頭註

國譯本草綱目

第七冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍
監修・校註　理學博士　白井光太郎
顧問　木村博昭
考定　理學博士　牧野富太郎
考定　理學博士　脇水鐵五郎
考定　岡田信利
考定　矢野宗幹
考定　木村康一
譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目　第七册

目次

本草綱目穀部第二十二卷

本草綱目穀部第二十三卷

本草綱目第二十四卷

穀部第二十四卷目錄

本草綱目第二十五卷

本草綱目菜部第二十六卷

本草綱目穀部

第二十二卷

本草綱目穀部目錄第二十二卷

李時珍曰く、太古の人民は穀物を營養にするといふことがなかつたから、動物を食ひ、その血を飲んでゐたのであるが、神農氏が出て、始めて植物を食餌することを實驗し、穀物なるものを區別して、一般人民に耕作、種植の方法を教へ、また植物食餌の實驗に依り藥物を區別して、一般人民の疾病、横死を救はれ、軒轅氏が出て、更に食物に對しては適當なる煮熟、調理の方法を教へ、藥物に對しては病源、病證に適應する方、劑を正確ならしめられた。それ以來、一般人民は始めて身體、生命を完全に營養するの方法を得たのであつて、その後、周の時代の制度には、(一)五穀、(二)六穀、(三)九穀などの名目があり、詩人の歌詠には、(四)八穀、百穀などの言葉があるほどで、穀物なるものの種類もまことに數多いことである。素問には『五穀を養となし、麻、麥、稷、黍、豆を以つて肝、心、脾、肺、腎に配す』とあり、夏の時代の職方氏の官は、九州それぞれの耕作地の穀物を區別し、地官はその土地の地味、氣候に因る種、稑の適否を明にして、種蒔き、取入れ、植付け、刈立ての

(一)五穀ハ周禮ノ註ニ麻、黍、稷、麥、豆ナリトアリ。
(二)六穀ハ周禮ノ註ニ稌、黍、稷、粱、麥、彫胡ナリトアリ。
(三)爾雅ニ九穀ハ黍、稷、稻、粱、大小麥、大小菽、麻ナリトアリ。

(四)八穀ハ九穀ヨリ麻ヲ除キタルモノヲ云フ。

(五)五方ハ東、西、南、北、中央。

(六)九州、禹貢ニハ冀、兗、青、徐、揚、荊、豫、梁、雍トス。周制ニハ幽州・并州ヲ置キ、徐、梁ヲ削ル。

適法を教へたといふ。いづれも人民の天とする食糧問題を甚だ重大視されたわけである。(五)五方には氣に差があり、(六)九州には生産に差があり、百穀それぞれにその性を異にするのであるが、吾人は常にこれを食つて居るのである。その物の有する氣味、その氣味に因つて人體に受くる損益、それ等に關し十分な智識を缺くことは然るべきことであるまいと思ふ。ここに草の實の食料に供し得べきものを集めて穀部とし、凡て七十三種を、麻麥稻類、稷粟類、菽豆類、造釀類の四類に分けて記述した。舊本の米穀部は三品共に五十九種であるが、今ここには、九種を併入し、一種を菜部に移し入れ、草部より一種を此の部に移し入れた。

神農本草經七種　梁の陶弘景註。　名醫別錄十九種　陶弘景註。

唐本草二種　唐の蘇恭。　藥性本草一種　唐の甄權。

本草拾遺十一種　唐の陳藏器。　海藥本草一種　唐の李珣。

食療本草三種　唐の孟詵。　開寶本草二種　宋の馬志。

嘉祐本草三種　宋の掌禹錫。　圖經本草二種　宋の蘇頌。

日用本草一種　元の吳瑞。　本草補遺一種　元の朱震亨。

救荒本草一種　周憲王。　　　　食鑑本草一種　明の寗原。
食物本草三種　明の汪頴。　　　本草綱目十五種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　　呉普本草　　宋雷斆炮炙　　齊徐之才藥對
唐楊損之删繁　　蕭炳四聲　　孫思邈千金　　南唐陳士良食性
蜀韓保昇重註　　宋寇宗奭衍義　　金張元素珍珠囊　　元李杲法象
王好古湯液　　明王綸集要　　汪機會編　　陳嘉謨蒙筌

穀の一　麻麥稻類十二種

胡麻　本經　卽ち油麻。　亞麻　圖經　卽ち壁蝨胡麻。　大麻　本經　卽ち麻蕡。　小麥　別錄
大麥　別錄　穬麥　別錄　雀麥　唐本　卽ち燕麥。　蕎麥　嘉祐
苦蕎麥　綱目　稻　別錄　卽ち糯米。　粳　別錄　秈　綱目

右附方　舊七十三、新百六十六。

穀の一　麻麥稻類十一種

胡麻[一]（本經上品）

和名　ごま
學名　*Sesamum orientale*, L.
科名　ごま科（胡麻科）

［校正］今ここには沈存中、寇宗奭の二說に據つて、本經の靑蘘、及び嘉祐に新に一條を立てた白油麻、胡麻油を併せ入れて一條に記載した。

［釋名］**巨勝**（本經）　**方莖**（呉普）　**狗蝨**（別錄）　**油麻**（食療）　**脂麻**（衍義）　俗に芝麻と書くは誤である。葉を**靑蘘**と名ける。蘘の音は箱（サウ）である。莖を**麻藍**と名ける。藍の音は皆（カイ）である。また稭とも書く

時珍曰く、按ずるに、沈存中の筆談に「胡麻とは今の油麻のことで、更に議論の餘地はない。古代に中國にあつたのはただ大麻だけで、その實を藖といつたのである。漢の時西域に使した張騫が始めて（二）大宛から油麻の種を持つて來た。それで胡麻と名けて中國の大麻と

（一）牧野云フ、胡麻ハ熱帶地ノ原產デ、我邦デハ普ネク之レヲ栽培シ其種子ヲ食料ニ供シテヰル、種子ノ白キヲしろごまト云ヒ、其黑キヲくろごまト云ヒ、又其黃色ヲ帶ビタモノヲきんごま一名あぶらごまト稱ヘル、第一、第二ノ品ハ普通デアルガ第三品ハ偶マニ見ラルル。

（二）大宛トハ古ノ國

名、今ノ露領中央亞細亞ノブルハノ州ノ地ナリ。
(三)方勝トハ兩斜方形ノ互ニ相聯合スルモノヲ云フ。
(四)大業ハ煬帝ノ年號、四年ハ西暦六〇八年。
(五)上黨ハ石部長石ノ註ヲ見ヨ。
(六)中原トハ邊境、及ビ蠻夷ノ地ニ對シテ中國ヲ指スノ語ナリ。今ノ河南、及ビ山東ノ西部、河北、山西ノ南部、陝西ノ東部ヲ古ニ中原ト稱ス。

區別したのである』とある。寇宗奭の衍義もやはり此の説に據つて胡麻に註釋してあるから、ここには油麻を此の一條中に併入した。巨勝とは胡麻の角が巨大で(三)方勝のやうなものをいふので、別に一種のものがあるのではない。方莖とは莖に就いて名けたもの、狗蝨とは形に就いて名けたものである。油麻、脂麻は脂油が多いといふ意味を表したものだ。張揖の廣雅に、胡麻一名藤弘とあるが、弘といふもやはり巨なるの意味である。別錄に、一名鴻藏とあるは藤弘の誤だ。又、杜寶の拾遺記には『隋の(四)大業四年に胡麻を交麻と呼ぶことに改めた』とある。

【集解】 別錄に曰く、胡麻は一名を巨勝といひ、(五)上黨の川澤に生ずる。秋季に採收する。靑蘘は巨勝の苗であつて、(六)中原の川谷に生ずる

弘景曰く、胡麻は八穀の中に於て特に優良なもので、純黑のものを巨勝と名ける。巨とは大なるの意味だ。もと大宛に生じたものだから胡麻と名ける。又、莖の四角なるを巨勝といひ、圓きを胡麻といふ。

恭曰く、角の八稜になつたものを巨勝といひ、四稜のものを胡麻といふ。すべて色の黑いものが良く、白いものは劣る。

○詵曰く、肥沃の地に種ゑたものは八稜、山の畑に種ゑたものは四稜になる。その土地の關係でその差異を生ずるのだが、功力の點では同じである。

○斆曰く、巨勝は、七稜あつて色が赤く、味の酸く澀いものが眞物である。八稜のもの、兩頭の尖つたもの、色の紫黒なものや烏油麻をみな胡麻と呼ぶは誤だ。

○頌曰く、胡麻は處處に種ゑてあるが、稀には野生のものもある。苗梗は麻のやうで葉が圓く鋭く光澤があり、嫩い時は蔬にして食へる。道家で多くこれを食ふ。本經には、胡麻一名の巨勝といふとあり、陶弘景は、莖の方圓で區別し、蘇恭は、角の稜の多少で區別してあり、仙方には、胡麻と巨勝と服餌の方法に二樣あつて、功用を少し別にしてあるところから、皆これを二種のものとして居るのである。しかしまた、當今の油麻はもと胡中に生じたもので、形體が麻に類するものだから油麻と名けたのだ。八穀のうちで特に最も勝れたものだから巨勝と名けたのであつて、一種の物に對する二樣の名稱だともいふ。かかる次

〔胡麻一脂麻〕

第であつて見れば、これは一物に二種あるので天雄、附子などの類のやうなものである。故に、葛洪が『胡麻のうちの一葉に兩尖あるものが巨勝である』といひ、別錄の序例に『細麻、卽ち胡麻である。形の扁扁たるものだ。その莖の四角なものを巨勝と名ける』とあるがその事である。今一般に用ゐてゐる胡麻は、葉は荏のやうで狹く尖り、莖の高さは四五尺、花は黃色で、房になつた(七)胡麻角のやうで小さい子を生ずる。嫩いうちは食へる。甚だ甘く滑かで、大腸を利するものだ。皮はやはり大麻のやうに布に作れるが、色が黃で脆い。俗にこれを黃麻ともいふ。その實は色黑く、韭子のやうで粒が細かく、味は膽のやうに苦く、杵いて末にしても存外膏油がない。その說はまちまちだが、これが服食家の要藥だとするは何たる差誤であらう。果してそれで效果を期待し得るであらうか。

宗奭曰く、胡麻に就ては諸說まちまちで一定せぬが、要するにこれは今一般にある脂麻である。更に議論の餘地はない。種が大宛から來たといふところから胡麻と名けたのだ。現在胡地に產するものは皆肥大であつて、紋が鵲のやう、色が紫黑で、油がやはり多く取れる。嘉祐本草の白油麻はこれと同一物だが、ただ色の點をいへ

(七)白井曰ク、此文黃麻ノ花實ヲ說クニ似タリト雖モ、此處黃麻ヲ說ク必要ナク且黃麻ノ果實ハ胡麻ニ似ズ甚ダ疑フ可シ。

ば、胡地の麻に比してやや淡く、全白でないだけである。今は一般に二者通じてこれを脂麻と呼ぶ。故に、二箇條の記載を見ると、主たる治療の功が大體同一なのである。川大黄、上黨人參といふやうなもので、特に適する土地に生じたところからその名稱が存するのだ。單に生産する土地の相違を以て、その物に二種の區別を置くべき道理があらうか。

時珍曰く、胡麻、卽ち脂麻である。遲い種類と早い種類とあり、黑、白、赤の三色の別はあるが、その莖はいづれも四角で、秋白色

〔巨勝〕

の花を開く。また紫に艶のある花のものもある。節節に角を結び、その角の長いものは一寸ほどのものもある。四稜、六稜のものは房が小さいから子の數も少く、七稜、八稜のものは房が大きく、隨つて子の數も多い。それはいづれも土地の肥、瘠から生ずる結果である。蘇恭は、四稜を胡麻とし、八稜を巨勝として、ただその房が勝れて巨大だとだけ説明してあるが、これは莖は高いものは三四尺で、ただ一本

の莖が上に伸びるものもありそれは角が纒つて子が少い。枝が四方に廣がるものもあり、それは角が多くて子が多い。これは皆苗がこんで生えるとまばらに生えるとに因る結果である。その葉にも、本が圓くて末の銳いものがあり、本が圓くて末が三丫に分れ、鴨の掌のやうな形のものもある。葛洪の說明に、一枚の葉に兩尖のあるものが巨勝だといふはこれを指したのだ。が、やはり烏麻にも白麻にも皆二種の葉のあることは知らなかつたやうだ。按ずるに本經には、胡麻、一名巨勝とあり、吳普の本草には、一名方莖とあり、抱朴子、及び五符經には、いづれも巨勝、一名胡麻とあつて、その說は甚だ明だ。しかるに、陶弘景に至つて、始めて莖の方、圓を區別し、雷斅はまた、赤麻が巨勝で、烏麻は胡麻でないと主張し、嘉祐本草にはまた、白油麻なる一條を揭げて胡麻と區別を立てた。いづれも、巨勝とは胡麻のうちの丫葉があり、巨さが勝れ、子の肥えたもののことだといふことを知らなかつたのだ。故に誤から誤に傳へて、かやうに疑の端を開くに至つたのである。ただ孟詵が、四稜、八稜は土地の肥、瘠の關係だといひ、寇宗奭が、沈存中の說に據つて、斷然脂麻を胡麻なりと主張したのは、以つて諸家の誤を證するに足りる。又、賈思

勰の齊民要術にある胡麻の栽培、收穫法は、現今の脂麻を栽培し收穫する方法そのままだ。これはその一物なることを證明する尤も有力な根據といへるのである。今では藥種商が、莖に方圓の區別があるなどの説に故事付けて、遂には茺蔚の子を僞つて巨勝といひ、黄麻子や大藜子を僞つて胡麻といつてゐる。誤も更に大なる誤だ。茺蔚子は長さ一分ばかりもあつて三稜があるものだ。黄麻子は黒く細韮子のやうで味が苦いものだ。大藜子は形狀が壁蝨や酸棗核仁のやうで味が辛く甘いものだ。いづれも脂油がない。餘程判別に注意する必要がある。梁の簡文帝の勸醫文には『世間には誤つて灰滌菜子を胡麻として居るものがある』と注意されてある。して見れば胡麻なるものに對する訛は、かなりに古くからあつたものと思はれる。

愼微曰く、俗間の言ひ傳へに『胡麻は夫婦で蒔くとよく繁茂する』といふ話があるので、本事詩に『胡麻は好種なれども人の種るなし、正に是れ歸る時君歸らず』とある。

胡麻 【修治】 弘景曰く、胡麻を服食するには、黒色のものを取り、九蒸九暴し、熬り搗いて餌ふものである。穀食を斷ち、長生し、飢を充たす。まことに手近なものだが、學者はそれさへ常服が出來ぬのだから、況や他の藥を服することは覺束

ないことだ。これは蒸して熟せぬものを食へば髪が落ちる。その性は茯苓と適合するものだ。俗方には用ゐることが甚だ稀で、時に湯、丸に合せる位のことである。

斅曰く、凡そこれを修治するには、水で淘つて浮くものを去り、晒し乾して酒を拌ぜ、午前十時から午後十時まで蒸して取出し、攤いて晒し乾して臼で舂き、粗皮を去つて薄皮を留め、小豆と對して拌ぜて共に炒り、豆が熟したとき豆を去つて用ゐる。

(八)【氣味】「甘し、平にして毒なし」士良曰く、初めて食つたときは大、小腸を利するが、久しく食へばそれが無くなり、新陳代謝を盛にする。○鏡源に曰く、巨勝は丹砂を煮得る

【主治】「傷中虛羸に五内を補し、氣力を益し、肌肉を長じ、髓腦を塡てる。久しく服すれば身を輕くし、老衰せぬ」(本經)「筋骨を堅くし、耳目を明にし、饑渴に耐へ、天年を延べる。金瘡に痛を止め、また傷寒、溫瘧の大吐後の虛熱、羸困を療ず」(別錄)「中を補し、氣を益し、五臟を潤養し、肺氣を補し、心驚を止め、大、小腸を利し、寒暑に耐へ、風濕氣、遊風、頭風を逐ひ、勞氣、產後の羸困を治し、分娩を催し、胞衣を落す。細研して塗れば髮を長くし、白蜜で蒸して餌へば百病を治す」(日華)「炒つて食へば風病が起らぬ。風疾の人が久しく食へ

(八)木村(康)曰ク、食用トシテハ本邦各地ニ栽培セラルレドモ、胡麻油ヲ製スル原料トシテハ多ク滿洲ヨリ輸入セラル。(成分)種子ハ四五―五五%ノ脂肪油ヲ含有ス。胡麻油ノ脂肪酸組成(%)ハ油酸四八・二、「リノール」酸三六・八、「パルミチン」酸七・七、「ステアリン」酸四・六、「アラビン」酸[illegible]・〇四、「リノセリン」酸〇・〇四、尙食物化學(澤村

員)ニヨレバ、白胡麻ハ養分總量ノ%ハ水分六・九三、粗蛋白質二〇・五四、粗脂肪五一・五七、可溶性無窒素物一二・六〇、灰分八・三六、黒胡麻ノハ水分六・六五、粗蛋白質一九・六五、粗脂肪四四・一五、可溶無窒素物一九・四三。(薬用)胡麻油ハ軟膏ノ基礎劑トシ「アムモニア」擦劑、樟腦軟膏、單軟膏等ヲ製ス、ソノ他食用油トシテ多量ニ消費セラル、又人造牛酪ヲ製造ス。(邦産薬用植物學)

ば歩行が正しくなり、言語が蹇らぬ】(李延飛) 【生で嚙んで小兒の頭瘡に塗り、湯に煎じて惡瘡、婦人の陰瘡を浴すれば大いに效がある】(蘇恭)

白油麻(嘉祐) [氣　味] 【甘し、大寒にして毒なし】 宗奭曰く、白脂麻は世間一般に一日も缺くべからざるものとして用ゐられてゐるもので、一向に大寒といふやうな結果は現れて居らぬ。原曰く、生のものは性寒にして疾を治す。炒つたものは性熱にして病を發す。蒸したものは性溫にして人體を補す。○詵曰く、久しく食すれば人の肌肉を抽く。その汁は久しく置いたものを飮めば霍亂を起す。

[主　治] 【虛勞を治し、腸、胃を滑し、風氣を行り、血脈を通じ、頭上の浮風を去り、肌肉を潤す。食後に一合を生で噉ひ、終身輟めぬがよし。又、乳母に與へて服ますれば孩子が永く病を起さぬ。客熱には飮汁に作つて服するがよし。生で嚙んで小兒の頭上の諸瘡に傅けるが良し】(孟詵) 【仙方では蒸してこれを用ゐ、辟穀の法を行ふ】(蘇恭)

[發　明] 甄權曰く、巨勝なるものは仙經に於いて重要なものとなつてゐる。白蜜と等分を合せて服するを靜神丸と名け、肺氣を治し、五臟を潤すにその功甚だ多

い。また能く糧食を休止して生活するの資となり、人の(九)精髓を塡て、男性に有益である。患者の甚しく虛して吸吸たるものにこれを加へて用ゐる。

時珍曰く、胡麻は、油を取るには白いものが勝り、服食には黑いものが良く、胡地のものが就中妙である。その黑なる色が入つて腎に通じて能く燥を潤す特長に依るのである。赤いものは形狀が老茄の子のやうで、殼が厚く、油は少く、ただ食料になるだけで、服食の價値はない。しかし、ただ錢乙の小兒の痘瘡が黑く變じて腎に歸するを治する百祥丸だけに赤脂麻を用ゐ、煎湯にして送下するとある。これはやはりその解毒の力を應用するだけである。五符經には、巨勝丸といふがあつて『卽ち胡麻である。これはもと大宛に生じたもので、(一〇)五谷の長である。中絕することなくこれを常服すれば、萬物を知り、神明に通じ、世と與に常に存し得るものだ』とある。參同契にも『巨勝は延年すべし、還丹にし口中に入る』とある。かく古代には胡麻を仙藥としたのであるが、近代では用ゐることが稀である。或はしかく神明に通ずると吹聽するほどに神驗のあるのでもないからであらう。ただ久しく服すれば益があるものには相違ない。劉晨、阮肇の二人が天台に入つて仙女に遇つた

(九)大觀ニ骨ニ作ル。

(一〇)五谷ハ五穀ト解シテ可ナラン。

とき、胡麻飯といふを食はされた。やはり胡麻を米と共に飯に炊いたもので、仙家の食品だといふことである。又、按ずるに、蘇東坡が程正輔に與へた書に『凡そ痔疾には、酒肉と鹽酪、醤菜の厚味のもの、及び粳米飯を斷たねばならぬ。ただ淡麪一味、及び蒸した胡麻を食ふがよし。こは黒脂麻のことで、皮を去つた茯苓と共に少量の白蜜を入れて麪にして食ふのだ。これを試ること久しきに亙れば、氣力が衰へず、あらゆる病が自ら去り、痔も漸次に退く。この方法は長生の要訣であるが、ただ知り易くして行ひ難いだけだ』とある。この説に據れば、胡麻の脂麻なること動かすべからざるものだ。この方法に茯苓を用ゐたのは、陶氏が胡麻に註解した説に本づいたものである。近頃世間では、脂麻を擂り爛して滓を去り、綠豆粉を入れて豆腐にして食つてゐる。その性は平にして潤、最も老人に益がある。

附方　舊十五、新十六。

【胡麻の服食法】　抱朴子には『上黨の胡麻三斗を淘淨して甑で蒸し、氣を全部に廻らせて日光で乾し、水で淘つて沫を去り、再び前の如くして蒸す。かく九回繰返してから、湯けて皮を脱き去つて簸ひ淨め、香しく炒つて末にし、白蜜、或は棗膏で彈子大の丸にし、一日三回づつ、一丸を溫酒に溶して服す。

毒魚、狗肉、生菜を忌む、百日まで繼續して服すれば、能く一切の痼疾を除き、一年にして身體、顏面が光澤になり、飢ゑず、二年にして白髮が黑に返り、三年にして齒の落ちたものが生え更り、四年にして水火も害すること能はず、五年にして奔馬にも追ひ付くやうになり、久しく服すれば長生する。若しこれを下さんとするには葵菜汁を飲む』とある。○孫眞人は『胡麻三升を用ゐ、黃褐色のものを去つて三十回蒸し、微し炒つて香しくして末にし、白蜜三升を入れ三百杵搗いて梧子大の丸にし、毎早朝五十丸を服す。四十歳以上を過ぎた人でも、久しく服すれば目が明になつて物を洞視し、腸が柔かで筋のやうになる』といつてある。○仙方傳には『魯女生は胡麻を服し、朮を餌ひ、穀を絶つこと八十餘年にして甚だ少壯であつた。一日に三百里の道を行き、麞、鹿にも走り付くほどであつた』とある。【巨勝の服食方】五臟の虛損を治し、氣力を益し、筋骨を堅くする。巨勝を九蒸九暴して貯へ、二合づつを湯に浸し、布に裹んで皮を挼み去り、再び研つて水で濾し、その汁を煎じて飲み、粳米に和して粥に煮て食ふ。○時珍曰く、古は胡麻、巨勝の二樣の服食法があつたが、その方は同一人の考案に出でたものでないところから二法になつたの

で、その實は一種の物を用ゐたのだ。【白髪を黒に返す】烏麻を九蒸九晒して研末し、棗膏で丸にして服す。（千金方）【腰脚の疼痛】新胡麻一升を香しく熬り、搗いて末にし、日毎に一小升を服す。一斗まで服すれば永く痊える。溫酒、蜜湯、姜汁のいづれで服してもよし。（千金方）【手脚の酸痛】微し腫れたるには、脂麻を熬つて研り、五升を酒一升に一夜浸して隨意に飲む。（外臺）【水に入つて四肢の腫れたもの】痛むには、生胡麻を搗いて塗る。（千金）【偶然風寒を感じたるもの】脂麻を炒り焦し、熱に乘じて酒に擂つて飲み、煖に臥して微し汗を取るがよし。【中著毒死】救生散——新胡麻一升を微し炒つて黒くし、攤いて冷して末にし、新汲水で調へて三錢を服す。或は彈子大の丸にして水で服す。（經驗後方）【嘔啘の止まらぬもの】白油麻一大合を淸油半斤で煎じて三合を取り、麻を去つて（二）溫服する。（近效方）【牙齒の痛腫】胡麻五升、水一斗を汁五升に煮詰め、それで含漱して吐く。二劑に過ぎずして神效が現れる。（肘後）【熱淋莖痛】烏麻子、蔓菁子各五合を黄に炒り、緋袋に盛つて井華水三升に浸し、毎食前に一錢づつ服す。（聖惠方）【小兒の下痢】赤白を下すには、油麻一合を搗き、蜜湯に和して服す。（外臺）【胎毒を解し下す】初生兒に生脂麻を嚼

（二）一溫、大觀ニ頓ニ作ル。

み綿に包んで唖はせる。その毒は自ら下る。【小兒の急疳】油麻を嚼んで傅ける。(外臺)【小兒の軟癤】油麻を炒り焦し、熱に乘じて嚼み爛らして傅ける。(譚氏小兒方)【頭部、面部の諸瘡】脂麻を生で嚼んで傅ける。(普濟)【小兒の瘰癧】脂麻、連翹等分を末にして頻頻と食ふ。(簡便方)【疔腫惡瘡】胡麻を灰に燒き、針砂と等分を末にし、一日三回、醋で和して傅ける。(普濟方)【痔瘡風腫】痛むには、胡麻子の煎湯で洗へば消く。【(一二)坐板瘡疥】生脂麻を嚼んで傅ける。(筆峯雜興)【陰痒で瘡の生じたもの】胡麻を嚼み爛して傅るが良し。(肘後)【乳瘡腫痛】脂麻を炒り焦して研末し、燈窩油で調へて塗れば安になる。【婦人の乳少きもの】脂麻を炒つて研り、鹽少量を入れて食ふ。(唐氏)【湯火傷灼】胡麻を生で泥のやうに研つて塗る。(外臺)【蜘蛛の咬瘡】油麻を研り爛して傅ける。(經驗後方)【諸蟲の咬傷】同上。【蚰蜒の耳に入りたるとき】胡麻を炒つて研り、袋に入れて枕にする。(梅師)【(一三)穀賊尸咽】喉中の痛痒するものである。これは誤つて穀物の芒や檜刺を呑んだことに因するもので、その爲めの痒痛である。谷賊は咽に屬き、尸咽は喉に屬くものだから、その區別を誤つてはならぬ。脂麻を炒つて研り、白湯で調へて服す。(三因方)【癰瘡の合はぬもの】烏

(一二)此症夏日日曬ノ几凳ニヨリ、或ハ久坐陰濕ノ地ニヨリテ、暑濕熱毒ニ感シテ發スル臀腿間ノ瘡疥ニシテ、形黍豆ノ如ク色紅ニシテ癢ク、甚シケレバ則チ焮痛シ、谷道ニ延及シ勢火燎ノ如キモノト云フ。

(一三)證候下文ニアリ。

(一四)五黃ハ五疸ニ同ジ。黃汗、黃疸、穀疸、酒疸、女勞疸、是ナリ。

麻を黒く炒り、搗いて傅ける。(千金)【小便尿血】胡麻三升を杵いて末にし、東流水二升に一夜浸して翌早朝汁を絞り、熱して頓服する。(千金方)

胡麻油即ち**香油**　弘景曰く、生で笮つたものが良し。蒸したもの、炒つたものは、ただ食用にし、または燈火用に供するだけで、藥に入れては用ゐない。宗奭曰く、炒熟し熱に乘じて壓出した油を生油といふ、燈火に用ゐるだけのものだ。それを再び煎鍊したものが熟油であつて、始めて食料になるが、これは燈火用にはならない。まことに異なるものである。鐵なども火中から出したものを生鐵といふが、この油を生油といふも同じ意味である。時珍曰く、藥に入れるには烏麻油が上位にあり、白麻油はこれに次ぐ。自ら笮つて用ゐるが良し。商人の手に在るものは、已に蒸、炒を經たものであるばかりでなく、雜ぜ物もあれば僞物もある。

氣味　【甘し、微寒にして毒なし】

主治　【大腸、產婦の胞衣の落ちぬものを利す。生油を腫に摩る。禿髮を生ずる】(別錄)【頭部、面部の遊風を去る】(孫思邈)【天行熱悶、腸內の結熱に主效がある。一合を服し、通じのつくを度とする】(藏器)【瘖瘂に主效があり、(一四)五黃を殺し、三

焦の熱毒氣を下し、大小腸を通じ、蚘心痛を治す。一切の惡瘡、疥癬に傅け、一切の蟲を殺す。一合に雞子二箇、芒硝一兩を和して攪きまぜて服すれば、少時して熱毒を瀉下する。甚だ良いものである】(孟詵)【陳油を煎じた膏は、肌を生じ、肉を長じ、痛を止め、癰腫を消し、皮裂を補す】(日華)【癰疽、熱病を治す】(蘇頌)【熱毒、食毒、蟲毒を解し、諸蟲、螻、蟻を殺す】(時珍)

燈盞殘油　主治【能く風痰、食毒を吐し、癰腫、熱毒に塗る。又、狂犬の咬傷を治するに、瘡口に灌ぐが甚だ良し】(時珍)

發明　藏器曰く、大寒なもので、常に用ゐては冷疾を發し、精髓を滑し、臟腑の渇を發し、脾臟を困め、人體を重くし、聲を損ぜしめる。士良曰く、牙歯の疾、及び脾、胃の疾のある人は絕對に食つてはならぬ。飲食物を調理するには、必ずその日毎に熬り熟して用ゐねばならぬ。一夜置いたものを用ゐるならば氣を動ずる。劉完素曰く、油は麻から取るのだが、麻は溫で油は寒だ。質は同じだが性が異ふのである。震亨曰く、香油なるものは、炒熟した脂麻から取れば食つて美味であり、且つ疾を起さない。若しこれを甚しく煎煉するならば火と同樣の作用を顯はす。

時珍曰く、張華の博物志に『百石に滿つる大量の油を貯へれば自然に發火する』とあり、陳霆の墨談には『衣服や絹物に油のあるものを蒸熱すれば火の星が出る』とある。して見れば油と火とは性を同じうするのであつて、これを用ゐて食物を煎煉すれば、尤も能く火を動し、痰を生ずるものである。陳藏器はこの物を大寒なりといつてゐるが、余の考ではさうではない。ただ生で用ゐれば燥を潤し、毒を解し、痛を止め、腫を消する功力に、如何にも寒に似た點があるだけのことだ。且つ香油は能く蟲を殺すものだが、(一五)髮瘕の患者は油を嗜む。油を煉れば能く自ら焚えるが、氣が盡れば反つて冷える。これは又、物の玄理である。

附方　舊十、新二十六。［髮瘕で油を飲むもの］外臺に『髮瘕の患者は油を飲みたがるものだが、これには、酒一升に(一六)香澤を入れて煎じ、それを患者の枕邊に置いて、口、鼻からその氣を入れる。これを飲ませてはならない。すると疲れが極つて睡眠し、蟲が口から出て來るものである。その時急に石灰を手に粉し、その蟲を捉ひて抽き取る。取つて見るとそれは盡く髮であつて、初め出たときは流れぬ水の中にある(一七)濃菜のやうな形だ』とある。○又、胸から喉の間を瘕蟲が上下するやう

(一五)髮瘕ハ飲食物中ニ毛髮ヲ混ジタルモノ、胃ニ入リ化シテ蟲トナリテ發スルモノト云フ。

(一六)香澤ハ香油ヲ指ス。

(一七)濃菜ハアヲミドロヲ云フ。

に覺え、常に葱、豉、香氣ある食物などの香を嗅ぎたがるものは髮癥の蟲である。これには、二日間絶食し、口を開いて横臥し、油で煎じて香しくした葱、豉をその口の邊に置くと蟲が出るものだ。それを物を以て引き抽き去れば必ず癒えるといふ。

【髮瘕腰痛】南史に『宋の明帝のお局が腰が痛んで心に牽き、發作すると氣絶するのであつたが、徐文伯が診て「これは髮瘕といふ病だ」といつた。油を灌ぐと髮のやうなものを吐いたので、それを引き出して見ると、長さ三尺あり、頭は已に蛇に成つてゐて動き出したが、それを高く懸けて液を滴し盡させて見ると、それはただ一本の髮であつた』と記載してある。【蠱毒を吐解す】淸油を多く飲んで吐かす。(嶺南方)【河豚の毒を解す】その場合倉卒で藥のないときには、急に淸麻油を多く灌いで毒物を吐出させれば癒える。(衛生易簡方)【砒石の毒を解す】麻油一碗を灌ぎ込む。(衛生方)

【大風熱疾】近效方に『婆羅門僧が大風疾、竝に熱風で手足不遂のものを治し、丹石熱毒を壓するに、硝石一兩、生烏麻油二大升を共に鐺に入れ、(一八)土墼で口に蓋をして紙と泥で固濟し、細火でこれを煎じる。初めには氣が(一九)鯹いが、藥が熟すれば香氣が發する。その時更に生脂麻油二大升を入れて和合して煎じ、注意して適度を

(一八)土墼ハ未ダ燒カザル塼瓦。
(一九)鯹ハ腥ト通ズ。

(二〇)五心詳ナラズ、兩手足ノ心及項心ノ五心歟。

量り、最も適當と信ずるとき、それを透滲せぬ器に貯へて置き、大風患者の場合に患者を紙帳の中に坐らせ、その紙壁の外で火を燒いて發汗させ、日毎に一大合を服ます。强壯の者には一日に二回服ませる。かくて二十一日間繼續すると、頭部、面部の皰瘡は皆消滅する』とある。(圖經)【傷寒發黄】生烏麻油一盞、水半盞、雞子白一箇を和し攪きまぜて全部を服す。(外臺)【小兒の發熱】その原因の風寒なると、飮食物なると、時行、痘疹なるとに拘らず、いづれもこれを用ゐるがよし。葱涎に香油を入れ、それに手の指を納れて油を醮け、その小兒の(二〇)五心、頭部、面部、項部、背部の諸處に摩擦する。最も能く毒を解し、肌を涼するものである。(直指)【痘毒の豫防】外臺には『時行で、甚だ暖くして痘瘡を發する恐あるときは、生麻油一小盞に水一盞を少しづつ傾け入れながら、柳枝でよく攪きまぜて蜜のやうに混和させ、蜆殼で二三酌づつ——大人は二合——を就寢時に服す。三五服で大便が快く通じ、瘡は自から生じなくなる。これは扁鵲の油剤法といふものだ』とある。〇直指では、麻油、童尿各半盞を前記の方法の如くして服す。【小兒の初生】大小便の通ぜぬには、眞香油一兩、皮硝少量を共に煎じ滾らし、よく冷ましてから徐徐に口中に灌ぎ入れる。そ

れを嚥下すれば通じがつく。(蘭氏經驗方)【卒熱心痛】生麻油一合を服するが良し。(肘後方)【鼻衄の止まぬもの】紙條に眞麻油を蘸けて鼻に入れ、嚔をすれば癒える。ある者が一夕盃に盈るほど衄血したが、この方を用ゐて效があつた。(普濟方)【胎兒死亡】淸油と蜜等分を湯に入れて頓服する。(普濟方)【漏胎難產】血が乾き澀るに因るものである。淸油半兩、好き蜜一兩を共に煎じ、數十沸して溫服する。胎が滿ちて分身する。他藥で效果なき場合には、この方を用うれば血を助けて效を擧げる。(胎產須知)【產腸の收らぬもの】油五斤を煉熟して盆に盛り、その盆の中に婦人を坐らせて(二)飯久し、先づ皂角を炙き皮を去り研末して少量を鼻に吹入れ、嚔をすれば立ろに產腸が收復する。(斗門)【癰疽發背】初期にこれを服すれば毒氣をして內攻せしめない。麻油一斤を銀器で煎じ、二十沸して醇醋二椀を和し、五回に分けて一日に全部を服す。(直指)【腫毒の初期】麻油で葱を煎じて黑色にし、熱いまま手を休めず圓を描くやうに廻して塗れば自ら消える。(百一選方)【喉痺腫痛】生油一合を灌げば立ろに癒える。(總錄)【丹石の毒發】發熱するものだから熱物を食つてはならぬ。火で煖を取つてもならぬ。ただ厚く衣類寢具を著て煖に臥し、油一匙を取つて含み

(二)飯久トハ、食頃、小半時間ナドイフホドノ時間經過ヲイフカ。

(二二)竹ヲ割リテ作リシ薪材。

噤み、十四日間怒を愼む。○枕中記には『丹石を服した人は、先づ麻油一升の中へ薤白三升を切つて納れ、微火で黒く煎じて滓を去り、酒に合せて三合づつを服す。百日にして氣血が回復して旺盛になる』とある。【身體、面部の瘡疥】方は上に同じ。【梅花禿癬】淸油一椀を、(二二)小竹子に火をつけて燃えつつある中に入れて煎沸し、それに豬膽一箇の汁を瀝して和匀し、頭髮を剃つて擦り込む。二三日で癒える。日光に晒さぬやうにする(普濟方)【赤禿で髮の落ちたもの】香油、水等分を銀釵で攪き和して日毎に擦る。髮が生えたならば止める。(普濟方)【髮が落ちて生えぬもの】生胡麻油を塗る。(普濟方)【髮を長く黒くする】生麻油で桑葉を煎じ、滓を去つて髮を沐する、數尺の長さになる。(普濟方)【耳に滴して聾を治す】生油を日毎に三五回づつ滴し、耳中の塞つたものが出るまで試れば癒える。(總錄)【蚰蜒の耳に入つたとき】劉禹錫の傳信方に『胡麻油で作つた煎餠を枕にして臥せば須臾にして自ら出る。李元淳尙書が河陽にゐた頃、蚰蜒が耳に入つて如何ともする方法がなく、腦悶し、聲が聞え、終には頭を門柱に擊ち付けるほどに苦んだ。その危困の狀態を朝廷に奏上したので、特に御醫を遣されて治療を加へたが、それでも效驗を擧

げなかつた。ところが偶然ある人がこの方を進め、それに依つて癒えた』とある。（圖經）【蜘蛛の咬毒】香油に鹽を和して摻る。（普濟方）【冬季の唇裂】香油を頻頻と抹する。（相感志）【身體、面部の白癜】酒で生胡麻油一合を服す。一日三服づつ五斗まで服すれば瘥える。百日間は生、冷の物、豬、雞、魚、蒜等を忌む。（千金）【小兒の丹毒】生麻油を塗る。（千金）【打撲傷腫】熟麻油に酒を和して飲み、火で燒いて地を熱し、その上に臥して眠り、覺めれば疼きと腫と共に消く。松陽の住民共は、毆り合をして後この方を用ゐるので、後に官憲がその身體を撿べても全く痕迹がない。（趙葵行營雜錄）【虎爪の傷瘡】先づ淸油一盌を飲んでから、油を瘡口に淋して洗ふ。（趙原陽濟急方）【毒蜂の螫傷】淸油を塗るが妙である。（同上）【毒蛇の螫傷】急に好き淸油一二琖を飲んで毒を解し、然る後に藥を用ゐる。（濟急良方）

麻枯餠　時珍曰く、これは油を窄り去つた麻滓のことである。また麻籸とも名ける。——籸の音は辛（シン）である——凶作の歳には一般人もこれを食ふ。魚を養ふ飼糧になり、田畑の肥料になる。周禮に『（二三）草人は强堅にして糞を用う』とあるはやはりこの意味である。

（二三）草人ハ草ヲ栽ウル職、土地ノ堅强ナル場所ヘハ麻蕡ヲ肥料トスルト云フ意ナリ。

（二四）胡麻ノ苗葉ヲ云フ。

附方 新二。【牙に揩つて鬚を黒くする】麻枯八兩、鹽花三兩を、生地黄十斤から取つた汁と共に鐺に入れて熬り乾し、鐵で蓋をして鹽泥で塗り固め、赤く煆いて取り出して研末し、それを日毎に三回づつ牙に揩り、揩り畢つてから薑茶を飲む。先づ眉から始まつて一箇月で皆黒くなる。（養老書）【疽瘡の蟲あるもの】生麻油の滓を貼り、綿で裹んで置く。蟲が出るものである。（千金方）

（二四）**青蘘** 蘘は音穰（ジヤウ）である。（本經上品）恭曰く、草部より移して此に附す。

釋名【夢神、巨勝の苗である。中原の山谷に生ずる】（別錄）

氣味【甘し、寒にして毒なし】主治【五臟の邪氣、風寒濕痺。氣を益し、腦髓を補し、筋骨を堅くする。久しく服すれば、耳目が聰明になり、饑ゑず、老衰せず、壽命を増す】（本經）【傷暑熱に主效がある】（思邈）【湯にして頭を沐すれば、風を去り、髮を潤ほし、皮膚を滑にし、血色を益す】（日華）【崩中血の凝注するものを治するに、生で一升を擣き、熱湯で絞つた汁半升を服す。立ろに癒える】（甄權）【風を祛り、毒を解し、腸を潤ほす。又、飛絲が咽候に入りたるを治するに、これを嚼めば癒える】（時珍）

【發明】宗奭曰く、青蘘、卽ち油麻葉である。湯に浸して良久すれば稠くして黄色の涎が出る。婦人はこれを用ゐて髪を梳くが、日華子の湯にして髪を沐するとある說に合致して居る。して見れば胡麻が脂麻であることは疑ない。弘景曰く、胡麻葉は甚だ肥え、滑かで頭を沐するによいものだが、これを服するといふは如何にするものか判らない。仙方にはいづれも用ゐない。これはやはり陰乾して丸、散にするものなのであらう。時珍曰く、按ずるに、服食家には、青蘘を栽培し菜にして食ふ方法といふがある。それは秋期に巨勝の子を取つて畦に蒔き、生菜を栽培する方法のやうにして苗の出るを候つて食ふのであつて、滑で美味なることは葵に劣らぬといふ。して見ると本草の記述もやはり茹蔬としての功果をいふので、丸、散の藥に入れることではないのである。

胡麻花　思邈曰く、七月に最上の梢端のものを採り、陰乾して用ゐる。藏器曰く、陰乾して漬けて汁を(二五)取り、麪を溲して食ふ。至つて靭滑である。

【主治】【禿髪を生ず】(思邈)【大腸を潤ほす。身體上に生じた肉丁には、これを擦れば癒える】(時珍)

(二五) 取ノ字、大觀ニ據リテ補フ。

附方 新一。【眉毛の生えぬもの】烏麻花を陰乾して末にし、烏麻油に漬けて日毎に塗る。（外臺祕要）

麻稭 主治 【灰に燒いて痣に點け、惡肉を去る方の中に入れて用ゐる】（時珍）

附方 新二。【小兒の(二六)鹽哮】脂麻稭を瓦の內で燒いて性を存し、火毒を出して研末し、淡豆腐に蘸けて食ふ。（摘玄方）【聤耳の膿の出るもの】白麻稭を刮り取つて一合、花胭脂一枚を末にし、綿で裹んで耳中を塞ぐ。（聖濟總錄）

(一)亞麻（宋圖經）

和名 あま、ぬめごま
學名 Linum usitatissimum, L.
科名 あま科（亞麻科）

釋名 **鵶麻**（圖經） **壁虱胡麻**（綱目）

集解 頌曰く、亞麻子は(二)兗州、(三)威勝軍に產する。苗、葉は共に青く、花は白色である。八月上旬にその實を採つて用ゐる。時珍曰く、今は陝西地方でもこれを種ゑる。卽ち壁虱胡

〔亞麻子〕

(二六)鹽哮、詳ナラズ、哮ハ喘息ノ一名。

(一)牧野云フ、本種ハ今廣ク世界ノ諸處ニ作ラレテヰルガ、元來ハ蓋シ亞細亞ノ原產デアラウトノ事デアル、支那ニハ尙Linum perenne, L.(しゆくこんあま)ヲ見ル處ガアルガ此レハ元來歐洲ノ原產品デアル、植物名實圖考、卷ノ二ノ山西胡麻ハ蓋シ是レデアラウト思フ。

(二)兗州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(三)威勝軍ハ宋ニ置

麻である。その實はやはり油を搾つて點燈し得るものだが、氣が惡くて食料にはならぬ。その莖、穗は頗る茺蔚に似てゐるが、子は同物でない。

子

(四)**氣味**　【甘し、微溫にして毒なし】

主治　【大風、瘡癬】(蘇頌)

ク、今ノ山西省沁縣ソノ舊治ナリ。

(四)木村(康)曰ク、(成分)種子ハ蛋白質「リパーゼ」、「プロテアーゼ」(酵素)「レチチン」(〇・八八%)、粘液(六%)、脂肪油(三〇―四〇%)、分解ニヨリ青酸ヲ生ズル「リナマリン」等ヲ含有ス、粘液ハ「ペントザン」及ビ「ヘキソザン」ヨリナリ加水分解ニヨリ葡萄糖「カラクトーゼ」、「アラビノーゼ」、「キシローゼ」等ヲ生ズ。脂肪油ハ「イソリノレン」酸(三四%)、「リノール」酸(二六%)、油酸(一八%)、「リノレン」酸(一〇%)等ノ「グリセリド」ヨリ成ル。(藥用)亞麻仁ハ粘液ヲ含有スルヲ以テ煎劑トシ、內用ニハ包攝藥トシ又灌腸料トス、又罨布トナシテ外用ニ供ス。種子ヲ壓搾シテ得タル亞麻仁油ハ軟膏ノ基礎劑トシ、又「カリ」石鹼、「クレゾール」石鹼、亞麻仁油紙等ノ原料トス。(應用)亞麻仁油ハ乾性著シキヲ以テ塗油、印刷インキ等ニ用ヰ、又「リノリウム」製造ニ缺ク可ラザルモノナリ、又本植物ノ纖維ハ「リンネル」ノ原料タリ。

(一)大麻　(本經上品)

和名　あさ
學名　Cannabis sativa, L.
科名　くは科(桑科)

釋名　**火麻**(日用)　**黃麻**　俗の名稱である。**漢麻**(爾雅翼)　雄を**枲麻**(詩疏)　**牡麻**と名ける。(同上)　雌を**苴麻**(同上)　**莩麻**　と名ける。莩の音は字(ジ)である。花を**麻蕡**　と名ける(本經)　**麻勃**　時珍曰く、麻の字は兩の朩に從ひ广の下に在く、屋下にて(三)麻を派する形を形容したもので、朩は音派(ハ)广は音儼(ゲン)である。その

(一)牧野云フ、大麻ハ中央亞細亞ノ原生ナレドモ今ハ諸方ニ廣ク栽培セラレテヰル、主トシテ其皮ノ纖維ヲ用ヰ又其實ヲ食用トスル。

(三)麻ヲ派スルトハ、纖維ヲ分派スルコトナラン。

(三)木村(康)曰ク、大麻草ハ二家性ノ一年草ニシテ素ト東印度ノ産ニシテ、ソノ纖維(麻)ヲ利用スルノ目的ヲ以テ、現今諸國ニ栽培シ本邦マタあさト稱シ之ヲ培植ス、東印度ニ培養ス。大麻ハソノ植物學的ノ形狀ニ關シテハ、歐洲、本邦等ニ培植スルモノト特ニ差異ヲ見ザレドモ、ソノ雌性植物ハ夥シク樹脂ヲ分泌シ大ニ麻醉性ヲ有ス、印度大麻ノ麻醉性ヲ有スルハ印度及支那ニ於テハ太古ヨリ世ニ知ラレ、ソノ麻醉藥タル藥用ハ回教徒ニ始マレリトイノ、而シテ獨逸ニ於テハ一六〇〇年始メテ之ヲ藥用

他は下記の註を見よ。漢麻と呼ぶわけは胡麻と區別したにある。

(三)【集解】【正誤】 本經に曰く、麻蕡(まふん)、一名麻勃は麻花の上の(四)勃勃(ぼつぼつ)たるものである。七月七日に採るがよし。麻子は九月に採る。土に入つたものは人體を損ずる。太山の川谷に生ずる。

弘景曰く、麻蕡、卽ち牡麻である。牡麻とは實が無いことで、今世間で布、及び履物(はきもの)を作るに用ゐるものである。

〔大麻〕
—黄麻—

恭曰く、蕡とは麻の實のことで花のことではない。爾雅に『蕡は枲實(しじつ)なり』とあり、儀禮に『苴麻(しよま)の蕡あるもの』とあり、その註に『子のある麻を苴といふ』とあつて、いづれも子を謂つて居る。陶氏は蕡を麻勃だといひ、勃勃然たるを花のやうなものと思つたと見え、更に重複して麻子の一條を揭げたのは誤である。既に蕡は米穀の上品(じやうほん)となつてゐるではないか 花が食料となるべきわけがあるまい。

藏器曰く、麻子は、早春に種ゑるを春麻子といひ、小さくして毒がある。晩春に種

ゑるを秋麻子といひ、藥に入れるに佳し。壓搾（あつさく）した油は物に塗る油として用ゐる。

宗奭曰く、麻子は、海東の（五）毛羅島から來るは大さ蓮實ほどで、最も勝（すぐ）れてゐる。それに次ぐは（六）上郡、北地の產で大さ豆ほどある。南地のものは子が小さい。

頌曰く、麻子は處處で栽培する。その皮を績（つむ）いで布を織り得るものだ。農家ではその子の黑い斑文のあるものを擇（よ）つて雌麻といふ。これを種ゑれば結ぶ子が多いのであるが、他の子ではさほどに多く結ばないのだ。本經の麻蕡（まふん）と麻子との主效に關する記事は同一であり、また麻花は食料たり得るものでない點から考へると、蘇恭の論が至當のやうである。ところが本草の朱字で記載した部分には『麻蕡は味辛し、麻子は味甘し』とある。これでは二物の區別があるやうでもある。そこで本草と爾雅、禮記とではその稱呼が不同なのではなかつたかとも疑はれる。ところが、藥性論には、又『麻花を用ゐる。味苦し、諸風、月經不利に主效がある』と書いてある。此（こ）うして見ると、蕡といふもの、子といふもの、花といふもの、それぞれの三種に區別したものかも知れぬ。

時珍曰く、大麻、卽ち今の火麻で、また黃麻（わうま）ともいふ。處處で栽培してゐる。麻

ニ供セリ。日本藥局方ニイフ印度大麻草ハ、卽チ印度大麻ノ葉及果本ヲ果實稔熟ノ時期ニ採集セルモノナリ。印度地方ニ於テはしつし Haschish ト唱フルモノハ、印度大麻ヲ調和シテ製出セル喫烟料、嗜好品等ノ通稱ナリ。

（四）勃勃ハ盛ナル貌。

（五）毛羅島トハ卽チ毛利人ノ島ノ意カ。毛利人種ハ南洋ニュージーランドノ土人ナリ。

（六）上郡ハ秦ニ置ク今ノ陝西省楡林道、及ビ內蒙古鄂爾多斯左翼ノ地ナリ。膚施ニ治ス。今ノ陝西省綏德縣ノ地ナリ。

を剥いて用ゐ、子を取收めて用ゐ、雌があり、雄があつて、雄を枲といひ、雌を苴といふ。科が太く、油麻ほどあつて、葉は狹くして長く、その形狀は益母草の葉のやうで、一本の枝に七枚、或は九枚の葉がある、五六月に細かい黄色の花が穗になり、順次に實を結ぶ。その實の大さは胡荽子ほどで、油も取れれば、その皮を剥いて麻にも作る。その稭は白くて稜があり、輕虛なもので、燭の心に用ゐられる。齊民要術に『麻子は放勃した時に雄なるものを拔き去れ。また放勃せぬ先に拔いては子が成らなくなる。その子は黑くして重く、搗いて修治し燭に用ゐ得ると』あるはこの物のことだ。本經に麻蕡、麻子の二條を掲げてあるが、蕡とは麻勃のことで、『麻子の土に入つたものは人を殺す』とある。蘇恭は、蕡は麻子のことで花ではないといひ、蘇頌は、蕡、子、花の三物だらうといひ、疑問の範圍を脫し切らなかつた。しかし謹んで按ずるに、吳普の本草に『麻勃、一名麻花、味辛し、毒なし。麻藍、一名麻蕡、一名靑葛、味辛く甘し、毒あり。麻葉は毒あり、これを食へば人を殺す。麻子中の仁は毒なし、先に地中に藏したものを食へば人を殺す』とある。この說に據れば、麻勃は花のこと、麻蕡は實のこと、麻仁は實の中の仁のことだ。普は三國時代の人

(七)木村(康)曰ク、(成分)印度大麻草ノ臭氣ハ甚ダ少量ニ存セル揮發油ニ係ル、而シテ其麻醉性ノ起因スル成分ハ樹脂トス、坊間ニ「カンナビン」又ハ「ハーシン」ト稱スルモノハ、催眠ノ效ヲ有スル樹脂體ヨリ成レル混合物ニシテ「カンナビリン」ハ又催眠ノ效力アル油狀體トス。又印度大麻草中ニハ「カンナビニン」ナル「アルカロイド」ヲ含有スルトイフモノアレドモ、確實ニ發見セラレタルハ「ムス

で、害を去ること遠からぬ時の人だ、その說は甚だ明快である　神農本經の、花を以て蕡となし、土に藏し土に入つたものを以て人を殺すとある記事には、その文章にいづれも傳寫の誤脫があつたのだ。陶氏、及び唐、宋の諸家が、いづれも考證、研究に徹底を缺いて、疑似の臆測のみを事としたのは疎漏なものだ。今ここには吳氏に依據して、改めて下記の如くに正して置く。

麻勃　普曰く、一名麻花。時珍曰く、齊民要術の放勃した時に雄なるものを拔き去れとある文を觀れば、勃とは花であることが明かである。

(七)**氣　味**　【辛し、溫にして毒なし】　甄權曰く、苦し、微熱にして毒なし。○牡蠣を畏れる。血を行らす藥に入れるには䗪蟲を使として用ゐる。

(八)**主　治**　【一百二十種の惡風、黑色になつて全身が痒く苦しむもの。諸風、惡血を逐ひ、婦人の月經不通を治す】(藥性)【健忘、及び金瘡內漏を治す】(時珍)

發　明　弘景曰く、麻勃は方藥には用ゐることが稀だが、術家では人參と合せて服し、未來のことを豫知する。時珍曰く、按ずるに、范汪の方に健忘を治する方があつて、七月七日に採取した麻勃一升、人參二兩を末にし、蒸して氣を全部に廻

らせ、毎就寢時に一刀圭づつを服すれば、能く四方の事を盡く知るとある。これは健忘を治するので、服すれば能く四方の事を記憶するわけだ。陶氏の、未來の事まで豫知するは言ひ過ぎてある。又、外臺に『疔腫を生じた人は麻勃を見ることを忌む。見れば死亡するものである。その時は胡麻、針砂、燭燼を末にし、醋で和して傅ける』といつてある。麻勃が何故にかく疔と相忌むのか判らぬが、やはり漆を見れば瘡を生ずる者があるやうなもので、その理由は一向明瞭でない。

附方 舊一、新二。【瘰癧の初期】七月七日に取つた麻花、五月五日に取つた艾葉等分を炷にして灸を百壯する。(外臺祕要)【金瘡內漏】麻勃一兩、蒲黃二兩を末にし、日三回、夜一回、酒で一錢匕づつ服す。(同上)【風病の麻木】麻花四兩、草烏一兩を炒つて性を存して末にし、煉蜜で調へて膏にし、三分づつ白湯で調へて服す。

麻蕡 普曰く、一名麻藍、一名青葛。時珍曰く、これは確かに殼のままの麻子をいふのである。故に周禮に『朝事の籩に蕡を供す』とあり、月令に、食麻と大麻とは食ふべく、蕡は供すべし』とあつてやや區別がある。それは殼には毒があるが仁には毒がないからである。

カリン」、「トリゴネリン」及ビ「ショリン」ナリ。大麻ニ關スル研究文獻甚ダ多ク五十餘種アリ。食物化學ニヨレバ麻實ノ養分總量ハ水分九・九八、粗蛋白質二一・一八、粗脂肪二四・五六、粗纖維二九・三三、可溶無窒物一二・九〇、灰分二・〇五。

(八)木村(康)曰ク、(應用)內用ニハ鎭靜藥及ビ催眠藥トシテ應用ス、〇・五―三・〇ヲ散劑或ハ丸劑トシテ與フ、外用ニハ薰烟劑及ビ卷烟草トシテ喘息等ニ吸引セシム、藥局法ノ製品ハ印度大麻丁幾、印度大麻越幾斯ナリ、尙あさ實ヲ大麻仁ト稱シテ緩和藥トシ、又乳劑ニ之ヲ附加シ

【氣 味】〔辛し、平にして毒あり〕普曰く、神農は辛しといひ、雷公は甘しといひ、岐伯は毒ありといふ。○牡蠣、白微を畏る。【主 治】〔五勞、七傷。多く服すれば人をして鬼を見て狂走せしめる〕(本經) 詵曰く、鬼を見やうとするときは、生麻子、菖蒲、鬼臼等分を杵いて彈子大の丸にし、毎朝日に向つて一丸づつ服し、滿百日に達すれば鬼を見る。〔(九)五臟、下血、寒氣を利し、積を破り、痺を止め、膿を散ず。(一〇)久しく服すれば神明に通じ、身體を輕くする〕(別錄)

【附 方】 舊一。〔風顚百病〕麻子四升を水六升を猛火で煮て(一一)芽を出させ、滓を去つて二升に煎じつめ、空心に服す。或は發作し、或は發作せず、或は言葉が多くなつても怪しむに及ばぬ。ただ別の人にその手足を摩らせて置けば、少頃して鎭靜する(一二) 三劑まで服ませれば癒える。(千金)

麻仁 【修 治】 宗奭曰く、麻仁は極めて殼を去り難いものだ。殼を去るには、帛で包んで沸湯中に浸し、冷えてから取り出して井中に水に着かぬやうにして一夜間垂れて置き、翌日の日中に曝乾し、それを新瓦の上で挼んで殼を去り、簸ひ扇いで仁を取る。それで粒がみな完全に取れるものだ。張仲景の麻仁丸は、卽ちこの大

又食用トス、ソノ他ソノ纖維ヲ麻トシテ廣ク利用セラルル事ハ知ラルル如クナリ。

(九)五臟ヨリ寒氣ヲ利シ迄ノ一句ハ本經ノ文ニ屬ス。

(一〇)久服以下モ本經ニ屬スル文ナリ。

(一一)芽ヲ出サセト云フハ膨脹セシメテ、內子ヲ露出セシムルコトカ。

(一二)大觀ニ三上ニ須字アリ。

麻子の中の仁である。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】詵曰く、微寒なり、普曰く、先に地中に貯藏したものを食へば死亡する。士良曰く、多く食へば血脈を損じ、精氣を滑し、陽氣を痿す。婦人が多く食へば直ちに帶疾を發す。○牡蠣、白微、茯苓を畏る。

【主治】【中を補し、氣を益す。久しく服すれば肥健にして老衰せず、神仙となる】（本經）【中風で汗の出るを治し、水氣を逐ひ、小便を利し、積血を破り、血脈を復す。乳婦、產後の餘疾。沐すれば髮を長くし潤ほす】（別錄）【氣を下し、風痺皮頑を去る。人をして心を歡ばしむるには、香しく炒つて尿に浸し、その絞汁を服す。婦人の倒產には、十四粒を呑めば胎兒の姿勢が正しくなる】（藏器）【五臟を潤ほし、大腸の風熱結燥、及び熱淋を利す】（士良）【虛勞を補し、一切の風氣を逐ひ、肌肉を長じ、毛髮を益し、乳汁を通じ、消渇を止め、難產に分娩を催す】（日華）【汁を取つて煮た粥は五臟の風を去り、肺を潤ほし、關節不通、髮落を治す】（孟詵）【婦人の經脈を利し、大腸下痢を調へる。諸瘡癩に塗れば蟲を殺す。この汁を取つて煮た粥を食へば嘔逆を止める】（時珍）

【發明】弘景曰く、麻子中の仁は、丸藥に合せ、竝に酒を釀すに大いに善し、但し性は滑利である。劉完素曰く、麻は木穀であつて、風を治するは風と木と同氣相求むる結果である。好古曰く、麻仁は手の陽明、足の太陰の藥である。陽明の病は汗多く、胃熱し、便通困難になるもので、この三種の證候はいづれも燥だから、これを用ゐて通潤するのである。成無已曰く、脾は緩を欲する。急に甘を食つてこれを緩にする。麻仁の甘は脾を緩にし燥を潤ほす。

【附方】舊二十、新十八。【服食法】麻子仁一升、白羊脂七兩、蜜臘五兩、白蜜一合を和して杵き、蒸して食ふ。饑ゑず、老に耐へる。（食療）【耐老、益氣】久しく服すれば饑ゑぬ。麻子仁二升、大豆一升を香しく熬つて末にし、蜜で丸にして日毎に二回服す。（藥性論）【大麻仁酒】骨髓の風毒疼痛で運動不能なるを治す。大麻仁を水に浸し、沈むもの一升を取つて曝乾し、銀器に入れて廻しながら慢かに炒つて香しく熟し、木臼に入れて一萬杵搗き、白粉のやうに細になつた時止め、平均に十帖に別けて、その一帖を家釀の無灰酒と共に砂盆に入れ、柳槌で擂つて殼を濾し去り、半減するまで煎じて空服に一帖を溫服する。病の輕いものは四五帖で效が現はれ、

甚しきものも十帖以内で必ず苦痛がなくなる。その效は言葉に盡せない。(篋中方)【麻子仁粥】風水で腹大し、腰脐が重痛して轉動し得ぬには、冬麻子半斤を研り碎き、水で濾して汁を取り、粳米二合を入れて稀粥に煮、葱、椒、鹽、豉を投じて空心に食ふ。(食醫心鏡)【老人の風痺】麻子で前記の粥を煮て食ふ【五淋の澀痛】麻子で前記の粥を煮て食ふ。(同上)【大便不通】麻子で前記の粥を煮て服す。(肘後方)【麻子仁丸】脾約で大便が祕し、小便の頻數なるを治す。麻子仁二升、芍藥半斤、厚朴一尺、大黃、枳實各一斤、杏仁一升、これを熬つて研り、煉蜜で梧桐子大の丸にし、一日三回づつ漿水で十丸を服す。反應のないときは再加する。(張仲景方)【產後の祕塞】許學士は『產後に汗多ければ大便が祕難になる。これに用うべき藥としては、ただ麻子粥だけが最も穩である。これはただ產後に服するによきのみならず、凡そ老人の諸虛風祕にはいづれも具合の好いものである。大麻子仁、紫蘇子各二合を洗淨して研細し、再び水で研つて汁一盞を濾し取り、二回に分けて粥を煮て啜る』といつてある。(本事方)【產後の瘀血】下り盡きぬには、麻子仁五升を酒一升に一夜間漬け、翌早朝滓を去つて一升を溫服する。瘥えぬときは一升を再服する。吐きも下し

もせぬものだ。これを服したならば一箇月間は男子と同衾してはならぬ。初の通りに攝養する（千金方）【胎兒死亡の爲めの腹痛】冬麻子一升を杵き碎いて香しく熬り、水二升で煮てその汁を分服する（心鏡）【妊娠心痛】煩悶するには、麻子仁一合を水（一三）二盞に研り、六分に煎じ滓を去つて服す。（聖惠）【月經不通】或は兩三箇月、或は半年、或は一年に達するものには、麻子仁二升、桃仁二兩を研勻し、熱酒一升に一夜間浸し、一日に一升を服す。（普濟）【嘔逆の止まぬもの】麻仁（一四）を杵き熬つて水で研つて汁を取り、少量の鹽を添へて喫すれば立ろに效がある。李諫議は（一五）常に用ゐて極めて效を擧げた。（外臺）【虛勞內熱】下焦が虛熱し、骨節が煩疼し、肌肉が急し、小便が利せず、大便が（一六）頻數となり、少氣で吸吸となり、口が燥き、熱淋するには、大麻仁五合を研り、水二升で煮て半分に煮詰め、四五劑を服すれば瘥える。（外臺）【下を補し、渴を治す】麻子仁一升、水三升を煮て四五沸し、滓を去つて一日二回づつ半升を冷服する。（藥性論）【消渴飮水】やがて一日に數斗の水を飮むやうになり、小便の赤澀するには、秋麻子仁一升、水三升を煮て三四沸して汁を飮む。五升に過ぎずして瘥える。（肘後方）【乳石發渴】大麻仁三合、水三升を二升に煎じて

（一三）大觀ニ二ヲ一ニ作ル。
（一四）大觀ニ仁下ニ三兩ノ二字アリ。
（一五）大觀ニ常ヲ嘗ニ作ル。
（一六）大觀ニ大便數少トアリ。

（一七）大觀ニ漿上ニ蜜字アリ。

時時に呷ふ。（外臺）【飲酒咽爛】口舌に瘡を生ずるには、大麻仁一升、黄芩二兩を末にし、蜜で丸にして含む。（千金方）【脚氣腫渴】大麻仁を香しく熬り、水で研つて一升を取り、再び水三升を入れて一升に煮詰め、赤小豆一升を入れて煮熟し、豆を食ひ汁を飲む。（外臺祕要）【脚氣腹痺】大麻仁一升を研り碎き、酒三升に三晝夜間漬けて温服するが大いに良し。（外臺）【血痢の止まぬもの】必效方には、麻子仁汁で綠豆を煮て空心に食ふが極めて有效だとある。（外臺）【小兒の痢下】赤白を下して身體の衰弱甚しきには、麻子仁三合を香しく炒り、研つて細末にし、一錢づつを（一七）漿水で服すれば立ろに效がある。（子母祕錄）【腸が截れる怪病】大腸の端が一寸餘ほど出て痛み苦み、乾けば自ら落ちて又出るものを截腸病と名ける。それで腸が盡きれば不治である。ただ初めて截れたことを自覺したとき、器に脂麻油を入れてそれに坐りて浸し、大麻子汁數升を飲めば癒える。（夏子益奇疾方）【金瘡の瘀血】腹中に在るには、大麻仁三升、葱白十四本を搗き熟し、水九升で一升半に煮詰めて頓服する。血が出盡きぬときは再服する。（千金）【腹中の蟲病】大麻子仁三升、東に伸びた茱萸根八升を水に漬け、早朝二升を服す。その夜に至つて蟲が下る。（食療）【小兒の疳瘡】

一日六七回づつ麻子を嚼んで傅ける。(祕錄)【小兒の頭瘡】麻子五升を細かに水に研り、その汁を絞つて蜜を和して傅ける。(千金)【白禿無髮】麻子を炒り焦して研末し、豬脂に和して塗る。髮の生えるまでを度とする。(普濟方)【髮が落ちて生えぬもの】蕡麻子汁で粥を煮て頻に食ふ(聖濟總錄)【聤耳の膿の出るもの】麻子一合、花胭脂一分を研りまぜ、挺子にして綿で裹んで塞ぐ。(聖惠方)【大風癩疾】大麻仁三升を淘つて晒し、酒一斗で一夜浸して研り、白汁を取つて濾して瓶に入れ、重湯で數沸煮て取り收め、その汁一小盞で茄根散、乳香丸を兼ね服して效を取る。(聖惠方)【毒箭に射られたもの】麻仁數汁の杵汁を飲む。(肘後)【射罔の毒を解す】大麻子汁を飲むがよし。(千金)【溫疫の辟禳】麻子仁、赤小豆各十四粒を十二月末日の夜に井中に置き、その水を飲むが良し。(龍魚河圖)【赤遊丹毒】麻仁を搗いて末にし、水に和して傅ける。(千金方)【濕癬肥瘡】大麻(一八)渚を傅ければ五日で瘥える。(千金方)【瘭疽出汁】手足、肩背に生じ、纍纍として赤豆のやうな狀態となりたるには、剝き淨めた上へ大麻子を炒り研末して摩る。(千金方)

油　【主治】【黑く熬り、油を搾つて頭に傅ければ髮の落ちて生えぬを治す。煎

(一八)渚ノ字ノ音ハ除(ジヨ)ニシテ徐ニ同ジト集韻ニアリ。此ノ文字ハ瀦ノ字ノ誤用ニ非ザルカ。麻汁ヲヨドマシタルモノノ意ナラン。

熟して時時に啜(すす)れば硫黄毒發の身熱を治す】(時珍)○千金方、外臺秘要に記載がある。

[附方] 新一。【(一九)尸咽(しえん)痛痒(つうやう)】麻子を燒脂して服す。(總錄)

葉 [氣味]【辛し、毒あり】[主治]【搗汁五合を服すれば蚘蟲(くわいちう)を下す。搗(たう)爛(らん)して蝎毒に傅ける。俱に效がある】(蘇恭)【湯に浸して髮を沐すれば長く潤ひ、白髮が生えなくなる】甄權曰く、葉一握と子五升を共に搗き和して三日浸し、滓を去つて髮を沐す。

[發明] 時珍曰く、按ずるに、郭文の瘡科心要に『烏金散——癰疽(ようそ)、疔腫(ちやうしゆ)、(二〇)時毒、惡瘡を治す——の方の中に、火麻頭を麻黄諸藥と共に用ゐて汗を發す』とある。薬は毒があつて毒を攻るのだといふことが判る。普濟方には『これを用ゐて瘧(ぎやく)を截(き)る。尤も推奨すべきものだ』とある。

[附方] 新二。【瘧の止まぬを治す】火麻葉を生と枯たるとを問はず鍋に入れ、文武火で慢(ゆる)やかに炒つて香くし、(二一)攝起して紙で蓋ひ、汗を出盡さして末にし、發作の直前に茶或は酒で服ませ、その患者を原眠(もとね)つた床に臥させる。さながら醉ふたものの如くなり、醒めればそれで癒えてゐる ○またある方では、火麻葉を前記

(一九)尸咽、病源ニ云、腹内ノ尸蟲上ツテ人ノ喉咽ヲ食テ瘡ヲ生ズ、其狀或ハ痒ク或ハ痛ミ甘䘌ノ候ノ如シト。

(二〇)四時ノ瘟疫ニヨツテ、顔面耳項ノハルル證ナリ。

(二一)攝字、未詳。

の方法のやうにして末にし、一兩に縮砂、丁香、陳皮赤各半兩を加へ、酒糊で梧子大の丸にし、五七丸づつを酒、茶の任意のもので服す。諸瘧を治し、元氣を壯にする。（普濟方）

黃麻（二二）　主治　【血を破り、小便を通ずる】（時珍）

附方　新二。【熱淋脹痛】麻皮一兩、炙甘草三分を水二盞で一盞に煎じ、一日二回づつ服して效を取る。（聖惠方）【趺撲折傷】疼痛するものに對する接骨方は、黃麻の燒灰、頭髮灰各一兩、乳香五錢を末にし、三錢づつを溫酒で服す。立ろに效がある。（王仲勉經驗方）

麻根　主治　【搗汁、或は煮汁を服すれば、瘀血、石淋に主效がある】（陶弘景）【產難で胞衣の出ぬもの、破血、壅脹、帶下、崩中の止まぬものを治するに、水で煮て服するが效がある】（蘇恭）【熱淋で下血の止まぬを治するに、二十七箇を取つて洗淨し、水五升で三升に煮詰めて分服する。血が止まること神驗がある】（藥性）【根、及び葉の搗汁を服すれば、毆打の瘀血で心腹が滿し、呼吸短きもの、及び踠折骨痛の忍び難きものを治し、いづれも效がある。この物がないときは麻の煮汁を代用す

（二二）麻ノ下ニ皮字ヲ加フベシ。

る』(蘇頌) ○韋宙の獨行方に記載がある。

漚麻汁 [主治] 『消渴を止め、瘀血を治す』(蘇恭)

(一)小 麥 (別錄中品)

和名 こむぎ
學名 Triticum aestivum, L.
科名 禾本科

[校正] 拾遺の麥苗を此の條に併せ歸す。

(二)[釋名] **來** 時珍曰く、來は秾とも書く。許氏の說文に『天瑞麥を降す、一來二麰、芒刺の形に象る。天の所來なり』とある。足で步行して來たやうなといふので、麥の字を來に從ひ夊に從ふて書くのである。夊は音綏(スヰ)足の步行する形である。詩に『我に來牟を貽る』とあるがこれである。また『來はその實の形容、夊はその根の形容だ』ともいふ。梵書には麥を名けて迦師錯といふ。

〔小 麥〕

(一)牧野云フ、小麥ハ歐洲ノ南部、亞細亞西部邊ガ蓋シ原產デハナイカト謂ハレテヰルガ、今日デハ野生ノ處ハ見付カラヌ、我邦ヘハ舊ク入リ來ツタモノト思フガ、其レハ多分支那方面カラデアツタデアラウ。

(二)鈴木曰ク、李氏ノ引ク所說文ニ合ハズ、說文ニハ、周所受瑞麥來麰也。二麥一夆、象其芒朿之形。天所來也。故爲行來之來。詩曰。詒我來麰。トアリ。

(三)集解　頌曰く、大、小麥は、秋種ゑて冬長じ、春秀でて夏實る。四時中和の氣を具ふるものだ。故に五穀中の貴重なものとなつてゐるのである。氣候の暖い土地では、やはり春種ゑて夏になつて收穫することも可能であるが、しかし秋種ゑたものに比すれば四氣が不足なので毒がある。

時珍曰く、北方地方では、麥の種を蒔くに一面に散らして撒く、南方地方では撮んで撒く。北方の麥は皮が薄く麪が多いが、南方の麥はその反對だ。或は、麥を貯藏するに蠶沙を和すれば蠹を辟けるともいひ、或は、立秋前に蒼耳を剉み碎いて共に晒して貯藏しても蛀が付かぬ。しかし秋後になれば已に蟲が生えて了ふといふ。蓋し麥の性は濕を惡む。故に久雨があつて潦水に浸れば多くは熟さなくなる。

小麥　(四)氣味　【甘し、微寒にして毒なし】少陰、太陽の經に入る。甄權曰く、平にして小毒あり。恭曰く、小麥で湯を作るには皮が裂けるやうにしてはならぬ。藏器曰く、小麥は秋種ゑて夏熟するので、四時の氣を完全に受けて寒、熱、溫、涼を兼ね有する。故に麥は涼、(四)麴は溫、(五)麩は冷、(六)麪は熱であつて、は當然の現はれである。(七)河、渭以西の

(三) 木村(康)曰ク、小麥ハ子粒ヨリ小麥澱粉、麩、小麥油ヲ製シ又之ヲ粉末即チ小麥粉トナシ、麵麭、麩、素麪、饂飩、菓子類等ヲ製シ、又子粒ハ醬油、味ノ素(グルータミン酸モノナトリウム)等ヲ製スル原料ノ一トス、而シテ小麥藁モ大麥藁ト共麥藁トシテ、大小工業用トシテ要用ナリ。

(四) 木村(康)曰ク、(成分)藁ニハ「ペントザン」(内「キシラン」一六%)二三—二四%ヲ含ミ、灰分中(三—七%)中 SiO_2 六〇—七〇%ヲ占メ、他ニ K_2O, CaO, Na_2O, P_2O_5, MgO, SO_3, Fe_2O_3, Cl 等ヲ含ム。穀粒ニ

ハ水分一三・四%、含窒素物一一、脂肪一・六五、無窒素抽出物七〇、粗繊維二・一二、灰分一・九二ニシテ澱粉最モ多ク五三―七〇%（乾燥物質中五八―七六）及糖二―七、「デキストリン」二―一〇、其他「アスパラギン」ハ之ヲ缺ケドモ少量ノ「アルギニン」ヲ有ス。糖ハ蔗糖、「デキストローゼ」、「ラフイノーゼ」等ナリ。澱粉ハ即チ小麥澱粉ト稱スルモノニシテ「アミロペクチン」六七・五%、「アミローゼ」三二・五%ヨリナル、又穀粒ノ凡ソ一・四三%ヲ占ムルトイハルル芽胎中ニハ「トリチコヌクレイン」酸、糖、蛋白質、粗脂肪、無窒素物、灰分

白麥麪が涼であるのは、やはり春種ゑるために秋、冬の二氣を缺く結果である。時珍曰く。新麥は性が熱であり、陳麥は平、和である。

【主治】【(八)客熱を除き、(九)煩渇、咽(一〇)燥を止め、小便を利し、肝氣を養ひ、漏血、唾血を止め、婦人を妊娠し易くする】(別錄)【心氣を養ふ。心病にはこれを食ふがよし】(思邈)【湯に煎じて飮めば俄かに劇しき淋を治す】(宗奭)【熬つて末にして服すれば腸中の蚘蟲を殺す】(藥性)【陳きものを湯に煎じて飮めば虛汗を止める。燒いて性を存し、油で調へて諸瘡、湯火傷灼に塗る】(時珍)

【發明】時珍曰く、按ずるに、素問に『麥は火に屬す、心の穀なり』とあり、鄭玄は『麥には孚甲があり、木に屬する』といひ、許愼は『麥は金に屬す。金(一一)王にして生じ、火王にして死す』といひ、この三説はそれぞれ異つてゐるのであつて、別錄に『麥は肝氣を養ふ』とあるは鄭氏の說に合致し、孫思邈が『麥は心氣を養ふ』といふは素問と合致してゐる。しかしその功力の點を公平に觀察するに、煩を除き、渴を止め、汗を收め、溲を利し、血を止めるは皆心の病に關するものだ。これは素問が論據として正しいものといはねばならぬ。蓋し、許氏は時を中心としていひ、

鄭氏は形を中心としていひ、素問は功性を中心としていつたので、それ故に立論が異つたに過ぎぬのである。

震亨曰く、饑饉の際小麥を穀の代用とするには、晒燥して少量の水で潤し、舂いて皮を去り、煮て飯にして食ふやうにする。さうすれば麪の熱の惡影響を被らない。

附方　舊三、新四。【消渇の心煩】小麥で飯、及び粥を作つて食ふ。（心鏡）【老人の五淋】身熱し、腹滿するには、小麥一升、通草二兩を水三升で一升に煮て飲めば癒える。（奉親書）【項下の癭氣】小麥一升を醋一升に漬け、晒し乾して末にし、海藻を洗つて研つた末三兩と和しまぜ、一日三回づつ、酒で方寸ヒを服す。（小品）【(一二)眉鍊頭瘡】小麥を燒いて性を存して末にし、油で調へて傅ける。（儒門事親）【白癜風癬】小麥を石の上に攤げ、燒いた鐵物で壓搾して出した油を搽る。甚だ效がある。（醫學正傳）【湯火傷灼】まだ瘡とならぬには、小麥を黑く炒つて研り、膩粉を入れて油で調へて塗る。冷水に觸れてはならぬ。必ず爛れるものである。（袖珍方）【金瘡の腸出】小麥五升を水九升で煮て四升を取り、木綿で濾して汁を取り、極めて冷えるを待ち、患者を席の上に臥させ、その汁を含んで噀きかければ腸は漸次に入る。その背に噀

等ノ他「ヴイタミン」A及ビBヲ含ミCヲ鈌クト。
(四)麪ハ麪ニ同ジ。
(五)麩ハ小麥ノ屑皮ナリ。
(六)麪ハ麥粉ナリ。
(七)河ハ黃河、渭ハ渭水ヲ指ス。
(八)大觀ニ客字ナシ。
(九)大觀ニ煩ヲ躁ニ作ル。
(一〇)大觀ニ燥ヲ乾ニ作ル。
(一一)本經逢原ニ王ヲ旺ニ作ル。
(一二)眉毛中ニ瘡ヲ生ズルヲ眉鍊瘡ト云フ。

(一三)浮麥ハ、シヒナムギ、皮アリテ肉ナキ空殼ヲ云フ。

のであつて、決して患者本人にその藥を知らしめ、また多くの傍にゐる人人に物を言はせてはならぬ。腸が入らなくなるものである。腸が入つたならば、その席の四隅を擡げて輕く搖り腸を自から入らしめる。その後十日ほどの間はなるべく美食を攝るやうにする。決して本人を驚かし感動さしてはならぬ。驚動させれば死亡する。(劉涓子鬼遺方)

(一三)**浮麥** 即ち水で淘つたとき浮き上つたものである。焙じて用ゐる。

氣味 【甘く鹹し、寒にして毒なし】 主治 【氣を益し、熱を除き、自汗、盜汗、骨蒸、虛熱、婦人の勞熱を止める】(時珍)

麥麩 主治 【時疾熱瘡、湯火瘡爛、撲損傷折の瘀血には、醋で炒つて罯貼する】(日華) 【麪に和し餅にして食へば、洩痢を止め、中を調へ、熱を去り、身體を壯健にする。醋を拌ぜ、蒸熱して袋に盛り、包んで人馬の冷失、腰脚の傷折の患部を熨すれば、痛を止め、血を散ずる】(藏器) 【醋で蒸して手足の風濕痺痛、寒濕脚氣を熨し、汗の出るまで交互に易へて熨するがいづれも良し、末にして服すれば虛汗を止める】(時珍)

【發明】時珍曰く、麩とは麥の皮のことである。浮麥と性は同じであるが、汗を止める功力は浮麥の次位にある。蓋し浮麥とは肉の無い麥である。凡そ身體の疼痛するもの、及び、瘡瘍の腫爛して物を漬け沾はすもの、或は小兒の暑期に出る痘瘡で、潰爛して席や寢具に着くために眠れぬものには、いづれも蒲團皮へ麩を盛り縫合せて敷いて臥せば、性が涼でありまた軟かで誠に妙法である。

【附方】新七。【虛汗、盜汗】衛生寶鑑では、浮小麥を文武火で炒つて末にし、一日三回、二錢づつを米飲で服す。或は湯に煎じて茶代りに飲む。〇ある方では、豬觜唇を煮熟して切片し、右の末を蘸けて食ふも良し。【產後の虛汗】小麥麩、牡蠣等分を末にし、一日二回、豬肉汁で調へて二錢を服す。(胡氏婦人方)【走氣で痛むもの】釅醋を麩皮に拌ぜて炒り熱し、袋に盛つて熨す。(生生編)【諸種の瘢痕を滅す】春、夏は大麥麩を用ゐ、秋、冬は小麥麩を用ゐ、篩つた粉を酥で和して傅ける。(總錄)【小兒の眉瘡】小麥麩を黑く炒つて研末し、酒で調へて傅ける。【小便尿血】麪麩を香しく炒り、肥豬肉に蘸けて食ふ。(集玄)

麪 【氣味】【甘し、溫にして微毒あり。熱を消し煩を止め能はぬ】(別錄) 大明

（一四）大觀ニ駿ニ作ル。

（一五）大觀ニ二十三ニ作ル。

曰く、性は壅熱であつて、少し風氣を動じ、丹石の毒を發する。思邈曰く、多く食へば宿澼を增進し、客氣を加へる。○漢椒、蘿蔔を畏る。

［主治］【虛を補す。久しく服すれば膚、體を實し、腸、胃を厚くし、氣力を强くする】（藏器）【氣を養ひ、不足を補し、五臟を助ける】（日華）【水で調へて服すれば、人間の中暑、馬の肺熱を病むを治す】（宗奭）【癰疽、損傷に傅れば血を散じ、痛を止める。生で食へば大腸を利す。水で調へて服すれば鼻衄、吐血を止める】（時珍）

［發明］詵曰く、麪に熱毒のあるのは、それは多くは陳く（一四）黦い色になつたものか、又は磨臼中の石末が混入してゐるためだ。但し杵いて食へばよし。

藏器曰く、麪は性が熱であるが、（一五）二番磨りのものだけは涼である。それはその粉が麩に近くなるためである。河、渭以西の白麥麪は性が涼だ。それは春種ゑるために二氣を缺くからである。

頴曰く、東南の地は卑濕で、春雨水が多いから麥がその濕氣を受けてゐる。また嘗て汗を出さぬものだ。故に食へば渴し、風氣を動じ、濕を助けて發熱する。西北の地は高燥で、春雨が少いから濕を受けない。また地窖に貯藏してその汗を出して

ある。且つ北方人の體質は厚くして濕が少い。故に常食しても病を起さぬのだ。

時珍曰く、北方の麪は性が溫であつて、これを食へば渴せぬ。南方の麪は性が熱であつて、これを食へば煩渴する。西方國境附近の麪は性が涼である。いづれもその地氣の關係から現はれるものである。漢椒を呑み、蘿蔔を食へば皆能くその毒を解する。それに就いては蘿蔔の條下で說明してある。醫方中に往往飛羅麪を用ゐることになつてゐるのは、その石末を無くして性を平易ならしめるためである。陳麥麪は水で煮て食へば毒はないが、糟は脹を發し、よく病を發し、瘡を發する。ただこれを蒸餅にし藥に和するのは、そのものが消化し易い點を利用するのだ。按ずるに、李廷飛の延壽書に『北方は霜雪が多い、それで麪に毒がない。南方は雪が少い、それで麪に毒がある』とあり、顧元慶の簷曝偶談には『江南の麥は花が夜開くものだから病を發する。江北の麥は花が晝開くものだから人體に宜い』とあり、又、『且つ魚と稻とは江淮が宜く、羊と麪とは江洛が宜い』とある。やはり五方それぞれ適、不適があるのだ。麪は性熱ではあるが、寒食の日に紙袋に盛つて風の當る場所へ懸けて置けば、數十年に亙つて腐敗變質せず、それで熱性は皆去つて毒がない。藥に

(一六)抄ハ匙ヲ以テ取ルヲ云フ。

入れるに尤も良いものである。

附　方　舊七、新二十一。【熱渇心煩】温水一盞で麪一兩を調へて飲む。(聖濟總錄)【中暍卒死】井水で麪一大(一六)抄を和して服す。(千金)【夜間の盜汗】麥麪を彈丸ほどにし、就寢時に空心にして煮て食ひ、翌朝妙香散一帖を服して效を取る。【內損の吐血】飛羅麪をあつさり炒り、二錢を京墨汁、或は藕節汁で調へて服す。(醫學集成)【大衄出血】口、耳皆出るには、白麪に鹽少量を入れ、三錢を冷水で調へて服す。(普濟方)【中蠱の吐血】小麥麪二合を水で調へて服すれば半日で下出するものだ。(廣記)【嘔噦の止まぬもの】醋で麪を和して彈丸ほどのものを三十箇を作り、沸湯で煮熟して漉出し、漿水中に投じて温い間に二三箇を呑む。それで噦が定まれば再び呑むに及ばぬが、なほ定まらぬときは夕刻に再び呑む。(兵部手集)【白色のものを下す寒痢】炒つた麪方寸匕づつを粥に入れて食へば、一日百回瀉して醫師も救ひ得ぬほどのものを能く療ずる。(外臺)【泄痢して固まらぬもの】白麪一斤を炒つて黃色に焦し、毎日空心に一二匙を温水で服す。(正要)【諸瘧、久瘧】三軒の家から寒食麪一合づつを集め、五月五日の正午に採つた青蒿を擂つて自然汁を取り、和して綠豆大の

（一七）跰ハ胝ナリ、皮起ルナリ、ソコマメ。

丸にし、發作する日の早朝無根水で一丸を服す。ある方では、炒つた黄丹少量を加へる。（德生堂）【頭皮の虚腫】腫の狀態が薄く蒸餅のやうで內部に水があるやうに見えるには、口で麪を嚼んで傅けるが良し。（梅師方）【咽喉腫痛】迂かと物をも食へぬには、白麪を醋で和して外から喉の腫れた部位に塗る。（普濟方）【婦人の吹奶】水で麪を調へて糊に煮、熟せんとする時、無灰酒一盞を投じて攪きまぜて熱して飲み、別人に徐徐に按摩させる。藥が行つて瘉える。（聖惠方）【乳癰の消かぬもの】白麪半斤を黄色に炒り、醋で糊に煮て塗れば消く。（聖惠方）【破傷風病】白麪、燒鹽各一撮を新水で調へて塗る。（普濟方）【金瘡の出血】止まらぬには、生麪の乾いたものを傅ければ五七日で瘉える。（藺氏經驗方）【遠路を步行して出た脚（一七）跰の泡に成つたものには、水で生麪を調へて塗れば一夜にして平になる。（海上）【折傷瘀損】白麪、巵子仁を共に搗き、水で調へて傅ければ散る。【火燎瘡】炒つた麪に巵子仁末を入れ、油で和して傅ける。（千金）【瘡中の惡肉】寒食麪二兩、巴豆五分を水で和して餅にし、燒いて末にして摻る。（仙傳外科）【白禿頭瘡】白麪、豆豉を和して研り、醋で和して傅ける。（普濟方）【小兒の口瘡】寒食麪五錢、消石七錢を水で調へ、男は左、女は右

(一八)觔ハ筋ト同ジ、筋ハ今日食用トスル麩ノコトナリ。
(一九)漿粉ハ俗ニ云フシヤウフノリ。

の足の心に半錢を塗る。(普濟方)【婦人の斷産】白麪一升を酒一升で煮沸し、滓を去つて三服に分け、月經の潮せんとする前夜と翌朝と曉とに服す。【陰冷の悶痛】漸次に痛が腹に入つて腫滿するには、醋で麪を和して熨す。(千金方)【一切の漏瘡】鹽と麪を和して團にし、燒き研つて傅ける。(千金方)【瘭疽の汁の出るもの】手足、肩背に生じ、累累として赤豆のやうになつたものには、剝き淨めて酒で麪を和して傅ける。(千金方)【一切の疔腫】麪を臘猪脂で和して封ずるがよし。(梅師方)【米食の積傷】白麪一兩、白酒麯二丸を炒つて末にし、二匙づつを白湯で調へて服す。肉食で傷めたものならば山査湯で服す。(簡便方)

麥粉　［氣味］【甘し、涼にして毒なし】［主治］【中を補し、氣脈を益し、五臟を和し、經絡を調へる。又、炒つて一合を湯で服すれば下痢を斷つ】(孟詵)【醋で熬つて膏にしたものは、一切の癰腫、湯火傷を消す】(時珍)

［發明］　時珍曰く、麥粉とは麩麪のことだ。麪を洗つて(一八)觔にするとき澄し出す(一九)漿粉である。今世間では(二〇)漿衣に多くこれを用ゐるが、古方には用ゐたものは鮮い。按ずるに、萬表の積善堂方に『烏龍膏は一切の癰腫發背、無名腫毒の初

（二〇）漿衣トハ衣服ニ糊チ付ケルコトナリ。

（二一）素食トハ精進料理ノコトナラン。

期の焮熱してまだ破れぬものを治し、效を取ること神の如きものだ。一箇年以上を經た小粉を――久しく經つたものほど佳し――鍋で炒る。炒る初めには餳のやうになるが、久しく炒つて居るうちに乾いて黃黑色になる。それを冷え定まつてから研末し、陳米醋で調へて糊にし、更に熬つて黑漆のやうにして瓷罐に貯へ、使用する時には、紙に攤し、孔を剪り明けて貼る。すると氷のやうに冷えて疼痛が止まり、少頃すると痒を覺え、乾いて取らうとしても動かない。それをそのまゝ久しく經つと、腫毒が自ら消する頃に藥力もまた盡きて脫落する。甚だ妙である。この方は蘇州の杜水庵の所傳であつて、屢用ゐて效驗があつた。藥は極めて得易いが功力は偉大なものだ。醫術を行ふ者は宜しく收藏すべきことである』といつてある。

麪筋　[氣味]【甘し、涼にして毒なし】[主治]【熱を解し、中を和す。勞熱の患者は煮て食ふがよし】（時珍）【中を寬にし、氣を益す】（寗原）

[發明]　時珍曰く、麪筋は麩と麪とを水中で揉み洗つて出來るものだ。古人は知らなかつたらしい。今では（二二）素食として重要の物となつてゐる。煮て食ふが甚だ良し。今は一般に多く油で炒るが、さうしたものは性が熱である。宗奭曰く、生

で白麪を嚼めば筋になる。鳥や蟲を粘し得るものだ。

麥麨　卽ち糗である。麥を蒸し磨つて出來る屑である。〔氣味〕【甘し、微寒にして毒なし】〔主治〕【消渴に煩を止める】(蜀本)

麥苗(拾遺)〔氣味〕【辛し、寒にして毒なし】〔主治〕【酒毒の暴熱。酒疸の目黃を消す。いづれも搗き爛して汁を絞り、日毎に飲む。又、蠱毒を解すには汁を煮て濾して服す】(藏器)【煩悶を除き、時疾の狂熱を解し、胸膈の熱を退け、小腸を利す。虀を作つて食へば甚だ顏色を益す】(日華)

麥奴　藏器曰く、麥の穗が熟せんとする時に上に出る黑黴そのものである。

〔主治〕【熱煩、天行熱毒。丹石の毒を解す】(藏器)【陽毒、溫毒の極端な熱で發狂し大渴するもの、及び溫瘧を治す】(時珍)

〔發明〕時珍曰く、朱肱の南陽活人書に『陽毒、溫毒の極端な熱で發狂し、發斑し、大渴し、その程度が通常に倍して甚しきには、黑奴丸一丸を水で溶して服す。汗を出し、或は微し利して癒える。その方は、小麥奴、梁上塵、釜底煤、竈突墨、黃芩、麻黃、硝黃等分を末にし、蜜で彈子大の丸にして用ゐる』とある。蓋し火化

の作用を利用したもので、從治の法則に據つたものだ。麥なるものは心の穀で火に屬するものであり、奴そのものは麥實が實らんとして濕熱のために蒸上された黑黴だから、釜煤、竈墨と同じ關係にあるものだ。この方は、陳延之の小品方には麥奴丸なる名稱で記載され、初虞世の古今錄驗には高堂丸、水解丸なる名稱で記載されてある。誠に救急の良藥である。

稃　【主治】【灰に燒き、疣痣を去り、惡肉を蝕する膏中に入れて用ゐる】（時珍）

（一）大麥（別錄中心）

和名　おほむぎ
學名　Hordeum vulgare, L.
科名　禾本科

【釋名】**牟麥**　時珍曰く、麥にして苗、粒共に來より大きい。故に大なる名稱を呼ばれたのだ。牟もやはり大の意味で、二字の意味を合して麰と書く。

（二）【集解】弘景曰く、今の稞麥で、一名牟麥といふ。穬麥に似てこれは皮の薄いだけのものだ。

恭曰く、大麥は（三）關中に產する。卽ち靑稞であつて、小麥に似て形の大きい麥で、皮が厚いから大麥といふのである。穬麥には似てゐない。

（一）牧野云フ、大麥モ亦小麥ト同ジク今日デハ何レノ處ニモ其野生品ハ見付カラヌ、我邦ヘハ舊ク入リ來ツテ今日デハ最モ重要ナ食料品トナツテヰルガ、多分古ヘ支那ノ方面ヨリ移入セラレタモノト思フ、此一變種ニ稞麥卽チはだかむぎ（Var. coeleste〔L.〕）ガアツテ、中部以西ノ日本デハ普通ニ耕

○頌曰く、大麥は今は南方でも北方でも能く種蒔する。穬麥には二種あつて、一種は小麥に類して大きく、一種は大麥に類して大きい。

○○藏器曰く、大、穬の二麥を前後二條に記載してあるが、蓋し穬麥といふは皮付きのもの、大麥といふは麥米のことで、殼のままのものと殼のないものとの區別である。蘇恭が靑稞を大麥としたのは誤だ。靑稞は大麥に似て皮と肉とが生來離れてゐるものだ。(四)秦、隴、(五)巴西地方でこれを種ゑる。今は一般にこの物を大麥米として販賣しゐるが、區別の付き兼ねるものである。

〔大麥〕

○○陳承曰く、小麥とは今一般に磨つて麪にして日常用ゐてゐるものを指し、大麥とは一般に粒も皮も稻に似たものを指す。これは飯にすれば滑かなもので、馬の飼糧

作セラレテヰル。

(二)木村(康)曰ク、大麥ハ元來吾邦ニテハ米ニ亞ギテ主要ナル食物ニシテ、主トシテ麥飯トナシ、其他麥酒ノ麥房トシ、又飴ヲ作ル等效用頗ル多シ。

(三)關中ハ草部山草類淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。

(四)秦隴ハ草部山草類胡黃連ノ註ヲ見ヨ。

(五)巴西ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。

に良し。穬麥とは今一般に小麥に似て粒が大きく、色の青黄のもののことで、麪にすれば脆く硬く、多く食へば脹する。(六)汴洛、河北地方ではまたこれを黃稞と呼んでゐる。關中の一種の青稞は、近道のものに比すれば粒がやや小さく、色は微し青い。これは馬の飼糧にはするが、藥には用ゐられてゐない。かやうな次第で、大、穬の二麥はその名稱が錯綜してゐるが、今の穬麥といつて小麥に似て大きいものは大麥といふが正しく、今の大麥といつて小麥に似て硬脆なものは穬麥といふが正しいのである。曖昧な區別は宜しくない。

時珍曰く、大、穬の二麥に對する註釋者の意見は一定してゐないが、按ずるに、吳普本草には『大、麥、一名穬麥。五穀の長なり』とあり、王禎の農書には『青稞の大、小の二種は、大、小の麥に似て粒が大きく皮が薄く、麪が多くて麩がない。西方の地で種ゑてゐる。大小麥とは名稱が異ふといふに過ぎぬものだ』とあり、郭義恭の廣志には、大麥には、黑穬麥といふがあり、䅌麥といふがあり、涼州に產し、大麥に似てゐる。赤麥といふもあり、これは赤色で肥えてゐる』とある。これ等の說に據れば、穬麥とは大麥中の一種で皮が厚く青色のものといふことになる。大體に於て、

(六)汴洛ハ草部芳草類香薷ノ註ヲ見ヨ。

(七) 木村(康)曰ク、(成分)葉ニハ「カロチン」及ビ乾燥物質中蓚酸鹽〇・〇三%等ヲ含ム、全草ノ灰分五—七%ニシテ、SiO_2五〇・六〇%、CaO四—七、K_2O二〇%ヲ含ム。穀粒ニハ全組成(%)水分一二・九五、脂肪一・八七、無窒素物六七・八八、粗繊維四・二三、灰分三・〇六、其ノ中澱粉凡ソ五六—六六、糖等。六—七「デキストリン」三—四、大麥粉ハソノ乾燥物質中(%)澱

これは一類の異種であつて、粟(ぞく)、粳(かう)などの種類が百に近いと同じわけで、總て一類である。ただその生産する地方の地味、氣候等の關係から不同があるだけのものだ。故にこの二麥の主たる治功も甚だ遠いものではない。大麥もやはり粘のあるものを糯麥(じゆばく)と名け、釀酒の材料にする。

[氣　味] 【鹹し、溫にして微寒なり、毒なし。五穀の長となす。人をして熱多からしむ】詵曰く、暴食(ばうしよく)すれば脚弱のやうな狀態になる。それは氣を下すためだ。久しく服すれば人體に宜し、熟したものは益あり、生を帶びたものは冷にして人體を損ずる。○石蜜が使となる。

[主　治] 【消渴。熱を除き、氣を益し、中を調へる】(別錄) 【虛劣を補し、血脈を壯にし、顏色を益し、五臟を實し、穀食を消化し、洩(せつ)を止め、風氣を動ぜぬ。久しく食すれば人體を肥白ならしめ、肌膚を滑にする。麪にすれば小麥に勝(まさ)り、燥熱がない】(士良) 【麪にしたものは、胃を平にし、渴を止め、食物を消化し、脹滿を療ず】(蘇恭) 【久しく食すれば頭髮が白くならぬ。針砂、沒石子(もくせきし)等に和して染めれば髮が黑くなる】(孟詵) 【胸を寬にし、氣を下し、血を涼し、積を消し、食を進める】(時珍)

【發明】宗奭曰く、大麥は性が平涼であり、滑膩(くわつじ)である。纏喉風で食物の喉を通らぬ患者には、この麨で稀糊を作つて嚥(のま)せる。胃氣を助けて平癒する。三伏の暑中には、朝廷で麨にして臣下に賜はることになつてゐる。震亨曰く、大麥の熟した初に、世人は多く炒つて食ふが、この物には火(くわ)があつて能く熱病を生ずる。世人はこれを知らない。時珍曰く、大麥は飯となし食饗(しよくきやう)として益がある。粥に煮れば甚だ滑かだ。麨に磨つて醬にすれば甚だ甘美である。

【附方】舊四、新五。【飽食の煩脹】ただ臥してゐたがるには、大麥麨を熬(い)つて微し香くし、方寸ヒづつを白湯で服するが佳し。(肘後方)【膜外の水氣】大麥麨、甘遂(かんすゐ)末(まつ)各半兩を水で和し、餅にして炙熱して食ひ、通じをつける。(總錄)【小兒の(八)傷乳】腹脹し、煩悶し、よく睡りたがるには、大麥麨を生で用ゐ、一錢を水で調へて服す。白麨を微し炒つたものもよし。(保幼大全)(九)【蠼螋尿瘡(くさうねうさう)】一日三回、大麥を嚼んで傅ける。(傷寒類要)【腫毒の已に破れたもの】青大麥を鬚を去り、炒り爆して花のやうにし、末にして傅ける。靨(えん)になつたものは、それを剝き去つて又數回傅ければ癒える。【麥芒(はくばう)の目に入つたとき】大麥の煮汁で洗へば出る。(孫眞人方)【湯火傷灼】大麥を

粉八〇・八、「プロテイン」八・七、「ペントザン」二・八、脂肪二・二三、蔗糖一、粗纖維〇・四五、灰分一・一九。
麥芽中ニハ「ベタイン」、「ヒヨリン」蔗糖「ヒスチヂン」、「ホルデニン」等ヲ含ミ、「アミド」類ニ富ム、百分組成ハ水分一二、含窒素物一三、純「プロテイン」一六・二八、脂肪二、粗纖維一二・三二、無窒素物四三、灰分七・五一、又「ヴイタミン」ハA、B、D、Eヲ含ム。

(八)傷乳ハ乳ヲ飲ミ過ギタルヤマヒ。

(九)蠼螋尿瘡ハ壁間ニ隱レ住ム蠼螋蟲、一名八脚蟲ガ尿ヲ以テ人ヲ射タトキ其毒ニ中リ生ズルモノデ皮膚ニ米粒大又ハ豆

黒く炒つて研末し、細かに調へて搽る。【負傷して腸を露出せるもの】大麥粥汁で腸を洗つて推し入れ、百日間はただ米糜のみを飲むがよし。(千金)【突然の淋痛】大麥三兩を湯に煎じ、薑汁、蜂蜜を入れて茶代りに飲む。(聖惠方)

麥蘗 蘗米の條下に記載す。

苗 主治 【諸種の黄病に小便を利す。杵汁を日日服す】(類要)【冬期の顔面、手足の(一〇)皴瘃を煮汁で洗ふ】(時珍)

附方 新一。【小便不通】陳大麥稭の濃煎汁を頻に服す。(簡便方)

大麥奴 主治 【熱疾を解し、藥毒を消す】(藏器)

(一一)穬麥

穬の音は礦(クワウ)である。 (別錄中心)

和名 からすむぎ、かうぼうむぎ(本草綱目啓蒙)
學名 Hordeum vulgare, L. var.
科名 禾本科

釋名 時珍曰く、穬とは殼が厚くて粗礦だといふ意味である。

集解 弘景曰く、穬麥は馬に食はせるものだ。服食家はいづれも大、穬の二麥を食ふが、これは人體を輕健ならしめるものである。炳曰く、穬麥は西川地方で

大ノ水泡瘡ヲ發シ、湯火傷ノ如キ狀ヲ呈スルモノト云フ。

(一〇)皴ハ皮裂、瘃ハ手足ノ凍瘡。

(一一)牧野云フ、是レハおほむぎノ一品デ本草綱目啓蒙ニ「一種粒大ニシテ色青キ者ナリ」ト言ツテヰル、即チ今之レニ從フテオク、からすむぎニハ同名ガアリ又かうぼうむぎニモ同名ガアルノデ混視セ

だが、ただ穗が細く長くして疎らだ。唐の劉夢得が所謂『菟葵、燕麥、春風に動搖す』といつたそのものである。周憲王曰く、燕麥は穗が極めて細く、穗毎にまた數十箇の小叉があり、子もまた細小である。舂いて皮を去り、麪にして蒸して食ひ、また餅にして食ふ。いづれも凶歳のとき代用食になる。

米　(三)［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【饑を充て、腸を滑する】(時珍)

苗　［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【婦人の臨産に胎兒の出ぬには、汁に煮て飲む】(蘇恭)

［附方］　舊三。【腹中の胎兒死亡】【胞衣の下らぬもの】上に心を搶くには、雀麥一把を水五升で二升に煮詰めて溫服する。(子母祕錄)

(三)【齒䘌、竝に蟲】積年瘥えず、幼少の頃から老年に及んでもなほ惱むには、雀麥、一名杜姥草、俗にいふ牛星草を用ゐ、先づ苦瓠葉三十枚を取つて洗淨し、杜姥草を長さ二寸に剪つてその苦瓠葉で廣さ一寸、厚さ五分の五箇の包にしそれを三年の酢に漬け、日中に二包を火の中で炮き。熱して口中に納れて齒の外邊を熨す。冷えれば更に易へる。その時熨した包を水中に入れて解いて視ると、長さ三分ほどの蟲が出る。老いたものは黃色、

(二)木村(康)曰ク、雀麥ノ事詳ナラズ、參考ノ爲まからすむぎ(Avena sativa L.)ノ成分ヲ記ス。まからすむぎノ全草ニハ蔗糖「セカローゼ」果糖、葡萄糖「アルブミノイド」「ヴィタミン」ヲ含ム、全草ノ灰分ノ二分ノ一乃至三分ノ二ハSiO_2トK_2Oノ占ムル所ニシテ、葉ニ於テSiO_2ハ凡ソ七〇%ニ達ス、又硅素ヲ生植物一〇〇瓦中五〇瓱、乾燥植物一〇〇瓦中六二瓱ヲ有ス、又根

少(わか)いものは白色で、多きは二三十四、少きは一二十四も出るものだ。この方は甚だ妙である。（外臺祕要）

莖中ニ「グラミニン」ヲ含ム。

穀粒ノ組成ハ（動搖甚ダシ）凡ソ水分一二・八%、含窒素物一〇・二五、脂肪五・二七、無窒素物五九・六八、粗纖維九・九七、灰分三・〇二、ソノ中澱粉凡ソ五〇—六〇%、糖其他二—五、葉ノ中ニハ「ペリチン」質（メチールペクタード）〇・八%（乾燥物質ニツイテ）及多量「ペントザン」及ビ蠟質脂肪各〇・三%、「ヴイタミン」等ヲ含ム。

（應用）穀類トシテ重要ノモノニシテ、穀粒ヲ「オートミール」トイヒ粥トナシテ食用ニ供シ、又全草ヲ牛馬飼料トナス。

（三）齒齦ハムシクヒバ。

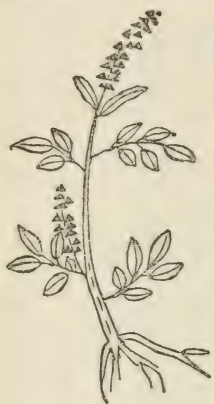
（一）牧野云フ、蕎麥ハ多分中央或ハ北部亞細亞ノ原産デアラウトノ事デアル、我邦ニハ廣ク栽培シ貴要ナ食料品トナツテヰルガ、是レニ秋そばト夏そばトガアル品質ハ秋そば佳ク夏そば劣ル故ニ秋そばガ最モ普通ニ作ラレル。

（二）翹然ハ特出スル貌。

（一）蕎麥（宋嘉祐）

和名　そば
學名　Fagopyrum esculentum, Moench.
科名　たで科（蓼科）

〔蕎麥〕

釋名　**荍麥**　荍の音は翹（ケウ）である。**烏麥**（吳瑞）　**花蕎**　時珍曰く、蕎麥(けうばく)といふは、莖が弱くて（二）翹然と伸び上るものであり、長成し易く收穫し易く、麪に磨れば麥のやうなものだ。それで蕎といひ、荍(けう)といひ、それに麥と同じ名を加へて呼ぶのである。俗に甜蕎(てんけう)と

も呼ぶが、それは苦蕎と區別するためである。楊愼は丹鉛錄に、烏麥を指して燕麥としてあるが、蓋しまだ日用本草を讀んだことがなかつたと見える。

【集解】 炳曰く、蕎麥を飯にするには、蒸して十分に氣を透らせ、それを烈日に暴して口を開かせ、舂いて米仁を取つて作るものである。時珍曰く、蕎麥は南方にも北方にもある。立秋の前後に種を下し、八九月に刈取つて收穫する。性は最も霜を畏れるものだ。苗は高さ一尺餘で、莖は赤く、葉は綠で烏桕樹の葉のやうだ。小さい白色の花を開き、それが密に繁つて(三)粲粲然たるものだ。結實は纍纍として羊蹄の實のやうで三稜があり、老い熟すると烏黑色になる。王禎の農書に『北方では多くこれを種ゑ、磨つて麪にし、煎餠にして蒜を配合して食ひ、或は(四)湯餠にし、それを(五)河漏と呼んで常食に供してゐるが、滑かに細く粉のやうで麥麪に亞ぐものだ。南方の一種はただ(六)粉餌として食する。これは農家に於ける冬季の食糧だ』といつてある。

(七)【氣味】 【甘し、平、寒にして毒なし】 思邈曰く、酸し、微寒なり。これを食へば消化し難く、久しく食へば風を動じ、頭眩を起す。麪にし、豬、羊肉を和し、

(三)粲粲然ハ鮮明ナル貌。
(四)湯餠トハ麪餠ヲ水瀹シテ食フモノヲ云フ。
(五)河漏ハソバキリ。
(六)粉餌トハソバガキ又ハソバミヅトシテ食スヲ指スカ。
(七)木村(康)曰ク、(成分)全草ハ「アントチアン」糖、「配糖體ルチン」等ヲ含ム、

熱して食ふは八九回以上はよくない。過ごせば熱風を患ひ、鬚眉が脱落して再び生えることが稀である。涇州、邠州以北にこの疾のものが多い。又、黄魚と合せて食つてはならぬ。

主治 【腸、胃を實し、氣力を益し、精神を續ぎ、能く五臟の滓穢を錬る】(孟詵)【飯にして食ふが丹石の毒を壓するに甚だ良し】(蕭炳)【醋で粉を調へて小兒の丹毒赤腫、熱瘡に塗る】(吳瑞)【氣を降し、腸を寛にし、積滯を磨し、熱腫、風痛を消し、白濁、白帶、(八)脾積、洩瀉を除く、沙糖水で炒麪二錢を調へて服すれば痢疾を治す。炒り焦し、熱水で(九)衝して服すれば絞腸沙痛を治す】(時珍)

發明 頴曰く、本草には『蕎麥は能く五臟の滓穢を錬る』といひ、俗說には『一年の沈積が腸、胃に在るには、これを食へばやはり消し去る』といふ

時珍曰く、蕎麥は最も氣を降し腸を寛にする。故に能く腸、胃の滓滯を錬るものであつて、かくて濁帶、洩痢、腹痛、上氣の疾を治す。氣盛にして濕熱ある者に適するものだ。脾、胃虛寒の者がこれを食ふならば、大いに元氣を脫して鬚眉を落す。適當なものでない。孟詵は『氣力を益す』といつてあるが、首肯し難いこと

ソノ七｜一〇%ヲ占ムル灰分ハCaO三〇｜五一、K_2O二一・四四、MgO七｜一八及ビ僅ノSiO_2及ビAアリ。

種子(精製ノモノ)ノ組成(%)ハ水分一四・八、無窒素物五五、含窒素物一三・三、脂肪二・七、素纖維一・四三、灰分一・七六、蔗糖一｜二%、澱粉凡ソ六七%ニ達スル量ヲ含ム。

そば粉ノ組成(%)ハ水分一三・八、含窒素物八・二八(純蛋白質七・八一)、脂肪一・四九、無窒素物七四・五八(澱粉六七)、粗纖維・七、灰分一・一一及ビ少量ノ「ゴム」質及ビ糖ヲ存ス。

(八)脾積ハ瘧母ノ一名ナリトイヘリ。

(九)衝ハ急ニ注ギ下

スコト。

(一〇)十水腫トハ遍身腫、四肢腫、面腫、脚腫、鼓脹、腸覃、石瘕等ノ十種ヲ云フカ。

だ。按ずるに、楊起の簡便方に『肚腹が微微として痛み、通じ始めると瀉し、瀉しても多くはなく、晝夜數回に及ぶものは、蕎麥麪一味を飯にして三四回續けざまに食へば癒える。予は壯年の頃、この病で二箇月ほどの間に甚しく瘦怯し、消食、化氣の藥を用ゐてもいづれも效がなかつたが、ある僧にこの方を授つて癒えた。その後度度用ゐて皆效を擧げてゐる』とある。これはこの物の積滯を鍊る功力を立證するものである。普濟の小兒の天弔、及び歷節風を治する方の中にもこれを用ゐてある。

附方　新十六。【欬嗽上氣】蕎麥粉四兩、茶末二錢、生蜜二兩、水一椀を一千回攪き廻して飲む。良久して氣を下して止まず、それで癒える。(儒門事親)【(一〇)十水腫喘】生大戟一錢、蕎麥麪二錢を水で和して餅にし、炙熟して末にし、空心に茶で服す。大小便の利するを度とする。(聖惠)【男子の白濁】魏元君の濟生丹——蕎麥を炒り焦して末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを鹽湯で服す。【赤白帶下】方は上に同じ。【禁口痢疾】蕎麥麪を二錢づつ沙糖水で調へて服す。(坦仙方)【癰疽發背】一切の腫毒には、蕎麥麪、硫黄各二兩を末にして井華水で

和し、餅にして晒して取収め、一餅づつを水に磨つて傅ける。痛むものをば痛まなくし、痛まぬものをば痛ませて癒える。（直指）【瘡頭の黑凹せるもの】蕎麥麪を煮て食へば起き上る。（直指）【痘瘡の潰爛】蕎麥粉を頻頻と傅ける。（痘疹方）【湯火傷灼】蕎麥麪を黄に炒つて研末し、水で和して傅ける。神の如き效がある。（奇效方）【蛇盤瘰癧】項部に圍み連なるには、蕎麥を炒つて殼を去り、海藻、白殭蠶を炒つて絲を去り、等分を末にし、白梅を湯に浸して肉を取り、半減して和して綠豆大の丸にし、六七十丸づつを食後、就寝時に米飲で服す。一日五回づつ服す。その毒は大便から排出するものである。淡菜と連服するが尤も好し。淡菜とは海藻の上に生ずるもので、やはりこの病に對する治功がある。豆腐、雞、羊、酒、麪を忌む。（阮氏方）【積聚敗血】通仙散——男子の敗積、婦人の敗血を治して眞氣を動ぜぬ。蕎麥麪三錢、大黄二錢半を末にし、就寝時に酒で調へて服す。（多能鄙事）【頭風で冷を畏るもの】李樓は『ある頭風の患者は、三十年間癒えず、綿を重ねて首を裹んでゐたが、予が、蕎麥粉二升を水で調へ、二枚の餅にして更互に頭上に合せて微汗を取らせると癒えた』といつてある。（怪證奇方）【頭風風眼】蕎麥を錢大の餅にして眼の四角に貼

り、米大の艾灶で灸する。神の如き效がある。【髮を黑く染る】蕎麥、針砂二錢を醋で和し、先づ漿で洗淨してから塗つて荷葉で包み、初更の刻にそれを洗ひ去り、再び無食子、呵子皮、大麥麪二錢を醋で和して塗つて荷葉で包み、曉方に洗ひ去れば黑くなる。(普濟)【絞腸沙痛】蕎麥麪一撮を黃に炒り、水で烹て服す。(簡便方)【小腸疝氣】蕎麥仁を炒つて尖を去り、胡盧巴を酒に浸して晒し乾して各四兩、小茴香を炒つて一兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、空心に五十丸づつを鹽酒で服す。二箇月で大便に白膿を出して病根を去る。(孫天仁集效方)

葉　主治　【茹にして食へば氣を下し、耳目を利す。多く食へば微し洩する】(士良)　○孫曰く、生で食へば刺風を動じ、身體を痒くする。

稭　主治　【燒灰の淋汁で鹼を取つて熬り乾し、石灰と等分を密封し貯へて置けば、能く癰疽を爛し、惡肉を蝕し、靨痣を去るに最も良し。穰で作つた薦は壁虱を辟ける】(時珍)　○日華に曰く、燒灰の淋汁で六畜の瘡、並に驢馬の躁蹄を洗ふ。

附方　新二。【噎食】蕎麥稭を灰に燒き、淋汁を取つて鍋で煎じて白霜一錢を取り、蓬砂一錢を入れて研末し、酒で半錢を服す。(海上方)【壁虱、蜈蚣】蕎麥稭

を薦に作つて敷き、幷に烟に焼いて熏ずる。

苦蕎麥[一]（綱目）

和名　にがそば、だつたんそば
學名　Fagopyrum tataricum, L.
科名　たで科(蓼科)

【集解】　時珍曰く、苦蕎は南方に産する。春社の日の前後に種を蒔き、莖は青く枝が多く、葉は蕎麥に似て尖り、綠色を帶びた花を開き、結實はやはり蕎麥に似てゐるが、やや尖つて稜角が鋭くなく、その味は苦く惡い。農家では磨り搗いて粉にし、蒸して氣を十分に透らせ、黃汁を滴し去る。かくて餻に作つて食ひ得るのである。色は豬肝のやうだ。穀物としての下級のもので、饑饉の際に饑を凌ぐ位のものである。

〔苦　蕎〕

[二]【氣味】　[甘く苦し、溫にして小毒あり]　時珍曰く、多く食へば胃を傷め、風を發し、氣を動じ、能く諸病を發する。黃疾の者は就中禁ぜねばならぬ。

（一）牧野云フ、亞細亞中部邊ガ其原産地デアラウ、我邦デハ未ダ耕作シテヰナイ品質ハ蕎麥ヨリハズツト下等デアル、本草綱目啓蒙ニ此苦蕎麥ナみぞそば(Polygonum Thunbergii, Sieb. et Zucc.)ニ充テアルハ全ク誤リデアル。

（二）木村(康)曰ク、(成分)だつたんそばハソノ組成ハ水分一〇—一四%、含窒素物九・七六、無窒素物五四・八(澱粉四四)、

粗纖維一九・七、灰分三・二九。

(一)牧野云フ、印度ノ原産ナルいねハ最モ舊ク我邦ニ移入セラレタモノデアル、即チ神代時分ニ南方ヨリ我邦ニ入リ來リシ人種ガ携帶シタモノト思フ、今日デハ我邦デ最第一ノ重要ナ食料品デ從テ廣ク一般ニ耕作セラレテヰル、最モ能ク土地ニ適シ良質ノ米ヲ産スル、品種亦從テ多ク三百品以上モアル。

附方　新一。【明目枕】(めいもくちん) 苦蕎皮、黑豆皮、綠豆皮、決明子、菊花を共に枕に作つて用うれば、老年に達しても目が明かだ。(鄧才雜興)

稻(一)　(別錄下品)

和名　いね、もちごめ
學名　Oryza sativa, L. var. glutinosa,(Lour)
科名　禾本科

釋名　稌　音は杜(ト)である。糯　また稬(なん)とも書く。時珍曰く、稻、稌は秔(かう)、糯の通稱である。物理論に所謂『稻とは溉種の總稱だ』とあるはこの意味である。本草では、專ら糯を指して稻といふことになつてゐる。稻の字は舀に從ふ。舀字の音は函(カン)であつて、人が臼の上で稻の始末をしてゐる狀態を意味した形象である。稌といふは方言で、稻の音の轉訛(てんくわ)である。その性が粘つて軟なところから糯といふ。穎曰く、糯米は筋を緩にし、人をして多く睡らしめる。性の懦(だ)なるものだ。

集解　弘景曰く、道家にも、方藥にも、稻米と粳米とあつて共に用ゐる。これは二種別のもので、稻米は霜のやうに白いものだ。江東(かうとう)にはこの物はないから一般に粳を稻と呼んでゐる次第で、その特異點の如何なるものかさへ一向に知らない。

○恭曰く、稲とは穬穀類(くわうこくるゐ)全體を通じて呼ぶ名稱であつて、爾雅には、『稌は稲なり』とある。秔とは粘らぬものの名稱で、二には穤といふがある。氾勝之は『三月秔稲を種ゑ、四月穤稲を種ゑる』といつてあるから、いづれも稲なのである。陶氏が二種のものといつたのは蓋しわけが判らぬ。

〔秈・粳・稲〕

稲は粘る―粳・
秈は粘らぬ―

○志曰く、ここに稲米とあるは糯米のことである。その粒の大小は秔米(かうまい)ほどのもので、糠が細く、雪のやうに白いものだ。今は秔、糯の二穀を通じて稲と呼ぶので、稲とは果してその孰(いづ)れなるかに惑ふのである。按ずるに、李含光の音義には、字書を引證して解釋し、粳の字をば『稲なり』といひ、(二)稲の字をば『稲の屬なり、粘(ねば)らず』といひ、粢の字をば『稲餅なり』といつてある。粢(し)とは蓋し糯のことである。

○○禹錫曰く、爾雅に『稌は稲なり』とあり、郭璞の註には『別の二名である。今(三)沛國では稌と呼ぶ』とあり、周頌には『豐年黍(しよ)多く稌多し』とあり、禮記には『牛

(二)一書ニ秔ノ誤字トス。

(三)沛國ハ今江蘇省徐州府ノ地ナリ。故城ハ沛縣ノ東ニ在リ。

は稌に宜し』とあり、豳風には『十月稻を穫る』とあり、是等は一物である。說文には『秔は稻の屬であつて、沛國では稻を糯といふ』とある。字林には『糯は粘稻なり、秔は不粘稻なり』とある。かやうに秔と糯とは甚だ相類するもので、粘ると粘らざるとの差異があるだけのものだが、說文に依つて稻を糯とすべきである。顏師古の刊謬正俗には『本草の稻米は今の糯米である。或は粳、糯を通じて稻と呼ぶ。孔子は、夫の稻を食ふといひ、周官には稻人なる官職があり、漢の時代には稻田使者なる官があつた。いづれも通じて秔、糯を指して言つたものだ。その結果後世の者が名稱を混同して、稻が糯であることが判らぬやうになつたのだ』とある。

宗奭曰く、稻米とは現に造酒に用ふる糯稻のことである。その性が溫なるものだから酒になるのであつて、酒は陽である故に熱が多いのだ。西域、天竺の境土は溽熱な處だから、一歲に四回熟する。やはり溫、熱の關係を證するものだ。

時珍曰く、糯稻は南方で水田に多く種ゑる。その性は粘るもので、釀して酒にもなり、粢にもなり、蒸して糕にもなり、熬つて餳にもなり、炒つても食ふことができる。品種がやはり多く、その穀の殼には紅、白の二色があり、毛のあるものあり、

(四)木村(康)曰ク、米ノ成分左表ノ如シ。

品種		水分	蛋白質	脂肪	無窒素物	纖維	灰分
粳玄米	日本關取	13.76	8.55	2.04	73.59	0.96	1.32
	暹羅米	12.639	8.745	2.280	74.078	1.071	1.259
	朝鮮米	13.934	7.929	2.143	73.186	1.324	1.504
糯		14.30	8.50	3.20	73.10	1.00	1.90

毛のないものもあり、その米にも赤、白の二色があつて、赤いものは醸せば酒が多くて糟が少い。また粒が霜のやうに白く、長さ三四分あるものもある。齊民要術には、糯に、九格、雉木、大黄、馬首、虎皮、火色等の種目がある。古代には酒を醸すに多く秫を用ゐたのだ。そのために諸家の説に於て、糯稻の何物なるかに關し往往論辯を費されることとなつたのである。秫とは糯粟のことだ。記載はその本條にある。

稻米（四）氣味 【苦し、溫にして毒なし】 思邈曰く、味甘し。宗奭曰く、性は溫なり。頌曰く、糯米は性は寒である。作つた酒は熱である。糟となつたものは溫、平である。やはり大豆と豉、醬とが性の同じからぬやうなものだ。詵曰く、（五）涼なり。風を發し、氣を動じ、人をして多く睡らしめる。多く食つてはならぬ。藏器曰く、久しく食すれば身體を軟ならしめ、筋を緩せしめる。小猫や犬が食へば、やはり脚が屈んで歩行し得なくなり、馬が食へば足が重くなり、妊婦が肉に雜て食へば子が（六）利せなくなる。蕭炳曰く、諸經絡の氣を擁し、四肢を收らなくし、風を發して昏昏たらしめる。士良曰く、久しく食すれば、心悸、及び癰疽、瘡癤中の痛を發する。酒と同時に食へば醉ふて醒め難い。時珍曰く、糯は性が粘滯で消化し難い。

木村(康)曰ク、ソノ組成(%)精白米ニテハ無窒素物七五・五、含窒素物八、脂肪油一・二九、粗纖維〇・八八、灰分一、水分一三、玄米ニテハ水分一四・六、澱粉七五—七六、脂肪〇・三、糖分〇・四六、「デキストリン」一、纖維素〇・三—〇・四、灰分〇・二九、灰分中 P_2O_5 四〇—五〇、K_2O 二二—二八、CaO 一・五—三、SiO_2 四—六・五等ノ他僅ニ砒素「ニツケル」「コバルト」銅等ヲ含ム。芽胎ハ脂肪油三〇%ノ他「フイトステリン」「グアニン」「アデニン」「ヒポキサンチン」少量ノ「キサンチン」多量ノ「フイチン」少量ノ「ヌクレイン」「レチチン」「レチ

小兒、病人は最も忌むべきものである。

（七）主　治　【飯にすれば中を溫め、熱多くし、大便を堅からしめる】（別錄）【能く榮衞の中の血積を行り、芫靑、斑蝥の毒を解す】（士良）【氣を益し、泄を止める】（思邈）【中を補し、氣を益す。霍亂後の吐逆の止まぬを止めるには、一合を水に研つて服す】（大明）【駱駝脂で作つた煎餅を食へば痔疾に主效がある】（蕭炳）【糜一斗を作つて食へば消渴に主效がある】（藏器）【脾、胃を暖め、虛寒泄痢を止め、小便を縮め、自汗を收め、痘瘡を發する】（時珍）

發　明　思邈曰く、糯米は味が甘い、脾の穀である。脾病にはこれを食ふが宜し。楊士瀛曰く、痘疹に對して糯米を用ゐるのは、その解毒の功を利用するのである。能く（八）釀して發する力があるのだ。

時珍曰く、糯米は性が溫であつて、釀して酒にすれば熱となり、熬つて餳としたものは就中甚しい。故に脾、肺の虛寒の者には適當なものであるが、素から痰熱、風病、及び脾病があつて、（九）轉輸の作用の十分でない人がこれを食へば、最も能く病を發して積となる。孟詵や蘇頌が、性涼なりとか、性寒なりなどいつてゐるが、謬

妄の說だ。別錄に已に『中を溫め、大便を堅くし、熱多からしめる』と謂つてあるではないか、これを寒、涼といひ得るわけはあるまい。現に冷洩のものは炒つて食へば止まり、老人の小便頻數のものは粢糕にし、或は丸にして夜半に食へば止まるといふことは一般に行はれてゐる事實であつて、これはその物が肺を溫め脾を暖めるの實證である。症證にこれを用ゐるのもやはりこの作用を利用するのである。

【附　方】　舊五、新十六。【霍亂煩渇】煩渇して止まぬには、糯米三合、水五升、蜜一合の研汁を分服し、或は煮汁を服す。(楊氏產乳)【消渇飮水】方は上に同じ。【三種の消渇病】梅花湯——糯穀を炒つて白花を出し、桑根白皮と等分を用ゐ、一兩づつを水二椀で煎じて汁を飮む。(三因方)【下痢禁口】糯穀一升を炒り、白花を出して穀を去り、薑汁を拌ぜ濕して再び炒つて末にし、一匙づつを湯で服す。三服で止まる。(經驗良方)【久洩食減】糯米一升を水で一夜浸して灑し乾し、慢かに炒り熟して磨り篩ひ、懷慶の山藥一兩を入れ、每早朝半盞に砂糖二匙、胡椒末少量を入れて極滾湯で調へて食ふ。極めて美味で大いに滋補の功がある。久しく服すれば精が暖になり、子を儲ける祕方である。(松篁經驗方)【鼻衄の止らぬもの】藥を服しても反應なきには、

チン」等ヲ含ム。糠ハ「アデニン」、「ヒヨリン」、「ヒポキサンチン」、「フイチン」、「アミノ酸」、「ニコチン酸」糖類「ヴイタミン」植物性鹽基物質「オリヂン」等ヲ含ミ、「ヒスチヂン」、「トリプトフアン」等ハ之ヲ缺ク。蔗葉ハ蔗糖ト轉化糖ヲ有ス、又一〇〇瓦ノ生植物中ニハ七瓱乾燥植物中ニハ八瓱ノ砒素ヲ含ム。

(五)大觀ニハ寒トアリ。

(六)利セズトハ足ガヨク利カヌコトナラン。

(七)木村(康)曰ク、(應用)本邦人ノ主食物トシテ重要ナルモノナルコトハ言ヲマタザレドモ、亦藥用トシテハ脚氣ニ有效

ナル「ヴイタミン」Bハ製劑又神經榮養劑ナル「フイチン」製劑ナ製ス。「ヴイタミン」B製劑ナル「オリザニン」(三共)、「パラヌトリン」(鹽野)、「ベリベロール」(ラヂウム)、「ベリカイン」(帝國製藥)、「ベリグミン」(小池)、「オルトベリン」(水野)、「ネチベリチン」(岸田)、「ヴイタミイル」(田邊)、「ウリヒン」(松本)、「フルフルミン」(日本藥品)、「ファベリン」(福井)、「コルン」X(鳥居)、「アンチベリベリン」(南信堂)、「ミヅホニン」(大日本製藥)、「ヴイタベリン」(小島)、「ピソール」(黒田)、「スペルゾン」(武田)、「オロベロン」(日本新藥)、「マ

獨聖散――糯米を微し炒つて黄にして末にし、二錢づつを新汲水で調へて服し、また少量を鼻中に入れる。(簡要濟衆方)【勞心の吐血】糯米半兩、蓮子心七箇を末にして酒で服す。孫仲盈は『嘗て用ゐて多く有效であつた。或は墨汁で丸にして服す』といつてある。(澹寮)【自汗の止まぬもの】糯米と小麥麸とを共に炒つて末にし、三錢づつを米飲で服す。或は煮た豬肉に點けて食ふ。【小便白濁】白糯丸――夜間に小便が(一〇)脚停し、白濁するものを治す。この證は老人、虚せる人に多いもので、卒死することがあり、非常に精液を耗失し、主に頭が昏重するものである。糯米五升を炒つて赤黒くし、白芷一兩を末にし、糯粉糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを木饅頭の煎湯で服す。木饅頭がなければ(一一)局方の補腎湯で服す。また少年で體質の怯弱なものが、房事過度のために小便が過多になり、尿道が塞澀し、尿が膏脂のやうになつた場合には、石菖蒲、牡蠣粉を入れるが甚だ效がある。(經驗良方)【婦人の白淫】糙糯米、花椒等分を炒つて末にし、醋糊で梧子大の丸にし、三四十丸づつ食前に醋湯で服す。(楊起簡便方)【胎動不安】黄水を下すには、糯米一合、黄芪、芎藭各五錢を水一升で八合に煎じて分服する。(產寶)【小兒の頭瘡】糯米飯を灰に燒き、輕粉を

入れ、清酒で調へて傅ける。(普濟方) 【纒蛇丹毒】糯米粉と鹽を嚙んで塗る。(濟急方) 【打撲傷損】諸瘡には、寒食の日に糯米を浸し、小滿の日まで毎日水を易へ、取出して日光で乾して末にし、水で調へて塗る。(便民圖纂) 【金瘡、癰腫】及び竹木、簽刺等の毒には、糯米三升を端午から四十九日前の日から冷水に浸し、一日に二回水を換へ、攪き廻して碎かぬやうにして淘り出し、端午の日に取り出して陰乾し、絹袋に盛つて風の通る場所に掛け、使用せんとする際に少しづつ出して黒く炒つて末にし、冷水で調へて膏藥のやうにし、瘡の大小に隨つてそれで瘡口を裹み固め、その外から布で動かぬやうに包み縛り、そのまま瘡の痊えるまで置く。○金瘡の場所は、生水に觸れば化膿して甚しく腫れるものである。急に裹んで一二時間すれば膿腫をなさぬ。癰疽ならば、纔に焮腫を覺える初期に急に貼れば一夜で消する。(靈苑方) 【喉痺(一二)吒腮】前記の膏を項下、及び腫處に貼れば一夜で消する。乾けば換へて常に濕を有たせて置くやうにするが妙である。【竹木簽刺】前記の膏を貼れば一夜で刺がその膏藥の中へ出る。【狂犬の咬傷】糯米一合、斑蝥七箇を共に炒り、蝥が黄になつたとき取去り、再び七箇を入れて炒り、黄になつたとき取去り、又七箇を

ルタミン」(丸石)等。フイチン製劑「フイチン」(バーゼル)、「フエロフイチン」(バーゼル)、「ユーキリン」(三共)等。

(八)釀トハ化膿スルトノ意ナラン。

(九)新陳代謝ノ作用。

(一〇)脚停ハ停滯ヲ云フカ。

(一一)局方ハ和劑局方ヲ指ス。

(一二)大觀ニ吒ニ作ル吒ハ噴ナリトアリ、頰ノ腫レルヤマヒナラン。

入れて米から烟が出るやうになつたとき甕を取去り、その米を末にして油で調へて傅ける。小便が利下して好果を擧げる。（醫方大成）【饑饉の際の代用食糧】稻米一斗を淘り、百回蒸し百回曝して搗いて末にし、日毎に食事を朝食の一回に止めて、これを水で調へて服す。三十日間服して止めれば一箇年間食物を攝らずに生存し得る。（肘後）【虚勞の不足】糯米を豬肚の中に入れて蒸し、乾して搗いて丸にし、日毎に服す。【腰痛虛寒】糯米二升を炒熱して袋に盛り、痛處に縛り付けて靠れ、內服には八角茴香を酒に研つて服す。（談埜翁試驗方）

米泔　氣　味　【甘し、涼にして毒なし】　主　治　【氣を益し、煩渴、霍亂を止め、毒を解す。鴨肉を食つて消化せぬには、頓に一盞を飮めば消化する】（時珍）

附　方　舊一。　【煩渴して止まぬもの】糯米泔を任意に飮めば定まる。研汁もよし。（外臺）

糯稻花　主　治　【陰乾し、牙に揩つて鬚を黑くする方に入れて用ゐる】（時珍）

稻穰　卽ち　**稻稈**　氣　味　【辛く甘し、熱にして毒なし】　主　治　【黃病で金のやうな色になるものには、煮汁に浸し、また穀芒を黃に炒つて末にして酒で服す】

（藏器）【燒灰は墜撲傷損を治す】（蘇頌）【燒灰を水に浸して飲めば消渇を止める。淋汁で腸痔を洗す。穰を挼んで靴の底に敷けば、足を暖め、寒濕氣を去る】（時珍）

發明　頌曰く、稻稈灰の方は劉禹錫の傳信方に出てゐる。それに依ると『湖南の李從事が落馬して傷損した際、稻稈燒灰を、新熟酒を糟のまま鹽を入れ和したもので灰の淋汁を取り、それを患部に淋したところ立ろに癒えた』といふ。

時珍曰く、稻穰は煮て加工して紙に作り、嫩心をば取つて（一三）鞵に作る。いづれも産業を裨補するものだ。その紙は瘡に貼つてはならぬ。能く肉を爛らすものである。按ずるに、江湖紀聞に『ある人が、壁虱が耳に入つて忍び難く頭痛し、あらゆる藥も效かなかつたが、稻稈灰の煎汁を灌ぎ入るとその蟲が死で出た』とある。

附方　舊一、新八。【消渇飲水】稻穰の中心を取つて灰に燒き、一合を湯に浸して澄淸して飲む。（危氏）【喉痺腫痛】稻草を燒いて黑烟を取り、醋で調へて鼻中に吹き入る。或は喉中に灌ぎ入れば痰を滾出して立ろに癒える。（普濟）【熱病の餘毒】手足を攻めて脫けるほど疼痛するには、稻穰灰の煮汁に漬ける。（肘後方）【下血で痔となつたもの】稻藁の燒灰で淋汁を取り、熱して三五回漬ければ瘥える。（崔氏纂要）【湯

（一三）鞵ハ草鞋ワラヅ。

火傷瘡】稻草灰を冷水で七回淘り、灰を帶びて上に攤し、乾けば易へる。もし瘡が濕ふものならば、焙じ乾して二三回油で傅ければ癒える。（衞生易簡方）【惡蟲の耳に入つたとき】香油と稻稈灰汁を合せて滴し入る。（聖濟總錄）【噎して食物の通らぬもの】赤稻の細稍を灰に燒き、滾つた湯一碗で絹を隔て三回に淋汁を取り、丁香一箇、白豆蔻半箇、米一撮を入れ、粥に煮て食ふが神效がある。（摘玄妙方）【小便白濁】糯稻草の濃煎汁を一夜露して服す。（同上）【砒石の毒を解す】稻草の燒灰の淋汁で青黛二錢を調へて服す。（醫方摘要）

穀穎　穀芒のことである。穩と書くは誤りだ。【主治】【黃病には、末にして酒で服す。又、蠱毒を解するには煎汁を飲む】（日華）

糯糠　【主治】【齒の黃色なるには、燒いて白灰を取つて每朝擦る】（時珍）

（一）粳

音は庚（カウ）である。（別錄中品）

和名　いね、うるしね
學名　Oryza sativa, L.
科名　禾本科

【釋名】**秔**　粳と同じ。時珍曰く、粳とは穀稻の總名であつて、收穫時期に於

（一）牧野云フ、いねノ最モ普通品デ吾人ガ日常ノ食品デアル即チうるしねデ之レヲもちごめト分ツテヰル、もちごめハタダ餅ニ造リ毎日ノ食

て早、中、晩に別れてゐる。諸家の本草に、獨り晩稻のみを粳としてあるは正しくない。粘るものは糯、粘らぬものが粳であつて、糯は懦であり、粳は硬である。ただし解熱藥に入れるは晩粳が良いとなつてゐるのだ。

【集解】弘景曰く、粳米は今一般の常食となつてゐる米である。但し白、赤、小、大があり、種類の異同で四五種あるが、やはり大體に於て一類である。(二)廩米として貯藏に堪へる。詵曰く、(三)淮、泗の地方に最も多く、(四)襄洛の土地に產する粳米も堅實で香しい。南方の地で多く收穫する火稻は最も人體に補益がある。諸處に粳米を多く產するが、ただ饑を充てるだけのものだ。

時珍曰く、粳には水、旱の二稻があつて、南方は土地が下くして塗泥が多いから水稻に適し、北方は土地が平でただ澤土だから旱稻に適する。西南の蠻夷地にも山地を燒いて(五)畲田にして種ゑる旱稻があつて、火米と稱してゐる。古代に於ける稻の耕作方はただ畦にし耕してそれに種を蒔いたもので、それゆゑに祭祀には稻を嘉蔬といつたのである。しかし今は一般に皆秧を拔いて揷んで栽ゑることになつてゐる。その種類百に近いほどもあつて、それぞれ特異點を有つてゐるが、いづれも產

料ニハシナイ。旱稻ハをかぼデ水田ニ作ラズ乾地ニ耕作シテキル一品デアル。

(二)廩ハ米藏ヲ云フ、廩米ハ貯藏米ノコト。

(三)泗ハ草部山草類徐長卿ノ註ヲ見ヨ。

(四)襄洛ハ襄州ヨリ北ニ洛水流域ノ地ヲ指ス。

(五)畲田ハ地ヲ治メテ二歳ヲ云フ、新田ヲ云フ。

地の地質、氣候等の關係に隨ふのであつて、その穀の尖芒にも長きと短きと、太きと細きと種種さまざまであり、その米にも、赤あり、白あり、紫あり(六)黑あり、堅きあり、鬆きあり、香あるとなきと等の差異があり、その性にも溫、涼、寒、熱があり、やはり產地の諸種の條件に因つて異るのである。(七)眞臘にある水稻は高さ一丈ほどになつて、水の深淺に隨つて成長する。また南方には一年に二回熟する稻もある。蘇頌がいふ、香粳の長くして玉の如く白く、天子の供御の御料に充つべきものといふも、やはり粳にしてやや特異點を有つたもののことである。

粳米

氣味　[甘く苦し、平にして毒なし]　思邈曰く、生のものは寒である。燔いたものは熱である。時珍曰く、北方產の粳は涼である。南方產の粳は溫である。赤粳は熱である。白粳は涼である。これを修治するには雞屎白を用ゐる。○穎曰く、新米を早速食へば風氣を動ずる。陳いものは氣を下し、病人には尤も宜し。○詵曰く、(八)乾粳飯を常食すれば、中を熱して脣口が乾くやうになる。馬肉と共に食へば、痼疾を發するから食つてはならぬ。蒼耳を和して食へば、卒心痛を發するから食つてはならぬ。その場合は急に(九)倉米を燒いて灰にし、蜜、漿で和して服する。

(六) 本草原始ニ靑ニ作ル。
(七) 眞臘ハ石部鹵石類戎鹽ノ註ヲ見ヨ。
(八) 乾粳飯ハホシイヒノコトナラン。
(九) 倉米ハ玄米ノコトカ。

(一〇)大觀ニ年上ニ再ノ字アリ。

(一一)大觀ニ毛ヲ芒ニ作ル。

(一二)大觀ニ血ヲ胃ニ作ル。

さなくば死亡する。

主治 【氣を益し、煩を止め、渇を止め、洩を止める】(別錄)【中を溫め、胃氣を和し、肌肉を長ずる】(蜀本)【中を補し、筋骨を壯にし、腸、胃を益す】(日華)【煮汁は心痛に主效があり、渇を止め、熱毒下痢を斷つ】(孟詵)【芡實と合せて粥にして食へば、精を益し、志を强くし、耳を聰くし、目を明にする】(好古)【血脈を通じ、五臟を和し、顏色を好くする】(時珍) 養生集要に記載がある。【乾粳飯を常食すれば噎せなくなる】(孫思邈)

發明 詵曰く、粳米の赤いものは粒が大くて香しく、水に漬ければ味があつて健康を益す。概して新たに熟したばかりのものは氣を動じ、(一〇)年を經たものもまた病を發するものである。ただ江南地方で多く收穫する米稻は、一旦倉庫に貯へて置いてから(一一)毛を燒き去り、春になつてから米を舂いて食ふので、病を發せず、健康に適し、中を溫め、氣を益し、下元を補するのである。

宗奭曰く、粳は白晩米を以て第一とし、早熟米はそれに及ばない。五臟を平和にし、(一二)血氣を補益するその功はこれに逮ぶものはないのであるが、しかし、やや生

のものではやはり脾を益するところがない。よく熟して始めて佳いのである。

○頴曰く、粳はその收穫期に依つて早、中、晩の三種に別け、晩白米を以て第一とする。各地方に依り、その產するものに種類が甚だ多く、隨つて氣味にも少しの差異は免れぬのであるが、やはり大差はないのである。天の五穀を生ずる所以は人を養ふに在るのであつて、人はこれを得れば生を保ち、これを得なければ死亡するのである。この穀だけは天地中和の氣を得て造化生育の功に同じきものだから、その點に於て到底他の物の比すべきものではないのである。藥に入れての功は略しても差支ないであらう。

○好古曰く、本草には『粳米は脾、胃を益す』とあるが、張仲景の白虎湯はこれを用ゐて肺に入るのである。これは、味の甘は陽明の經に屬し、色の白は西方の象であつて、氣の寒は手の太陰に入るのである。小陰の證に用ゐる桃花湯はこれを用ゐて正氣を補し、竹葉湯はこれを用ゐて不足を益する。

○時珍曰く、粳稻は、六七月に收穫するものを早粳といふ。これはただ食料に供するだけのものだ。八九月に收穫するものを遲粳といひ、十月收穫するものを晩粳と

いふ。北方の地は氣候が寒いから粳の性が多くは涼であつて、八九月に收穫したものでも藥に入れ得るが、南方の地は氣候が熱いから粳の性が多くは溫である。遲粳と晩粳とは金の氣を多く受けてゐる。ただ十月の晩稻だけが氣が涼であつて藥に入れ得るのである。故に色は白く、肺に入つて熱を解す。早粳は土の氣を多く受けてゐる。故に色の赤きは脾を益し、白きは胃を益する。滇、嶺の粳の如きは性は熱であるが、これは彼の地に於てのみのことで他の地には適用されぬことだ。

附方　舊二、新十。【霍亂吐瀉】煩渴して絕命せんとするには、粳米二合を粉に研り、水二盞を入れて汁に研り、淡竹瀝一合を和して頓服する。（普濟）【赤痢熱躁】粳米半升を水で研つて汁を取り、油瓷瓶に入れて蠟紙で口を封じ、井底に一夜沈めて翌早朝に服す。吳內翰の家の乳母がこの病の時、これを服して效があつた。（普濟方）【自汗の止まぬもの】粳米粉を絹に包んで頻頻と撲つ。【五種の(一三)尸病】粳米二升を水六升で煮て一沸し、一日三回に服す。（肘後）【突然の心臟の氣痛】粳米一升を水六升で煮て六七沸して服す。（肘後方）【米瘕で米を嗜むもの】好んで米を噉み、それが久しく經てば瘕となり、米を噉まねば淸水を吐出し、米を噉めば止まるといふも

(一三)五尸ハ飛尸、遁尸、沉尸、風尸、伏尸ニシテ皆鬼邪ノ氣ヲ挾ミ、身體ニ淹注シテ人ヲシテ寒熱淋瀝、精神錯雜、積年累月漸ク頓滯ニ至

リ以テ死ニ至リ、復傍人ニ易シテ滅門ニ至ル、證候病候論ニ詳ナリ。

(二四)甜瘡ハ顏面水泡瘡ヲ云フ。

のがあるが、その米は消化せずして久しきに亙れば死亡するものである。これには、白米五合、雞屎一升を共に炒り焦して末にし、水一升で頓服する。少時して癥を吐出する。それは研米汁、或は白沫、淡水のやうなものだ。癥はそれで癒える。(千金方)【小兒の初生】三日にして腸、胃を開いて穀神を助くべきものである。米を砕いて濃き汁にし、乳酪を飲ませるやうに、豆ほどづつを頻りに生兒に與へて飲ませる。二週間はこれを與へるがよし。絶對に雜薬を與へてはならぬ。(肘後方)【初生兒の皮無きもの】色が赤く、ただ紅い筋の現れてゐるのは、受胎後また日が足らぬのである。早白米粉を撲てば肌膚が自から生ずる。(聖濟方)【小兒の(二四)甜瘡】顏や耳に生じたるには、母をして頻りに白米を嚼んで就寝時に塗らす。三五回に過ぎずして癒える。【凶作の際の辟穀法】粳一升を酒三升に漬けて暴乾し、又は酒に漬け浸して取出し、少しづつ食へば穀を辟け得るものだ。三十日間に一斗三升を完全に食へば一年間穀を辟け得る。(肘後方)【胎動の腹痛】急に黄汁を下すには、粳米五升、黄芪六兩を水七升で二升に煎じ、四回に分服する。(聖惠)【赤根丁腫】白粉を黒く熬り、蜜で和して傅ける。(千金方)

淅二泔　釋名　**米瀋**　時珍曰く、淅の音は錫(セキ)であつて、洮米である。瀋は汁であつて泔は甘汁である。第二回目の洗ひ汁は清くして用ゐ得るところから淅二泔といふのである。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】　主治　【熱を淸し、煩渴を止め、小便を利し、血を涼す】(時珍)

發明　戴原禮曰く、風熱赤眼には、睡らんとする時、淅二泔で洗肝散、菊花散の類を冷調して服す。

附方　新四。【吐血の止まぬもの】陳紅米の泔水を一日三回づつ一鍾を溫服する。(普濟方)【衄血】頻りに淅二泔を飲み、同時に眞麻油、或は蘿蔔汁を滴し入る。(證治要訣)【酒皶】淅二泔を食後に冷飲し、外部には硫黃を大菜頭の內に入れて煨き碾つて塗る。(證治要訣)【服藥過劑】悶亂するには、粳米瀋を飲む。(外臺)

炒米湯　主治　【胃を益し、濕を除く。火毒を去らねば渴を作させる】(時珍)

粳穀奴　穀穗煤の黑いものである。　主治　【走馬喉痺には、燒き研つて酒で方寸匕を服す。立ろに效がある】(時珍)　千金方に記載がある。

禾稈　［主治］　【砒毒を解す。灰に燒き、新汲水で淋汁を取り、濾し淸めて一椀を冷服す。毒が下出するものである】（時珍）　衞生易簡方に記載がある。

（一）秈　音は仙（セン）である。（綱目）

和名　たいたうごめ
學名　Oryza sativa, L. var.
科名　禾本科

［釋名］　**占稻**（綱目）　**早稻**　時珍曰く、秈といふも粳の屬で、先に熟して鮮明なもののことである。故にこれを秈種といひ、（二）占城國から輸入したものだから占といふ。俗に占を粘と書くは正しくない。

［集解］　時珍曰く、秈は粳に似て粒が小さい。閩地方の者が占城國から種を輸入したことが中國にある始であつて、宋の眞宗の時、使を閩に遣して三萬斛を徵收し、それを諸道に分配給與して種とした。それで現に各處いづれにもあるのである。高仰の土地には何處でも栽種し得るもので、その熟する時期が最も早く、六七月には收穫し得る。種類も多く、赤白の二色があつて、粳と大同小異である。

秈米　［氣味］　【甘し、溫にして毒なし】　［主治］　【中を溫め、氣を益し、胃

（一）牧野云フ、たいたうごめハ太唐米ノ意デアル、米ノ品質ハ良好デナク其色ニ赤イモノガアル、米粒ハ普通ノ米ヨリハ小サイ、又たいまい或ハたいトモ呼バル。
（二）占城國ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

を養ひ、脾を和し、濕を除き、洩を止める】(時珍)

稈 主治 【反胃には、燒灰の淋汁を溫服して吐かす。蓋し胃中に蟲あるを能く殺す】(普濟)

本草綱目穀部第二十二卷　終

本草綱目穀部　第二十三卷

本草綱目穀部目録第二十三巻

穀の二　稷粟類十八種

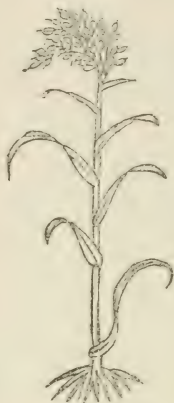
稷 別録　黍 別録　蜀黍 食物　玉蜀黍 綱目
粱 別録　粟 別録　秫 別録　穇子 救荒
稗 綱目　狼尾草 拾遺　東廧 拾遺　菰米 綱目
蓬草子 拾遺　菵草子 拾遺　蒒草子 海藥　薏苡 本經
罌子粟 開寶 即ち御米、麗春花。　阿芙蓉 綱目

右附方　舊二十七、新五十三。

穀の二　稷粟類十九種

（一）稷　（別錄（二）上品）

和名　きび（うるしきびノ方）
學名　Panicum miliaceum, L.
科名　禾本科

（一）牧野云フ、きびハ一名ヲこきびトモ云フ、此レニ黄穀ノ粘バルモノト然ラザルモノトアル、本條ノ稷ハ其粘バラヌ方ノモノヲ指ス。
（二）大觀ニ下ニ作ル。

釋名　**穄**　音は祭（サイ）である。**粢**　音は咨（シ）である。時珍曰く、稷の字は禾に從ひ畟——音は卽（ソク）——に從ふ諧聲であつて、努力して稼穡の業に從事するの意味である。詩に「畟畟たる良耜」とあるはそれであつて、稷を栽培する者は必らず畟畟として努力するといふのである。南方の地では北方の發音を承けて、稷を呼ぶに穄といふ。その米は祭祀に供へるものだとの意味を含ませたのだ。

〔稷　黍〕
——稷は粘せず・黍は粘する——

禮記に、宗廟を祭る稷を明粢といひ、爾雅に『粢は稷なり』とあり、羅願は『稷、穄、粢いづれも一物であつて、その發音により輕、重があるだけだ。赤いものは穈と名け、白いものは芑と名け、黑いものは秬と名ける』といつてある。その註解は黍の條下に記載する。

|集解| 弘景曰く、稷米なるものは、世人は一向に識らぬが、書、記に多くいつてある黍は稷と相似たものだ。又、黍米の註解にいふ穄米は黍米と相似てゐるが、際立つて大きいものだ。これを食料とするは健康に適しない。それは宿い病を發するものだからである。詩には、黍、稷、稻、粱、禾、麻、菽、麥を八穀と稱へてあるが、俗間ではそれさへ明確に識別するものがないのである。況や(三)芝、英などいふものに至つては申すまでもない。

蘇恭曰く、呂氏春秋に『飯の美なるものに(四)陽山の穄あり』とあり、高誘の註に『(五)關西ではこれを穈――音は糜(ビ)――といひ、(六)冀州ではこれを緊――音は牽(ケン)の去聲――といふ』とある。廣雅には『緊は穄なり』とある。禮記には、稷を明粢といひ、爾雅には『粢は稷なり』とある。說文には『稷といふは五穀の長で

(三) 芝、英トハ仙薬トスル五芝ト石英トヲ指ス。

(四) 陽山、呂氏春秋卷十四、本味篇ニ『飯之美者。玄山之禾。不周之粟。陽山之穄。南海之秬』トアリ、高氏ノ註ニ『山南日陽。

ある』とあり、註に『田の正なり』とある。これで見ると官名であつて穀物の名稱ではないのである。既往の學者は、稷を以て粟の類とし、或は粟の上なるものといつてゐるが、いづれもその意味に關する說明のみで、その實物をば知らなかつたのだ。按ずるに、氾勝之の種植書には、黍は擧げてあるが稷の說明はなく、本草には、稷は擧げてあるが穄は記載してない。穄とは稷のことで、(七)楚の地方では稷といひ、關中では(八)穈といひ、その米を呼んで黃米といふ。その苗が黍と類を同うするところから黍を呼んで秈稗といふのである。陶氏が『黍と相似たもの』といつたのは當を得てゐる。

藏器曰く、稷、穄は同一物である。(九)塞北に最も多く、色は黍のやうに黑いものだ。

詵曰く、稷は八穀の中の最下の作物で、黍とは酒に作るもののことだ。これ等のものは飯にする穀物とは用途が異ふ。

頌曰く、稷米は、粟を產する地方ではいづれも能く種植する。今は一般にあまり珍重されず、ただ祭祀の供物に用ゐ、農家でも他の穀物の稔れぬ場合の豫備食糧と

崑崙之南。故曰陽山。南海南方之海』トアリテ一見南海ノ崑崙卽チ馬來地方ノ如クナレドモ、更ニ南海ノ稙ヲ列シアルニ觀レバ或ハ山海經ノ昆侖之邱ヲ指スニハアラズヤトモ思ハル。昆侖之邱ハ畢氏ノ考證ニ據レバ今ノ甘肅省肅州ノ南八十里ニ在リトイフ。楊氏漢地理圖ニハ祁連山脈中ノ歐西喜山ヲ昆侖山ト指定ス。然ラバ此ニイフ陽山ハ祁連山脈ノ南青海省ノ北部一帶ノ地ヲ指スモノカ。

(五)關西ハ禽部水禽類鴇鷄ノ註ヲ見ヨ。

(六)冀州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(七)楚ハ湖北地方。

關中ハ山草類淫羊藿ノ註ヲ見ヨ。

するに過ぎない。

宗奭曰く、稷米は今に穄米と稱へる。諸種の穀米に先じて熟し、その香がよいところから、特にこれを祭祀の供物にするのだが、しかしこれは故い病を發するものだ。飯にもなるが、粘りがなく、味が淡い。

時珍曰く、稷と黍とは一類の二種であつて、粘るものが黍、粘らぬものが稷である。稷は飯になり、黍は酒に釀し得る、稻に粳と糯とがあるやうなものである。陳藏器は黑黍のみを指して稷としたが、やはり偏してゐる。稷、黍の苗は粟に似て低く小さく、毛があり、結子は枝になつてまばらに散り、粒は粟ほどのもので光があつて滑だ。三月種を下し、五六月に收穫する。また七八月に收穫するものもある。その色には赤、白、黃、黑の數種あつて、黑いものは禾がやや高い。今は俗に通じて黍子と呼び、稷とは呼ばない。北方の國境地方は土地が寒く、そこに種ゑたものには補の效果がある。(二〇)河西の產は顆粒が就中硬い。稷は熟することが最も早く、飯にすればさつぱりして香美であり、五穀の長として土に屬するものだ。故に穀神を祀るときに稷を以て社に配するのであつて、五穀の悉くを供へて祭ることは六ケ

(一八)糜ハ穄ノ誤。
(一九)塞北ハ蒙古地方。
(二〇)河西ハ今ノ陝西省ノ北半。

歟いからその長たるものを供へ、それで他の穀をも代表したわけである。上古には厲山氏の子孫を稷主の職に置いたが、成湯の時になつて始めて后稷に易へた。いづれも農事に精通し功勞あつたものなのである。

正誤　呉瑞曰く、稷は、苗が蘆に似て粒もやはり大きく、南方の地では蘆穄と呼ぶ。孫炎の正義には『稷は粟なり』とある。

時珍曰く、稷、黍の苗は頗る粟に似てはゐるが、結子が異ふ。粟は穗が叢り密集し、稷黍は粒毎にまばらに散つて枝になつてゐる。孫氏が稷を粟といつたのは誤だ。蘆穄といふは蜀黍のことで、その莖、苗は高く太く、蘆のやうなものだ。今の祭祀を行ふものは、稷とは黍の粘らぬものなることを知らずして、往往にして蘆穄を稷といつてゐるところから、呉氏もその誤のままを踏襲したのだ。ここにいづれも是正して置く。

稷米　(二)　氣味　『甘し、寒にして毒なし』詵曰く、多く食へば二十六種の冷病の氣を發する。瓠子と共に食つてはならぬ、冷病を發するものだ。但し黍穰汁を飮めば瘥える。又、附子と共に服してはならぬ。　主治　『氣を益し、不足を

(二)木村(康)曰ク、(穀仁)果實ノ組成(％)ハ脂肪三・八九、プロテイン一(含窒素物)一〇・六、無窒

素物六一・一一、粗纖維八・〇七（精白セラレザルモノ）、灰分三・八二、水分一二・五、内澱粉ハ凡ソ六〇・二ヲ占ム、糖〇・五、又「デキストリン」一・二%ヲ含ム。
（應用）稷ハ民間ニテ眼病ニ煎用シ、飯トシ粥トシ團子等トモナシ食用トス。又酒或ハ燒酎ヲ製ス。

補す】（別錄）【熱を治し、丹石毒發の熱を壓し、苦瓠の毒を解す】（日華）【飯にして食へば、中を安じ、胃を利し、脾に宜し】（心鏡）【血を涼し、暑を解す】（時珍） 生生編に記載がある。

發明 時珍曰く、按ずるに、孫眞人は『稷は脾の穀であつて、脾病にはこれを食ふがよし』といひ、氾勝之は『黍、稷を燒けば瓠が枯れる。これは物の性が相制するのであつて、稷米、黍穰は能く苦瓠の毒を解すものだ』といひ、淮南萬畢術には『祠塚の黍を兒に啖はせれば母を慕はなくなる』とある。これはやはり厭の力があるものと見える。

附方 新四。【中を補し、氣を益す】羊肉一脚を湯に煮り、河西の稷米、葱、鹽を入れて粥に煮て食ふ。（飮膳正要）【卒啘の止まぬもの】粢米粉を井華水で服するがよし。（肘後）【癰疽發背】粢米粉を黑く熬り、雞子白で和して練絹に塗り、孔を剪つて貼り、乾けば易へる。神效がある。（葛氏方）【瘟疫の辟除】感染を防ぐには、穄米を末にして頓服する。（肘後方）

根 **主治** 【心氣痛、產難】（時珍）

【附方】 新二。【心氣疼痛】高粱根の煎湯を温服するが甚だ有效である。【横產、難產】重陽の日に取つた高粱根を瓜蘢と名ける。これを陰乾し、燒いて性を存して研末し、酒で二錢を服すれば分身する。

(一)黍 (別錄中品)

和名 きび (もちきび)
學名 Panicum miliaceum, L.
科名 禾本科

【校正】 別錄中品の丹黍米を本書には一條に併記した。

【釋名】 赤黍を䵚——音は門(モン)——といひ、䵛——音は糜(ビ)——といひ、白黍を芑——音は起(キ)——といひ、黑黍を秬——音は距(キヨ)——といひ、一稃二米を秠——音は疕(ヒ)——といふ。(いづれも爾雅) 時珍曰く、按ずるに、許愼の說文には『黍は酒に作れるものだ。禾に從ひ、水に入るの意味を表した文字である』とあり、魏子才の六書精蘊には『禾の下を氺に從ひ、細粒が散垂する狀態を形象したものだ』とある。氾勝之は『黍は暑であつて、暑を待つて生じ、暑後に成熟するものだ』といひ、詩には『誕いに嘉種を降す、維れ秬、維れ秠、維れ䵛、維れ芑』

(一) 牧野云フ、元來前條ノ品ト同種デアレドモ此レハ其穀ノ粘バルモノデアル、故ニもちきびノ名ガアル。

とある　糜とは虋の發音の轉じたものだ。郭璞は、虋、芑を粱粟とし、秠を黑黍の二粒の米を生ずるものとし、羅願は、秠を來牟としたが、いづれも正しくない。

【集解】　弘景曰く、黍は(二)荊郢州、及び江北でいづれも種ゑる。その苗は蘆のやうで粟とは異ひ、粒も大きい。今一般に稷粟を黍と呼んでゐるが、誤だ。北方地方で作る黍飯、方藥に釀す黍米酒はいづれも稷黍である。別錄にある丹黍米といふは赤黍米のことで、やはり北方の地に產する。江東にも時にあるが、土地が適しない。多く補藥に入れて用ゐる。又、秬と名ける黑黍があつて、それは酒を釀して祭祀に供するに用ゐる。

恭曰く、黍には數種あるが、その苗はやはり蘆には似てゐない。粟に似てゐるけれども粟ではない。

頌曰く、今は(三)汴洛、河陝地方でいづれも種ゑてゐる。爾雅に『虋は赤苗、芑は白苗、秬は黑黍』とあるそのものだ。李巡は『秠とは黑黍のうちの一箇の稃の中に二箇の米のあるもののことだ』古代には、(四)上黨の秬黍の標準的に正しく平均したものを累ねて、一般に物を計る標準を制定したもので、度量衡の制度はそれから發

(二) 荊郢ハ荊州、郢州。荊州ハ鱗部蛇類蚺蛇説ノ註ヲ見ヨ。郢州ハ西魏ニ置キ、唐ソレニ因ル。今ノ湖北省鍾祥縣治ナリ。又、南宋ニ置キ、隋ニ廢シタル郢州ハ今ノ湖北省武昌縣治ナリ。弘景ハ後者ニ據レルナルベシ、卽チ荊州ノ郢州ナリ。

(三) 汴洛ハ草部芳草類ノ香薷ノ註、河陝ハ同山草類遠志ノ註ヲ見ヨ。

(四) 上黨ハ石部石類長石ノ註ヲ見ヨ。

生したものだが、後世ではこの黍を標準にしようとしても、終に正確に度量衡に合はぬやうになつて了つた』といつてある。或は『秬といふは黍の正しく平均したもののことで、一箇の稃に二箇の米がある黍である。この黍は天地中和の氣を得て生ずるもので、蓋し普通にあるものではない。この黍があれば一穗がみな同じく二米のもので、粒はいづれも平均して大小の差がない。それゆゑに物を計る標準となるのである。他の黍ではさうは行かぬ。土地には肥えたると瘠せたるとの差があり、歳には凶作と豐作とがあるから、米も大小の差が生じて一定せぬ。現に上黨の民間では、豐作の歳に往往二米のものを得ることがあるが、但しそれは極めて稀で、收穫が當てにならぬから貢納品には充てないのだ』ともいふ。

時珍曰く、黍とは稷の粘するもののことで、やはり赤、白、黄、黑の數種あり、その苗の色はやはり數種に別れてゐる。郭義恭の廣志には、赤黍、白黍、黄黍、大黑黍、牛黍、燕頷、馬革、驢皮、稻尾などの諸名稱が記載されてあつて、いづれも三月に種ゑるものは上時といつて五月に熟し、四月に種ゑるものは中時といつて七月に熟し、五月に種ゑるものは下時といつて八月に熟する。詩に『秬鬯一卣』とあ

るところを見ると、黍で酒を造つた事實は古いものだ。白いものは糯に亞ぎ、赤いものは最も粘る。蒸して食料になり、いづれも餳を作る材料になる。古代に黍を以て履を粘し、黍を以て桃を雪つたといふは、いづれもその粘る點を利用したものである。菰葉で裹んで糉にし、それを角黍と呼んで食ふ。淮南萬畢術には『黍を穫つて溝に置けば蟦螬が生ずる』とある。

【正誤】頌曰く、粘するものは秫であつて、酒を釀し得るものだ。北方では黃米と呼び、また黃糯ともいふ。粘せぬものは黍であつて、食料となる。稻に粳と糯があると同樣だ。

時珍曰く、これは誤つて黍を稷とし、秫を黍としたものだ。蓋し稷の粘るものが黍であり、粟の粘るものが秫であり、粳の粘るものが糯であることは、別錄の本文に黍、秫、糯、稻の性味功用を著錄されあつて甚だ明である。しかるに註釋者がそれを熟讀せずして、往往かやうな誤謬に陷つてゐるのだ。今俗間ではその區別が明でなく、秫と黍とを通じて黃米と呼んでゐる。

黍米　ここには通じて諸種の黍米を指す。(五)　【氣味】【甘し、溫にして毒なし。

(五) 木村(康)曰ク、

久しく食すれば人をして多く熱煩せしめる』(別錄) 詵曰く、性寒にして小毒あり。故疾を發す。久しく食すれば五臟を昏し、人をして好く睡らしめ、人の筋骨を緩にし、血脈を絕つ。小兒が多く食へば久しく行步不能ならしめる。小猫、犬が食へばその脚が跼屈する。葵菜と食合せれば痼疾となり、牛肉、白酒と食合せれば寸白蟲が生ずる。李廷飛曰く、五種の黍米は、多く食へば閉氣する。

【主治】『氣を益し、中を補す』(別錄)『灰に燒き油に和して杖瘡に塗れば、痛を止め、瘢とならぬ』(孟詵)『嚼んで濃汁を小兒の鵞口瘡に塗れば效がある』(時珍)

【發明】思邈曰く、黍米は肺の穀である。肺病にはこれを食ふがよし。主として氣を益する。

時珍曰く、按ずるに、羅願は『黍は暑である。火に象るものだから南方の穀とする』といつた。蓋し黍は最も粘滯するもので、糯米と性が同じく、その氣は溫暖だ。故にその功能は肺を補するのであるが、しかし多く食すれば煩熱を作し、筋骨を緩にする。孟氏が『その性寒だ』といつたのは正しくない。

【附方】舊二、新二。【異子の(六)陰易】黍米二兩を煮た薄粥に酒を和して飲む。

(成分)精白穀粒ノ乾燥物質中ニハ「デキストローゼ」五%、「デキスリン」〇・二六、澱粉七六・脫穀セザルモノニテハ糖四・〇八、「デキストリン」〇・九六、澱粉六〇・三四、一般組成ハ前者ト同ジ、以上ハ外國產ニ就テノ說。本邦產ノモノハ水分一三・六、蛋白質一〇・六、脂肪一〇・三七、無窒素物六九・七、粗纖維〇・九一、灰分一・八〇、灰分中ニハ硅酸五六%、燐酸一八等ヲ含ム。(應用)果實ハ粘氣多キ故ニ主トシテ餻トナシ、又糊ヲ製ス。

(六)陰易ノ解、第二

卷三十四頁ニ出ヅ。

（七）大觀ニ苦ニ作ル。

發汗して癒える。（聖濟總錄）【心痛の瘥えぬもの】四十年に達したものは、黍米の淘汁を隨意に溫服する。（經驗方）【湯火傷】まだ瘡とならぬには、黍米、女麴等分を、各〻炒り焦して研末し、雞子白で調へて塗る。粥に煮て用ゐるもよし。（肘後方）【閃肭、脫臼】赤黑くなつて腫痛するには、黍米粉、鐵漿粉各半斤、葱一斤を共に炒つて性を存して研末し、醋で調へて三回服し、後に水で調へて少量の醋を入れて貼る。（集成）

丹黍米（別錄中品）卽ち赤黍であつて、爾雅にはこれを虋といつてある。瑞曰く、浙地方では紅蓮米と呼ぶ。江南には白黍が多く、たまたまある赤いものを赤蝦米と呼ぶ。宗奭曰く、丹黍は皮が赤く、その米は黃である。ただ糜にするだけのもので飯にはならない。粘著すると容易に解けないものだ。原曰く、穗が熟すると色が赤い。故に火に屬するものだ。北方の地ではこれで酒を醸し糕を作る。

【氣味】【（七）甘し、微寒にして毒なし】思邈曰く、微溫なり。大明曰く、溫にして小毒あり。蜜、及び葵と共に食合せてはならぬ。宗奭曰く、風を動ずる。性は熱である。多食すれば消化し難い。○その他は黍米に同じ。

【主治】【欬逆上氣、霍亂。洩利を止め、熱を除き、煩渇を止める】(別錄)【氣を下し、欬嗽を止め、熱を退ける】(大明)【鼈瘕を治す。新しい(八)熱せるものを淘つた泔汁一升を取り生で服す。二三回に過ぎずして癒える】(孟詵)

【附方】 舊二、新二。 【男子の陰易】丹黍米三兩を煮て薄酒を和して飲む。發汗せしめて癒える。(傷寒類要)【小兒の鵞口】乳を飲み得ぬには、丹黍米を嚼んで汁を塗る。(子母祕錄)【酒を飲んで醉はぬ方】赤黍を取つて狐血で漬けて陰乾し、酒を飲む場合に一丸を舌下に置いて含む。醉はなくなる。(萬畢術方)【婦人をして嫉妬せざらしめる方】虋、卽ち赤黍を取り、薏苡と等分を丸にして常服する。(同上)

穰莖 幷に **根** 【氣味】【辛し、熱にして小毒あり】 詵曰く、醉つて黍穰に臥せば厲を生ぜしめる。人家でその莖、穗を取つて地上を掃く帚にしたものを煮た汁は藥に入れて更に佳し。

【主治】【煮汁を飲めば苦瓠の毒を解す。身體を浴すれば浮腫を去る。小豆を和して煮た汁を服すれば小便を下す】(孟詵)【灰に燒いて方寸匕を酒で服すれば妊娠尿血を治す。丹黍の根、莖の煮汁を服すれば小便を利し、上喘を止める】(時珍)

(八) 熱ハ熱ノ寫誤カ。

【附方】　舊一、新三。【全身の水腫】黍の莖で作つた帚を煮た湯に浴する。【脚氣衝心】黍穰一石の煮汁に椒目一升を入れ、更に煎じて十沸し、脚を三四回漬ければ癒える。（外臺祕要）【天行豌瘡】人と畜類とに拘らず、黍穰を煮た濃汁で洗ふ。一本莖のものは䅉穰といふもので、用ゐられない。（千金）【瘡腫傷風】水に中つたもので、痛み劇しきには、黍穰を烟に燒いて熏じ、汗を出さしめれば癒える。（千金方）

蜀黍（食物）[一]

和名　もろこしきび、たかきび
學名　Andropogon Sorghum, L.
科名　禾本科

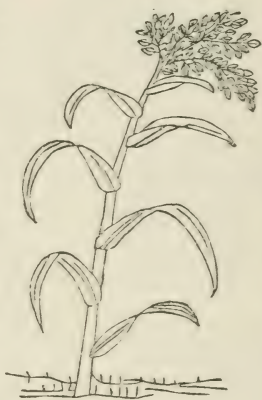
【釋名】　蜀秫（俗名）　蘆穄（食物）　蘆粟（いづれも俗）　木稷（廣雅）　荻粱（同上）　高粱

時珍曰く、蜀黍は甚だ經に見えないが、現に北方に最も多い。按ずるに、廣雅に『荻粱は木稷なり』とある。蓋しこれもやはり黍、稷の類のもので、高く大きくして蘆、荻のやうなものだから俗にかかる諸名があるのであつて、これを栽培することが蜀地方から始つたので蜀黍といつたのだ。

【集解】　頴曰く、蜀黍は、北方の地では栽培して食糧不足の場合の備にし、そ

（一）牧野曰フ、其穗形、色彩ハ品種ニヨツテ多少ノ相違ガアル、中ニハ往往穗梗ノ曲ルモノモアル、稈ニ糖分多キさたうもろこし（蘆粟ノ名デ我邦ニ來タ）、花穗デ箒ヲ造ルははきもろこしハ皆其變種デアル。

の他、牛、馬の糧にもする。穀類中で最も長いものだ。南方地方では蘆穄と呼ぶ。

時珍曰く、蜀黍は下地に適し、春期に種を蒔いて秋期に收穫する。莖は高さ一丈ばかり、狀態は蘆、荻に似て內部が實し、葉もやはり蘆に似たもので、穗は大きくして帚のやうだ。粒の大いさは椒ほどの紅黑色のもので、米は性が堅く實して黃赤色だ。二種あつて、粘するものは糯秫に和して酒に釀し、食料となる。粘せぬものは糕にし、粥にして凶作の場合の食料になり、畜類の飼糧にもなり、梢は箒になり、莖は箔席を織る材料になり、籬に編むにも用ゐ、炊爨の薪にもなり、民家に取つて最も有用なものである。現に一般に稷に代へて祭祀に用ゐてゐるが、あれは誤だ。この穀物の殼は水に浸すと紅色になり、酒に色をつける場合に用ゐる。博物志には『土地に蜀黍を種ゑて年久しく經つと蛇が多くなる』とある。

〔蜀黍〕

米(二)【氣味】【甘く澀し、溫にして毒なし】【主治】【中を溫め、腸、胃を澀し、霍亂を止める。粘するものは黍米と同功だ】(時珍)

根【主治】【煮汁を服すれば小便を利し、喘滿を止める。灰に燒いて酒で服すれば產難を治するに有效だ】(時珍)

【附方】新一。【小便不通】喘を止める 紅秫散——紅秫黍根二兩、扁蓄一兩半、燈心百莖を用ゐ、半兩づつを流水で煎じて服す。(張文叔方)

(一)玉蜀黍（綱目）

和名　たうもろこし
學名　Zea Mays, L.
科名　禾本科

【釋名】**玉高粱**

【集解】時珍曰く、玉蜀黍の種類は(三)西土から出たもので、種植するものはやはり罕だ。その苗、葉は倶に蜀黍に似てゐるが肥えて矮く、また薏苡の苗にも似た

(二)木村(康)曰ク、(成分)葉(殊ニ若キ植物ニ於テ)ハ配糖體「ヅリン」、酵素「エムルシン」ヲ含ム、又青酸ノ含量ハ〇—〇・一三%(若キモノ程多シ)、又莖葉ヨリ赤褐色ノ色素「ヅラサンタリン」ヲ含ム色素ヲ得ラル。穀粒中ニハ酒精ニ可溶ノ蛋白質「カフイリン」=「ソルギン」ヲ含ム、ソノ灰分中ニ銅ヲ存ス、以上洋書ノ說。日本產ノモノハ其組成水分一一・四六%、蛋白質八・九六%、脂肪三・五九%、灰分一・九五%、而シテ無窒素物中ニハ六五・四九%ノ澱粉、三・三〇%ノ「デキストリン」、一・四六%ノ蔗糖ヲ含有シ、灰分中ニハ燐酸及加里鹽ヲ多ク含ム。(應用)穀ヲサキテ皮ヲ去リ餅トナシ、又麵麭トモナシ、又燒酎ノ製造ニ用ウ。

(一)牧野云フ、元來中、南亞米利加原產ノ禾本デアルが、今一般ニ我邦ニ栽培セラレテ重要ナ食料品ノ一トナツテヰル、はぜニ造ルモノニはなきびト稱スルモノがアルが此一變種デアル。

もので、高さ三四尺のものだ。六七月に秕麥のやうな狀態の穗に成つた花を開き、苗の心から別に椶魚のやうな形の一箇の苞が出て、その苞の上から白鬚が出てふさふさと垂れ、久しく經つとその苞が折けて子の顆粒が夥しく簇り著いて出る。その子の大いさはやはり稷の子ほどの黃白色のもので、燥き炒つて食へる。炒れば折き糯穀を炒り折いたときのやうに白花の形狀になる。

〔玉 蜀 黍〕

米(三) [氣味]【甘し、平にして毒なし】[主治]【中を調へ、胃を開く】(時珍)

根葉 [氣味] [主治]【小便淋瀝、沙石痛の忍び難きには、煎湯を頻に飲む】(時珍)

(二)西土ハ新疆、西藏、及ビソノ以西ノ地ヲ廣ク指シタル稱ナリ。

(三)木村(康)曰ク、(成分)葉莖中ニ酵素「インベルチン」、「ヂアスターゼ」及糖ヲ含ム、而シテ莖ノ汁液中ニハ蔗糖〇・二ー一〇%、轉化糖〇・八ー四・七五%、雌蕊ハ「フイトステロール」、葡萄糖、「キシラン」、「ガラクタン」等ヲ含有ス。風乾物一〇〇分中無機成分含量ハ水分一二・七、灰分五・六、灰分中SiO_2 〇・二、$Fe_2O_3 \times Al_2O_3$ 〇・三、CaO〇・六、MgO 〇・六、K_2O 一・七、Na_2O 〇・二、P_2O_5 〇・六 Cl. 〇・三、玉蜀黍粉末ハ水分一〇・六〇、蛋白質一四・〇、脂肪三・八、無窒素物七〇・三四、纖維〇・六八、灰分〇・八六ナリ。(藥用)米國ノ準藥局法ニヨレバ、花柱ヲ生ノママ或ハ乾燥シタルモノヲ民間ニ煎服シテ利尿ノ效ヲナス、大人一日用量八瓦。

（一）粱（別錄中品）

和名　あは、おほあは
學名　Sotaria italica, Beauv.
科名　禾本科

校正　別錄中品にある青粱米、黃粱米、白粱米をここには一條に併記した。

釋名　時珍曰く、粱(りやう)は良であつて、穀物としての良なるものの意味だ。或は『種が（二）梁州から出たから』或は『粱の米は性涼なるものだから』それで粱なる名稱が生じたのだといふが、これはいづれも各〻勝手な見方であつて、粱とは卽ち粟のことである。周禮に就いて考ふるに、九穀、六穀として擧げてある中の名稱に、粱があつて粟のないところを見ても推知される。漢より以後、大きくして毛の長いものを粱とし、細かにして毛の短いものを粟とするといふことが始つたのであるが、今では兩者を通じて粟と呼び、古代に呼んだ粱なる稱呼は反對に隱れて了(しま)つた。現に世俗に稱するところの、粟の中の穗が太くして芒(はう)が長く、粒が粗(あら)くして紅毛、白毛、黃毛のある品が卽ち粱なのであつて、黃粱、白粱、青粱、赤粟と呼ぶは、や

（一）牧野云フ、今日我邦ニ培養セラルルあはニハ數個ノ變リ品ガアツテ、中ニハ穗末ガ數枝穗ニ分岐スルモノモアル。あはトえのころぐさトノ間種ト認メラルルモノニおほえのころト云フモノガアツテ能クあは畑ニ生ジテヰル。

（二）梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

はりその色に隨つた命名に過ぎない。郭義恭の廣志に、解粱、貝粱、遼東赤粱なる名稱が擧げてあるが、これはその産地に因つた命名だ。

【集解】弘景曰く、凡て粱米といふはみな粟の類であつて、ただその牙頭の色の差異に因つて區別しただけのものである。汜勝之は『粱は秫粟だ』といつたが、それはさうでない。黄粱は(三)青、冀州に産するもので、東部地方では見受けない。白粱は處處にあるが、襄陽の竹根のものを佳しとする。青粱は江東にはあることが稀だ。又、漢中に桌粱といふ一種があつて、粒は粟のやうで皮が黒く、食料にもなり、酒にも釀す。よく(四)玉を消かすものだ。

〔秫・粟・粱〕
—粱は粗く・粟は細かく・秫は粘する—

恭曰く、粱は粟の類ではあるが、詳細に調べると差別がある。黄粱は、(二)蜀、漢、商、浙地方に産し、穗が大きくして毛が長く、穀、米は倶に白粱よりも粗くして子の收穫が少く、水旱に耐へず、食料として香美なる點は諸粱に勝るもので、一般に

(三)青州、冀州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(四)一書ニ樂ニ作ル。

(二)蜀ハ四川、漢、商ハ陝西ノ南半、浙ハ浙江地方ヲイフ。

竹根黄と稱してゐる。陶氏が竹根を白粱といつたのは誤だ。白粱は、穗が大きくして毛が多く、且つ長くして穀は粗く、扁長で粟のやうに圓くなく、米はやはり白くして大きく、食料としての香美な點は黄粱に亞ぐものだ。青粱は、穀穗に毛があつて粒が青く、米もやはり微し青くして黄粱、白粱よりも細かく、その粒は青稞に似て少し粗く、早く熟して收穫が薄い。夏期の食料として極めて清涼なものだが、ただ味がないのと色の惡いのとで黄粱、白粱のやうなわけに行かない。故に一般にこれを種植することが稀である。餳を作ると潔白で他の米に勝る。

○頌曰く、粱は粟の類であつて、粟は粒が細くはあるが功用の點では差異がない。現に汴洛、河陝地方では白粱を多く種植するが、青粱、黄粱は稀だ。それは土地の肥力を損して收穫が少いためだ。

○宗奭曰く、黄粱、白粱は西洛の農家で多く種植する。飯にして尤も佳し。その他の用途では甚だ結構なものでない。

黄粱米（別錄中品）(六) 氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【氣を益し、中を和し、洩を止める】（別錄）【客風頑痺を去る】（日華）【霍亂下痢を止め、小

(六) 木村（康）曰ク、（成分）うるあはノ組成（%）ハ水分一三・

三四、蛋白質二・五七、脂肪五・五五、無窒素物六五・三一、纖維一・六五、灰分二・五五。

(七) 大觀ニ續ニ作ル。

便を利し、煩熱を除く】(時珍)

【發明】 宗奭曰く、青粱、白粱は性いづれも微涼であるが、黄粱だけは性、味が甘にして平である。これは土地の中和の氣を稟けることが多いからではないかと思ふ。

頌曰く、諸種の粱は、他の穀類に比較して最も脾、胃を益するものだ。

【附方】 舊四、新一。【霍亂煩躁】黄粱米粉半升、水半升を和して絞り、白粉のやうにして頓服する。(外臺)【霍亂大渇】渇して止まぬものは、多く流動物を飲めば死亡する。黄粱米五升、水一斗を煮て淸したもの三升を少しづつ飲む。(肘後)【小兒の鼻乾】涕の出ないものは腦熱である。黄米粉、生礬末各一兩を用ゐ、一日二回、一錢づつを水で調へて顖上に貼る。(普濟)【小兒の赤丹】土番黄米粉を雞子白で和して塗る。(兵部手集)【小兒に生じた瘡】身體、顏面全部に滿ちて火で燒くやうなるには、黄粱米を粉に研つて蜜水を和して調へ、瘥えるを度として用ゐる。(外臺)

白粱米(別錄中品) 【氣味】【甘し、微寒にして毒なし】【主治】【熱を除き、氣を益す】(別錄)【胸膈中の客熱を除き、五臟の氣を移し、筋骨を(七)緩にする。凡そ

胃虚、幷に食物、及び水を嘔吐するには、米汁二合、薑汁一合を和して服するがよし】(孟詵)【飯に炊いて食へば、中を和し、煩渴を止める】(時珍)

附方　舊二。【霍亂の(八)止まぬもの】白粱米五合、水一升を和して粥に煮て食ふ。(千金方)【手足に疣の生じたるもの】白粱米粉を鐵(九)銚で赤く炒つて研末し、多數人の唾液で和して厚さ一寸に塗る。直ちに消える。(肘後)

青粱米(別錄中品)　氣味【甘し、微寒にして毒なし】主治【胃痺、熱中、消渴、洩痢を止め、小便を利し、氣を益し、中を補し、身を輕くし、天年を長くする。粥に煮て食ふ】(別錄)【脾を健にし、洩精を治す】(大明)

發明　時珍曰く、現に粟中にある大きくして青黑色なものがそれである。この物は穀芒が多くして米が少く、金水の氣を禀受するものだ。その性は最も涼であつて、病人に好適のものである。

詵曰く、青粱米は辟穀に可し。純苦酒に三日間浸し、百回蒸し百回晒して貯藏し、遠路步行の際に一日に一回食へば十日間步行繼續に堪へる。若しそれを繼續して食へば四百九十日間は饑ゑない。又、ある方では、米一斗、赤石脂三斤を水に漬けて

(八)大觀ニ吐ニ作ル。
(九)大觀ニ鐺ニ作ル。

一兩日間暖かな場所に置き、上に青白色の衣の出たとき、搗いて大いさ李ほどの丸にし、一日三丸づつを服す。やはり饑ゑない。按ずるに、靈寶五符經中に『白鮮米を九蒸九暴して辟穀の糧にする』とあるが、此に青粱米を用ゐるといふその出處は判らない。

附方　新七。【脾を補し、胃を益す】羊肉湯に青粱米、葱、鹽を入れて粥に煮て食ふ。(正要)【脾虚泄痢】青粱米半升、神麴一合で日毎に粥を煮て食へば癒える。(養老書)【冷氣心痛】桃仁二兩を皮を去り、水で研つて汁を絞り、その汁に青粱米四合を入れて粥に煮て常食する。(養老書)【五淋澀痛】青粱米四合に醬水を入れて粥に煮、上蘇末三兩を投じて毎日空心に食ふ。(同上)【老人の血淋】車前五合を綿に裹んで煮た汁に青粱米四合を入れて粥に煮、その汁を飲む。またよく目を明にし、熱を引いて下行するものだ。【乳石の發渴】青粱米の煮汁を飲む。(外臺)【一切の毒藥】及び鴆毒の煩懣止まぬには、甘草三兩、水五升を二升に煮取つて滓を去り、黍米粉一兩、白蜜三兩を入れて煎じ、薄粥のやうにして食ふ。(外臺)

粟(一)（別錄中品）

和名　こあは
學名　Setaria italica, Beauv. var. germanica, Trin.
科名　禾本科

〔釋名〕**秈粟**　時珍曰く、粟の古文字は㮚と書いた。穗が禾の上に在る狀態を形容したものであつて、春秋題辭に『粟なるものは金の所立であつて、米は陽の精である。故に西の字に米を合せて粟としたのだ』とあるはこじつけだ。許愼の說には『粟といふは續の意味で、穀に續くものだ。古代には粟を黍、稷、粱、秫の總稱とした』とあつて、今いふ粟そのものは古代にはただ粱と呼んだそのものだ。後世一般には粱の細かいものを指して專ら粟と呼ぶやうになつた。それで唐の孟詵の本草には『一般に粟なるものを識らぬ』といつたのだが、近世では全く粱を識らなくなり、大體に於て、粘るものを秫とし、粘らぬものを粟とするところから、この物をば秈粟と呼んで秫と區別して秈と配するやうになつた。北方の地では一般にこれを小米と呼んでゐる。

〔集解〕弘景曰く、粟は、江(二)南、江西地方で作るものはいづれもその粒が粱

(一)牧野云フ、あはノ果穗ノ小形ナル品デアルガ、往往普通ノあはト分チ難イ中間品ガアル。
(二)南、大觀ニ東ニ作ル。

よりも細かく、よく舂いて白くしてやはり白粱に當て、白粱粟と呼び、或は粢米と呼んでゐる。

恭曰く、粟は種類は多いが、いづれも諸種の粱よりも細かい。北方の地では常食とする。粱とは區別がある。粢とは稷米のことだ。陶氏の註解は正しくない。

詵曰く、粟とは顆粒の小さいもののことだ。現に一般人の多くは正確に知つてゐない。(三)粢そのものは米粒が粗大なもので、色に隨つて區別する。南方では多く新たに燒いて開墾する所謂畬田に多くこれを作るが、その收穫したものは極めて舂き易く、粒は細く、香美で少しこくがない。それはただ灰の中へ種ゑるのと、鋤を加へないがためであつて、北方で耕地に作るものは多く鋤を加へるから、その收穫物は舂き難い。鋤を加へないとその草が(四)翳死する。全然土地の關係である。

時珍曰く、粟、卽ち粱であつて、穗が大きくして毛長く、粒の粗いものは粱である。穗が小さくして毛短く、粒の細かいものは粟である。いづれも苗は茅のやうなものだ。種類は凡そ數十あつて、青、赤、黃、白、黑の諸色があり、人の姓氏や地名やに因み、或は形の類似點や時季に因み、それぞれの意味を含めて名を命けるの

(三)大觀ニ粢ニ作ル。

(四)翳死ハ雜草ニ隱蔽セラレテ死スルコト。

(五) 息耗ノ息ハ増スコト、耗ハ減ズルコト。

(六) 木村(康)曰ク、こあはノ穀粒成分ノ組成(%)ハ澱粉五六・七―六二・五、脂肪三・一二、含窒素五、水分八・六。

で、早種のものには趕麥黄、百日糧などの名のものがあり、中種のものには八月黄、老軍頭などの名のものがあり、晩種には鴈頭青、寒露粟などの名のものがある。按ずるに、賈思勰の齊民要術には『粟の成熟に早晩あり、苗稈に高下あり、收實に(五)息耗あり、質性に强弱あり、米味に美惡あり、山澤に異宜あり。天の時に順ひ地の利を量れば、力を用うること少くして功を成すこと多し。性に任じ道に返すれば、勞して穫ること無し』とある。概して早粟は皮薄くして米が實し、晩粟は皮厚くして米が少い。

粟米　卽ち小米である。(六)

氣味　【鹹し、微寒にして毒なし】 時珍曰く、鹹し、淡なり。宗奭曰く、生では消化し難い。熟では滯氣し、隔食し、蟲を生ずる。藏器曰く、胃冷のものは多食してはならぬ。粟を水に浸して敗れるやうになつたものは人體を損ふ。瑞曰く、杏仁と食合はせれば人をして吐瀉せしめる。鴈は粟を食ふと足が重くなつて飛べなくなる。

主治　【腎氣を養ひ、脾、胃中の熱を去り、氣を益す。陳きものは苦寒であつて、胃熱、消渇を治し、小便を利す】(別錄) 【痢を止め、丹石の熱を壓す】(孟詵)

【水で煮て服すれば、熱腹痛、及び鼻衄を治す。粉にし水で和して漉した汁は、諸毒を解し、霍亂、及び轉筋の腹に入りたるものを治し、又、卒に罹つた鬼打を治す】(藏器)【小麥毒の發熱を解す】(士良)【反胃、熱痢を治す。粥に煮て食へば、丹田を益し、虛損を補し、腸胃を開く】(時珍) ○生生編

發明 弘景曰く、陳粟とは三五年經つたものをいふのであつて、尤も煩悶を解す。服食家でもやはりそれを食ふ。

宗奭曰く、粟米は小便を利するものだから脾、胃を益する效能があるのだ。

震亨曰く、粟は水と土とに屬する。陳いものは最も硬くして消化し難いが、漿水を得れば消化する。

時珍曰く、粟なるものは、味は鹹くして淡く、氣は寒にして下滲する。腎の穀であつて、腎病に適する食物だ。虛熱、消渇、洩痢はいづれも腎の病であつて、小便を滲利する結果は腎の邪を洩することになるのである。胃火を降すから脾、胃の病に食ふがよし。

附方 舊五、新四。【胃熱消渇】陳粟米で炊いた飯を乾して食ふが良し。(醫方心

鏡）【反胃吐食】脾、胃の氣弱で食物が消化せず、湯飲の通らぬには、粟米半升を粉に杵いて水で梧子大の丸にし、七粒を煮熟して少量の鹽を入れ、空心に汁と共に呑下す。或は、醋中に納れて呑む。下通して已むといふ。（心鏡）【鼻衄の止まぬもの】粟米粉を水で煮て服す。（普濟）【嬰孩の初生】七日目に穀神を助けて腸、胃に導き達する。粟米を研いで飴のやうな粥に煮、毎日少許を哺はす。（姚和衆方）【孩子の赤丹】粟米を嚼んで傅ける。（兵部手集）【小兒の重舌】粟米を嚼んで哺ふ。（秘錄）【雜物の眯目】出ぬには、生粟米七粒を嚼み爛らし、その汁を取つて洗ふ。直ちに出る。（總錄）【湯火灼傷】粟米を炒り焦して水に投じ、澄して汁を取り、糖のやうに煎稠して頻りに傅ける。能く痛を止め、瘢痕を滅す。ある方では、半炒半生にして研末し、酒で調へて傅ける。（崔行功纂要）【熊、虎の爪傷】粟を嚼んで塗る。（葛氏方）

粟泔汁　主治　【霍亂卒熱で心の煩渴するには、數升を飲む。立ろに瘥える。臭泔は消渴を止めるに尤も良し】（蘇恭）【酸泔、及び澱で皮膚の瘙疥を洗へば蟲を殺す。これを飲めば五痔に主效があり、臭樗皮を和して煎じて服すれば小兒の疳痢を治す】（藏器）

附方　新二。【眼熱赤腫】粟米泔澱の極めて酸きものと、生地黄等分を研りまぜて方圓二寸の絹に攤し、目上に貼つて熨す。乾けば易へる。（總錄）【疳瘡月蝕】寒食泔澱を傅けるが良し。（千金）

粟糠　主治　【痔漏、脱肛には、諸藥に和して薫ずる】（時珍）

粟奴　主治　【小腸を利し、煩懣を除く】（時珍）

發明　時珍曰く、粟奴、卽ち粟苗の穗が生えるときに生ずる黑煤である。古方には用ゐてないが、聖惠に、小腸の結澀不通で心煩悶亂するを治する粟奴湯といふがあつて、『粟奴、苦竹鬚、小豆葉、炙甘草各一兩、燈心十寸、葱白五寸、銅錢七文を水で煎じて分服する。效を取つたならば止める』とある。

粟廩米　後の陳廩米の條下に掲げる。

粟蘗米　後の蘗米の條下に掲げる。

粟　糗　後の麨の條下に掲げる。

(一)**秫**　音は朮(ジュツ)である。(別錄中品)

和名　もちあは
學名　Setaria italica, Beauv. forma.
科名　禾本科

【釋名】**衆**　音は(シュウ)である。(爾雅)　**糯秫**(唐本)　**糯粟**(唐本)　**黃糯**　時珍曰く、秫の字の篆文はその禾の體の柔弱なる形に象つてある。俗に糯粟と呼ぶそのものだ。北方地方では黃糯と呼び、また黃米ともいふ。酒に釀しては糯に劣る。

【集解】恭曰く、秫とは稻秫のことで、今は一般に粟糯を秫と呼ぶ。北方の地では多くこれで酒を釀すが、汁は黍米よりも少い。凡て黍稷、粟秫、粳糯の三穀にはいづれも秈と(二)糯とがある。

禹錫曰く、秫米は黍米に似て粒が小さい。酒に作れるものだ。

宗奭曰く、秫米は搗くと初めに淡黃色が出る。やはり糯のやうなもので、飯にはならない。それはあまり粘り過ぎるからだ。酒を作るにはよい。

時珍曰く、秫とは粱米、粟米の粘るものを指すのであつて、赤、白、黃の三色あり、いづれも酒に釀し、糖に熬り、餈糕に作つて食へるものだ。蘇頌の圖經に、秫

(一)牧野云フ、粟ノ粘ルモノデ、あは、こあはトモ孰レニモアル。

(二)大觀ニ秫ニ作ル。

を黍の粘るものだといひ、許愼の說文に、秫を稷の粘るものだといひ、崔豹の古今注に、秫を稻の粘るものだといつたのはみな誤であつて、蘇恭が、粟秫を以て秈、糯を分ち、孫炎の爾雅の註に、秫を粘粟(ねんぞく)といつたのが當を得てゐる。

秫米 卽ち黄米である。(三) 〔氣味〕『甘し、微寒にして毒なし』詵曰く、性は平である。常食してはならぬ。五臟の氣を擁(よう)し、風を動じ、人をして迷悶せしめるものだ。時珍曰く、按ずるに、養生集に『味酸く、性熱であつて、粘滯して黄積(わうしやく)病(びやう)と成り易い。小兒は多食してはならぬ』とある。

〔主治〕『寒熱。大腸を利し、漆瘡を療ず』(別錄)『筋骨の攣急を治し、瘡疥毒熱を殺す。生で搗き、鷄子白で和して毒腫に傅けるが良し』(孟詵)『犬咬(けんかう)、凍瘡に主效がある。嚼んで傅ける』(日華)『肺瘧(はいぎやく)、及び陽盛陰虛で夜中眠れぬもの、及び鵝を食つて成つた癥(ちやう)、妊娠中に黄汁を下すものを治す』(時珍)

〔發明〕弘景曰く、北方地方ではこの米で酒を作る。糟に煮れば肥軟にして消化し易い。方藥には純粹の藥としては用ゐない。ただ嚼んで漆瘡に塗り、また諸種の藥酵(やくかう)を釀すに用ゐるだけだ。

(三) 木村(康)曰ク、秫ト稱スルハ粘穀(盛京通志)、樸粟(通州志)ノ類ニシテ、種粒殊ニ小サク粘マリ餅トナスニ適シ、マタ酒、燒酎、飴ヲ製スルニ佳ナリ。

時珍曰く、秫は肺の穀であつて、肺病にはこれを食ふがよし。そのわけは、能く寒熱を去り、大腸を利するからで、大腸は肺の合であつて、肺が病めば多く皮の寒熱を作すものだ。千金の肺瘧を治する方にこれを用ゐたのはこの意味を取つたのである。靈樞經に、岐伯が陽盛陰虚して夜瞑し得ざるを治する半夏湯中にこれを用ゐたのは、この物が陰氣を益して大腸を利する功力を取つたものであつて、大腸が利すれば陽が盛でなくなる。その方は半夏の條下に記載した。又、異苑に『宋の元嘉年間のこと、ある者が鴨を食つて癥瘕になつたとき、醫が秫米を粉に研つて水で調へて服ませると、須臾にして煩躁し、一羽の鴨雛を吐出して瘥えた』とある。千金方には『鴨肉を食つて病となり、胸滿し、面赤く、物を食し能はぬには、秫米泔一盞を飲ませる』とある。

附方　舊三、新三。　【赤痢の止まぬもの】秫米一把、鯽魚鮓二臠、薤白一虎口で粥に煮て食ふ（普濟方）【筋骨の攣急】詵曰く、秫米一石、麴三斗、地黃一斤、茵蔯蒿を黃に炙いて半斤を用ゐ、普通の釀造法に依つて酒にして服するが良し。【肺瘧寒熱】痰が胸中に聚り、その病狀が心を寒せしめるやうになり、寒甚しければ熱

してよく驚き、幻覺を生ずるやうなものである。恒山三錢、甘草半錢、秫米三十五粒を水で煎じ、未發時に三回に分服する。(千金)【妊娠で水を下すもの】膠のやうな黄色の水、或は小豆汁のやうな水を下すには、秫米、黄芪各一兩、水七升を三升に煎じて三回に分服する。(梅師)【浸淫惡瘡】汁があつて多く心に發するものは、早く治療せねば全身に及んで死亡する。秫米を黄黒に熬り、末に杵いて傅ける。(肘後方)【久泄の胃弱】黄米を炒つて粉にし、數匙づつを沙糖を拌ぜて食ふ。(簡便)

根【主治】【湯に煮て風を洗ふ】(孟詵)

穇(一)

䅁(サン)慘(ザン)の二音である。

(救荒)

和名 しこくびえ
學名 Eleusine coracana, Gaertn.
科名 禾本科

【釋名】**龍爪粟** **鴨爪稗** 時珍曰く、穇とは粘せぬものを呼ぶ言葉であつて、また實らぬものを指す意味である。龍爪といひ、鴨爪といふは、その穗の岐の形の形容だ。

【集解】周憲王曰く、穇子は水田中、及び下濕の地に生える。葉は稻に似てた

(一)牧野云フ、山地ノ畑ニ往往之レヲ作ルヲ見ル、一ニかもまたきびトモかうばふひえトモ稱スル、蓋シちからぐさ一名なししば(E. indica, Gaertn.)カラ變化シタ品デハナイカト思フ、本草綱目啓蒙ニハ此書ノ穇子ヲひえトスレドモ非デアル、

然シ周憲王ノ救荒本草所載ノ䅟子ハ蓋シひえデハナイカト思フ、卽チ此書ノ䅟子ト救荒本草ノ䅟子トハ名ハ同ジデモ其物ハ異ツテキル。ひえハ植物名實圖考ニ湖南䅟子トアルモノデ學名ハ Echinochloa frumentacea, Link. デアル。

だやや短く、梢の端にさながら稗子の穗そのままの穗を結ぶ。その子は黍粒ほどの大いさで茶褐色だ。米を搗いて粥に煮、飯に炊き、麪に磨る、いづれもよし。

〔䅟　子〕

時珍曰く、䅟子は、山東、河南でもやはり五月に種ゑる。苗は茭、黍のやうなもので、八九月に莖が抽き出でる。その莖には三稜があつて、水中の藨草の莖のやうだ。細かい花を開き、簇簇とした粟の穗のやうな穗を結び、それが數岐に分れて鷹の爪のやうな狀態になり、內に黍粒のやうで細かな赤色の細子がある。その稃は甚だ薄く、その味は粗澀なものだ。

氣味【甘く澁し、毒なし】 主治【中を補し、氣を益し、腸、胃を厚くし、饑を濟ふ】

稗（一） 音は敗（ハイ）である。（綱目）

和名　のびえ、いぬびえ
學名　Echinochloa Crusgalli, Beauv.
科名　禾本科

釋名　時珍曰く、稗とは禾の卑賤なるものだ。故に文字は卑に從ふのである。

集解　弘景曰く、稗の子はやはり食へる。又、烏禾といふ野中に生える稗のやうなものがある。凶作の際には代用食糧となる。蟲を殺すもので、煮て地に沃ぐと螻、蚓が悉く死ぬ。

藏器曰く、稗に二種あつて、一種は黄白色、一種は紫黒色だ。紫黒色のものは芑に似て毛がある。北方の地では烏禾と呼ぶ。

時珍曰く、稗は處處に野生し、最も能く稻の苗と見まがふものだ。その莖、葉、穗、粒はいづれも黍、稷のやうなもので、一斗から米三升取れる。故に『五穀熟せざれば稊、稗に如かず』といふのであつて、稊は苗が

〔稗〕

（一）牧野云フ、のびえニハ數品ガアル、其芒ノ無キモノヲさるびえト稱ヘ芒ノ著シキモノヲくまびえト稱スル。ひえハ多分モト此ノびえカラ出タ品デハナイカト思ハル、ひえハ通常畑ニ作ッテヰルガ又水田ニ栽エル品モアッテ之レヲみづびえト云ハルル。ひえノ支那名ハ湖南稷子（植物名實圖考）デ學名ハ Echinochloa frumentacea, Link. デアル。

稗に似て、穗は粟のやうで紫毛がある。卽ち烏禾である。爾雅にはこれを䅿——音は迭（テツ）——といつてある。周憲王は『稗に水稗と旱稗とあつて、水稗は田中に生じ、旱稗は、苗、葉は穇子に似て色は深綠、根下の葉は紫色を帶び、稍頭に扁穗を出して子を結ぶ。その子は黍粒のやうで茶褐色だ。味は微し苦く、性は溫である。粥に煮、飯に炊き、麪に磨いて食ふ。いづれもよし』といつた。

稗米（三）【氣味】【辛く甘く苦し、微寒にして毒なし】頴曰く、辛く脆し。

【主治】【飯にして食へば氣を益し、脾に宜し。故に曹植に『芳菰、精稗』の稱がある】（時珍）

苗根【主治】【金瘡、及び傷損の出血止まぬには、搗いて傅け、或は研末して摻る。直ちに止まり、甚だ效驗がある】（時珍）

（一）狼尾草（拾遺）

和名　あぶらすすき
學名　Spodiopogon cotulifer, Hackel.
科名　禾本科

【釋名】**稂**　音は郎（ラウ）である。**董蓈**　爾雅には童粱と書いてある。**狼茅**（爾

（三）木村（康）曰ク、ひえハ種子ヲトリ炊キテ食用ニ供ス、性質强剛ニシテ能ク旱魃ニモ堪ヘ、風雨蟲害ニ犯サルルコトモ少ク、瘠地ト雖モ尙ヨク相當ノ收穫アリ、且ツ久シク貯藏ニ耐フルノ故ヲ以テ、農家ハ古來備荒ノ作物トシテ栽培セリ。

（一）牧野云フ、今植物名實圖考ニ據テ之レヲ下ノ如ク定メタが、然シ時珍ノ文ニヨレバ從來學者が僞シタヤウニちから

ぐさ（Pennisetum purpurascens, Makino.）ニ充ツルコトモ出來ルトモ考ヘ得ル。

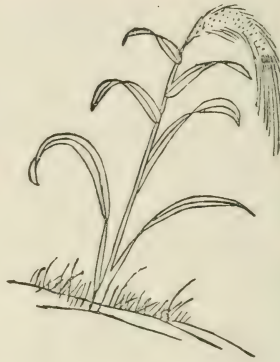
(二) 牧野云フ、蒯草ハ未詳ノ一草デアル從來學者ハ之レヲかやつりぐさ科ノあぶらがや（Scirpus cyperinus, Kunth. var. concolor, Makino.）ニ充テ居レドモ穩當デナイ。

雅）**孟**（爾雅）**宿田翁**（詩疏）**守田**（詩疏）時珍曰く、狼尾とはその穗の狀態の形容である。秀でて成熟せず、すつくとして田にあるから宿田、守田と呼ばれたのだ。

［集解］ 藏器曰く、狼尾は澤地に生じ、茅に似て穗になる。廣志に『子は黍として食へる』とあり、爾雅に『孟は狼尾、茅に似たり、以て屋を覆ふ可し』とあるはこの物だ。

時珍曰く、狼尾は、莖、葉、穗、粒いづれも粟に似て、穗は紫黃色で毛がある。凶作の年にはやはり采つて食物となる。許愼の說文に『禾粟にして穗が生えて成らぬものを蕫蓈といふ、その秀でて實らぬものを狗尾草といふ』とある。草部に記載してある。

〔狼尾草〕

［附錄］ (二)**蒯草** 藏器曰く、蒯草は苗が茅に似たもので、席にも織り、繩にも綯へる。また食物にもなり、粳米のやうだ。

米 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【飯にして食へば人をして饑ゑざれしめる】（藏器）

（一）東廧 音は墻（シヤウ）である。（拾遺）

和名　とうしやう
學名　Nitraria Schoberi, L.
科名　はまびし科（蒺藜科）

〔釋名〕 **沙蓬米**（格物） **登相子**（保德州志） **沙米**（同上） **登粟**（遼史）

〔集解〕 藏器曰く、東廧は（二）河西に生ずる。苗は蓬に、子は葵に似たもので、九月、十月に熟する。飯にして食へるものだ。河西地方には『東廧を貸してくれたら田粱で濟さう。（貸我東廧償爾田粱）』といふ俚諺がある。廣志には『東廧（三）子の粒は葵に似て青（四）黑色だ』とある。（五）幷、涼地方にもある。

時珍曰く、相如の賦に『東廧、彫胡』とあるはこの物だ。魏書に『（六）烏丸の地は東廧に適する。穄に似たもので、白酒を作るものだ』とあり、又、廣志に『粱禾は蔓生のもので、その子は葵子のやう、その米の粉は白くして麪のやうだ。饘粥になる。六月種ゑて九月に收穫する。牛が食ふと尤も肥えるものだ』とある。これもや

（一）牧野云フ、「シリア」ヨリ「シベリア」ヲ經テ支那北部ノ礦地ニ產スル小灌木デ、繁ク枝ヲ分チ多肉ナル倒披針形ノ小葉ヲ着ケ葉間ニ細花ヲ開ク、小形ノ漿果ヲ結ビ少シク鹽味ヲ帶ブルモ、之レヲ食用ニ供スルコトガ出來ルトノコトデアル。
（二）河西ハ陝西省ノ北半部。
（三）子粒ノ二字、大觀ニ之子ノ二字ニ作ル。
（四）大觀ニ黑字ナシ。
（五）幷ハ幷州。石部石髓ノ註ヲ見ヨ。涼ハ涼州、同雄黃ノ註ヲ見ヨ。
（六）烏丸ハ今ノ內蒙古ノ地ナリ。
（七）木村（康）曰ク、此種ハ南魯西亞ヨリ蒙古ニカケテ及ビ

は一種の穀類で、東廧に似たものだ。

子 (七)【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【氣を益し、身を輕くし、久しく服すれば饑ゑず、筋骨を堅くし、能く歩行せしめる】(藏器)

(一)菰米(綱目)

和名　まこもノ實
學名　Fruits of Zizania latifolia, Turcz.
科名　禾本科

【釋名】**茭米**(文選) **彫蓬**(爾雅) **彫苽**(說文) 唐韻には蔏胡と書いてある。

彫胡 時珍曰く、菰はもと苽と書いたものだ。茭草である。その中に生える菌は瓜のやうな形で、食へるものだ。故にこれを苽といふ。その米は霜が降りて彫む時をまつて採るものだから彫苽といひ、或は訛つて雕胡といふ。枚乘の七發には、これを『安胡』といつてある。爾雅には『齧は彫蓬なり。蔏は黍蓬なり』とあり、孫炎の註に『彫蓬、卽ち茭米である。古代にはこれを五飯の一に數へたものだ』とある。鄭樵の通志には『彫蓬、卽ち米茭である。飯にして食へるものだから齧といふ。黍蓬といふは茭の實を結ばないもののことで、ただ蔏に作れるだけだから蔏

「メソポタミヤ」、「オーストラリヤ」ニ產ス、此種及 Nitravia retusa ハ曾テ曹達ヲ製スルニ應用セラレタリ、果實ハ食フ可シ。

(一)牧野云フ、菰米ハまこもノ穀デ、往時ハ我邦デモ僅カニ之レヲ食用トシタ事モアルガ今日デハ其事實ガナイ、まこもニハ實ノ生ルモノト否ラザルモノトアルト唱ヘラレテヰタガソンナ事ハ決シテナク、何レノ株ニモ能ク實ガ出來ル、卽チ花穗ノ上部ニ雌花ガ咲イテ之レニ實ガ結ビ、花穗ノ下部ニハ雄花ガ咲ク、此雄花ガマダ咲キ了ラヌ內早ク穗末ノ花ハ實ニナツテヰル、實ハ熟スルト穗カラ離レテ落下ス。

といふ』とある。楊愼の卮言には『蓬には水、陸の二種ある。彫蓬といふは水蓬であつて彫菰のことだ。黍蓬といふは旱蓬であつて青科のことだ。青科は黍のやうな實を結び、羌地方ではそれを食ふ。現に(二)松州にある』とある。余が按ずるに、鄭氏、楊氏の二説は同じくないが、しかしいづれも根據がある。蓋し蓬の類は一種でないからだ。

【集解】弘景曰く、菰米、一名彫胡は餅にして食へる。

藏器曰く、彫胡とは菰蔣草の米のことで、古代には重要視されたものである。故に内則に『魚は苽に宜し』とある。いづれも水に産するものだ。曹子建の七啓に『芳菰、精稗』とあるは、その二草の實は飯になるものだから謂つたのだ。

頌曰く、菰は水中に生え、葉は蒲、葦のやうだ。その物の苗に莖梗あるものを菰蔣草といふ。秋になつて結ぶ實が彫胡米だ。古代には美饌としたのだが、今は饑饉歲にやはり採つて代用食糧にする位のものだ。葛洪の西京雜記に『漢の太液池の邊は全部彫胡、紫籜、綠節、(三)薄叢の類であつた』とある。蓋し菰にして米のあるものをば長安地方では彫胡といひ、菰にして首あるものをば綠節といひ、葭蘆にして

(二)松州ハ草部芳草類當歸ノ註ヲ見ヨ。

(三)薄、恐クハ蒲ノ誤。

まだ葉の解けぬものをば紫籜といふ。

宗奭曰く、菰蔣は、花は葦のやうで青い子を結ぶ。細い青麻黄のやうで、長さ寸に幾いものだ。野人はこれを取收め、粟と合せて粥にして食ふ。甚だ饑を濟ふものだ。

時珍曰く、彫胡は、九月に莖が抽き出て葦、艻のやうな花を開き、長さ一寸ばかりの實を結ぶ。降霜後に採る。大いさ茅針ほど、皮は黑褐色で、その米は甚だ白くして滑膩なものだ。飯にすれば香脆なものである。杜甫の詩に『波は菰米を漂はして沈雲黑し』といつたのはこのものだ。周禮には、供御に六穀、九穀の數を擧げ、管子の書には、これを鴈膳といつてある。故にその米だけを此に收錄した。茭、筍、菰、根については別に草部に掲載してある。

氣味 【甘し、冷にして毒なし】 主治 【渴を止める】(藏器) 【煩熱を解し、腸、胃を調へる】(時珍)

蓬草子（拾遺）(一)

和名　ナシ
學名　未詳
科名　未詳

釋名

集解

時珍曰く、陳藏器の本草に蓬草子を載せてあるが、形狀の說明がない。余が按ずるに、蓬類は單に一種のものでないので、彫蓬、卽ち菰草といふものがあり、——それは菰米の條に記載した——黍蓬、卽ち青科といふもあり、又、黃蓬草、飛蓬草といふもある。陳氏は果してその何れの蓬を指していつたものか判らないが、事實から推したところでは、黃蓬でなければ青科を指したものに相違ないやうだ。黃蓬草は、湖、澤の中に生じて葉は菰、蒲のやう、秋期に結實して穗になり、子は細かで彫胡の米ほどのものだ。饑饉年には一般に採つて食ふ。浸し洗つてから曝して舂けば苦澀味が取れる。青科は、(二)西南夷地方で種ゑる。葉は茭、黍のやうで、秋期に實を結んで穗になり、赤黍のやうで細かな子があり、その稃は甚だ薄い。曝し舂いて炊いて食ふ。又、粟類に七稜青科、八稜青科といふがあり、麥類に青

(一) 牧野云フ、集解ノ文中ニアル飛蓬ヲ單ニ蓬ト稱スル草ダトシテ、小野蘭山ハ之レヲやなぎよもぎ一名むかしよもぎニ充テタノハ誤リデアル、蓬ハあかざ科ノ一種ノ草デ、ははきぎ(地膚)ニ似タモノデアル。

(二) 西南夷トハ雲南地方ヲ指ス。

稞(くわ)、黄稞といふがあるが、いづれもこの物の類ではなく、異物同名だ。飛蓬といふそのものは藜(れい)、蒿(かう)の類で、末が大きく本が小さく、風で抜け易いものだから飛蓬と呼ぶのである。子は灰翟菜の子のやうで、やはり饑饉の際の糧になる。又、魏略に『鮑出は、饑饉歳に蓬實を采(と)り、日に數斗を得て母のために食料にした』とあり、西京雜記に『宮中では、正月上辰に池邊に出て盥濯(くわんたく)し、蓬の食物を食つて邪氣を祓(はら)ふ』といふことがあるが、これはいづれも采つた場所が如何なるところで、それが何の蓬であつたか判らないが、要するに右の三種の蓬子もやはり甚しい相違のあるものでなからう。

子　氣味　【酸く澀し、平にして毒なし】　主治　【飯にして食へば、饑を益すること粳米(かうまい)と異らない】(藏器)

菵(一)草(二)

音は綱(マウ)である。　(拾遺)

和名　みのごめ、ゑつたむぎ
學名　Glyceria acutiflora, Torr.
科名　禾本科

釋名　皇(爾雅)　守田(同上)　守氣(同)　時珍曰く、皇と菵とは音が近いの

(一)牧野云フ、菵草ハ先輩ノ爲セシヤウニみのごめニ之レヲ充テテヨイト思フ。然シ小野蘭山等ハ其實物ヲ間違ヘ、同ジ禾

だ。

集解　藏器曰く、菵草は水田中に生ずる。苗は小麥に似て小さく、四月に熟する。飯になるものだ。

時珍曰く、爾雅に『皇は守田(しゆでん)なり』とあり、郭璞は『一名守氣といふ、廢田中に生じ、燕麥に似たもので、子は彫胡(てうこ)のやうで、食へる』といつた。

米　氣味　【甘し、寒にして毒なし】　主治　【飯にすれば、熱を去り、腸、胃を利し、氣力を益す。久しく食へば饑ゑぬ】(藏器)

本科ノ Beckmannia erucaeformis, Host. ヲ其品トシテキルノハ實際ニ卽セヌ說デ取ルニ足ラヌ。此品ハ其殼コソ大キイガ其穀粉微少デ使用スルニ足ラヌモノデアル。蘭山ハ村民子ヲ採テ糊トス又居者(ヱツタ)モ飯トシ食フト記シテ居レドモ、ソンナ事ハ一切ナイ。故ニ此品ヲ從來ノ如ク、のごめナド稱スルハ間違ユエ、私ハ之レニかずのこぐさノ名稱ヲ與ヘタ、ソシテみのごめノ稱ヲ其正品ニ移シテ其過ヲ正シクシタ。卽ヲ菵草ヲみのごめト稱スル事ハ變リハナイガ其實物ハ違ノノデアル。私ノ稱スルみのごめハ現ニ農夫ガ之レヲ田ニ集メテ食用ニ供シテ居リ、處ニヨッテハたむぎト呼ンデキル。今日植物家ハ通常之レヲむつおれぐさト稱ヘテキルガ、ソレハみのごめト呼バネバナラヌ。

(二) 大觀ニ菵米ニ作ル。

䔾(一)草（海藻）

和名　こうばふむぎ
學名　Carex macrocephala, Willd.
科名　かやつりぐさ科(莎草科)

釋名　自然穀(海藻)　禹餘糧

集解　藏器曰く、博物志に『東海の洲上に䔾(し)といふ草があつて、その實は食

(一) 牧野云フ、先輩ノ定ムル所ニ從ヒ先ヅ下ノ如ク極メテオク、此こうばふむぎハ一ニふでくさト稱スルモノデ諸州ノ海濱砂地ニ普通ニ見ル

モノデアル。雌雄異株デ雌株ニハ實ガ出ルガ其形チハ麥ニ似テヰル、然シ敢テ食フニ堪フルモノデハナイノデ何處ニモ之レヲ食ツテヰル處ハナイ、强テ食フナラ却テ同ジ海邊生ノこうばふしば（Carex pumila Thunb.）ノ實ガ好イト思ハル。

へる。大麥ほどのもので、七月に熟する。その地の民は冬までにそれの收穫を訖る。それを自然穀と呼び、また禹餘糧ともいふ』とあるが、これは石類の禹餘糧とは異ふ。

珣曰く、蒒の實は毬子のやうなもので、八月に取收める。かの地の人民は常食としてゐるのだが、中國では未だ曾て見たことがない。

時珍曰く、按ずるに、方孝孺集に海米行といふがある。蓋しやはり蒒草の類のものだらう。その詩は『海邊に草あり、海米と名く。大にして蓬蒿に非ず、小にして薺に非ず。婦女籃を携へて晝羣を作し、采り摘んで仍つて海中に於て洗ふ。歸來釜を滌つて松枝を燒き、米を煮て飯にして朝饑を充つ。辭することを莫れ苦澀咽を下らざることを、性命聊か須臾の時を假る』といふのである。

子　［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【饑ゑず、身を輕くする】（藏器）【虛羸、損乏を補し、腸、胃を溫め、嘔逆を止め、久しく服すれば人體を健にする】（李珣）

(一)薏苡仁（本經上品）

和名　はとむぎ
學名　Coix Lachryma-Jobi, L. var. frumentacea, Makino.
科名　禾本科

[校正]　千金方に據つて、草部より此に移し入る。

[釋名]　**解蠡**　音は禮（レイ）である。（本經）　**芑實**　音は起（キ）である。（別錄）　**贛米**（別錄）　音は感（カン）である、陶氏は簳珠と書き、雷氏は䊞米と書いた。**回回米**（救荒本草）　**薏珠子**（圖經）　時珍曰く、薏苡といふ名稱の意味は判らない。その葉が蠡實の葉に似て解散し、また芑黍の苗に似てゐるところから解蠡、芑實の名稱がある。贛米といふは、そのものが堅硬で贛強なものといふ意味があり、苗を屋菼と名ける。救荒本草に『回回米は、また西番蜀秫とも呼び、俗に草珠兒と名ける』とある。

[集解]　別錄に曰く、薏苡仁は(二)眞定の平澤、及び田野に生ずる。八月に實を採る。根の採收に一定の時期はない。

(一)牧野云フ、往往薏苡ヲじゆずだまト訓ズレドモ此レハ下ニ記スルガ如クはとむぎデアル、じゆずだまハ集解ノ文中ニアル菩提子デ其學名ハ Coix Lachryma-Jobi, L. デアル、此じゆずだまハ多年生本デ野生シテヰレドモ、はとむぎハ一年生本デ圃ニ作ラレテヰル。

(二)眞定ハ草部隰草類紫菀ノ註ヲ見ヨ。

弘景曰く、眞定縣は常山郡に屬する。近道處處にあつて、人家で種ゑてゐる。交趾に産するものは子が最も大きく、彼の地では(三)簳珠と呼ぶ。故に馬援は交趾にゐたときこれを餌ひ、中國に齎し還つてから種植したので、人からそれを珍珠として讒されたといふのである。實の重纍せるものを良しとし、仁を取つて用ゐる。

志曰く、今は(四)梁漢のものを多く用ゐるが、氣は眞定のものに劣る。青白色のものが良し。子を取つて甑中に入れて蒸し、氣を餾せしめて曝乾し、挼んで仁を取る。また磨つて取つてもよし。

頌曰く、薏苡は所在にある。春苗が生え、莖は高さ三四尺、葉は黍葉のやうで、紅白の花を開いて穗になり、五六月に珠子のやうな形で稍長い青白色の實を結ぶ。故に一般に薏珠子と呼ぶのである。小兒が多く線を穿つて貫珠のやうにして玩ぶ。九月、十月にその實を採る。

斅曰く、凡そこれを使用する場合に、糯米といふを用ゐてはならぬ。それは顆が

〔薏　苡〕

(三)簳、救荒本草ニ

蘀ニ作ル。

(四)梁漢ハ梁州漢中。石部特生礜石梁州ノ註參照。

大きくて味がなく、世間で粳糠（かうかん）と呼んでゐるそのものだ。薏苡仁は顆が小さくして色青く、味甘く、咬めば人の齒に粘著するものだ。

時珍曰く、薏苡は一般に多く種ゑるもので、二三月に宿根から自生して葉は初生の芭(五)芽のやう、五六月に莖が抽き出て花を開き實を結ぶ。二種あつて、一種は牙に粘るもので、尖つてゐて殼が薄い。即ち薏苡である。その米は色白く、糯米（じゆまい）のやうなもので、粥、飯にもなり、また麪に磨つて食ひ、米と共に酒にも釀し得る。一種は圓くして殼が厚く、堅硬なもので、即ち菩提子（ぼだいし）である。その米は少い、即ち粳糠であつて、ただ穿ち綴つて經を誦（よ）むときの數珠になるだけだ。故に一般にもやはり念珠と呼ぶのである。その根はいづれも色白く、大いさ匙の柄ほどのもつれ結ぼれたもので、味は甘い。

薏苡仁　［修治］　斅曰く、凡そこれを使用するには、毎一兩を糯米一兩と共に(六)炒り、熟して糯米を去つて用ゐる。また更に鹽湯で煮て用ゐることもある。

(七)［氣味］　【甘し、微寒にして毒なし】　詵曰く、平なり。［主治］　【筋急し、拘攣（こうれん）して屈伸し得ぬもの、久風濕痺。氣を下す。久しく服すれば身を輕くし、氣を

(五)芽ハ茅ノ誤。

(六)炒、大觀ニ煎ニ作ル。

(七)木村(康)曰ク、(成分)はとむぎノ全種子ニハ水分一二・一

%、粗蛋白質一六%、粗脂肪三・六%、澱粉五〇・三%、灰分四・九%ヲ含ミ、種仁ハ水分八・五%、澱粉五一・九%、粗蛋白質一七・六%、粗脂肪七・二%、灰分二・三%ヲ含有ス。蛋白質ノ性狀ハ小麥ニ類スルモ、分解ニヨル「アミノ酸」ハ「ロイシン」、「チロジン」ニ富ミ「グルタミン」酸少ナシト。

（藥理）寺坂源雄―鮮醫昭和二（七五）三四五・二、金線蛙及家兎ニ對スル薏苡仁油ノ實驗アリ。

（藥用）頁好ナル營養品ナリ、肺病ニ賞用セリ。利尿及健胃藥トモナス。薏苡仁煎ヲ連用スレバ疣ヲ除クニ效アリ。

（八）積、大觀ニ吐ニ

益す】（本經）【筋骨中の邪氣で不仁なるを除き、腸、胃を利し、水腫を消し、食慾を增進する】（別錄）【飯に炊き麪にして食へば、饑ゑず、氣を溫めるの主效があり、煮て飲めば消渴を止め、蚘蟲を殺す】（藏器）【肺痿、肺氣の（六）積膿血、欬嗽、涕唾上氣を治す。煎じて服すれば毒腫を破る】（甄權）【乾、濕脚氣を去るに大いに效驗がある】（孟詵）【脾を健にし、胃を益し、肺を補し、熱を淸し、風を去り、濕に勝つ。飯に炊いて食へば冷氣を治し、煎じて飲めば小便熱淋を利す】（時珍）

發明　宗奭曰く、薏苡仁は、本經には『微寒にして筋急、拘攣に主效がある』とあるが、拘攣には二種あつて、素問註の文中に『大筋に熱を受けると縮して短になる。故に攣急して伸びない』とあるものは、これは熱に因つて拘攣するものだ。故に薏苡を用うべきものである。素問に『寒に因るときは筋急する』とあるその場合には更にこれは用ゐられない。蓋し寒を受くれば筋急を發し、（九）寒熱は筋攣を發するものであるが、ただ熱を受けただけで全然寒を受けぬ場合にはやはり筋緩を發し、濕を受ければまた引長して無力になるものだ。この藥は力勢が和緩だから、凡そ使用するには、他の藥に倍加して用ゐて效が現はれる。

作ル。
(九)寒、火觀ニ受ニ
作ル。

震亨曰く、寒なれば筋急し、熱なれば筋縮する。急は堅强に因り、縮は短促に因るのであつて、濕を受ける場合には弛し、弛すれば引長する。かかる次第で寒と濕とにして熱を挾まぬといふことは未だ曾てないのであつて、三者いづれも濕に因るのである。しかし外部よりの濕は内部よりの濕が開き發するのでなければ外部よりの濕のみで病とは成り得ないものだ。故に濕から病となるには酒が因となり、魚肉がそれに繼ぐものであつて、甘、滑のもの、燒炙して陳久なるもの、幷に辛香のもの、いづれも濕を致すの因である。

時珍曰く、薏苡仁は土に屬し、陽明の藥である。故に能く脾を健にし胃を益するので、『虛するときはその母を補する』が法則だから、肺痿、肺癰にこれを用ゐ、筋骨の病は陽明を治するを根本とするものだから、拘攣、筋急、風痺のものにこれを用ゐ、土は能く水に勝ち濕を除くものだから、泄痢、水腫にこれを用ゐるのである。按ずるに、古方の小續命湯の註には『中風で筋急、拘攣し、語遲く、脈の弦するには薏苡仁を加へる』とあるは、やはり脾を扶け、肝を抑へる意味だ。又、後漢書には『馬援が交趾にゐた頃、常に薏苡實を餌ひ一身を輕くし、慾を資け、それに因つて瘴

(一〇)大觀ニ食醫心鏡ノ四字アリ。

氣に勝つことが出來る」といつた』とある。又、張師正の倦游錄には『辛稼軒が突然疝疾を患ひ、重墜して盃ほどの大いさになつたとき、ある道人かち、薏珠を東壁土と共に炒り、水で煮て膏にして服する方を敎へられ、數服にして消いた。程沙隨がこの疾を病んだときは、稼軒がその方を授けてやはり奏效した。本草では薏苡を上品の藥とし、心を養ふ藥としてある。故にかやうな功果があるのだ』とある。

○頌曰く、薏苡仁は心、肺の藥に多く用ゐるものだ。故に范汪が肺癰を治し、張仲景が風濕胸痺を治する方にいづれもこれを用ゐる方法があり、濟生方の肺損咯血を治するには、熟豬肺を切り、薏苡仁末を蘸けて空心に食ふ。薏苡は肺を補するため、豬肺は經に引くためであつて、趙君猷は『屢用ゐて效果があつた』といつてある。

附方　舊五、新九。　【薏苡仁飯】冷氣を治す。薏苡仁をよく舂いて飯に炊いて食ふ。氣味はなるだけ麥飯のやうにするが佳し。或は粥に煮るも好し。(廣濟方)　【薏苡仁粥】久風濕痺を治し、正氣を補し、腸、胃を利し、水腫を消し、胸中の邪氣を除き、筋脈の拘攣を治す。薏苡仁を末にし、粳米と共に粥に煮て日毎に食ふが良し。(一〇)　【風濕身疼】日晡に劇しきには、張仲景の麻黃杏仁薏苡仁湯を主とする。麻

黄三兩、杏仁二十箇、甘草、薏苡仁各一兩を水四升で二升に煮取り、二回に分服する。（金匱要略）【水腫喘急】郁李仁二兩を研つて水で濾し、その汁で薏苡仁飯を煮て、一日二回を食ふ。（獨行方）【沙石熱淋】痛み忍び難きには、玉秫を用ゐる。卽ち薏苡仁である。子、葉、根いづれも用ゐてよし。水で煎じて熱飲する。夏期には冷飲する。通ずるを度とする。（楊氏經驗方）【消渴飲水】薏苡仁で粥飲を煮、幷に粥を煮て食ふ。【(二)周痺緩急】偏なるには、薏苡仁十五兩、大附子十箇を炮いて末にし、一日三回、方寸匕づつを服す。（張仲景方）【肺痿咳唾】膿血あるには、薏苡仁十兩を杵き破り、水三升で一升に煎じ、酒少量を入れて服す。（梅師）【肺癰咳唾】心胸の甲錯するには、淳苦酒で薏苡仁を濃く煮取り、微溫にして頓服する。肺に血あるは吐出して癒えるものだ。（范汪方）【肺癰咯血】薏苡仁三合を搗き爛し、水二大盞で一盞に煎じ、酒少量を入れて二回に分服する。（濟生）【卒かに發つた喉の癰腫】薏苡仁二箇を呑むが良し。（外臺）【癰疽の潰れぬもの】薏苡仁一箇を呑む。（姚僧坦方）【妊娠中の癰】薏苡仁の煮汁を呑む。頻頻と飲む。（婦人良方補遺）【牙齒の䘌痛】薏苡仁、桔梗を生で研末して點じ服す。大人、小兒に拘らぬ。（永類方）

(二)周、大觀ニ胸ニ作ル。

根　氣味　【甘し、微寒にして毒なし】　主治　【三蟲を下す】(本經)　【汁漿に煮て食へば甚だ香しく、蚘蟲を去るに大效がある】(弘景)　【煮て服すれば胎を墮す】(藏器)　【卒に發つた心腹の煩滿、及び胸脇痛を治す。剉んで煮た濃汁を三升服すれば定まる】(蘇頌)　記載は肘後方にある。【擣汁に酒を和して服すれば黄疸を治するに有效だ】(時珍)

附方　舊二、新二。【金の如き黄疸】薏苡根の煎湯を頻に服す。【蛔蟲の心痛】薏苡根一斤を切り、水七升で三升に煮て服す。蟲が死んで盡く出る。(梅師)　【經水不通】薏苡根一兩を水で煎じて服す。數服に過ぎずして效がある。(海上方)　【牙齒の風痛】薏苡根四兩を水で煮て含漱し、冷えれば易へる。(一二)(延年祕錄)

葉　主治　【飲にすれば氣が香しく、中を益し、膈を空くする】(蘇頌)　【暑期にこれを煎じて飲めば、胃を暖め、氣血を益す。初生の小兒を浴すれば無病になる】(時珍)　記載は瑣碎錄にある。

(一二)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。

(一)罌子粟（宋開寶）

和名　けし
學名　Papaver somniferum, L.
科名　けし科（罌粟科）

釋名　**米囊子**（開寶）　**御米**（同上）　**象穀**　時珍曰く、その實の形狀が罌子のやうで、その米が粟のやうなるを穀に形容し、しかも供御になるといふのでかかる諸種の名稱があるのだ。

集解　藏器曰く、嵩陽子に『罌粟花は、四葉あり、紅白色で上に淺紅の暈子がある。その囊の形は髇頭箭のやうで、中に細米がある』とある。

頌曰く、處處にあるもので、一般に美觀を賞するために多くこれを蒔く。花には紅、白の二種あつて、微かな腥氣がある、その實の形は缾子のやうで、極めて細かな米粒が中にある。耕作者は一年おきに土地に肥料を加へて九月に子を蒔き、冬を經て春になつてから始めて苗が生え、極めて繁茂する。さうせねば生えぬもので、生えたにしても茂らないのである。缾形の實が焦黄色になるを俟つて採收する。

宗奭曰く、その花にはやはり千葉のものがある。一箇の罌中に凡そ數千萬の粒が

(一)牧野云フ、けしハ希臘並ニ小亞細亞ノ原産植物デアル、花ヲ賞スルモノハ其花色種種アリ、又八重咲ナドモアルガ藥用ノ阿片ヲ採ルモノハ、一重咲白花品ヲ賞用スル。

(二)大觀ニ水研ノ上ニ取子ノ二字アリ。

あつて、大いさは葶藶子ほどで色は白い。

時珍曰く、罌粟は秋種ゑて冬生える。嫩苗は蔬にして食ふが甚だ美味だ。葉は白苣のやうで、三四月に薹が抽き出て青苞を結び、花が開けば苞が脱する。花は凡て四瓣で、大いさは仰盞ほどあり、罌は花の中にあつて鬚蘂に裹まれ、花は開いて三日で散り、罌は莖頭に遺つて、長さ一二寸、大いさ馬兜鈴ほどになり、上に蓋があり下に蔕があつて、さながら酒罌のやうだ。その中に極めて細かな白い米があつて、粥に煮、飯に和して食へるが、(二)水で研つて濾した漿と綠豆粉とで豆腐にして食ふが就中佳味である。また油も取れる。その殼は藥に入れることが甚だ多いのだが、本草に記載のないところを見ると、古代には用ゐなかつたものと見える。江東地方では千葉のものを麗春花と呼ぶ。或はこれを罌粟の別種だとい

〔罌子粟〕

ふが、それはやはりさうでない。その花には變態があつて、元來一定したものではない。白いものもあり、紅いものもあり、紫のもの、粉紅のもの、杏黃のもの、半紅のもの、半紫のもの、半白のものもある。艶麗愛すべきものだから麗春といひ、又、賽牡丹といひ、錦被花といふ。游默齋の花譜に詳述してある。

米（三）［氣味］【甘し、平にして毒なし】宗奭曰く、性は寒である。多食すれば二便を利し、膀胱の氣を動ずる。

［主治］【丹石の發動で飲食の下らぬには、竹瀝と和して粥に煮て食ふ。極めて美味だ】（開寶）寇曰く、石藥を服する人は、これを研つて水で煮、蜜を加へて湯にして飲むが甚だ宜し。【風氣を行り、邪熱を逐ひ、反胃、胸中の痰滯を治す】（頌）【瀉痢を治し、燥を潤ほす】（時珍）

［附方］舊一、新一。【反胃吐食】罌粟粥――白罌粟米（四）三合、人參末三大錢、生山芋五寸を細に切つて研り、三物を水二升（五）三合で六合に煮取り、生薑汁、及び鹽花少量を入れ、和勻して分服する。早期と晩期とに拘らず、また他の湯藥、丸藥を服しても妨げない。（圖經）【赤白泄痢】罌粟子を炒り、罌粟殼を炙き、等分を末にして煉蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを米飲で服す。實際に經驗を經たもの

（三）木村（康）曰ク、種子ノ組成（%）ハ粗脂肪四〇―五六、主トシテ「スチアリン」酸、「パルミチン」酸、油酸等ノ「グリセリド」ヨリ成ル、蛋白質一八・四―二一・六、粗繊維五・二―五・六、「ペントザン」三―三・六、「アミド」其他一―一・八、無窒素物九・五―一〇・六、水分三・九―四・五、灰分五・六―六・三六、尚阿片鹼基類ノ二三ハ極メテ僅ニ之ヲ含ムトイフ報告アリ。罌粟子ハ菓子製造ニ

だ。（百一選方）

殼

【修治】　時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、水で洗ひ潤して蒂、及び筋膜を去り、外薄皮を取つて陰乾し、細かに切つて米醋を拌ぜ、炒つて藥に入れる。また蜜で炒ることもあり、蜜で炙くこともある。

（六）【氣味】【酸く濇し、微寒にして毒なし】　時珍曰く、醋、烏梅、橘皮と配合するが良し。

【主治】【瀉痢を止め、脫肛を固くし、遺精、久欬を治し、肺を斂め、腸を澀し、心腹、筋骨の諸痛を止める】（時珍）

【發明】　杲曰く、收斂し、氣を固くし、腎に入るものだ。故に骨病を治するに就中好適である。

震亨曰く、今一般に、虛勞欬嗽に多く粟殼を用ゐて止劫し、また濕熱泄痢にこれを用ゐて止澀する。治病の功力の急速なものではあるが、人を殺すこと劍の如きものでもあるから、深く警戒を要するものだ。又曰く、嗽を治するに多く粟殼を用ゐることは必しも異議はないが、但し豫め病根を去ることが必要であつて、この物はその後を收める藥である。痢を治するにも同樣であつて、凡そ痢の場合には、豫め邪

用キラルルモノナルガ、是けし栽培者ニトツテ重要ナル補助收入トナルモノナリト聞ク。

（四）大觀ニ二ニ作ル。

（五）大觀ニ二ニ作ル。

（六）木村（康）曰ク、罌粟殼ハ阿片ヲ採集シ、種子ノ成熟シタル後刈リ取リ乾燥シ種子ヲ除キタルモノナリ、歐洲產ノモノハ概ネ未熟果ヲ採集セラルルモノニシテ切截ナク形狀モ品種ニヨリ一定セズ。（成分）ハ「メコン」酸酒石酸、枸櫞酸、「モルヒン」「ナルコチン」（痕跡）「パパベリン」及ビ蠟質等ヲ含ム。未熟ノ果殼（種子ハ除ク）ノ成分％ハ「モ

ルヒン」〇・〇五一〇・二〇、「ナルコチン」十「コデイン」〇・〇一一、三一〇・〇一一六、成熟殼(種子ハ除ク)ノ成分%ハ「モルヒン」〇・〇一八、「ナルコチン」「コデイン」〇・〇二八〇。
(應用)罌粟殼ハ腹痛咳嗽等ニ煎用ス。

を散じ、滯を行ることを條件とする。遽に粟殼、龍骨などの藥を投じ、そのために腸、胃を閉塞してよかるべきわけがあらうか。それでは邪氣が補を得ていよいよ甚しくなり、結局變症が發つてますます病を深くし長くして停止するところがない。

時珍曰く、酸は收澀を主とするものだ。故に初期の病には用ゐられない。泄瀉、下痢が既に久しきに亙れば、氣が散じて固からず、そのために腸が滑して肛が脫する。咳嗽の諸病が既に久しきに亙れば、氣が散じて收まらず、そのために肺が脹つて痛が劇しくなる。その場合には、いづれもこれを用ゐて澀し、固くし、收め、斂めるが宜きを得た方法である。按ずるに、楊氏の直指方には『粟殼で痢を治することに就ては、一般に甚しく危險視してこれを避ける傾向がある。しかし、長期の下痢で腹中に積痛がないものならば、當然止澀を要するのであつて、澀せぬわけには行かぬのである。この藥劑がなくて何を以て對治し得やうぞ。但し條件として輔佐の藥を要するだけだ』とあり、又、王碩の易簡方には『粟殼は痢を治するに神の如きものだ。ただ性が緊澀で、嘔逆せしめることが多い。故に一般に畏れて敢て服せぬのだが、醋を用ゐて制し、それに烏梅を加へるならば、使用上最も適法を得たも

のだ。或は四君子藥と共に用ゐるが、就中胃を閉ぢ、食を妨げる副作用がなくて奇功を獲るものだ』とある。

附方 新八。【熱痢便血】粟殼を醋で炙いて一兩、陳皮半兩を末にし、三錢づつを烏梅湯で服す。(普濟方)【久痢の止まぬもの】罌粟殼を醋で炙いて末にし、蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを水一盞、薑三片で八分に煎じて溫服する。○又ある方では、粟殼十兩を膜を去つて三分にし、一分は醋で炒り、一分は蜜で炒り、一分は生で用ゐ、いづれも末にして蜜で芡子大の丸にし、三十丸づつを米湯で服す。○集要では、百中散——粟殼を蜜で炙り、厚朴を薑制し、各四兩を細末にし、一錢づつを米飲で服す。生物、冷物を忌む。【小兒の下痢】神仙救苦散——小兒の赤白痢下で晝夜に百回ほどあつて止まらぬを治す。罌粟殼半兩を醋で炒つて末にし、再び銅器で炒り、檳榔半兩を赤く炒つて研末し、各取收めて等分づつを用ゐ、赤痢には蜜湯で服し、白痢には沙餹湯で服す。口味を忌む。(全幼心鑑)【水泄の止まぬもの】罌粟殼一箇を蒂、膜を去り、烏梅肉、大棗肉各十箇を水一盞で七分に煎じて溫服する。(經驗)【久嗽の止まぬもの】穀氣の元來壯なる患者に用ゐて效がある。粟殼を筋

を去つて蜜で炙いて末にし、五分づつを蜜湯で服す。（危氏方）【久欬虚嗽】賈同知の百勞散——多年の欬嗽で白汗するを治す。罌粟殼二兩半を蒂、膜を去り、醋で炒つて一兩を取り、烏梅半兩を焙じて末にし、二錢づつを就寢時に白湯で服す。（宣明方）

嫩苗　【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【蔬にして食へば、熱を除き、燥を潤ほし、胃を開き、腸を厚くする】（時珍）

（二）阿芙蓉（綱目）

和名　あへん
學名　Opium.

【釋名】**阿片**　時珍曰く、俗に鴉片と書く。名稱の意味は詳でない。或は、阿とは地方音の我といふ意味で、その花が我が國の芙蓉に似てゐるといふところからこの名稱が生じたのであるといふ。

【集解】時珍曰く、阿芙蓉は前代には聞くことの罕なものであつたが、近頃の方には用ゐるものがあつて、その話に據ると『これは罌粟花の津液で、罌粟が青苞を結んだとき、午後に、太い針で裏面の硬皮を損せぬやうに外面の青皮だけを三五个處刺して置き、翌早朝、そこに出てゐる津を竹刀で刮り取つて瓷器に取收め、陰

（一）牧野云フ、阿片ハけしノ果實ノ未熟ナルモノヲ傷ケテ採リシ白乳ヲ乾カシタモノデアッテ、數種ノ「アルカロイド」ヲ含ンデヰル、其中デ「モルヒネ」ハ能ク人ノ知ッテヰルモノデアル。
木村（康）曰ク、阿芙蓉即阿片ハ未熟ナルけしノ果實ニ淺ク切傷ヲ附シ分泌セル乳液ヲ採集スルモノニシテ、調製法國ニヨリ異ナル、本邦ニ於テハ六〇度ヲ超エザル温度ニテ乾燥シ粉末トス。日本藥局方

品ハ「モルヒネ」含量ヲ一〇―一一%ト規定ス。

(二)天方國ハ草部隰草類番紅花ノ註ヲ見ヨ。

(三)木村(康)曰ク、(成分)けしヨリ採リタル阿片ニハ總「アルカロイド」一〇―二五%ヲ含有シ、是ノ「アルカロイド」ハメコン酸鹽トシテ含有セラル。本邦産阿片ノ主要アルカロイド含量ヲ示セバ「モルヒネ」五―二四%、「ナルコチン」四―七%、「コデイン」〇・四―一%、「テバイン」〇・四―〇・八%、「パパベリン」〇・四―〇・七%、「ナルツエイン」〇・二―〇・五%、其他「グノスコピン」「ヒドロコタルニン」「コダミン」「ク

乾して用ゐるものだ。それで現に市中で賣るものには、内に苞の片が雜(まじ)つてゐるのだ』といふ。王氏の醫林集要には『これは(二)天方國で種ゑる紅罌粟花であつて、頭を水に淹(つ)からぬやうにし、七八月花が散つて後、青皮を刺して取るものだ』とあるが、按ずるに、この花は五月に實が枯れるので、七八月後になほ青皮があらう筈はなささうに思はれるが、或はその土地に因つて異ふのかも知れぬ。

(三)【氣味】【酸く澁し、溫にして微毒あり】【主治】【瀉痢し、脫肛(だつこう)して止まぬもの。能く男子の精氣を澁する】(時珍)

【發明】時珍曰く、俗間で房中術に用ゐる。京師で傳(う)つてゐる一粒金丹は、百病を通治するといふが、いづれも方伎家の術である。

【附方】新四。【久痢】阿芙蓉を小豆ほど溫水に溶かし、一日一回、空心に服す。葱、蒜(さん)、漿水を忌む。渴するときは蜜水を飲めば解す。(集要)【赤白痢下】鴉片、木香、黃連、白朮(びやくじゆつ)各一分を研末し、飯で小豆大の丸にし、壯年の者は一分、老人、幼兒は半分を空心に米飲で服す。酸きもの、生のもの、冷えたるもの、油膩(ゆじ)のもの、茶、酒、麪を忌む。止まらぬものなし。口が渴するときは少し米湯を飲む。

リプトピン」「ラントピン」「ラウダニン」「ラウダニヂン」「ラウダノシン」「メコニヂン」「ネオピン」「ブキシナルコチン」「オキシヂモルフイン」「プソイトパパベリン」「パパベラミン」「プロトパパベリン」「プロトヒン」「ロエアヂン」「トリトピン」「キサンタリン」等ナリ、其他樹脂ゴム質ヲ多量ニ含有ス。

（藥用）鎭靜スル爲ニ盲腸炎、腹膜炎等ニ內用ス、局方製劑トシテハ阿片丁幾ドーノル散芳香阿片酒ヲ製ス、又「モルヒネ」「コデイン」其他重要ナルアルカロイド藥劑ノ製造原料ナリ。

（四）斷腸トハ中毒シテ死スルコトヲ云フ。

〇ある方では、罌粟花のまだ開かぬとき、外部を包む兩片の青葉――花が開けば落ちる――を取收めて末にし、一錢づつを米飮で服す。神效がある。赤痢には紅花のものを用ゐ、白痢には白花のものを用ゐる。【一粒金丹】眞阿芙蓉一分を粳米飯と擣いて三丸にし、一丸づつを服す。なほ效なきときは再び一丸を服す。多く服してはならぬ。醋を忌む。犯せば(四)腸が斷つものだ。風癱には熱酒で服す。口目の喎邪には羌活湯で服す。百節痛には獨活湯で服す。正頭風には羌活湯で服す。偏頭風には川芎湯で服す。眩運には防風湯で服す。陰毒には豆淋酒で服す。瘧疾には桃柳枝湯で服す。痰喘には葶藶湯で服す。久嗽には乾薑阿膠湯で服す。勞嗽には欵冬花湯で服す。吐泄には藿香湯で服す。赤痢には黄連湯で服す。白痢には薑湯で服す。禁口痢には白朮湯で服す。諸氣痛には木香酒で服す。熱痛には巵子湯で服す。臍下痛には燈心湯で服す。小腸氣には川楝茴香湯で服す。血氣痛には乳香湯で服す。脇痛には熱酒で服す。噎食には生薑丁香湯で服す。婦人の血崩には五靈脂湯で服す。小兒の慢脾風には砂仁湯で服す。(龔雲林醫鑑)

本草綱目穀部第二十三卷　終

本草綱目穀部

第二十四卷

本草綱目穀部目錄第二十四卷

穀の三　菽豆類十四種

大豆 本經　大豆黄卷 本經　黄大豆 食鑑　赤小豆 本經

腐婢 本經　綠豆 開寶　白豆 嘉祐　穭豆 拾遺

豌豆 拾遺　蠶豆 食物　豇豆 綱目　藊豆 別錄

刀豆 綱目　黎豆 拾遺 卽ち貍豆。

右附方　舊五十一、新一百。

穀の三　菽豆類十四種

(一)大豆（本經中品）

和名　だいづ
學名　(Glycine Max, Merr.
科名　まめ科（荳科）

【校正】禹錫曰く、原は大豆黄卷の條下に附してあつたが、ここに一條を分出した。

【釋名】**尗** 俗に菽と書く。時珍曰く、豆といひ、尗といふはいづれも莢穀の總稱であつて、篆文の尗の字は莢が莖に生り附いて下垂した狀態の形容、豆の字は子が莢の中に在る狀態の形容だ。廣雅には『大豆は菽なり、小豆は荅なり』とある。角を**莢**といひ、葉を**藿**といひ、莖を**萁**といふ。

〔大　豆〕

諸大豆みな同じ、ただ豆の色にて分つ。

（一）牧野云フ、元來大豆ハ本種ノ總名デ種中ニ種種ノ變リ品ガアル、藥用ニハくろまめヲ用ウルノデアルガ此レモ種中ノ一品デアル、本種ノ學名ハ又 (Glycine Soja, Sieb. et Zuc.) ト稱スルガ此名稱ノSojaハ醬油ニ基イテノ名デアル、俗ニ本種ヲSoybeanト呼バルル。

【集解】別錄に曰く、大豆は太山の平澤に生ずる。九月に採收する。

頌曰く、今は處處で種ゑる。黑白の二種あつて、藥に入れるには黑きものの緊つて小さきものを用ゐ、これを雄とする。使用上就中佳し。

宗奭曰く、大豆には綠、褐、黑の三種あり、大、小の兩類があつて、大なるものは江浙、湖南、湖北に產し、小なるものはその他の地に生ずる。藥に入れての功力は更に佳し　又、碓いて腐にして食へる．

時珍曰く、大豆には黑、白、黃、褐、靑、斑の數色あつて、黑いものは烏豆と名けて藥に入れ、また食料にし、豉を作るに用ゐる。黃なるものは豆腐に作り、油を搾り、醬を造るに用ゐる。その他の種類はただ豆腐にし、また炒つて食ふ位のものである。いづれも夏至前後に種を下し、苗は高さ三四尺、葉は團くして尖があり、秋、小さい白花を開き、叢になつて長さ一寸餘の莢を結び、霜が降ると枯れる。按ずるに、呂氏春秋に『時を得たるの豆は莖長く足短く、その莢二七が族をなし、枝多くして數節あり、大菽は圓、小菽は團である。時に先つものは必ず蔓長く、葉が浮き、節疎らに、莢小さくして實らない。時に後るるものは必ず莖短く、節疎らに、

(二)牧野云フ、黒大豆ハくろまめ一名くろづデ其豆ノ皮ノ黒イ品デアル、學名ハGlycine Max, Merr. forma Kuromame, Makino (G. Soja forma Kuromame, Makino.) デアル。

(三)木村(康)曰ク、(成分)だいづノ葉ハ燐酸「カルチウム」「ウレアーゼ」脂肪油(三—六%)、「アミラーゼ」「チモーゲン」葉ハソノ灰分中撥性石灰(四五%)、酸化「マグネシウム」(一五・四%)等ヲ含ム。

本が虚して實らない』とあり、又、氾勝之の種植書には『夏至に豆を種ゑる。深く耕す必要はない。豆の花は日を見ることを惜むもので、日を見れば黄爛して根が焦れる。その歳の收穫の豐凶を豫知し得るものだ。嚢に豆子を盛り、平均量にして陰地に埋め、冬至から十五日後に發掘して量つて見て、最も多いものを種ゑる。蓋し大豆は保藏には收穫が易く、凶年に對する備となし得るもので、小豆は保藏でなければ收穫が困難だ』とある。

(二)**黒大豆** (三)氣味 【甘し、平にして毒なし 久しく服すれば人をして身を重からしめる】岐伯曰く、生では温、熟すれば寒である。

藏器曰く、大豆は生では平である。炒つて食へば極めて熱である。煮て食へば甚だ寒である。豉にすれば極めて冷である。醬に造つたもの、及び生黄卷では平である。牛が食つては温であり、馬が食つては冷である。一體の中に用ゐやうに依て數種の變化がある。

之才曰く、五參、龍膽を惡む。前胡、烏喙、杏仁、牡蠣、諸膽汁と配合するが良し。

詵曰く、大豆黄屑は猪肉を忌む。小兒が炒豆と猪肉とを食合せれば、必ず壅氣して十中八九は死亡する。十歳以上はその畏がない。

時珍曰く、萆麻子を服したものは炒豆を忌む。これを犯せば脹滿して死を致す。厚朴を服したものもこれを忌む。氣を動ずるものだ。

【主治】【生で研つて癰腫に塗る。煮汁を飲めば鬼毒を殺し、痛を止める】（本經）【水脹を逐ひ、胃中の熱痺、傷中淋露を除き、瘀血を下し、五臟の結積、內寒を散じ、烏頭の毒を殺す。炒つて屑にすれば、胃中の熱に主效があり、痺を除き、腫を去り、腹脹を止め、穀物を消化する】（別錄）【煮て食へば溫毒、水腫を治す】（唐本）【中を調へ、氣を下し、關脈を通じ、金石藥の毒、牛、馬の溫毒を制す】（日華）【煮汁は、礜石、砒石、甘遂、天雄、附子、射罔、巴豆、芫靑、斑蝥、あらゆる藥の毒、及び蠱毒を解す。藥に入れば下痢臍痛を治す。衝酒すれば風痙、及び陰毒腹痛を治す。牛膽で貯へたものは消渴を止める】（時珍）【黑く炒り熱して酒中に投じて飲めば、風痺の癱緩、口噤、產後の（五）頭風を治す。食後に生で半兩を呑めば、心胸の煩熱、熱風、恍惚を去り、目を明にし、心を鎮め、溫補する。久しく服すれば、顏色を好

種子（大豆）ノ組成（〇二）ハ含窒素物三五、脂肪油一七、無窒素物二六、粗纖維五―六、灰分四・五、水分一一・三四。黄大豆ノ乾燥物中ニハ脂肪一九・八―二三・三、總「プロテイン」三七―四二、純「プロテイン」三一・九―三七・七、可溶性「プロテオーゼ」三―六、無窒素物二四・八―三一・五、主トシテ蔗糖ヨリナル。糖一二、粗纖維四・八―七・七、灰分四・二八―五・七九、又消化酵素ハ「カゼイン」、「ヒヨレステリン」、「レチチン」、「アスパラギン」、「ロイチン」、「ヒヨリン」、「ヒポキサンチン」鹽基、「フエニールアミゼプロピオン」酸等ヲ含ム。

大豆油ハ「パルミチン」、「オレイン」、「リノレイン」遊離ノ脂肪酸、不鹼化物、「レチチン」等ヨリ成ル。

大豆ノ萠(モヤシ)ノ組成(％)ハ凡水分九三・四、含窒素物二・三五(内蛋白質〇・八六)、含水炭素三・八八、灰分〇・三八。

(應用)大豆ハ食料トシテ重要ナルモノニシテ、豆腐、腐皮(ユバ)、味噌、醤油、納豆、雪花菜(キラズ)等ヲ製スル原料トナリ。又大豆油ヲ搾リタル粕即チ豆粕ハ肥料トシテ重要ナリ、近時獨逸ニテハ豆粕ヲ粉末トシテ小麥粉ニ混ジテ製麭スルアリト云フ。

(四)大觀ニ甚衰ヲ之及ノ二字ニ作ル。

(五)大觀ニ頭ヲ諸ニ

くし、髮の白きを黑く變じ、老衰せぬ。煮て食へば、性寒であつて、熱氣腫を下し、丹石の煩熱を壓し、腫を消す。(藏器)【中風脚弱、産後の諸疾に主效がある。甘草(かんざう)と共に煮た湯を飮めば、一切の熱毒氣を去り、風毒脚氣を治す。煮て食へば、心痛、筋攣、膝痛、脹滿を治す。桑柴灰(さうさいくわい)(六)と共に煮て食へば、水鼓腹脹を下す。飯に和して搗いて一切の毒腫に塗る。男子、婦人の陰腫を療ずる。綿で裹んで納れる】(孟詵)【腎病を治し、水を利し、氣を下す。諸風熱を制し、血を活し、諸毒を解す】(時珍)

發明 頌曰く、仙方では、修治して末にして服し、辟穀(ひこく)を行つて饑を凌ぎ得るものだといふ。しかし多く食すれば人體を重からしめるが、久しきに亙れば故(もと)のやうになる。

(七)甄權曰く、每食後によく磨り拭つて三十粒を呑めば、人をして長生せしめる。服し初めた當時は身體が重いやうに感ずるが、一年以後には身體の輕さを覺える。又、陽道を益する。

頴曰く、陶華は『能く腎を補するものだ』といひ、黑豆(こくづ)に鹽を入れて煮て常に食つてゐた。蓋し豆は腎の穀であつて、その形が類する。而もまた黑色は腎に通ずる

作ル。
(六)大觀ニ灰下ニ汁字アリ。
(七)大觀ニ甄權ヲ誂ニ作ル。
(八)大觀ニ左慈ヲ左元亮ニ作ル。

ものだ。これを導くに鹽を以てすれば、その結果は妙なるわけである。

時珍曰く、按ずるに、養老書に『李守愚は、毎早朝黑豆十四箇を水で呑み、それを五臟穀と謂つてゐた。年老いても衰へなかつた』とある。そもそも豆には五色あつてそれぞれ五臟を治すものだが、黑豆だけは水に屬し、性寒にして腎に對する穀物であり、腎に入るの功果が多い。故に能く水を治し、脹を消し、氣を下し、風熱を制するのであつて、血を活し、毒を解するは、所謂同氣相求めるのである。又按ずるに、古方に、大豆は百藥の毒を解すと稱してあるが、予の毎に實驗したところに據ると、全然さうでない。ところがまた甘草を加へると不思議なほど著しい效驗を示す。かかる事實は心得て置くべきことだ。

附方　舊三十二、新三十四。【大豆の服食法】人をして肌膚を長ぜしめ、顏色を益し、骨髓を塡て、氣力を加へ、虛を補し、食を能くする。二劑に過ぎずして效がある。大豆五升を通常醬を作る方法の如くにして黃を取つて末に搗き、猪肪を煉つた膏で和して梧子大の丸にし、五十丸乃至百丸づつを溫酒で服す。神驗の祕方である。肥つた人は服してはならぬ。(延年祕錄)【饑饉の場合の食料として】博物志に『(八)左慈

の荒年の法、大豆の(九)粒の細に平均したものを用ゐ、生でよく挼んで光澤を出し、摩擦熱を豆の內部まで徹らせ、(一〇)豫め一日間絕食してから冷水で頓服する。服し訖つてからは一切の魚肉、菓菜を口に入れてはならぬ。渴けば冷水を飲む。當初には少し弱るけれども、十數日後には體力が壯健になつて食思が起らない』とある。〇黃山谷の救荒法は、黑豆、貫衆各一升を煮熟して貫衆を去つて曬乾し、每日空心に三十五粒を喫ふ。あらゆる木の枝葉を食つても、みな味があつて十分に飽食し得るやうになる。〇王氏の農書には『辟穀の方が石刻に載せて遺つてゐる。水旱、蟲荒は孰れの朝代にもあることで、甚しきは金を(一一)懷いて鵠の如く立ち、子を易いて骸で炊くといふこともある。民の父母たる者の心得置かねばならぬ法である。昔、晉の惠帝の永寧二年の黃門侍郞劉景先の奏表に

臣(一二)太白山ノ隱氏ニ遇フテ、濟饑辟穀ノ仙方ヲ傳フ。臣ガ家大小七十餘口、更ニ別物ヲ食セズ。若シ斯ノ如クナラザレバ、臣ガ一家甘ジテ刑戮ヲ受ケン。其ノ方ハ、(一三)大豆五斗ヲ用キ、淘淨シテ蒸スコト三遍ニシテ皮ヲ去リ、大麻子三斗ヲ用キ、浸スコト一宿、亦タ蒸スコト三遍シテ口ヲ開カシメテ仁ヲ取リ、各搗イテ

(九)大觀ニ粒ヲ麁ニ作ル。
(一〇)大觀ニ先日不食ヲ先不食一日ノ四字ニ作ル。
(一一)痩衰、骨立ノ狀ヲ形容セルナリ。
(一二)太白山ハ今ノ陝西省郿縣ノ東南ニ在リ。
(一三)食物本草ニ大上ニ黑字アリ。

末トナシ、和シ搗イテ團ト爲スコト拳大ノ如クシ、甑内ニ入レテ蒸スコト戌ヨリ子ノ時ニ至リテ止メ、寅ノ時ニ甑ヨリ出シ、午ノ時ニ晒シ乾シテ末ト爲シ、乾シテ之ヲ服シ、飽ヲ以テ度ト爲ス。一切ノ物ヲ食スルコトヲ得ザレ。第(一四)一頓ニシテ七日饑ヱザルコトヲ得、第二頓ニシテ四十九日饑ヱズ、第三頓ニシテ三百日饑ヱザルコトヲ得、第四頓ニシテ二千四百日饑ヱザルコトヲ得。更ニ必ズシモ服セズシテ永ク饑ヱズ。老少ヲ問ハズ、但ダ法ニ依ツテ服食スレバ、人ヲシテ強壯ナラシメ、容貌紅白ニシテ永ク憔悴セザラシム。口渇スルトキハ、即チ大麻子ヲ研ツテ湯ニシテ之ヲ飲ム。轉タ更ニ臟腑ヲ滋潤ス。若シ重テ物ヲ喫セント要セバ、葵子三合ヲ用キ、研末シテ湯ニ煎ジテ冷服ス。藥ノ金色ノ如クナルヲ取リ下シ、諸物ヲ任喫シテ並ニ損スル所ナシ。

とある(一五)隨州の前知事朱頌が人民にこの法を用ゐしめて效驗があつたので、その顛末由來を序述して、漢陽大別山の太平興國寺境内に石に刻して建立した』とある。○又ある方では、黑豆五斗を淘淨して三回蒸して晒乾し、皮を去つて末にし、秋麻子三升を浸して皮を去り、晒して研り、糯米三斗で作つた粥と搗き和して拳ほ

(一四)一頓ハ俗ニ一カタケ。

(一五)隨州ハ草部山草類丹參ノ註ヲ見ヨ。

どの大いさの剤にし、甑中に入れて一晝夜蒸し、取出して晒して末にし、紅小棗五斗を煮て皮、核を去つたものと和して拳ほどの大いさの剤にし、再び一夜蒸して飽くを度として服す。もし渇するときは麻子水を飲めば臟腑を滋潤する。それには脂麻でもよし。但し一切の物を食つてはならぬ。〔炒豆紫湯〕頌曰く、古方に紫湯といふがある。血を破り、風を去り、氣を除き、熱を防ぎ、就中産後二日間に服するに適するものだ。烏豆五升、清酒一斗(一六)を用ゐ、烟の絶えるまで(一七)炒つて酒中に投じ、酒が紫赤色になるを待つて豆を去り、性を量つて服す。晝夜に三盞服するがよく、神驗がある。口噤には雞屎白二升と炒り和して投ずる。〔豆淋酒の法〕宗奭曰く、産後のあらゆる病。或は血熱で餘血、水氣あるを覺え、或は中風で困篤になり、或は背強し、口噤し、或はただ煩熱し、瘈瘲し、口渇し、或は頭部、身體悉く腫れ、或は身體痒く、嘔逆し、直視し、或は手足頑痺し、頭旋し、眼眩する。これはみな虛熱中風である。大豆(一八)三升を微し烟が出るまでに熬つて瓶中に入れ、酒(一九)五升を沃ぎ、一日以上を經てその酒一升を服し、温かに被て身體が潤ほふほどに少し汗を出せば癒える。口噤するものには獨活半斤を細かに搥き破つて加へ、同樣に酒を

(一六)大觀ニ斗下ニ半字アリ。
(一七)大觀ニ炒豆トアリ。
(一八)大觀ニ伍ニ作ル。
(一九)大觀ニ五升ヲ一斗ニ作ル。

沃ぐ。産後には常服して風氣を防ぐがよし。又、結血を消す。【中風口喎】卽ち上記の方を日に一升服す。(千金)【頭風の頭痛】卽ち上記の方を七日間密封して溫服する。(千金)【破傷中風】口噤するには、千金方では、大豆一升を熬つて腥氣を去り、熬り過ぎぬ程度にして末に杵き、蒸して蒸氣を平均に廻らせ、甑から取下して酒一升を淋ぎ、一升を溫服して汗を取り、膏を瘡上に傅ければ癒える。○經驗方では、黑豆四十箇、硃砂二十文を共に研末し、酒半盞で調へて服す。【頭項の强硬】頸の廻らぬには、大豆一升を色が變るまで蒸し、囊に裹んで枕にする。(千金)【暴かの風疾】四肢攣縮して步行不能なるには、大豆三升を淘淨し濕して蒸し、醋二升と甁中に傾け入れ、それを地上に鋪いてその豆の上に席を設け、それに患者を臥さしめて寢具を五六層に重ね、豆の冷えるに隨つて漸次に寢具を減じ、そこで他の一人がその寢具の中で攣急する處を引挽し、更に豆を蒸して同樣に再び試み、同時に荊瀝湯を飮む。三晝夜これを試みて休める。(崔氏纂要)【風の臟中に入りたるもの】急性、慢性の腫風が臟中に入りたるを治す。大豆一斗、水五斗を一斗二升に煮取つて滓を去り、美き酒一斗半を入れて九升に煎じ取り、早朝に服して汗を取る。神驗がある。

(二〇)大觀ニ腸チ腰ニ作ル。

(千金翼)【風毒攻心】煩躁し、恍惚たるには、大豆半升を淘淨し、水二升で七合に煮取る、食後に服す。(心鏡)【卒風で言語不能のもの】大豆の煮汁を煎稠し、飴のやうにして含み、幷に汁を飲む。(肘後方)【喉痺の言語不能】上記の法に同じ。(千金)【突然の失音】詵曰く、生大豆一升、青竹算子の長さ四寸、濶さ一分のもの四十九箇を水で煮熟し、晝夜に二服すれば瘥える。【熱毒の眼を攻むるもの】赤痛し、瞼浮するには、黑豆一升を十袋に分け、沸湯中で蒸して更互に熨す。三回にして癒える。(普濟方)【突然の中惡】大豆十四箇、雞子黃一箇、酒半升を和勻して頓服する。(千金)【陰毒傷寒】危篤なるには、黑豆を炒り乾して酒に投じて熱飮する。或はこれを灌ぎ、吐くときはまた飮ませ、汗の出るを度とする。(居家必用)【腸の打たれるやうな痛み】大豆半升を熬焦して酒一升に入れ、煮沸して飮んで醉ふ。(肘後)【(二〇)腸、脇の卒痛】大豆を炒つて二升、酒三升を二升に煮て頓服する。(肘後)【卒かの腰痛】大豆六升に水を拌ぜて濕し、炒熱して布に裹んで熨し、冷えれば易へる。これは張文仲の處方である。(延年祕錄)【脚氣衝心】煩悶して人事不省となるには、大豆一升、水三升の濃煮汁を服し、なほ定らぬときは再服する。(廣利方)【身體、顏面の浮腫】千

（二二）大觀ニ三ナ二ニ作ル。

金では、烏豆一升、水五升を三升に煮取つた汁に酒五升を入れ、更に三升に煮取り、三回に分服する。瘥えぬときは再び合劑して用ゐる。○王璆の百一選方では、烏豆を皮が乾くまで煮て末にし、二錢づつを米飮で服す。宋の建炎の初年に吳內翰の女孫が突然腫凸を發したとき、吳撿外臺がこの方を得て服ませると、立ろに奏效した。【新、久の水腫】大豆一斗、淸水一斗を八升に煮取り、豆を去つて薄酒八升を入れ、再び八升に煎じ取つて服し、再服、三服する。水は小便に從つて出るものである。（范汪方）【腹中の痞硬】夏、秋の交、夜氣に露されて久しく坐り、ために腹中が痞して多くの石が腹に在るやうに覺ゆるには、大豆半升、生薑八分、水（二二）三升を一升ほどに煎じて頓服すれば瘥える。（經驗方）【霍亂脹痛】大豆を生で水に研り、方寸匕を服す。（普濟方）【水痢の止まぬもの】大豆一升を炒つて白朮半兩と末にし、三錢づつを米飮で服す。（指南方）【赤痢臍痛】黑豆、茱萸子二物を摩りみがいて嚥むが良し。（經驗）【赤白下痢】方は猪膽の條下に揭げてある。【男子の便血】黑豆一升を炒り焦し、研末して熱酒を淋ぎ、豆を去つて酒を飮む。神效がある。（活人心統）【一切の下血】雄黑豆の緊つて小さいものを皂角湯に微し浸し、炒熟して皮を去つて末にし、煉猪

（二三）大觀ニ盡ヲ之ニ作ル、卽百日間ニ之ヲ吞ムトヨムナリ。

脂で和して梧子大の丸にし、三十丸づつを陳米飮で服す。（華佗中藏經）【小兒の沙淋】黑豆一百二十箇、生甘草一寸を新水で煮熟し、滑石末を入れて熱に乘じて飮むが良し。（全幼心鑑）【腎虛消渴】難治のものである。黑大豆を炒り、天花粉と等分を末にし、糊で梧子大の丸にし、一日二回、七十丸づつを黑豆湯で服す。これを救活丸と名ける。（普濟妙方）【消渴飮水】烏豆を牛膽中に入れて陰乾し、百日間に吞み（二三）盡せば瘥える（肘後方）【晝夜不眠のもの】新しい布を火で炙つて目を熨し、幷に大豆を蒸して交互に囊に入れて枕にし、冷えれば易へる。終夜不斷にこれに枕すれば瘥える。（肘後方）【疫癘の發腫】大黑豆二合を炒熟し、炙甘草一錢、水一盞で汁に煎じて時時に飮む。夷堅志に『靖康二年の春、京師に疫が流行したとき、ある異人がこの方を壁間に書いて置いたので、それを用ゐて立ろに效驗があつた』とある。【乳石發動の熱】烏豆二升、水九升を銅器で五升に煮取り、その汁を一升に熬稠して飮む。（外臺祕要）【礬、砒の毒を解す】大豆の煮汁を飮むが良し。（肘後）【酒食の諸毒】大豆一升の煮汁を服して吐すれば瘥える。（廣記）【諸魚の毒を解す】大豆の煮汁を飮む。（衞生方）【巴豆の毒を解す】下痢して止まぬには、大豆の煮汁一升を飮む。（肘後方）【惡刺

瘡痛】大豆の煮汁に漬けて瘥效を取る。(千金)【湯火灼瘡】大豆の煮汁を、(二三)飲む。癒え易くして斑がなくなる。(子母祕錄)【頭を打つて生じた青腫】豆黃末を傅ける。(千金方)【折傷、墮墜】瘀血が腹に在り、氣短なるには、大豆五升、水一斗の煮汁二升を頓服する。劇しきものも三回に過ぎずしてよし。(千金方)【豌瘡で煩躁するもの】大豆の煮汁を飲むが佳し。(子母祕錄)【痘瘡濕爛】黑大豆を研末して傅ける。【小兒の頭瘡】黑豆を炒つて性を存して研り、水で調へて傅ける。(普濟方)【身體、面部の疣目】七月七日に大豆で疣上を拭ひ、三回拭つてから、その豆を本人に南面の屋根の東側の第二の溜の中へ種ゑさせ、その豆に葉が生えたとき、熱湯をそれに沃いで枯らす。それで癒える(外臺祕要)【髮を黑く染める】醋で黑豆を煮て豆を去り、その汁を煎稠して(二四)染める。(千金)【牙齒の生えぬもの】多年のもの、大人、小兒に拘らず、黑豆三十粒を牛糞の中で烟が盡きるまで燒き、研つて麝香少量を入れ、豫め針で挑破して血を出してから少量を揩る。風に當ててはならぬ。酸、鹹のものを忌む。(經驗方)【牙齒の疼痛】黑豆を酒で煮て、その酒で頻りに漱ぐが良し。(周密怡然齋抄)【月經の斷えぬもの】前に記した紫湯を服するが佳し。【妊娠腰痛】大豆一升、酒三升

(二三)大觀ニ飲之ヲ塗上ニ作ル。

(二四)大觀ニ染之ヲ傅髮ニ作ル。

（二五）大觀ニ類ニ作ル。

（二六）牯ハ牡ノ誤。

を七合に煮て空心に飲む。（心鏡）【胎兒死亡】月數足らず、母が悶絶せんとするには、大豆三升を醋で煮てその濃汁を頓服する。立ろに出る。（産乳）【胞衣不下】大豆半升、醇酒三升を一升半に煮取り、三回に分服する。（産書）【時氣の辟禳】新しい布に大豆一斗を盛り、井中に一夜納れて置いて取出し、七粒づつを服するが佳し。（二五）（類要）【菜中の蛇蠱】蛇毒が中に入つた菜、果を食ふと、蛇蠱といふ病に罹る。大豆を末にして酒に漬け、汁を絞つて半升を服す。【身體上を蟲が行くやうに感ずるもの】大豆を水に漬けて漿を絞り、毎早朝洗ふ。或は少量の麪を加へて髮を沐するも良し。（千金方）【小兒の丹毒】濃く煮た大豆汁を塗るが甚だ良し。（千金）【風疽瘡疥】凡そ脚腨、及び曲脉の中が痒く、搔けば黄汁の出るものである。三尺長さの青竹筒の中へ大豆一升を入れ、馬屎と糠の火で燒熏し、滴る汁を器に承け取つて搽る。豫め淸んだ泔に鹽を和して洗ふ。三回に過ぎずして極めて效がある。（千金）【肝虛の目暗】風に向ふと淚の出るには、臘月の（二六）牯牛膽に黑豆を盛つて風の吹く場所に懸け、取り出して毎夜二十一粒づつを呑む。久しく繼續すれば自ら明になる。（龍木論）【小兒の胎熱】黑豆二錢、甘草一錢に燈心七寸、淡竹葉一片を入れて水で煎じる。（全幼心鑑）

【指の天(二七)蛇頭瘡】痛み、甚しく臭きには、黒豆を生で研末し、繭の中に入れてそれに指を差し込む（濟急方）

大豆皮　主治　【生で用ゐて痘瘡目翳を療ず、嚼み爛して小兒の尿灰瘡に傅ける】（時珍）

豆葉　主治　【搗いて蛇咬に傅け、頻りに易へて瘥を取る】（時珍）　記載は廣利方にある。

發明　時珍曰く、按ずるに、抱朴子内篇に『相國張文蔚の別莊の屋敷に(二八)鼠狼の穴があつて、四匹の子を養つてゐた。ある時その四匹の子が蛇に呑まれたので、親の雌雄が劇しき驚きと悲みとの中に、咄嗟に穴の外から土ぼこりを掻き集めて(二九)入口を塞ぎ、蛇が出て來るを待ち、頭が出なくなつてのた打つところへ飛びかかつて腰を咬斷り、腹を食ひ破つて遂に呑まれた四匹の子を取り出した。見るとまだ呼吸があつたので、それを穴の外に列べて置いて豆の葉を嚼んで傅けてやつてゐたが、それで四匹共復活した』とある。後世一般に豆の葉で蛇咬を治するは、蓋しここから出たものである。

(二七)天蛇頭瘡ハ手指上或ハ足上ニ生ジ、瘡傍ノ一塊ニ口ヲ開キ腫痛スルモノ。

(二八)鼠狼ハ鼬鼠、即イタチナリ。

(二九)大觀ニ塞穴ノ二字ヲ恰容蛇頭ノ四字ニ作ル。

（一）本經ニ下品トアリ。

【附方】新二。【渴を止める急方】大豆の嫩（やはらか）い苗三五十本に酥を塗つて黃色に炙き末にして二錢づつを人參湯で服す。（聖濟總錄）【小便血淋】大豆葉一把、水四升を二升に煮て頓服する。（聖惠方）

花

【主治】【目盲、翳膜に主效がある】（時珍）

大豆黃卷（本經（一）中品）

和名 くろまめのもやし

洋名 Soybean Sprouts.

【釋名】**豆糵** 弘景曰く、黑大豆を糵（もやし）にし、五六寸長さに生えたとき乾したものを黃卷と名ける。用ゐるには熬る。服食に須用のものとしてある。

時珍曰く、ある法では、壬癸の日に井華水で大豆を浸し、芽が生えるを候（ま）つて皮を取つて陰乾して用ゐる。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】 普曰く、前胡、杏子、牡蠣（ぼれい）、烏喙、天雄、鼠屎と配合し、いづれも蜜で和するがよし。海藻、龍膽を惡む。

【主治】【濕痺、筋攣、膝痛】（本經）【五臟の不足、胃氣結積。氣を益し、痛を止

め、黒皯を去り、肌膚、皮毛を潤ほす】(別錄)【婦人の惡血】(孟詵)　頌曰く、古方の産蓐婦人の藥の中に多く用ゐてある。【腎に宜し】(思邈)【胃中の積熱を除き、水病の脹滿を消す】(時珍)

附方　新四。【大豆蘗散】周痺を治す。周痺とは、邪が血脈中に在る水痺であつて、痛まない。上下身體に周ねきものだから名けたのである。この藥は五臟の留滯、胃中の結聚を治し、氣を益し、毒を出し、皮毛を潤ほし、腎氣を補す。大豆蘗一斤を香しく炒つて末にし、一日三回、半錢づつを溫酒で調へて服す。(宣明方)【頭風濕痺】筋攣、膝痛、胃中積熱、大便結澀。黄卷散——大豆黄卷を炒つて一升、酥半兩を末にし、一日二回、食前に一匙を溫水で服す。(普濟方)【水病腫滿】腓腸部が急し、大小便が澀るには、大豆黄卷を醋で炒り、大黄を炒つて等分を細末にし、早朝に葱橘皮湯で二錢を服し、利するを度とする。(聖濟總錄)【小兒の撮口】初生の豆芽を研り爛して汁を絞り、乳に和して少量を灌ぐが良し。(普濟方)

（二）牧野云フ、此レハ白豆品デ最モ普通ノモノデアル、通常之レヲだいづト稱スル、彼ノ食用ニスルえだまめ（枝豆）モ此品デアル。

（二）黃大豆（食鑑）

和名　しろまめ
學名　Glycine Max, Merr.
科名　まめ科（荳科）

【集解】 時珍曰く、大豆には黑、青、黃、白、斑の數色あつて、黑いものだけを藥に入れ、黃、白豆は炒つて食ひ、豆腐にし、醬を釀造し、油を笮る。日用品として盛に用ゐられるものだから、その性、味に就いての智識が必要だ。

周憲王曰く、黃豆は、苗は高さ一二尺、葉は黑大豆の葉に似て大きく、黑豆の角ほどのやや肥大なる角を結ぶ。その莢、葉の嫩いうちは食料となり、甘美なものだ。

【氣味】 【甘し、溫にして毒なし】時珍曰く、生では溫、炒れば熱であつて、微毒があり、多く食へば氣を壅し、痰を生じ、嗽を動じ、身體を重からしめ、面黃、瘡疥を發せしめる。

【主治】 【中を寬にし、氣を下し、大腸を利し、水脹、腫毒を消す】（寧原）【研末し、熟水で和して痘後の癰に塗る】（時珍）

【附方】 新一。【痘後に生じた瘡】黃豆を黑く燒いて研末し、香油で調へて塗

る。

豆油 [氣味] 【辛く甘し、熱にして微毒あり】 [主治] 【瘡疥に塗り、髮䐈を解す】(時珍)

稭 [主治] 【燒灰を痣に點け、惡肉を去る藥に入れる】(時珍)

(一)赤小豆（本經中品）

和名　あづき
學名　Phaseolus angularis, Wight.
科名　まめ科(荳科)

[校正] 大豆の條より分離す。

[釋名] **赤豆**(恭) **紅豆**(俗) **荅**(廣雅) 藥を **蓄** と名ける。時珍曰く、按ずるに、詩に『黍稷稻粱、禾麻菽麥』とあつて、これは卽ち八穀である。董仲舒の註に『菽とは大豆のことで兩種あり、小豆は荅と名けて三四種ある』とある。王禎は『今の赤豆、白豆、綠豆、豋豆はいづれも小豆だ』といつた。此にいふは藥に入れて用ゐる赤い小さいもののことである。

[集解] 頌曰く、赤小豆は、今は(二)江淮地方で多く種ゑる。

(一) 牧野云フ、あづきハ亞細亞ノ原產デ今我邦ニモ普通之レチ見、重要ナル食料品ノ一トナツテヰル、西洋デハ俗ニ Adzuki Bean ト稱スル。

(二) 江淮ハ今ノ安徽、江蘇地方。

> (三)關西ハ今ノ陝西省中部、及ビ南半。河北ハ今ノ河北省ノ地。汴洛ハ今ノ河南省北半、黃河以南ノ地ヲ指ス。
>
> (四)木村(康)曰ク、食用植物誌ニヨレバあづきノ組成左表ノ如シ。
>
> | 種類 | 水分 | 蛋白質 | 脂肪 | 其他含窒素 | 纖維 | 灰分 |
> |---|---|---|---|---|---|---|
> | 下野產 | 12.70 | 22.01 | 0.40 | 55.59 | 6.44 | 3.06 |
> | 北海道產 | 17.00 | 22.97 | 0.38 | 51.67 | 4.44 | 3.54 |
>
> (應用)あづきノ種子ハ單ニ煮テ食ヒ、或

宗奭曰く、(三)關西、河北、汴洛では多くこれを喰ふ。

時珍曰く、この豆は、緊小にして赤黯色なるものを藥に入れる。そのやや大にして鮮紅、淡紅色なるものはみな治病の功がない。いづれも夏至後に種を下し、苗科は高さ一尺ばかり、枝葉は豇豆の葉に似て微し圓く、峭しくして小さい。秋になつて花を開く、その花は豇豆の花に似て小さく、淡銀褐色で腐臭がある。莢を結び、その莢は長さ二三寸、綠豆の莢に比してやや大きく、皮の色は微白色に紅を帶びたものだ。その莢の三本青く二本黄なる割合に成つたとき採收する。煮ても、炒つても、粥、飯、餛飩、餡にしてもいづれも良し。

〔小豆〕

諸小豆みな彷彿たり。ただ形にて分つ。

(五)**氣味** 【甘く酸し、平にして毒なし】 思邈曰く、甘く鹹し、冷なり。魚鮓と食合せれば消渴となり、醬に作つたものと飯と食合せれば口瘡となる。藏器曰

く、驢が食へば足が輕くなり、人が食へば(五)身が重くなる。

【主　治】【水(六)腫を下し、癰腫の膿血を排す】(本經)【寒熱、熱中、消渇を療じ、洩痢を止め、小便を利し、腹脹滿を下す。吐逆、卒澼】(別錄)【熱毒を(七)治し、惡血を散じ、煩滿を除き、氣を通じ、脾、胃を健にし、食物の味を美ならしめる。末に擣き、鷄子白と共に一切の熱毒癰腫に塗る。煮汁で小兒の黃爛瘡を洗ふ。三回に過ぎてはならぬ】(權)【氣を縮し、風を行り、筋骨を堅くし、肌肉を抽く。久しく食すれば瘦せる】(士良)【氣を散じ、關節の煩熱を去り、人の心孔を開かしめる。暴痢後の氣滿で食事不能なるには、煮て一頓に食へば癒える。鯉魚に和して煮て食へば甚だ脚氣を治す】(詵)【小麥の熱毒を解す。煮汁は酒病を解し、衣服の粘綴を解く】(日華)【瘴疫を辟け、産難を治し、胞衣を下し、乳汁を通ずる。鯉魚、鱧魚、鯽魚、黃雌雞と和して煮て食へば、いづれも能く水を利し、腫を消す】(時珍)

【發　明】弘景曰く、小豆は津液を逐ひ、小便を利す。久しく服すれば肌膚を枯燥せしめる。

頌曰く、水氣脚氣には最も必要なもので、ある者が脚氣を患つたとき、袋にこの

ハ粳米ヲ交ゼテ飯ニ炊キ、或ハ强飯ニ色ヲ添ヘ、或ハ餡トナシ、或ハ糕菓子等ノ料トナス。葉湯煮シテ醬油ニ浸シ、或ハ胡麻味噌ニ和ヘ以テ食用ニ充ツルコトヲ得ベシ。

民間ニ脚氣ニ效アリトシテ、種子ヲ鹽茹デニシテ食ス。

(五)大觀ニ體ニ作ル。

(六)大觀ニ腫字ナシ。

(七)大觀ニ治ヲ消ニ作ル。

(八)共工氏トハモト

豆を盛つて朝夕それを踏み轉がさせると、久しくして遂に癒えた。

好古曰く、水を治する場合、單に水を治するだけで胃を補することに注意を缺くと、それがために壅滯せしめるの過失に陷るものだ。赤小豆は水を消し、氣を通じて脾、胃を健にするものだから、その場合に適當な藥である。

藏器曰く、赤小豆は、桑根白皮と和して煮て食へば濕氣痺腫を去る、通草と和して煮て食へば無限に氣を下す。これを脱氣丸と名ける。

時珍曰く、赤小豆は小さくして色が赤い。心の穀である。その性は下行して小腸に通じ、能く陰分に入つて有形の病を治するものだ。故に津液を行り、小便を利し、脹を消し、腫を除き、吐を止めて下痢、腸澼を治し、酒病を解し、寒熱癰腫を除き、膿を排し、血を散じて乳汁を通じ、胞衣、產難を下すのであつて、これはいづれも病の有形なるものだ。久しく服すれば降の作用が太だ過ぎて、津、血が滲洩する結果は肌瘦せしめ、身體を重からしめるものである。かの鼻に吹く瓜蒂散や瘟疫を辟けるに用ゐるのは、やはりその氣を通じ、濕を除き、熱を散ずる作用の應用である。或は、(八)共工氏に不才の子があつて、冬至の日に死んで疫鬼になつた。そ

水官ノ官名ニシテ、後ニ氏トナセルモノ、世江淮ノ間ニ居ル、堯ノ時ハ已ニ逐ハレテ邊境ニ在リ、四凶ノ一トセラル。

(九)痄腮トハ兩ノ腮ガ腫ルル病、俗ニオタフク風ト云フモノ。

れが赤豆を畏れたので、それでこの日に小豆粥を作つて禁厭するのだといふが、これはやはり傅會の妄説だ。又按ずるに、陳自明の婦人良方に『予が家の婦は主に菜食で、産後七日間乳脈が行らず、藥を服しても效がなかつたが、偶然赤小豆一升で粥を煮て食つたところ、その夜のうちに乳が出た。そこで本草を調べて見ると、やはりこの事が載つてゐた。思ひ寄るままに記して置く』とある。又、朱氏集驗方には『宋の仁宗皇帝がまだ東宮に在したとき(九)痄腮を患ひ、道士贊寧にその治療を命ぜられ、小豆四十九粒を末にして傅けてそれで癒えた。中貴人任承亮が、後に惡瘡を患つて瀕死に陷つたとき、尙書郎傅永が授けた藥で立ろに癒えた。その方を尋ねて見ると赤小豆であつた。予が脇疽に苦んで旣に五臟を犯されんとしたとき、ある醫師の治療に用ゐた藥が非常に奏效した。居合せた承亮が「それは赤小豆ではないか」といふと、醫師は恐縮して「實は私はこの方で、只今三十人の家族を養つてゐるやうな次第です。どうぞ公表しないことにして戴きたい」といつた。ある僧が發背で瓜の爛れたやうになつたとき、隣家の乳母がこれで治療してやると神の如き效を奏した。この藥は、一切の癰疽、瘡疥、及び赤腫は善惡に拘はらず、ただ水で

調へて塗る。癒えぬといふことなし。しかしただその性が粘するもので、乾くと容易に(一〇)搗けなくなるが、苧根末を入れると粘せなくなる。この法は就中佳し』とある。

附方　舊十八、新十九。【水氣腫脹】頌曰く、赤小豆五合、大蒜一顆、生薑(一一)五錢、商陸根一條を用ゐ、いづれも碎き破つて水で共に煮爛し、藥を去つて空心にその豆を食ひ、汁を少しづつ全部を啜る。腫は立ろに消く。○韋宙の獨行方では、水腫を治す。脚から起つて腹に入れば死亡する。赤小豆一斗を極端に煮爛して汁五升を取り、溫めて足膝を漬ける。已に腹に入つた場合には、ただ小豆を食つて他の雜食を止めればやはり癒える。○梅師の水腫を治する方では、東行花桑枝の燒灰一升で淋汁を取り、赤小豆一升を煮て飯の代に食ふが良し。【水蠱腹大】動搖すれば聲があり、皮膚の黑きには、赤小豆三升、白茅根一握を水で煮て豆を食ふ。消くを度とする。(肘後)【瘟疫の辟禳】五行書に『正月元日と十五日に、赤小豆十四箇、麻子七個を井中に投ずる。瘟疫を辟けるに甚だ效がある』とある。(一二)○又、正月七日に、赤小豆を新布囊に盛り、三日間井中に置いて取出し、男は(一三)七粒を、女は十四粒を

(一〇)搗、本草洞玄ニ揭ニ作ル。

(一一)大觀ニ五錢ヲ一分ニ作ル。

(一二)大觀ニ肘後方ノ三字アリ。

(一三)大觀ニ男十枚女二十枚ニ作ル。

呑む。その一个年間病に罹らぬ。【疾病の辟厭】正月元旦に、東に向ひて井華水で赤小豆二十一箇を呑む。一个年間諸病に罹らない。○又、七月立秋の日に、西に向ひて井華水で赤小豆七箇を呑む。その秋一期間痢疾に犯されない。【傷寒狐惑】張仲景曰く、狐惑の病は、脈數が多くして熱がなく、微し煩し、默默としてただ臥さんとし、汗が流れ出で、發病三四日間は鳩のやうに目が赤くなり、七八日で目眥が全部黃黑になる。かくてよく物を食ふものならば膿が已に成つたのである。赤豆當歸散を主として用ゐる。赤小豆三升を水に浸して芽を出させ、當歸三兩と末にし、一日三回、方寸匕づつを漿水で服す。(金匱要略)【下部の卒痛】鳥の啄のやうな形狀になりたるには、小豆、大豆各一升を蒸熟し、二箇の囊を作つてそれに入れ、更互にその上に坐れば止む。(肘後方)【水穀痢疾】小豆一合、鎔かした蠟三兩を頓服して效を取る。(必效方)【熱毒下血】熱物などを食つたことから發動したものには、赤小豆末方寸匕を水で服す。(梅師方)【腸痔下血】小豆(一四)三升を苦酒五升で煮熟し、日光で乾して再び浸し、苦酒がなくなるまで繰返してから末にし、一日三回、酒で一錢づつを服す。(肘後方)【舌上の出血】簪ほどの孔あるには、小豆一升を杵き碎き、水

〔一四〕大觀ニ二二ニ作ル。

（一五）大觀ニ慢下ニ火字アリ。

（一六）大觀ニ二十一箇ニ作ル。

三升に和して汁を絞つて服す。（肘後方）【熱淋、血淋】男、女に拘らず、赤小豆三合を（一五）慢に炒いて末にし、葱一莖を煨いて酒に擂り、熱して末二錢を調へて服す。（修眞祕旨）【重舌、鵞口】赤小豆末を醋で和して塗る。（普濟方）【小兒の言語不能のもの】四五歳にして物を言はぬものである。赤小豆末を酒で和して舌下に傅ける。（千金）【牙齒疼痛】紅豆末を牙に擦つて涎を吐き、また鼻中に吹く、ある方では、銅青少量を入れる。ある方では、花鹼少量を入れる。（家寶方）【酒の中毒で嘔逆するもの】赤小豆の煮汁を徐徐に飲む。（食鑑本草）【頻頻墮胎するもの】赤小豆末を、一日二回、酒で方寸匕づつ服す。（千金）【妊娠中月經あるもの】方は上に同じ。【婦人の難產】產寶では、赤小豆七箇を生で飲むが佳し。○集驗では、難產日久しくして氣乏するものを治す。赤小豆一升を水九升で煮て汁を取り、炙いた黃明膠一兩を入れて共に少時煎じ、一回に五合を服す。三四服に過ぎずして產する。【胞衣不下】赤小豆を、產兒の男の場合には七箇、女の場合には十四箇を東流水で呑む。（救急方）【產後の目閉】心悶するには、赤小豆を生で研り、方寸匕を東流水で服す。癒えぬときは更に服す。（肘後方）【產後の悶滿】食事不能なるには、小豆（一六）二十四箇を燒いて研り、冷

（一七）大觀ニ水ヲ醋ニ作ル。

水で服するが佳し。（千金方）【乳汁不通】赤小豆の煮汁を飲む。（產書）【婦人の吹奶】赤小豆を酒に研つて溫服し、滓を傅ける。（熊氏）【婦人の乳腫】小豆、莽草等分を末にし、苦酒で和して傅けるが佳し。（梅師）【癰疽の初期】赤小豆末を（一七）水で和して塗る。毒は直ちに消散する。頻りに用ゐて有效だ。（小品方）【石癰、諸癰】赤小豆五合を苦酒中に五晝夜納れて置いてから炒つて研り、苦酒で和して塗れば消く。栝樓根等分を加へる。（范汪方）【痘後の癰毒】赤小豆末を雞子白で調へて塗傅する。【顋頰の熱腫】赤小豆末を蜜で和して塗る。一夜にして消く。或は芙蓉葉末を加へるが就中妙である。【火の如き丹毒】赤小豆末を雞子白で和し、時時に怠らず塗れば手を逐ふて消く。（小品方）【風瘙癮疹】赤小豆、荊芥穗等分を末にし、雞子清で調へて塗る。【金瘡煩滿】赤小豆一升を苦酒に一日浸して熬り燥し、再び滿三日間浸して黑色にして末にし、一日三回、方寸匕づつを服す。（千金）【六畜肉の中毒】小豆一升を燒いて研り、三方寸匕づつを水で服するが神效がある。（千金方）

葉　【主治】【煩熱を去り、小便數を止める】（別錄）【煮て食へば目を明にする】（日華）

〔發明〕時珍曰く、小豆は小便を利するものだが藿は小便を止める。麻黄は發汗するが根は汗を止めると同様の關係である。物界の現象にはかやうな不思議な點がある。

〔附方〕舊一、新一。【小便頻數】小豆葉一斤を豉汁の中に入れ、煮和して羹にして食ふ。(心鏡)【小兒の遺尿】小豆葉を搗いて汁を服す。(千金)

芽〔主治〕【妊娠數月にしてともすれば經水の溯するものを漏胎と名ける。房事などのために起つたものを傷胎と名ける。この物を末にし、一日三回、方寸匕づつを溫酒で服し、效があつたときは止める】(時珍)記載は普濟にある。

(一)腐婢（本經下品）

和名 あづきのはな
洋名 Flowers of Adzuki Bean.

〔集解〕別錄に曰く、腐婢は漢中に生ずる。小豆の花であつて、七月に採つて(二)四十日間陰乾する。

弘景曰く、花と實とで用途が異ふ。故に品級が同じくないのだ。方家では用ゐない。何故に腐婢なる名稱があるのか判らない。本經にはこれが小豆の花だとはいつ

(一)牧野云フ、之レチあづき(赤小豆)ノ花ト定ム、集解ノ海邊有小樹云云ノ品チ本草綱目啓蒙ニはまくさぎ(Premna microphylla, Turcz.)ニ充テテアルガ或ハサウカモ知レナイ。

(二)大觀ニ四十日ノ三字ナシ。

てないが、別錄にさういつてある　いづれが正、否とも判ぜられない。現に海岸地方に巵子のやうな形狀の小さい樹で莖、(三)葉が多く曲り、腐臭のやうな臭氣のある樹がある。その物をその地の者は腐婢と呼び、瘧の治療に有效で、酒に皮を浸して服すれば心腹の疾を療ずる。これが眞のその物ではないかと思ふ。この條は木部に編入すべきものであらう。

恭曰く、腐婢は葛花だといふことになつてゐる。葛花は酒を消するに大いに勝れたものだが、小豆には全然その效力がない。葛花が眞の物に相違ない。

禹錫曰く、按ずるに、別本に『小豆花にはやはり葛花と同じ腐氣がある。服してから酒を飮めば醉はない』とあつて、本經の酒病を治すとある說と合致する。陶、蘇二氏の說はいづれも誤だ。

甄權曰く、腐婢、卽ち赤小豆の花である。

頌曰く、海岸地方の小樹と、葛花と、赤小豆花との三物にいづれも腐婢なる名稱はあるが、これは同名異物である。

宗奭曰く、腐婢に關する記載が穀部に在る以上、豆花說の正しいことは兎角の論

(三)大觀ニ條ニ作ル。

議を容れる餘地がない。

時珍曰く、葛花に就いては已にその本條に記載がある。小豆は能く小便を利し、熱中を治し、氣を下し、渇を止める點に於いて腐婢の主治效功と同じであつて、豆花そのものなることに疑ない。但し小豆にも數種あるが、甄氏の藥性論には特に赤小豆だけを指定してあるから、今姑くそれに從ふ。

【氣味】【辛し、平にして毒なし】【主治】【(四)痎瘧、寒熱邪氣、洩痢、陰不起、消渇病、酒頭痛を止める】(本經) ○心鏡には『上記の病證には、花を豉汁、五味と共に煮て羹にして食ふ』とある。【酒毒を消し、目を明にし、水氣を下し、小兒の丹毒、熱(五)核を治す。氣滿で食事不能なるを散ずるには、煮て一頓に食ふ】(藥性) 【熱中、積熱、痔瘻、下血を治す】(時珍) ○宣明方の葛花丸中にこれを用うとある。

【附方】新二。【酒を飲んで醉はぬ法】小豆花葉を百日間陰乾して末にし、水で方寸匕を服す。或は葛花等分を加へる。(千金) 【疔瘡惡腫】小豆花末を傅ける。(普濟方)

(四)大觀ニ痎ヲ痎ニ作ル。

(五)大觀ニ核ヲ腫ニ作ル。

（一）綠　豆（宋開寶）

和名　ぶんどう、やへなり
學名　Phaseolus aureus, Roxb.
科名　まめ科（荳科）

〔釋名〕 時珍曰く、綠とは色を以て名けたものだ。舊本に菉と書いたのは正しくない。

〔集解〕 志曰く、綠豆は圓くして小なるものが佳く、粉にして食物にし、炙いて食ふが良し。大なるものをば植豆と名ける。苗、子は似たもので、やはり能く氣を下し、霍亂を治す。

瑞曰く、官綠と油綠とがあるが、主たる療病上の效力は同一だ。

時珍曰く、綠豆は處處で種ゑるものだ。三四月に種を下し、苗は高さ一尺ばかりになり、葉は小さくして毛があり、秋になつて小さい花を開き、莢は赤豆の莢のやうだ。粒が粗くして色の鮮かなものが官綠、皮が薄くして粉が多く、粒が小さくして色の深いものが油綠である。皮が厚くして粉が少く、早く種ゑるものをば摘綠と呼ぶ。幾回も摘み取れるものだ。遲く種ゑるものをば拔綠と呼ぶ。これはただ一回

（一）牧野云フ、私ハ此ぶんどうヲ下ノ學名ノモノト定ム、卽チ此學名ノ品ハ今日デハ其野生品ハ見ナイガ多分其原產地ハ印度デアラウトノ事デアル、俗ニ Mur 或ハ Green Gram ト稱スル。

拔き取れるだけのものだ。北方地方ではこれの利用が甚だ廣く、豆粥にし、豆飯にし、豆酒にし、炒つても食ひ、麨にしても食ひ、磨つて麪にし、それを水に入れ澄し濾して粉を取り、それを餌、卽ち食品とし、餻に頓する。―頓は蒸す事を言ふ―。皮に盪して豆皮、卽ちゆばとし、又粉索に搓る、此等は重要の食品である。又、水で浸濕して生えしめた白芽は菜としても佳品である。牛馬の飼糧も多くこれに頼る。眞に經濟的穀物としての理想的なものだ。

(二)［氣味］【甘し、寒にして毒なし】藏器曰く、これを用ゐるには皮のまま用うべきもので、皮を去れば少し壅氣する。蓋し皮は寒であり、肉は平である。〇榧子殼と反し、人體を害ふ。鯉魚鮓と食合せて久しきに互れば、肝黃を發し、渇病と成る。

［主治］【煮て食へば、腫を消し、氣を下し、熱を壓し、毒を解す。生で研り汁を絞つて服すれば、丹毒、煩熱、風疹、藥石の發動、熱氣奔豚を治す】(開寶)【寒熱、熱中を治し、泄痢、卒澼を止め、小便脹滿を利す】(思邈)【腸、胃を厚くする。枕にすれば、目を明にし、頭風、頭痛を治し、(三)吐逆を除く】(日華)【元氣を補益し、五

(二) 木村(康)曰ク、(成分)ハ澱粉五五―五七%、脂肪一―一・五%、蛋白質二一―二七%、細胞質三・四―四・五%、灰分三・四―四・五%、水分九・四―一三%、青酸ヲ生成シ得。(應用)種子ハ煮テ食ヒ又綠色ノ餡ヲ作ルベク、或ハ水ヲ以テ浸濕シ白芽ヲ作リ蔬トナス、味佳ナリ。
(三) 大觀ニ熱毒ニ作ル。

臟を和調し、精神を安じ、十二經脈を行らし、浮風を去り、皮膚を潤ほす。常にこれを食ふがよし。煮汁は消渇を止める』（孟詵）【一切の藥草、牛馬、金石の諸毒を解す』（寗原）【痘毒を治し、腫脹を利す』（時珍）

［發明］時珍曰く、綠豆は、肉は平、皮は寒であつて、金石、砒霜、草木、一切の諸毒を解するには、皮のまま生で研つて水で服するがよし。按ずるに、夷堅志に『ある者が、附子酒を過量に服して頭が斗ほどに腫れ、唇が裂けて血が流れたが、急に綠豆、黑豆各數合を取り寄せ、嚼んで食ひ、幷に湯に煎じて飮み、それで解した』とある。

［附方］新十。【扁鵲の三豆飮】天行豆瘡を治す。豫めこの飮を服すれば、熱毒を疎解し、たとひ出ても少い。綠豆、赤小豆、黑大豆各一升、甘草節二兩を水八升で極端に煮熟し、任意に豆を食ひ汁を飮み、七日にして止める。○ある方では、黃大豆、白大豆を加へて五豆飮と名ける。【痘後の癰毒】初期に三豆膏で治すれば神效がある。綠豆、赤小豆、黑大豆等分を末にし、醋で調へて時時に刷き塗れば消く。（醫學正傳）【痘の目に入るを防ぐ】綠豆七粒を用ゐ、小兒をして自ら井中に投げ込ま

せ、七遍振り返つて視て還らせる。【小兒の丹腫】綠豆五錢、大黃二錢を末にし、蜜を入れた生薄荷汁で調へて塗る（全幼心鑑）【赤痢の止まぬもの】大麻子を水に研り、濾した汁で綠豆を煮て食ふ。極めて效がある。粥にして食ふもよし（必效方）【老人の淋痛】青豆二升、橘皮二兩で豆粥を煮て、麻子汁一升を投じて空心に漸次に食ひ、幷にその汁を飲む。甚だ效驗がある（養老書）【消渴飲水】綠豆の煮汁でいづれも粥にして食ふ（普濟方）【心氣疼痛】綠豆二十一粒、胡椒十四粒を共に研り、白湯で調へて服すれば止まる。【多食して饑ゑ易きもの】綠豆、黃麥、糯米各一升を炒熟して粉に磨り、一盃づつを白湯で服す。三五日で效が現れる【十種の水氣】綠豆二合半、大附子一箇を用ゐ、附子を皮臍を去つて兩片に切り、共に水三椀で煮熟し、就寢時に空心にして豆を食ひ、次の日はその兩片の附子を四片にして、再び綠豆二合半と前日の如く煮て食ひ、第三日は別の綠豆と附子とで第一日と同じくして煮て食ひ、第四日には第二日と同じくして煮て食ふ。水は小便から下つて腫は自ら消く。なほ消かぬときは再服する。生、冷、毒物、鹽、酒を忌む。六十日繼續すれば奏效せぬといふことなし。（朱氏集驗方）

綠豆粉 【氣味】「甘し、涼、平にして毒なし」原曰く、その膠粘するものをば、脾、胃の虛せる者は多食されぬ。瑞曰く、杏仁に近づけてはならぬ。近ければ爛れて索にし得なくなるものだ。

【主治】「諸熱を解し、氣を益し、酒食の諸毒を解し、發背癰疽、瘡腫、及び湯火傷灼を治す」(吳瑞)「痘瘡が濕爛して痂疕を結せぬには、乾して撲つが良し」(甯原)「新水で調へて服すれば、霍亂轉筋を治し、諸種の藥毒で死して心頭のなほ溫なるものを解す」(時珍)「菰菌、砒の毒を解す」(汪穎)

【發明】時珍曰く、綠豆は色が綠にして小さい。豆にして木に屬するものであつて、厥陰、陽明に通ずる。その性はやや平である。腫を消し、痘を治する功力は赤豆と同一だが、熱を壓し、毒を解する功力はそれ以上だ。且つ氣を益し、腸、胃を厚くし、經脈を通ずるもので、久しく服しても人體を枯らす嫌がない。ただ涼粉にし、豆酒に造つたものは、或は冷に偏し、或は熱に偏するためによく病を起すことがあるが、それはみな人間が爲すことで、豆その物に咎はない。豆粉は綠色にして粘膩なるものを用ゐるを正しとする。

外科に、癰疽の治療に用ゐる內托護心散といふがあつて、極めて神效あるものとされ、丹溪朱氏は左の如く詳説して宣明した。

震亨曰く、外科精要に『內托散は、發病一日乃至三日に十數服を進めて、毒氣の臟腑に內攻することを免れる』とあるが、更に切實な推究を試みれば、綠豆の丹毒を解し、石毒を治し、味甘くして陽明に入り、性寒にして能く補するを君とし、乳香の惡腫を去り、少陰に入り、性溫にして善く竄するを佐とし、甘草の性緩にして五金、八石、百藥の毒を解するを使としたのであつて、想ふにこの方は、專ら丹石を服して發した疽に對して設けたもので、老年の者、病深き者にして、その證狀が完全に現れ、體の虛せる者の場合であつては、綠豆は補するものとはいひながら、その效果を現はすに堪へないといふ虞がある。五香連翹湯でも、やはり必ずしも適當なものとはいひ兼るので、この場合には、必ず氣を助け、胃を壯にし、根本を堅固にして、經に行り血を活かさしめるものを佐とし、參ふるに經絡、時令を以てして毒氣を外發せしめねばならぬものである。かくするが內托の根本的意治方法であつて、治療を施すことが早ければそれで內消するものである。

附方　新十二。【護心散】又、內托散、乳香萬全散と名ける。凡そ疔疾が發して一日乃至三日以內のものには、これを十餘服連進するがよし。それで變證を免れ、毒氣を外に驅出するものである。服用がやや遲れては毒氣が內攻し、漸次に嘔吐を催し、或は鼻に瘡菌を生じ、食事を攝らずして危篤に陷る。四五日經過してもやはりこれを間服するがよし。眞綠豆粉一兩、乳香半兩を燈心と共に研つて和勻し、生甘草の濃煎湯で調へ、一錢づつを時時に呷ふ。もし毒氣が心に冲し、嘔逆を催ほす證狀のあるときは、大いにこれを服するがよし。蓋し綠豆は熱を壓し、氣を下し、腫を消し、毒を解し、乳香は諸癰腫の毒を消するもので、一兩まで服すれば香が瘡孔中に徹するものだ。眞に聖藥である。(李嗣立外科方)【瘡氣嘔吐】綠豆粉三錢、乾胭脂半錢を研り勻ぜ、新汲水で調へて服す。一服で立ろに止む。(普濟)【霍亂吐利】綠豆粉、白糖各二兩を新汲水で調へて服す。直ちに癒える。(生生編)【燒酒の毒を解す】綠豆粉の盪した皮を多く食へば解す。【鴆酒の毒を解す】綠豆粉三合を水で調へて服す。【砒石の毒を解す】綠豆粉、寒水石等分を藍根汁で調へて三五錢を服す。(衞生易簡)【諸藥の毒を解す】已に死んでも、ただ心頭の溫なるには、綠豆粉を水で調へて

（一）本草經疏ニ白ヲ甘ニ作ル。

服す。（衞生易簡方）【打撲損傷】綠豆粉を新しい銚で紫に炒り、新汲水で調へて傅け、杉木皮で縛定する。その效神の如きものだ。これは汀人陳氏が夢傳の方である。（普濟方）【杖瘡疼痛】綠豆粉を炒つて研り、雞子白で和して塗る。妙である。（生生編）【外腎に生じた瘡】綠豆粉、蚯蚓糞等分を研つて塗る。【暑期の痱瘡】綠豆粉二兩、滑石一兩を和匀して撲つ。一には蛤粉二兩を加へる。（簡易方）【一切の腫毒】初期には、綠豆粉を黄黑色に炒り、豬牙皂莢一兩と末にし、米醋で調べて敷く。皮の破れたものには油で調へる。（邵眞人經驗方）

豆皮 【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【熱毒を解し、目翳を退ける】（時珍）

【附方】新一。【通神散】癍痘で目に翳を生じたるを治す。綠豆皮、（一）白菊花、穀精草等分を末にし、一錢づつを、乾柿餅一箇、粟米泔一盞で共に煮乾し、一日三回、その柿を食ふ。淺きもの は五七日で效が現れ、遠きもの も半个月で效が現れる。（直指方）

豆莢 【主治】【赤痢の年を經て癒えぬには、蒸熟して隨意に食ふが良し】（時珍）

記載は善濟にある。

豆花 [主治] 【酒毒を解す】(時珍)

豆芽 [氣味] 【甘し、平にして毒なし】 [主治] 【酒毒、熱毒を解し、三焦(せう)を利す】(時珍)

[發明] 時珍曰く、諸豆に生える芽はいづれも腥(なまぐさ)く韌(こは)くして用ゐられないが、ただこの豆の芽だけは白美なもので、獨特である。現在では一般に普通のことと考へてゐるが、古代にはまだそれを知らなかつた。但し濕熱、鬱浥(うついふ)の氣を受けるものだから、頗る瘡を發し、氣を動ずるもので、綠豆の性とはやや異ふところがある。

豆葉 [主治] 【霍亂吐下には、汁を絞つて醋を和し、少量を溫服する】(開寶)

(一)白豆 (宋嘉祐)

和名　しろあづき、しやぼんまめ
學名　Phaseolus angularis, Wight, var.
科名　まめ科(荳科)

[釋名] **飯豆**

(一) 牧野云フ、あづき(赤小豆)ノ豆ノ白キモノデ其一品デアル。

【集解】 詵曰く、白豆の苗の嫩いうちは菜にして食へる。生で食ふも妙だ。頴曰く、浙東にある一種は味が甚だ勝れ、醬を作り、腐を作るに用ゐて極めて佳し。北方の地にある水白豆といふは、よく似てはゐるがこれには及ばない。原曰く、白豆とは飯豆のことだ。粥、飯にいづれも拌ぜて食へる。時珍曰く、飯豆は小豆の白いもので、また土黄色のものもある。豆の大いさは綠豆ほどで長く、四五月に種ゑ、苗、葉は赤小豆に似てやや大きくして食へるものだ。莢もやはり小豆に似てゐる。蔉豆といふ一種は、葉は大豆のやうで、飯にもなり、腐にもなる。やはりその類のものだ。

【氣味】 【甘し、平にして毒なし】 原曰く、鹹し、平なり。【主治】 【五臟を補し、中を調へ、十二經脈を助ける】(孟詵) 【腸、胃を煖める】(日華) 【鬼氣を殺す。腎の穀であつて、腎病の者の食物に適する】(思邈)

葉 【主治】 【煮て食へば、五臟を利し、氣を下す】(日華)

（一）穭豆　穭ノ音ハ呂（ロ）である。（拾遺）

和名　未詳
學名　未詳
科名　まめ科（荳科）

【釋名】時珍曰く、穭とは自生する稻を呼ぶ名稱であつて、この豆は本來野生のものだからかく名けたのだ。今は一般にこれも下地に種ゑる。

【集解】藏器曰く、穭豆は田野に生える小さくして黑いものだ。醬になる。爾雅に『戎菽、一名驢豆。古は營豆と名く』とあるがこの物だ。

瑞曰く、穭豆とは黑豆中の最も細なもののことだ。

時珍曰く、これは黑小豆のことだ。科が小さく、粒が細かく、霜後に熟する。陳氏がこれを指して戎菽としたのは誤である。爾雅にもやはりこの文はないが、戎菽とは胡豆のこと、營豆とは鹿豆のことで、菜部に揭げてある。いづれも四月に熟する。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【賊風、風痺、婦人產後の冷血を去る。黑焦げに炒つて熱したところを酒中に投じて漸漸に飮む】（藏器）

（一）牧野云フ、本品ハ未詳ノ種デアル、或ハ大豆屬ノつるまめ (Glycine ussuriensis, Reg. et. Maack.) ノ樣ナモノカ、或ハ赤小豆屬ノやぶつるあづき (Phaseolus trilobus, sit.) カモ知レヌガ今遽カニ判然セヌ、本草綱目啓蒙ニ之レヲ黑豆ノ一種ノたんきりまめ(同名ガアル)一名のみまめ、一名くはしまめニ充テアレドモ想像デアル。

豌豆（拾遺）

（一）

和名　ゑんどう
學名　Pisum sativum, L.
科名　まめ科(荳科)

釋名　**胡豆**（拾遺）　**戎菽**（爾雅）　**回鶻豆**（遼志）　飲膳正要には回回豆と書いてある。（二）回回とは回鶻國のことである。**畢豆**（唐史）　崔寔の月令には蹕豆と書いてある。**青小豆**（千金）　**青斑豆**（別錄）　**麻累**　時珍曰く、胡豆は豌豆である。その苗が柔弱で宛宛たるものだから豌豆と呼ばれたので、種は胡、戎から出たものだ。嫩いときは青色だが、老いると斑麻になるものだ。故に胡、戎、青斑、麻累などの名稱がある。陳藏器の拾遺に胡豆は掲げてあるけれども、但だ『苗は豆に似て、田野の間に生ずる。米の中に往往ある』とある。しかし豌豆にも蠶豆にも胡豆なる名稱がある。陳氏のいふ物は蓋し豌豆のことで、豌豆の粒は小さい

〔豌　　豆〕

（一）牧野云フ、豌豆ニ二品アッテ其一ヲあかゑんどうト云ヒ其一ヲしろゑんどうト稱ヘル、あかゑんどうハ Pisum sativum L. β. arvensis, Trautv. しろゑんどうハ P. sativum L. α. genuina Trautv. ノ學名ヲ有スル。

（二）回回ハ石部青琅玕ノ註、回鶻國ハ同寶石ノ註參照。此ニ時珍ガ『回回即回鶻』ト註セルハ蓋シ元史記述ノ妄ヲ承ケタルモノナラン。回回ト回鶻トハ本相渉ラズ。回回ト稱セルハ土耳其斯坦ノシル河、アム河ノ兩流域、所謂古ノコラヅム國、及ビ今ノ新疆省カシカルノ地、或ハ今ノ波斯ノ地ヲ指ス。回鶻

ハ隋、唐ニ蒙古ノ庫倫、科布多地方ニ據リタル回紇可汗ノ國ニシテ、唐末ニソノ地ヲ逐ハレ、元、明ニ今ノ新疆省ノ東北部土魯番、哈密地方ニ據ル。元ニ所謂畏吾兒ノ地ナリ。故ニ遼志ト飲膳正要トノ記載ハ各ソノ傳來地ヲ殊ニスト見ルヲ正トスベキカ。

ものだから米の中にあるのだ。爾雅には、戎菽を荏菽といひ、管子には、山戎から荏菽が出て天下に布くなつたとあり、いづれもその註に『卽ち胡豆なり』とある。唐史には、畢豆は西戎回鶻の地面から出たとあり、張揖の廣雅には、畢豆は豌豆、留豆なりとし、別錄の序例には『丸藥は胡豆ほどにする。大なるは卽ち靑斑豆だ』とあり、孫思邈の千金方には『靑小豆、一名胡豆、一名麻累』とあり、鄴中記には『石虎は胡といふを諱んで胡豆を國豆と呼び改めた』とある。この數說はいづれも豌豆を指したものだ。蓋し昔は豌豆を胡豆と呼んだのである。今では蜀地方で專ら蠶豆を胡豆と呼ぶだけで、豌豆を胡豆と名けることは一般人は知らない。又、鄕里の方では、豌豆の大なるものを淮豆と呼ぶ。蓋し回鶻と音が近いからだ。

【集解】 時珍曰く、豌豆の種は西胡から出たもので、今では北方の地に甚だ多く、八九月に種を下して苗が生え、蔓のやうに柔弱で鬚があり、葉は蒺藜に似て兩兩對生し、嫩いときは食へる。三四月に蛾のやうな形で淡紫色の小さい花を開き、長さ一寸ばかりの莢を結ぶ。子は藥丸のやうに圓いもので、また甘草子にも似てゐる。胡地に產するものは大いさ杏仁ほどあり、煮ても炒つても佳し。粉麪に磨れば

甚だ白くして細膩なもので、あらゆる穀物中で最も先に登るものだ。又、野豌豆といふものがあるが、粒は小さく、役に立たない。ただ苗を茹へるだけのもので、名稱を翹搖といふ。菜部に掲げてある

〔氣　味〕【甘し、平にして毒なし】思邈曰く、甘く鹹し、溫、平にして澁し瑞曰く、多く食へば氣病を發する

〔主　治〕【消渇には、淡煮して食ふが良し】(藏器)【寒熱、熱中を治し、吐逆を除き、泄痢、澼下を止め、小便、腹脹滿を利す】(思邈)【營衞を調へ、中を益し、氣を平にする　煮て食へば鬼毒心病を殺し、乳石の毒發を解す　研末して癰腫、痘瘡に塗る。澡豆にして用ゐれば䵟䵳を去り、顏を光澤あらしめる】(時珍)

〔發　明〕時珍曰く、豌豆は土に屬する。故にその主治たる病は多くは脾、胃に關するものだ。元時代には膳部に每にこの豆を用ゐたもので、擣いて皮を去り、羊肉と共に調理して食ひ『中を補し、氣を益す』といつた。今では日用の物となつてゐるが、唐、宋の本草に遺漏したのは學術としての迂濶であつた。千金、外臺の洗面用の澡豆の方に畢豆麪を盛んに用ゐてあるのは、やりその白膩なる點を取つたも

(三) 木村(康)曰ク、豌豆ノ未熟ノ果實(莢「青豌豆」)ハ蔗糖「イノシット」、「ツリゴネリン」、「レブローゼ」、「ガラクトーゼ」、「アラビノーゼ」等ヲ含ム、成熟セル種子ノ組成(%)ハ含窒素物二三・三五、無窒素物五二・六五、粗纖維五・五七、脂肪一・八八、灰分二・七五、水分一三・八。而シテ澱粉ノ含量ハ凡ソ五〇%ニ及ブ、又諸種ノ蛋白質酵素等ノ他植物鹽基「ツリゴネリン」、「ヒヨリン」及ビ「ベタイン」様ノ鹽基ヲ含ム。

のだ

【附方】新三。【四聖丹】小兒の痘中に疔があつて、或は紫黑にして大きく、或は黑く壞れて臭く、或は中に黑線あるものを治す。この症は十中の八九まで絶望だが、ただ牛都御史が祕傳を得たこの方を點けるが最も妙である。豌豆四十九粒を燒いて性を存し、頭髮灰三分、眞珠十四粒を炒り、研つて末にし、油、燕脂と共に杵いて膏にし、豫め簪で疔を挑破し、惡血を吮ひ去つてから少量を點ける。即時に紅活色に變ずるものだ。【服した石藥の毒發】胡豆半升を擣き研つて水八合を入れ、絞つて汁を飮む。直ちに癒える。（外臺）【霍亂吐利】豌豆三合、香薷三兩を末にし、水三盞で一盞に煎じ、二回に分服する。（聖惠）

(一)蠶豆（食物）

和名　そらまめ
學名　Vicia Faba, L.
科名　まめ科（荳科）

【釋名】**胡豆**　時珍曰く、豆莢の形狀が老蠶のやうだから名けたものだ。王禎の農書に『この豆は養蠶期に始めて熟するから名けたのだ』とあるが、それでも通

(一) 牧野云フ、今日我邦ニハ普通ニ之レヲ作リ其豆ヲ食料トシ、又其莖葉ヲ綠肥ニ使用スル、一種おたふくまめト云フノハ豆ノ極メテ扁大ナモノデ、通常此レハ料理ニ使ハレテヰル。

じる、吳瑞の本草に、これを豌豆としたのは誤だ。この豆の種もやはり西胡から來たもので、豌豆と同名を呼ばれ、同一時期に種ゑるのではあるが、しかしその形狀、性質は迥かに相異がある。太平御覽に『張騫が外國へ使したとき、胡豆の種を持ち歸つた』とあるはこの豆を指したのだ。今蜀地方にはこれを胡豆と呼ぶが、豌豆をば胡豆とはいはない。

〔集解〕時珍曰く、蠶豆は南方の地で種ゑ、蜀中に就中多い。八月種を下し、冬嫩苗が生え、それは茹へる。莖は四角で中が空になり、葉の形狀は匙頭のやうで、本が圓く末が尖り、表面は綠、背面は白で柔かく厚く、一枝に三葉あり、二月に花を開く。その花は蛾の形のやうで紫白色だ。また豇豆の花のやうでもある。それに結ぶ角は大豆のやうで連り合ひ、頗る蠶の形に似てゐる。蜀地方ではその子を收獲して凶作の歳の備にする。

〔蠶豆―胡豆〕

〔三〕【氣味】【甘く微し辛し、平にして毒なし】【主治】【胃を快(こころよ)くし、臟腑を和す】(汪穎)

【發明】時珍曰く、蠶豆は、本草には記載がないが、萬表の積善堂方に『ある婦人が誤つて針を呑んだとき、それが腹に入つて、多くの醫師も治療し得なかつたが、ある者に敎へられて蠶豆と韭菜(きうさい)とを共に煮て食つたところ、針が大便と共に出た』とある　これはやはりその性の臟腑を利するの例證だ。

苗【氣味】【苦く微し甘し、溫なり】【主治】【酒醉の醒めぬには、油、鹽で炒熟し、湯に煮て灌(そそ)げば效がある】(穎)

(三) 本村(康)曰ク、食用植物誌ニヨレバそらまめノ種子ノ組成(%)ハ水分一五・七六、蛋白質二八・八八、脂肪一・二九、含水炭素四九・七四、纖維一・二三、灰分三・一一、又 Böpmer 氏ニヨレバ水分一四、含窒素物二五・六五、無窒素物四七・二九、脂肪一・六八、粗纖維八・二五、灰分三・一〇、澱粉凡三三―三六ニ對シ葡萄糖一・二、「パクチン」質四、ゴム質四・五、又植物鹽基(或含窒素配糖體)「ヴイチン」及ビ「コンヴイチン」等ヲ含ム。莢ハ「ロイチン」、「アスパラギン」、「チロジン」等ヲ含ム。葉ハ又莢ト共ニ「ヂオキシフエニルアラニン」ニ富ム。花ノ黒點ヲナス色素ハ「アントフエイン」ナリ。(應用)種子ヲトリ煮食シ炒リテ食シ、或ハ餡ヲ作リ或ハ味噌ノ原料トナス。軟莢モ亦食スベシ。葉ハ爆熱シテ救荒時ノ食料ニ充ツベシ。

(二)豇　豆　(綱目)

和名　ささげ
學名　Vigna sinensis, Endl.
科名　まめ科(荳科)

豇は江(カウ)絳(コウ)の二種の發音がある。

【釋名】䜶𧄍　音は絳雙(コウサウ)である。時珍曰く、この豆は紅色のものが大

(二) 牧野云フ、今日我邦デモ一般ニ作ツテヰル、其一種ニ十六ささげ一名ふろうト云フモノガアツテ V. sesquipedalis, W.

部分で、莢が必ず雙(なら)んで生えるから、豇、跭䨇と呼ぶ名があるのだ。廣雅に、これを胡豆としたのは誤だ。

【集解】時珍曰く、豇豆は處處で三四月に種ゑる。一種は蔓(つる)が一丈餘の長さになり、一種は蔓が短く、いづれも葉は本が太く末が尖り、嫩(わか)いときは茹(く)へる。花には紅、白の二色あり、莢には白、紅、紫、赤、斑駁の數色あつて、長さは二尺にもなり、嫩いときは菜として食ひ、老いればその子を收穫する。この豆は、菜にもなり、菓子にもなり、穀にもなり、用途の最も多いもので、豆の中での上品であるが、本草に記載の漏れたのは合點が行かぬ。

〔豇　豆〕

(三)【氣味】甘く鹹し、平にして毒なし。【主治】中を理し、氣を益し、腎を

F. Wight ノ學名チ有スル、又はたけささげト云フ種ガアツテ其學名ハ V. Catiang, Walp デアル。

(二)木村(康)曰ク、豇豆ハ纏繞草ニシテ種類多シ、あづきささげ、しろささげ、じふろくささげ等是ナ

補し、胃を健にし、五臟を和し、營衞を調へ、精髓を生じ、消渇、吐逆、泄痢、小便頻數を止め、鼠莽の毒を解す」（時珍）

［發明］　時珍曰く、豇豆は、花を開き莢を結ぶに必ず兩兩並び垂れ、そこに習坎の意味がある。豆子は微し曲つて人の腎臟の形のやうになつてゐる。所謂『豆は腎の穀だ』といふはこの豆がそれに當るわけである。昔、盧廉夫が人に腎を補することを敎へて、毎日空心に豇豆を煮て少量の鹽を入れて食はせたといふが、蓋しこの意味を知つてゐたものであらう。諸種の疾病の者に與へて差閊ないが、ただ水腫は腎を補することを忌むものだから多食されないだけである。又、袖珍方に『鼠莽の中毒は、豇豆の煮汁を飲めば解す。もしその事實を試みやうとならば、先づ鼠莽の苗を刈つて汁を潑けて見る。根がそれで爛れて生えなくなるものだ』とある。これは物に有する特殊性に因る現象だ。

（二）藊豆　藊の音は（ヘン）である。（別錄中品）

和名　へんまめ、いんげんまめ（同名がある）
學名　Dolichos Lablab, L.
科名　まめ科（荳科）

成分ハ

品名	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素	纖維	灰分
やつこささげ	15.21	21.77	3.18	57.32	1.17	1.36
金時ささげ	12.90	37.83	17.91	20.54	7.51	4.00

豇豆ハ莢中ノ上品ニシテ嫩莢ヲ煮、或ハ胡麻和、味噌和、芥子和等トナシテ食ヒ、種子ヲ煮食シ或ハ白餡トス、救荒時ニハ其葉ヲ食用ニ供ス。

（二）牧野云フ、我邦一般ニ栽培セラレテ

ヰルモノデ、いんげんまめト云フノガ其正名デアッテ、關西地方デハ其名デ呼ンデヰル處ガ少ナクナイ、然シ今日又菜豆卽チ Phaseolus vulgaris. L. ヲいんげんまめト呼ブノデ此ニツガ混雜シ困ッタ有樣デアル、然シ此いんげんまめノ名ハ本當ハ前種ノ有スベキモノデアル、本種ノ黑豆品ヲ鵲豆ト稱スル卽チ紫藊豆デアル、又白豆品ヲバ白藊豆ト稱シおぢまめ又ハひらまめノ名ガアル。

【釋名】 **沿籬豆**（俗） **蛾眉豆** 時珍曰く、藊の字はもと扁と書いた。莢の形が扁たく、籬に沿ふて蔓延するものだ。蛾眉とは豆の脊に通つてゐる白い路に象つたものである。

【集解】 弘景曰く、藊豆は人家で籬垣に種ゑてあるものだ。その莢は、蒸して食ふと甚だ美味だ。

頌曰く、蔓は延びて上り、葉は大きく、花は細かく、花に紫、白の二色あつて、莢は花の下に生え、その實には黑白の二種あつて、白いものは溫だが黑いものは少し冷である。藥には白いものを用ゐる。黑いものは鵲豆と名ける。蓋しその黑い筋が鵲の羽のやうに通つてゐるからである。

〔藊豆〕
——莢は多く同じくない——

時珍曰く、扁豆は二月に種を下し、蔓生して延纏し、葉は盃ほどの大いさで團く

して尖があり、その花の形狀は小蛾に翅や尾があるやうだ。莢には凡そ十餘通りあつて、或は長く、或は圓く、或は龍爪、虎爪などのやう、或は猪耳、刀鎌などのやう、種種さまざまだが、いづれも纍纍として枝をなし、白露の節後に實つて更に繁衍する。嫩いうちには蔬菜にもなり、花菓子にもなり、老いれば子を取收めて煮て食ふ。子には黑、白、赤、斑の四種ある。一種は莢が硬くて食へない。ただ豆子の粗く圓くして色の白いものだけを藥に用ゐられる。本草にその區別を記さなかつたのは缺點だ。

白扁豆　修治　時珍曰く、凡そ使用するには、殼の硬い扁豆子を取り、皮のまま炒熟して藥に入れる。また水に浸して皮を去る場合、生で用ゐる場合もある。それぞれの方に從ふ。

(二)氣味　【甘し、微溫にして毒なし】詵曰く、微寒である。冷の患者は食つてはならぬ。弘景曰く、寒熱の患者は食つてはならぬ。

主治　【中を和し、氣を下す】(別錄)【五臟を補し、嘔逆に主效がある。久しく服すれば頭が白くならぬ】(孟詵)【霍亂吐利の止まぬを療ず。研末して醋に和して服

(二)木村(康)曰ク、果實未熟ノモノノ組成ハ水分九二・一六、蛋白質二・二六、脂肪〇・一五、含水炭素二・三五、纖維二・四六、灰分〇・六二、種子ノ組成ハ水分一〇

す】（蘇恭）【風氣を行り、婦人の帯下を治し、酒毒、河豚魚（かとんぎよ）の毒を解す】（蘇頌）【一切の草木の毒を解す。生で嚼み、また煮汁を飲んで效を取る】（甄權）【泄痢を止め、暑を消し、脾、胃を暖め、濕熱を除き、消渇を止める】（時珍）

【發明】時珍曰く、硬殼白扁豆（はくへんづ）は、その子がよく實し、白くして微し黄に、その風は腥香で、性は溫、平にして中和を得てゐる。脾の穀であつて、かの太陰の氣分に入り、三焦を通利し、能く淸を化して濁を降すものだ。故に專ら（三）中宮の病を治し、暑を消し、濕を除き、また毒を解するのである。その軟殼のもの、及び黑鵲色のものは性が微涼であつて、ただ食料になるだけだが、やはり脾、胃を調へるものだ。

【附方】新九。【霍亂吐利】扁豆、香薷（かうじゆ）各一升、水六升を二升に煮て分服する。（千金）【霍亂轉筋】白扁豆を末にし、醋で和して服す。（普濟方）【消渇飲水】金豆丸（きんづぐわん）——白扁豆を浸して皮を去つて末にし、天花粉汁と蜜とで和して梧子大の丸にし、金箔を衣にかけ、一日二回、二三十丸づつを天花粉汁で服す。炙煿（しやせん）したもの、酒色を忌む。次いで滋腎の藥を服す。（仁存堂方）【赤（しやく）、白帯下（びやくたいげ）】白扁豆を炒つて末にし、二

—一二、含窒素物一八・二一—二五・七、無窒素物五四—六二、脂肪〇・八—一・四二粗纖維二・六—六・五灰分二・五二—四・九四、青酸ヲ發生シ得ベシト。

（三）中宮ハ臟腑ヲ指スモノナラン。

錢づつを米飲で服す。【毒藥で胎を墮したもの】婦人が草藥を服して墮胎し、腹痛するには、生白扁豆を皮を去つて末にし、米飲で方寸匕を服し、濃煎汁を飲む。丸にして服するもよし。もし胎氣が已に傷れて未だ墮せぬもの、或は口噤し、手强し、自汗し、頭を低れて中風に似た症狀ならば九死一生である。醫師は多くはそれを識らずして風としては治療を施すことがあるが、それでは必ず死亡すること疑ない。【砒霜の中毒】白扁豆を生で水に研り、絞つてその汁を飮む。（いづれも永類方）【六畜の肉の中毒】白扁豆を燒いて性を存して研り、（四）塗水で服するが良し（事林廣記）【諸鳥肉の中毒】生扁豆末を冷水で服す。（同上）【惡瘡痂痒】痛むには、扁豆を擣いて封すれば痂が落ちて癒える。（肘後）

花　〔主治〕【婦人の赤白帶下には、乾して末にし、米飲で服す】（蘇頌）【焙じ研つて服すれば崩、帶を治す。餛飩にして食へば泄痢を治す。水に擂つて飲めば一切の藥毒の中毒で死に垂たるを解す。功力は扁豆と同じ】（時珍）

〔附方〕　新二。　【血崩の止まぬもの】白扁豆花を焙じ乾して末にし、二錢づつを、炒米を煮た飲に鹽少量を入れて調へて空心に服す。即效がある。（奇效良方）【一切

（四）塗ハ冷ノ誤。

の泄痢】白扁豆花の正しく開いた清淨なものを擇り取り、洗はずに滾湯で淪き、小豬の脊(五)脂肉一條、葱一根、胡椒七粒を和して醬汁で拌匀し、適度になつたとき、豆花を淪いた汁で麪を和してそれを包み、小餛飩にして炙熟して食ふ（必用食治方）

葉　主　治　【霍亂吐下のやまぬもの】（別錄）【吐利後の轉筋には、生で一把を擣いて酢少量を入れ、汁を絞つて服す。立ろに瘥える】（蘇恭）【醋で炙いて研つて服すれば瘧疾を治す】（孟詵）【杵いて蛇咬に傅ける】（大明）

藤　主　治　【霍亂には、蘆籜、人參、倉米と等分を煎じて服す】（時珍）

(一)刀　豆（綱　目）

和　名　なたまめ
學　名　*Canavalia gladiata*, DC.
科　名　まめ科（荳科）

釋　名　**挾劍豆**　時珍曰く、莢の形から名けたものだ。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『(二)樂浪に挾劍豆といふがある。莢が橫斜に生つたさまが人が劍を挾んだやうだ』とあるはこの豆のことだ。

集　解　頴曰く、刀豆は長さ一尺ばかりのものだ。醬に入れるに用ゐる。

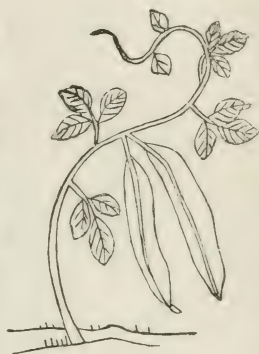
(五)脂、恐クハ胳ノ誤

(一)牧野云フ、一般ニ栽培セラレテ其嫩莢ヲ食用ニ供シ其豆ハ食セヌ、豆ハ多少有毒ダト稱スル人ガアル、處ニヨリたてわきト呼バルル、近時叢ガ直立シテ矮生ノモノガアル、之レヲたちなたまめ（新稱）ト稱スル、即チ其學名ハC. ensifor-

mis, DC. デアル。

(二) 樂浪ハ鱗部無鱗部類鯑魚ノ註ヲ見ヨ。

(三) 木村(康)曰ク、なたまめノ種子ノ組成(%)ハ水分八―一三、蛋白質二二・七―二六・八、無窒素物四九―六二、脂肪二・六―三、粗纖維一・一―六・六、灰分二・二五―三・八三、果實ハ蛋白質一七・七六、無窒素物六五・一、粗纖維一九・三、灰分三・七九、各種ノ「アミノ」酸酵素等ト共ニ有力ナル「ウレトーゼ」ヲ有ス。民間藥トシテ

〔刀豆〕

時珍曰く、刀豆は一般に多く種ゑるもので、三月種を下し、蔓生で一二丈に引き延び、葉は豇豆の葉のやうでやや長く大きく、五六七月に紫色で蛾の形のやうな花を開き、結ぶ莢は長さは一尺に近く、微し皂莢に似て扁く、劒脊の三稜がさながら名にいふ通りだ。嫩いうちは煮て食ひ、醬で食ひ、蜜で煎じてもいづれも佳し。老いると子を取收める。子の大いさは拇指の頭ほどで淡紅色だ。猪肉、雞肉と共に煮て食ふが尤も美味である。

(三)【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【中を溫め、氣を下し、腸、胃を利し、呃逆を止め、腎を益し、元を補す】(時珍)

【發明】時珍曰く、刀豆は本草に記載がない。ただ近頃の零細な書籍に記事があつて、この豆が元陽を補することを記載し、又『ある者が病後に呃逆が止まず、その聲が隣家まで聞えたが、ある人が刀豆子を燒いて性を存し、二錢を白湯で調へ

脊痛ニ苢子ヲ用ウル地方アリ。

（二）牧野云フ、黎豆ハ本草綱目啓蒙ニ從テ下ノ品ニ充ツルヲ正當ト考ヘル、此レハ我邦デ偶マニ作ラレテヰルが下等ナ豆デアル、植物名實圖考ニハ黎豆ヲ Phaseolus 屬ノつるあづきニ似タ一種ノモノトシテアルが、釋名竝ニ集解ノ文ニ考フレバ前者トスル方適當デアル。

て服ませると直ちに止んだ』とある。これはやはり氣を下し、元に歸する意味を應用したもので、それで逆が自から止んだのだ。

（二）黎豆（拾遺）

和名　はつしやうまめ、おしやらくまめ
學名　Stizolobium Hasjoo, Piper et Tracy.
科名　まめ科（荳科）

校正　草部より此に移し入る。

釋名　**黎豆**（綱目）　**虎豆**　藏器曰く、豆子に貍の首の文のやうな文があるから名けたものだ。時珍曰く、黎はやはり黒色をいつたのだ。この豆は、莢が老いると黒色になり、毛があつて筋が露れ、虎か貍の指爪のやうになり、その子にも虎、貍の斑のやうな點があり、煮れば汁が黒くなる。故にこれ等の諸名が生じたのだ。

〔黎豆〕
──熊爪豆──

【集解】藏器曰く、黎豆は江南に生ずる。蔓は葛のやう、子は皂莢子のやうで貍首の文がある。一般に炒つて食ふ。格別の功はない。陶氏の蝍蛇の註に『黎豆のやうだ』といつたのはこれをいつたのだ。爾雅には『諸慮、一名虎涉』とあり、又、櫐根の註に『苗は豆のやうだ』といひ、爾雅に『攝は虎櫐なり』とあつて、郭璞の註に『江東では櫐と呼ぶ。葛に似た藤になり、粗大で林樹に纒蔓し、莢に毛刺がある。一名豆蔻といふ』とある。これは今の虎豆で、千歲櫐のことだ。

時珍曰く、爾雅にいふ虎櫐は貍豆のことで、古代には藤を櫐といつた。後世のものがその櫐を貍と訛つたのである。爾雅に、山櫐、虎櫐とあるは元來二種のものであつて、陳氏がそれを合して一とし、諸慮、一名虎涉といひ、又、これを千歲櫐としたのはいづれも誤である。千歲櫐は草部に記載してある。貍豆は野生のものだが、山地住民中にはこれを種ゑるものもあつて、三月に種を下せば蔓が生え、葉は豇豆の葉のやうだが、ただ文理が偏斜になつてゐる。六七月に簇つた花を開き、その花の色は紫で、形狀は扁豆の花のやうだ。一本の枝に十餘の莢を結び、その莢は長さ三四寸、太さ拇指ほどで白茸毛があり、老いれば黑くなつて筋が露れ、宛ら乾いた

熊の指の爪のやうな形狀になる。その子の大いさは刀豆の子ほどで、淡紫色で貍の文のやうな斑點がある。煮て黒汁を去り、猪、雞の肉と再び煮て食ふと味が佳(よ)くなる。

(三)**氣味**【甘く微し苦し、溫にして小毒あり】多く食へば人をして悶せしめる。

主治【中を溫め、氣を益す】(時珍)

(三)木村(康)曰ク、種子ハ二%ノ脂肪油ト共ニ「パルミチン」酸、「ステアリン」酸、油酸(?)其他植物鹽基、鞣酸等ヲ含ム。種子ヲ煮テ食用トス多食スレベ逆上スル氣味アリ。

本草綱目穀部第二十四卷　終

本草綱目穀部

第二十五巻

本草綱目穀部目錄第二十五卷

穀の四　造釀類二十九種

大豆豉 別錄　豆黃 食療　豆腐 日用　陳廩米 別錄

飯 拾遺　青精乾石䭀飯 圖經　粥 拾遺 諸藥粥を附す。

麩 拾遺　米糒 綱目　糉 綱目　寒具 綱目

蒸餅 綱目　女麴 唐本　黃蒸 唐本　麴 嘉祐

神麴 藥性　紅麴 丹溪補遺　蘗米 別錄 即ち麥芽、穀芽。

飴餹 別錄　醬 別錄　楡仁醬 食療　蕪荑醬 食療

醋 別錄　酒 別錄 諸藥酒を附す。　燒酒 綱目

葡萄酒 綱目　糟 綱目　米粃 食物　舂杵頭細糠 別錄

右附方　舊八十、新一百。

穀の四　造醸類二十九種

大豆豉（別錄中品）

和名　からなつとう
洋名　Bean relish.

【釋名】時珍曰く、按ずるに、劉熈の釋名に『豉は嗜である。五味を調和して甘嗜にする』とある。許愼の說文に、豉を『配鹽幽菽』といつてあるは鹹豉のことである。

【集解】弘景曰く、豉は、(一)襄陽、(二)錢塘に產するものが香美にして濃い。藥に入れるには中心のものを取つて用ゐるのが佳し。

藏器曰く、(三)蒲州の豉は味が鹹い。作る方法が諸種の豉と異ふので、その味が烈いのだ。(四)陝州にある豉汁は(五)十年經ても腐敗せぬ。藥に入れるには今用ゐてゐる豉心に如くはない。それは鹽がないからである。

詵曰く、陝府の豉汁が通常の豉に比して甚だ勝れてゐる。その釀造法は、大豆を黃に蒸し、一斗に對てし鹽四升、椒四兩を加へ、春は三日、夏は二日(六)置いて半熟

(一)襄陽ハ石部握雪礜石ノ註ヲ見ヨ。
(二)錢塘ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(三)蒲州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。
(四)陝州、陝府ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。
(五)大觀ニ十字ナシ。
(六)大觀ニ冬五日ノ三字アリ。

となつたとき、生薑五兩を加へるのである。十分潔淨であり、且つ精良なものだ。

○時珍曰く、豉は諸大豆いづれも造れるものだが、黑豆で造つたものを藥に入れ、淡豉と鹹豉とあるが、治病には多く淡豉を用ゐる。汁、及び鹹いものはそれぞれの方に從つてその方法を取つて用ゐる。豉心と稱するは、豉を合せてあるその內の中心の部分から取出して用ゐるをいふのであつて、皮を剝いで心を取るといふのではない。この說は外臺祕要に記載されてある。

淡豉製造法――黑大豆二三斗を用ゐる。時期は六月中。その豆を淘淨し、一夜水に浸してからその水を切つて乾し、蒸熟して蓆の上に取出して攤げ、微溫になるを候つて蒿で覆ひ、三日に一回づつ覆ふた中を看て、黃衣が全面にかかつたとき取り出す。黃衣が厚くかかり過ぎてはならぬ。それを晒して淸淨に簸ひ、水を拌ぜて乾濕の適度を計り、汁が指の間につく位を程度として甕中にぎついいりに塡め、桑葉で厚さ三寸に蓋ひ、泥で目塗をし、それを七日間日中に晒してから取出して一時曝し、また水を拌ぜて甕に入れる。かく七回繰返してから再び蒸し、攤げて火氣を去つてから甕に收めて、よく押し詰めて封じて置けば出

來上る。

鹹豉製造法――大豆一斗を用ゐ、水に三日間浸して淘り、蒸して攤げ、それを罯ひ、黃衣のかかるを俟つて取出して簸ひ淸め、水で淘つてから漉して乾し、それを四斤毎に鹽一升、薑絲半斤、椒、橘、蘇、茴、杏仁を入れてよく拌ぜ、甕に入れて水を表面から一寸深さまでに浸し、箬で蓋ひ、口を封じて一个月晒して置けば出來上る。

豉汁を造る法――時期は十月から正月まで。好き豉三斗を用ゐ、淸麻油を烟がなくなるまで熬つて一升をその豉に拌ぜて蒸し、攤し冷して晒し乾し、また拌ぜて再び蒸す。かく三囘繰返してから、白鹽一斗と擣き和して湯で淋汁三四斗を取り、淸淨な釜に入れて椒、薑、葱、橘、絲を投じ、共に煎じて三分の一を減じたとき、外部に津液の滲出せぬ器に貯藏する。かくすれば香氣の非常に勝れたものが出來上る。

また麩豉、瓜豉、醬豉などさまざまのものも造れるが、それは食品に供し得るだけのもので藥用には入れない。

淡豉　氣味　【苦し、寒にして毒なし】思邈曰く、苦く甘し、寒にして澁る。醯と配合するが良し。杲曰く、陰中の陰である。

主治　【傷寒で頭痛し、寒熱するもの、瘴氣惡毒で煩躁し、滿悶するもの、虚勞で喘吸するもの、兩脚の疼冷。六畜胎子の諸毒を殺す】(別錄)【時疾熱病を治し、汗を發す。熬つて末にしたものは、能く盜汗を止め、煩を除く。生で搗いて丸にして服すれば、寒熱風で胸中に瘡の生じたるを治す。煮て服すれば、血痢、腹痛を治す。研つて陰莖に生じた瘡に塗る】(藥性)【瘧疾、骨蒸、藥の中毒、蠱氣、犬咬を治す】(大明)【氣を下し、中を調へ、傷寒、溫毒、發癍、嘔逆を治す】(時珍)　千金の溫毒を治する黑膏中にこれを用ゐてある。

蒲州豉　氣味　【鹹し、寒にして毒なし】主治　【煩熱熱毒、寒熱虚勞を治し、中を調へ、汗を發し、關節を通じ、腥氣を殺す。傷寒鼻塞。陝州の豉汁もやはり煩熱を除く】(藏器)

發明　弘景曰く、豉は食事の際に常に用ゐる。春、夏期の(七)氣不和には、蒸し炒つて酒に漬けて服するが至つて佳し。康伯の法に依ると、先づ醋、酒を溲ぜ、

(七)大觀ニ春夏之氣ヲ春夏天氣ニ作ル。

(八)大觀ニ飲チ浸ニ作ル。

蒸して曝し燥し、麻油を和して再び蒸して曝し、凡そ三回繰返してから、末椒、薑を和して調理するのであつて、食慾を進める點に於て當今の油豉に甚だ勝るものだ。脚疾を患ふ人は、常に酒に漬けたものを(八)飲み、滓を脚に傅ける。いづれも瘥える。

頌曰く、古今の方書に、豉を治病に用ゐた事實がなかなか多い。江南地方では豉を善く作る。凡そ時氣に罹つた場合には、取りあへず葱豉湯を服して汗を取れば往往にして瘥えるものだ。

時珍曰く、陶氏の說の康伯豉法は博物志に記載があつて『もとは外國に產したものだ』とある。中國で康伯と謂ふは、その方法を傳來した人の姓名だ。この豉は中、下の氣を調へるに最も妙なるものである。黑豆の性は平であるが、豉に作れば溫となり、一旦蒸罯の加功を經てゐるものだから、能く升り、能く散じ、葱と配合すれば汗を發し、鹽と配合すれば能く吐し、酒と配合すれば風を治し、薤と配合すれば痢を治し、蒜と配合すれば血を止め、炒熟すればまた能く汗を止める。やはり麻黃の根と節とのやうな意味である。

附方　舊三十一、新十八。

【傷寒に汗を發す】頌曰く、葛洪の肘後方に『傷寒に

(九)大觀ニ身ヲ內ニ作ル。

(一〇)大觀ニ此處ニ若不汗ノ三字アリ。

(一一)大觀ニ傷寒不止ヲ傷寒汗出ニ作ル。

數種あつて、凡庸の者には卒かに區別はつかないものだ。ここにこの一藥でそれぞれのものを兼ね療ずる。凡そ初めは頭痛し、(九)身熱あるを覺え、脈洪にして一二日のものは葱豉湯で治す。葱白一虎口、豉一升を綿で裹み、水三升で一升に煮て頓服し、汗を取る。(一〇)更に作るときは葛根三兩を加へ、再び汗せぬときは麻黄三兩を加へる。○肘後の又ある方では、葱湯で煮た米粥に鹽豉を入れて食つて汗を取る。○又ある方では、豉一升を男童の尿三升で一升に煎じ、分服して汗を取る。【傷寒の解せぬもの】傷寒が(一一)解せぬのみに止らず、已に三四日にして胸中の悶惡するには、豉一升、鹽一合、水四升を一升半に煮て分服し、吐を取る。これは祕法である。(梅師方)【溫疫の辟除】豉に白朮を和し、酒に浸して常服する。(梅師)【傷寒懊憹】吐下の後に心中が懊憹するもの、甚しく下して後身熱が去らずして心中の痛むものは、いづれも梔子豉湯を用ゐて吐かす。肥梔子十四箇を水二盞で一盞に煮て豉半兩を入れ、共に七分までに煮て滓を去つて服す。吐が止んで後に服するのである。(傷寒論)【傷寒の餘毒】傷寒後に毒氣が手足、及び身體を攻めて虛腫するには、豉五合を微し炒つて酒一升半と共に煎じ、五七沸して適宜に飲む。(簡要濟衆)【傷寒の目翳】燒

(一二)大觀ニ肘後ヲ傷寒類要ニ作ル。
(一三)大觀ニ藏毒下血不止ニ作ル。

豉十四箇を研末して吹く。(一二)(肘後)【傷寒暴痢】藥性論に『豉一升、薤白一握、水三升を用ゐ、薤を煮て熟したとき豉を納れ、更に煮て色が黑くなつたとき豉を去り、二回に分服する。【(一三)血痢の止まぬもの】豉、大蒜等分を杵いて梧子大の丸にし、三十丸づつを鹽湯で服す。(王氏博濟)【血痢で刺すやうに覺えるもの】藥性論に『豉一升を水に漬けて淹し煎じ、兩沸して汁を絞つて頓服する。瘥えぬときは再び作つて用ゐる。【赤、白重下】葛氏は、豆豉を熬つて少し焦し、一日三回、搗いて一合を服す。或は炒り焦して水に浸し、その汁を服しても效驗がある。○外臺では、豉心を炒つて末にし、一升を四回に分けて酒で服す。口に入れば止まる。【臟毒下血】烏犀散――淡豉十文、大蒜二箇を煨き、共に擣いて梧子大の丸にし、一日二回、二十丸づつを香菜の煎湯で服し、平安を得れば止める。永く根本を絶つ。忌むものなし。○廬州の彭大祥は『この藥は甚だ妙なるものだ。但し大蒜で丸にして蒸すが佳し。それを冷虀水で服するのである。曾て朱元成が「私の姪、及び陸子楫提刑がいづれもこれを服し、數十年の疾が更に作らなくなつた」と話した』といつた。(究原方)【小便血條】淡豆豉一撮の煎湯を空腹に飲む。或は酒を入れて服す。(危氏得效方)【瘧疾寒

熱】豉を煮た湯を數升飲んで大いに吐すれば癒える。(肘後方)【小兒の寒熱】惡氣人に中るには、濕豉を研つて雞子大の丸にし、それで腮上、及び手、足の心を六七回摩し、また心、臍上をそろそろ摩で廻しながら咒文を唱ひ、それが了るとその豉丸を破つて看て、中にある細い毛を道路に棄てる。それで瘥える。(食醫心鏡)【盜汗の止まぬもの】豉一升を微し炒つて香しくし、淸酒三升に三日間漬けて汁を取り、冷、暖意に任せて服す。瘥えぬときは更に二三回合劑して服すれば止る。【齁喘痰積】雨天の際には大抵發つて、坐することも臥すこともならず、飲食が進まぬは、肺竅に久積せる冷痰が陰氣の觸動に遇ふから發るのである。この藥一服を用ゐれば癒える。七八回まで服すれば惡痰數升を出し、藥性もまた隨つて出て根絕する。江西の淡豆豉一兩を蒸して泥のやうに搗き、砒霜末一錢、枯白礬三錢を入れて綠豆大の丸にし、七丸づつを冷茶、冷水で服す。甚しきには九丸を服す。小兒は五丸を服す。そのまま枕を高くして仰臥する。熱い物等を食ふを忌む。(皆效方)【風毒膝攣】骨節の痛むには、豉(二四)三五升を九蒸九暴し、酒一斗に一夜浸し、空心に適當量を溫飲する。(食醫心鏡)【手足不隨】豉三升、水九升を三升に煮て三回に分服する。又ある法で

(二四)大觀ニ三升心ニ作ル。

は、豉一升を微し熬つて囊に入れ、酒三升の中に三晝夜漬けて溫服し、常に微醉するが佳し。(肘後)【頭風疼痛】豉湯で頭を洗ひ、風を避けて瘥效を取る。(孫眞人方)【突然の言語不能】豉の煮汁に美き酒を加へ入れて服す。(肘後)【喉痺の言語不能】豉汁を煮て一升を服し、厚く覆ふて汗を取り、桂末を舌下に著けて嚥む。(千金)【咽に瘜肉の生じたもの】鹽、豉を和し搗いて塗る。豫め刺破つて血を出してから用ゐるが神效がある。(聖濟總錄)【口舌に瘡を生じたもの】胸膈の疼痛するには、焦した豉の末を含めば一夜にして瘥える。(聖惠方)【舌上の出血】針の孔のやうなもののあるには、豉三升、水三升を煮沸し、一日三回、一升を服す。(葛氏方)【墮胎下血】煩悶するには、豉一升、水三升を煮て三沸し、鹿角末方寸匕を調へる。(子母祕錄)【妊娠動胎】豉汁を服するが妙である。これは華佗の方である。(同上)【婦人難產】兒枕の破れたると敗血とがその胎兒を裹む場合である。勝金散を用ゐてその敗血を逐へば順になる。鹽豉一兩を舊い青布に裹んで赤く燒いて乳細し、麝香一錢を入れて末にし、秤錘を紅く燒いて酒に淬し、その酒一大盞で調へて服す。(郭稽中方)【小兒の胎毒】淡豉を煎じた濃汁三五口を與へれば、その毒が自ら下る。また能く脾氣を助け、乳や食物を

（一五）哯音衍、小兒嘔乳ナリ。

（一六）大觀ニ此處ニ得分穩ノ三字アリ。

消化する。（聖惠）【小兒の（一五）哯乳】鹹豉七箇を皮を去り、膩粉一錢と共に研つて黍米大の丸にし、三五丸づつを藿香湯で服す。（全幼心鑑）【小兒の丹毒】瘡になつて水を出すには、豉を烟が盡きるまで炒つて末にし、油で調へて傅ける。（姚和衆方）【小兒の頭瘡】黃泥で裹んで煨熟し、取り出して研り、蓴菜油で調へて傅ける。（勝金）【發背癰疽】已に潰れたものにも、未だ潰れぬものにも、香豉三升に少量の水を入れて擣いて泥にし、腫れた部分の大いさに隨つて三分厚さの餅にし、瘡に孔のあるときはその孔を覆はぬやうにその豉餅を鋪き、その上に艾を列べて灸する。但し溫かに感ずる程度とし、肉を破らぬやうにする。熱痛を感ずるときは急に易へる。病患はそれで減じて快くなる（一六）。一日二囘灸する。孔がある場合には、豫め汁を出すが妙である。（千金方）【一切の惡瘡】豉を熬つて末にして傅ける。三四囘に過ぎぬ。楊氏產乳に記載がある。【陰莖に瘡を生じたるもの】痛み、爛れたるには、豉一分、蚯蚓濕泥二分を水で研り和して塗り、乾けば易へる。熱き食物、酒、蒜、芥菜を禁ず。（藥性論）【蠼螋尿瘡】鼓を杵いて傅けるが良し。（千金）【蟲に刺されたとき】豉心を嚼んで敷く。少頃して豉中に毛のあるが見えれば瘥える。もし見えぬときは再び傅け、毛の

見えるまで晝夜休まず試みる。（外臺）【蹉跌の破傷】筋骨を傷めたるには、豉三升を水(一七)三升に漬けてその濃汁を飲む。心悶を止める。（千金）【毆打傷の瘀聚】腹中の悶滿するには、豉一升、水三升を煮て三沸して分服する。瘥えぬときは再び試る。（千金）【蜀椒の毒を解す】豉汁を飲む。（千金方）【牛、馬の中毒】豉汁に人乳を和して頻りに服すれば效がある。（衛生易簡）【小蝦蟇の毒】小蝦蟇は有毒のもので、それを食へば小便が祕澀し、臍下が悶痛し、死に至ることがある。生豉一合を新汲水半椀に投じて浸し、濃汁を頓に飲めば癒える（茆亭客話）【酒中毒の病】豉、葱白各半升、水二升を一升に煮て頓服する。（千金方）【服藥過劑】悶亂するには、豉汁を飲む（千金）【雜物の眯目】出ぬには、豉二十一箇を水に浸し、それで目を洗つて視れば出る。（總錄方）【刺の肉中に在るもの】豉を嚼んで塗る（千金方）【小兒の淋病】方は蒸餅の發明の項に記載する。【腫の脚から起るもの】豉汁を飲み、滓を傅ける（肘後方）

豆黃（食療）

和名　くろまめのかうぢ
洋名　Bean mould.

【按正】もとは大豆の條下に附してあつたが、本書にはこ

(一七)大觀ニ三升ニ作ル。

れを分離して記載した。

【釋名】時珍曰く、釀造法は、黑豆一斗を蒸熱して蓆の上に鋪き、蒿でそれを覆ふて盦醤法のやうにし、表面が黄になるを待ち取出して晒し乾し、末に搗いて取收めて用ゐる。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、豬肉を忌む。【主治】【濕痺、膝痛、五臟の不足、脾、胃の氣の結積。氣力を壯にし、肌膚を潤ほし、顏色を益し、骨髓を塡て、虛損を補し、食を能くし、身體を肥健にする。錬豬脂で和して丸にし、百丸づつを服す。神驗の祕方である。肥えた人は服してはならぬ】（詵）記載は延年祕錄方にある。【生で嚼んで陰痒で汗の出るに塗る】（時珍）

【附方】新二。【脾弱で物を食はぬもの】これを餌つて食事に當てる。大豆黃二升、大麻子三升を香しく熬つて末にし、一日四五回、任意に一合づつを飲で服す。（千金方）【打撲の靑腫】大豆黃を末にし、水で和して塗る。（外臺祕要）

豆腐（日用）

和名　とうふ
洋名　Bean curd.

【集　解】 時珍曰く、豆腐の法は漢の淮南王劉安から始まつた。凡そ黑豆、黃豆、及び白豆、泥豆、豌豆、綠豆の類はいづれも造れるもので、その製造法は、水に浸して磑き碎き、滓を濾し去つて煎じ上げ、それに鹽鹵汁、或は山礬葉、或は酸漿、醋澱を入れて釜で凝收させる。又、缸內に入れて石膏末で凝收させる方法もある。大抵鹹、苦、酸、辛の物を配合するといづれも收斂するものだ。その表面の凝結した部分を揭げ取つて晒し乾したものを豆腐皮と名ける。これは料理の中に入れて甚だ佳いものだ。

（一）

【氣　味】 『甘く鹹し、寒にして小毒あり』 原曰く、性は平なり。頴曰く、寒にして氣を動ずる。瑞曰く、腎氣、瘡疥、頭風を發するが、杏仁で解し得るものだ。時珍曰く、按ずるに、延壽書に『ある者が好んで豆腐を食つて中毒し、醫治不能であつたが、豆腐製造業者の話に、萊菔が湯の中に入ると腐にならぬものだと聞いたので、萊菔湯で藥を服ませると癒えた』とある。概して暑期には人の汗が入つてゐる恐があるから尤も注意を要する。

【主　治】 『中を寬にし、氣を益し、脾、胃を和し、脹滿を消し、大腸の濁氣を下

（一）木村(康)曰ク、我ガ豆腐ノ組成ハ水分八八・七九%、含窒素物六・五五、脂肪二・九五、無窒素物一・〇五、粗纖維〇・〇二、灰分〇・六四。支那ノ豆腐ハ製法出來上リ共ニ本邦ノモノト異ナル、ソノ組成ハ未ダ知ルニ至ラズ。

す】（寗原）【熱を淸し、血を散ず】（時珍）

【附方】舊四。【休息久痢】白豆腐を醋で煎じて食へば癒える。（普濟方）【赤眼腫痛】數種あるが、いづれも肝熱で血が凝るのである。風熱を消する藥を服し、夜間鹽で凝收した豆腐片を貼る。醋漿で造つたものは用ゐてはならぬ（證治要訣）【杖瘡の靑腫】豆腐を切片して貼り、頻りに易へる。ある法では、燒酒で煮て貼る。色の紅くなるときは易へ、紅くならぬときはそのままにする（拔萃方）【燒酒の醉死】心頭の熱するものには、熱した豆腐を細に切片して全身に貼り、冷えれば換へる。甦つたときは止める。

陳廩米（別錄下品）

和名　ふるごめ
洋名　Old rice.

【釋名】陳倉米（古名）　老米（俗名）　火米　時珍曰く、屋根あるを廩といひ、屋根なきを倉といふ。いづれも官營の貯藏である。方なるを倉といひ、圓きを囷といふは、いづれも私人の貯藏である。老とあるもやはり陳いの意味だ。火米には三種あつて、火で蒸して加工するものと火で燒いて加工するものとあり、又、畬田の

火米といふもあるが、これは此にいふ火米と異ふ。

【集解】弘景曰く、陳廩米、卽ち粳米であつて、久しく倉中に貯藏して陳く赤くなつたもののことである。それは軍隊に廩けるものだといふので廩といつたのである。方中に多くこれを用ゐる。一般にはこれで酢を作るが、結果は新粳米に勝る。

藏器曰く、廩米は、(一)呉地方では粟が良いといひ、漢地方では粳を善いといふ。やはり呉の紵、鄭の縞が、それぞれ(二)近きものを貴しとされ、遠きものが賤しとされるやうなものである。その功力に就いての正確な認識からいへば粟を取るべきものであらう。

宗奭曰く、諸家の註說には粳とも粟とも指定してないが、しかし二米いづれにするも、その陳いものは性がみな冷であつて、煎煮してもやはり膏膩がない。(三)粉にして食へば自利を起すところは、經の說と事實とがやや矛盾する。

時珍曰く、廩米は、北方では多く粟を用ゐ、南方では多く粳、及び秈を用ゐる。いづれも水に浸して蒸し晒して作り、また火で燒いて加工するものもある。倉に入つて陳久なものは、いづれも氣が過ぎて色が變じてゐる。故に古人は『紅粟、紅腐、

(一)呉ハ土部甘鍋ノ註、漢ハ石部理石漢中ノ註參照。

(二)大觀ニハ反對ノ文字アリ左ノ如シ、蓋貴レ遠賤レ近之義焉コレ時珍ノ誤寫タルコト明ナリ。

(三)大觀ニ粉ヲ頻ニ作ル。

陳陳相因る』といつた。

【氣　味】『鹹く酸し、温にして毒なし』藏器曰く、廩米は、熱食すれば熱である。冷食すれば冷である。これは火氣を假るためであつて、そのもの自體は温、平なるものだ。馬肉と共に食へば痼疾を發する。時珍曰く、廩米は、年久しきものはその性が多くは涼である。ただ炒つて食へば温なるだけだ。熱食すれば熱だといふやうなわけがあらうか。

【主　治】『氣を下し、煩渴を除き、胃を調へ、洩を止める』(別錄)『五臟を補し、腸、胃を澀す』(日華)『脾を暖め、憊氣を去る。湯にして食ふが宜し』(士良)『飯に炊いて食へば、痢を止め、中を補し、氣を益し、筋骨を堅くし、血脈を通じ、陽道を起す。飯に酢を和して搗いて毒腫、惡瘡を封ずれば立ろに瘥える。北方の地では、飯を甕中に入れ、水で浸して酸くして食ふ。これは五臟、六腑の氣を暖める。(同)米を研つて服すれば卒心痛を去る』(孟詵)『中を寛にし、食物を消化する。多食して饑ゑ易い』(寗原)『腸、胃を調へ、小便を利し、渴を止め、熱を除く』(時珍)

【發　明】時珍曰く、陳倉米は煮汁が渾らない。當初に於て氣味が倶に盡きてゐ

(同)大觀ニ米ヲ取汁ノ二字ニ作ル。

るから、沖淡であつて胃を養ふによし。古人は多く煮汁で藥を煎じたが、やはりその腸、胃を調へ、小便を利し、濕熱を去る功力を取つたのだ。千金方に『洞注下利を治するに、この米を炒つて研末し、飲で服す』とあるは、やはりこの意味を取つたのだ。日華子がこれを『腸、胃を澀す』といひ、寇氏がこれを『冷にして利す』といつたのは、いづれも中正な意見でない。

附方 新五。【霍亂大渴】ために死亡することがある。黄倉米三升、水一斗の煮汁を澄清して飲むがよし。(永類鈐方)【反胃膈氣】食物の入らぬには、大倉散 ―― 倉米、或は白米を日の西に傾いたとき水を微し拌ぜて濕ほし、患者自ら口氣がその米の中に在るやうに想念し、翌日晒して袋に盛つて風の吹く場所に掛け、その米一撮づつを水で煎じて汁共に飲む。即時に食物が入るものだ。○又ある法では、陳倉米で炊いた飯を焙じ研り、毎五兩に沈香末半兩を入れて和勻し、二三錢づつを米飲で服す。(普濟方)【諸般の積聚】太倉丸 ―― 脾、胃が饑飽時ならずして病を生じたものの、及び諸般の積聚、あらゆる物のために傷めたるを治す。陳倉米四兩、巴豆二十一粒を皮を去つて共に炒り、米を焦さぬやうにし、米が香しく豆が黒くなつたとき、

豆は擇り去つて用ゐず、白を去つた橘皮四兩を入れて末にし、糊で梧子大の丸にし、一日二回、五丸づつ薑湯で服す。（百一選方）【暑期の吐瀉】陳倉米二升、麥芽四兩、黄連四兩を切り、共に蒸熟して焙じ、研末して水で梧子大の丸にし、百丸づつを白湯で服す。

飯（拾遺）

和名　めし
洋名　Boiled rice.

【釋名】

【集解】時珍曰く、飯食は諸穀いづれでも作れるものだ。それぞれの米の性に隨つてその本條に詳記してある。しかし藥に入れる諸飯として類從されぬものがあるから、それは區別して取扱ふべきものだと思ふ。それ等は概してみな粳、秈、粟の米を採用することになつてゐる。

新炊飯　【主治】【床に遺尿するものには、熱飯一盞をその床の遺尿した箇所にあけて拌ぜ、病者本人に知らせぬやうに食はす。又、熱に乘じて腫毒に傅けるが良し】（時珍）

寒食飯　饙飯である。［主治］【瘢痕、及び雜瘡を滅する。研末して傅ける】（藏器）【灰に燒いて酒で服すれば、その米の飲を食つて積となり、黃瘦し、腹痛するを治するに甚だ效がある】（孫思邈）【傷寒の食復には、この飯を燒いて研り、米飲で二三錢を服すれば效がある】（時珍）

祀竈飯　［主治］【卒かに噎するには、一粒を取つて食へば下る。燒き研つて鼻中の瘡に搽る】（時珍）

盆の邊りに零れた飯　［主治］【鼻中に生じた瘡には、燒き研つて傅ける】（時珍）

齒中に殘つた飯　［主治］【蠍蛟の毒痛はこれを傅ければ止まる】（時珍）

飧飯　飧の音は孫（ソン）卽ち水飯である。［主治］【熱して食へば、渴を解し、煩を除く】（時珍）

荷葉燒飯　［主治］【脾、胃を厚くし、三焦を通じ、生發の氣を資助する】（時珍）

［發明］　李杲曰く、易水の張潔古の枳朮丸は、荷葉で裹んで燒いた飯で丸にする。蓋し荷なるものは色が靑く中が空で、震の卦に象るものだ。風木は人體に在つては足の少陽——膽であつて、手の少陽——三焦と共に萬物を生化するの根蔕であ

る、この物を用ゐて化の働をなさせるからは、胃氣が上升せぬわけに行かないのであつて、更に燒飯で藥を和し、白朮と協力して穀氣を滋養するのだから、胃が厚くなり、再び傷むことがなくなるのである。その利は廣くして大なるものだ。

○○時珍曰く、按ずるに、韓懋の醫通に『東南地方のものは、北方では飯を炊く甑類が無いことを識らぬと見え、燒といふを燒菜のやうに燒いて作るものと思ひ、それが訛つて荷葉に飯を包んで灰火に入れて燒煨してゐる』といつたが丹溪などでさへやはりはつきりとは識らなかつたやうだ。しかし、ただ新荷葉を煮た湯に粳米を入れて飯に造れば氣味がやはり完全なのである。凡そ粳米の飯は、荷葉湯で炊いたものは中を寛にし、芥葉湯のものは痰を豁し、紫蘇湯のものは氣を行らし、肌を解し、薄荷湯のものは熱を去り、淡竹葉湯のものは暑を辟ける。いづれも類推すべきもである。

(一)青精乾石(二)䭀飯（宋圖經）

和名　そめいひ
洋名　Boild Rice, flavored with the leaves of of Vaccinum bracteatum Thunb.

(一)牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ之レヲなんてんめしト訓ズルハ非デアル、何トナ

レバ此書ノ集解ニアル南燭ハなんてんデハナクテしやくなげ科ノしやしやんぼ(Vaccinium bracteatum, Thunb.)デアルカラデアル。白井曰ク、牧野君ノ説ハ本草綱目三十六巻南燭ノ集解李時珍ノ説及植物名實圖考ニ據ラレタルモノニシテ、時珍説ノ南燭ハ其子實紫色ニシテ甘酸可食細子アリト云ヘバしやしやんぼトスルヲ適當トスレドモ、集解蘇頌ノ説ノ南燭ハ一名南天燭ト云フモノニテ、今日庭際ニ栽植シテ紅實ヲ結ブ所ノ南天ナリ。蘇頌及ビ綱目南燭ノ條ニ二物ヲ混説スル爲、庭木ノ南天ノ正シキ漢名南天燭ヲ移シテしやしやん

釋名 **烏飯** 頌曰く、按ずるに、陶隱居の登眞隱訣に太極眞人青精乾石䭀飯法の記載がある。䭀の音は三)信(シン)である。䭀の意味は飧(そん)であつて、酒、蜜、藥草などを溲(ま)ぜて曝したものを謂ふのである。また迅とも書く。凡そ内外の諸書にいづれもこの字はない。ただこの飯の場合にこの字を用ゐるだけだ。陳藏器の本草には烏飯(うはん)と名けてある。

集解 頌曰く、登眞隱訣記載の南燭草木の名狀に關する註は木部の本條下に揭げてある。その飯を作る法は、生白粳米一斛五斗をよく舂(つ)き淅(しら)げて一斛二斗を取り、南燭木の葉五斤——燥いたもの三斤でもよし——を莖皮を雜へて煮取つた汁を極めて淸冷にし、それに米を溲(ま)ぜ、米を釋(こ)いで炊くのである。四月から八月末までは新生葉を用ゐるから色がいづれも深く出來る。九月から三月までは宿(ふる)い葉を用ゐるから色がいづれも淺く出來る。その斤兩は隨時に進退してよし。又、軟枝の莖皮を採つて石臼で擣き碎き、假令ば四五日中に作るには十斤ばかりを用ゐ、よく舂(つ)いて一斛二斗を湯に浸し染めて一斛に煮詰て用ゐる。近來はただ水に一二夜漬けるだけで、必ずしも湯を用ゐずにそれを漉して炊く。初めは米が正紅色になるが、それ

ほノ漢名トセントスルノ人アルハ非ナリ。今日所謂南天ノ南天燭ナル事ハ紹興校定證類本草ノ圖說ニヨリテ明瞭ナリ。

(二)大觀ニ飢ニ作ル。

(三)大觀ニ信ヲ迅ニ作ル。

(四)茅山ハ石部石腦ノ註ヲ見ヨ。

を蒸すと紺色になる。もし色が思ふやうでなかつたときは、また淘り去つて更に新しい汁に漬け、灑すにも濩るにもみなこの汁を用ゐ、ただ飯が正青色に炊き上がるを程度とし、それを高い場所に置いて曝乾する。三回蒸し三回曝すのであつて、蒸す毎にその葉の汁を溲ぜてびしやびしやにする。毎日二升服するがよく、獸物の肉は一切食つてはならぬ。胃を塡て、髓を補し、三蟲を消滅する。上元寶經に『子、草木の王を服し、氣神と通ず。子、青燭の津を食し、命復た殞せず』とあるはこれをいつたのだ。現に(四)茅山の道士はやはりこの飯を作り、或は遠方への贈物などにするが、それを更に一回蒸して食ふと甚だ香しくて甘味だ。

藏器曰く、烏飯の法は、南燭の莖、葉を搗き碎いて取つた淸汁に粳米を浸し、九回浸し、九回蒸し、九回曝す。米粒が緊小にして瑿玉のやうに黑くなるものである。袋入にして遠方へ贈るによし。

時珍曰く、この飯は仙家の服食の法だが、今では佛教寺院で多く四月八日にこれを造つて佛前に供へる。それを造る場合に、また柿葉、白楊葉などを數十枚いれてその染色を助け、或はまた生鐵を一塊入れることもある。それはただ色を好く仕上

げようといふ考だが、實はそれ等のものは服食家で忌むものだといふことを知らないのだ。

［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【一日に一合を食へば饑ゑない。顔色を益し、筋骨を堅くし、行歩を能くする】（藏器）【腸、胃を益し、髓を補し、三蟲を滅す。久しく服すれば、白を變じ、老を却ける】（蘇頌）記載は太極眞人法にある。

粥（拾遺）

和名　かゆ
洋名　Rice-gruel.

［釋名］**糜**　時珍曰く、粥の字は米が釜中に在つて相屬する有様の形容だ。釋名に『米を煮て粥となすは糜爛せしむるなり』とある。粥は糜よりも濁つて育育然たるものだ。厚きを饘といひ、薄きを酏といふ。

小麥粥　［主治］【消渇煩熱を止める】（時珍）

寒食粥　杏仁を用ゐ、諸花を和して作る。［主治］【咳嗽。血氣を下し、中を調へる】（藏器）

糯米　秫米　黍米粥　［氣味］【甘し、温にして毒なし】［主治］【氣を益し、

脾、胃虚寒の泄痢、吐逆、小兒の痘瘡の白色なるを治す」（時珍）

粳米　秈米　粟米　粱米粥　［氣　味］［甘し、温、平にして毒なし］［主　治］【小便を利し、煩渇を止め、腸、胃を養ふ】（時珍）

［發　明］　時珍曰く、按ずるに、羅天益の寶鑑に『粳、粟米粥は、氣薄く、味淡く、陽中の陰である。それゆゑに淡滲し下行して能く小便を利するのだ』とあり、韓悉の醫通には『ある淋病患者で藥が嫌ひで服めぬものがあつたが、予は專ら粟米粥を喫はせて他の食味を一切絶たせた。ところが十日餘にし病が減じ、一个月餘にして痊えた。これは五穀治病の理である』とあり、又、張耒の粥記には『毎日起きて粥一大椀を食へば、腹が空に胃が虚なるところへ穀氣が作り、補の效果が些少なものでない。又、極めて柔かに膩かだから腸、胃のために宜し。これは飲食の最妙訣だ。齊和尚は山中の僧に說いて「毎朝明け方に食ふ一回の粥は甚だ利害に關係があつて、それを食はないと、終日臟腑の燥潤が甚しいやうに覺える。粥は能く胃氣を暢べ津液を生ずるものだ。大抵生を養ひ安樂を求めるといふことも、やはり深遠な六ケ敷い道理があるのではない。寢食の間のことに過ぎないわけのものだ」といつ

た。故にこの文を作つて人に毎日粥を食はんことを勸める。大いに笑ふべきではない』とある。又、蘇軾の帖に「ある夜、甚しく饑ゑたとき、吳子野が白粥を食へと勸め「能く陳を推し、新を致し、膈を利し、胃を益するものだ」といつたが、食つて見ると粥もうまかつたし、食つた後になる程言ふべからざる妙があつた』とある。

これ等はいづれも粥にさやうな益があるといふことを著したものである。諸種の穀物で作る粥に就ては本條に詳記したが、古方には藥物を用ゐた粳、粟、粱米の粥で病を治すといふことが甚だ多い。此にその通常食へるところのものを略ぼ左に集錄して參考に備へる。

赤小豆粥〔小便を利し、水腫脚氣を消し、邪癘を辟ける〕

綠豆粥〔熱毒を解し、煩渴を止める〕

御米粥〔反胃を治し、大腸を利す〕

薏苡仁粥〔濕熱を除き、腸、胃を利す〕

蓮子粉粥〔脾、胃を健にし、洩痢を止める〕

芡實粉粥〔精氣を固くし、耳、目を明にする〕

菱實粉粥【腸、胃を益し、内熱を解す】
栗子粥【腎氣を補し、腰脚を益す】
薯蕷粥【腎精を補し、腸、胃を固くする】
芋粥【腸、胃を寛（くわん）にし、人をして饑ゑざらしめる】
百合粉粥【肺を潤ほし、中を調へる】
蘿蔔粥【食物を消化し、膈を利す】
胡蘿蔔粥【中を寛にし、氣を下す】
馬齒莧粥【痺を治し、腫を消す】
油菜粥【中を調へ、氣を下す】
莙薘菜粥【胃を健にし、脾を益す】
波薐菜粥【中を和し、燥を潤（うる）ほす】
薺菜粥【目を明にし、肝を利す】
芹菜粥【伏熱を去り、大、小腸を利す】
芥菜粥【痰を豁（くわつ）し、惡を辟ける】

葵菜粥【燥を潤ほし、腸を寛にする】

韮菜粥【中を溫め、下を暖める】

葱豉粥【汗を發し、肌を解す】

伏苓粉粥【上を淸し、下を實する】

松子仁粥【心、肺を潤ほし、大腸を調へる】

酸棗仁粥【煩熱を治し、膽氣を益す】

枸杞子粥【精血を補し、腎氣を益す】

薤白粥【老人の冷利を治す】

生薑粥【中を溫め、惡を辟ける】

花椒粥【瘴を辟け、寒を禦ぐ】

茴香粥【胃を和し、疝を治す】

胡椒粥　茱萸粥　辣米粥【いづれも心、腹の疼痛を治す】

麻子粥　胡麻粥　郁李仁粥【いづれも腸を潤ほし、痺を治す】

蘇子粥【氣を下し、膈を利す】

竹葉湯粥【渇を止め、心を清す】
豬腎粥　羊腎粥　鹿腎粥【いづれも腎虚の諸疾を補す】
羊肝粥　鷄肝粥【いづれも肝虚を補し、目を明にする】
羊汁粥　雞汁粥【いづれも勞損を治す】
鴨汁粥　鯉魚汁粥【いづれも水腫を消す】
牛乳粥【虚羸(きよるゐ)を補す】
酥蜜粥【心肺を養ふ】
【鹿角膠を粥に入れて食へば元陽を助け、諸虚を治す】
【炒麪(せうめん)を粥に入れて食へば白痢を止める】
【燒鹽を粥に入れて食へば血痢を止める】

麨

尺沼の切(セウ)である。　（拾遺）　和名　こがし、はつたい
洋名　Roast flour.

校正　もとは粟の條下に附してあつたが、本書はこの一條を分離掲載した。

(一)大觀ニ糗、一名麨昌少切トアリ。

(二)河東ハ山西省地方、北方トアルハ河北、遼東地方、東方トアルハ山東地方ヲ指ス。

【釋名】(一)糗 去九の切(キウ)である。時珍曰く、麨は炒つてその臭香を出すものだ。故に糗の字は臭に從ひ、麨の字は炒に從つて省略した文字である。劉熙の釋名に『糗は齲である。飯にして磨つて齲碎せしめたものだ』とある。

【集解】恭曰く、麨は米、麥を蒸し、熬つてから磨つて作るものだ。藏器曰く、(二)河東地方では麥で作り、北方の地では粟で作り、東方の地では粳米で作る。飯を炒り乾して磨つて作るものだ。粗いものを乾糗糧といふ。

米麥麨【氣味】【甘く苦し、微寒にして毒なし】藏器曰く、酸し、寒なり。

【主治】【寒中。熱渴を除き、石氣を消す】(蘇頌)【水に和して服すれば、煩熱を解し、洩を止め、大腸を實する】(藏器)【炒米湯は煩渴を止める】(時珍)

餻(綱目)

和名 だんご
洋名 Dumpling.

【釋名】**粢** 時珍曰く、餻は黍糯に粳米粉を合せて蒸して作る。凝膏のやうな狀態のものだ。單に糯粉で作つたものをば粢といひ、米粉に豆末、糖、蜜を合はせて蒸して作つたものをば餌といふ。釋名に『粢は慈軟なり、餌は而なり、相粘而す

るなり』とあり、揚雄の方言には『餌は、これを餻と謂ひ、或はこれを粢と謂ひ、或はこれを䬆——音は令(レイ)——と謂ひ、或はこれを餣——音は浥(イフ)——といふ』とある。しかしそれ等の異稱に因つてそれぞれ微かの區別があることを知らねばならぬ。

【氣味】【甘し、温にして毒なし】時珍曰く、粳米餻は消導し易いが、粢餻は最も尅化し難くして脾を損じ、或は積となる。小兒には特に禁ぜねばならぬ。

【主治】【粳餻は、脾、胃を養ひ、腸を厚くし、氣を益し、中を和す。○粢餻は、氣を益し、中を暖め、小便を縮し、大便を堅くする效がある】(時珍)

【發明】時珍曰く、晩粳米餻は、脾、胃の藥を丸にする場合に蒸餅の代用とする。それはその物の化け易きを取るのである。糯米粢は、丹藥を丸にする場合に糯糊の代用とする。それはその物の相粘する黏を取るのである。九日の登高米餻もやはり藥に入れ得るもので、聖惠方を按ずるに、山瘴瘧を治する餻肉丸は、九月九日に米餻角を取つて陰乾して半兩、寒食飯二百粒、豉一百粒、獨蒜一箇、恒山一兩を水二盞に一夜浸し、五更に一盞に煎じて頓服し、下利するを度とすべしとある。

【附方】 新一。【老人の泄瀉】乾餻一兩を薑湯で泡け化して飯の代りにする。(簡便方)

糉（綱目） 和名 ちまき 洋名 May-dumpling

【釋名】 角黍 時珍曰く、糉の字は俗に粽と書く。古代に、菰、蘆の葉に黍米を裹んで煮て、糉櫚の葉の心のやうな形の尖角に作つたので、糉といひ、角黍といつたのだ。近世では多く糯米を用ゐる。現に俗間では五月五日に節句の供物として互に贈答する。或は屈原を祭るためにこれを作つて江中に投じ、それを蛟龍の餌にしてやるのだなどといふ。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【五月五日に糉尖を取つて截瘧藥を和するが良し】(時珍)

(一)寒具（綱目） 和名 あげぐわし(新稱) 洋名 Fried cake.

【釋名】 捻頭(錢乙) 環餅(要術) 饊 時珍曰く、寒具は冬から春に數月間取

(一) 牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ「ひぐわし類ノ總名ナリ」トアレドモ、今釋名竝ニ集解ノ文ニヨッテ

之レヲあげぐわし即チ油煎菓子ト新稱シタ。

つて置けるもので、寒食の日に火を焚かぬときそれを用ゐる。故に寒具と名けたのだ、捻頭とはその頭が捻れてゐるから、環餅とは環釧の形に象つてあるから、饊とは消散し易いからである、服虔の通俗文にはこれを餲といひ、張楫の廣雅にはこれを梳籽といひ、楚辭にはこれを粔籹といひ、雜字解詁にはこれを膏環といつてある。

【集解】時珍曰く、錢乙の方中に捻頭散といふがあり、葛洪の肘後には捻頭湯といふがあるが、醫書には記載がない。按ずるに、鄭玄註周禮に『寒具は米食なり』とあり、賈思勰の要術には『環餅、一名寒具。水に牛、羊の脂を搜入したもので和して作る。口に入れば直ちに碎ける』とあり、林洪の淸供には『寒具は捻頭である。糯粉で麪を和し、麻油で煎じて作り、餳で食ふものだ。一个月餘取つて置ける。焚火を禁ずるときの用によし』とある。これに據つて觀ると、寒具とは卽ち今の饊子のことで、糯粉で麪を和し、少量の鹽を入れ、索や紐で引かけて捻つて環釧の形に作り、油で煎じて食ふものである。劉禹錫の寒具の詩に『纖手搓成す玉數尋、碧油煎出す嫩黃深し。夜來春睡輕重無し、壓褊す佳人臂に纏ふの金』とある。

【氣味】【甘く鹹し、溫にして毒なし】【主治】【大小便を利し、腸を潤し、

中を温め、氣を益す】（時珍）

附方　新二。【錢氏捻頭散】小兒の小便不通を治す。延胡索、苦楝子等分を末にし、毎服半錢、或は一錢を捻頭湯で調へて食前に服す。捻頭が無いときは、油を滴してその代りにする。（錢乙小兒方）【血痢の止まぬもの】地楡を晒して研末し、毎服二錢を羊血上に摻り、炙熱して食ひ、捻頭の煎湯で送下する。或は地楡の煮汁を飴のやうな狀態に熬り、一服に三合を捻頭湯に化して服す。

蒸餅（綱目）

和名　ぱん
洋名　Bread.

釋名　時珍曰く、按ずるに、劉熈の釋名に『餅は幷である。麪を溲ぜて合幷せしめたもので、蒸餅、湯餅、胡餅、索餅、酥餅などの屬がある。いづれも形に隨ふ命名だ』とある。

集解　時珍曰く、小麥麪で修治する食品は甚だ多いが、ただ蒸餅だけが最も由來が古い。これは單に麪のみを酵糟で發酵させて造るもので、藥を丸にするに必要のものであり、且つ疾を治する功能があるものだ。而るに本草に記載のないのは

やはり一の缺點であつた。これは臘月、及び寒食の日に皮が裂けるまで蒸して皮を去り、風の當るところに懸けて乾して置き、使用の際に臨んで水に浸して脹らせ、擂り爛して濾し、それを脾、胃、及び三焦の藥を和するに用ゐる。甚だ消化し易く、且つ鶉が已にその性質に變化を來してゐるので濕熱を助けないものだ。しかし果菜、油膩の諸物を餡にして入れたものは藥用に堪へない。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【食を消し、脾、胃を養ひ、中を溫め、滯を化し、氣を益し、血を和し、汗を止め、三焦を利し、水道を通ずる】（時珍）

【發明】時珍曰く、按ずるに、愛竹談藪に『宋の寧宗皇帝がまだ郡王であつたとき、淋を病んで晝夜に凡そ三百回も小便に起ち、宮廷の醫官達は手の下しやうがなかつたが、ある者の推擧に因つて孫琳を召して治療を命ぜられた。そのとき琳は、蒸餠、大蒜、淡豆豉の三物を搗いて丸にし、溫水で三十丸を進め「今日三服されると病は三分を減じ、明日も同樣で、三日で病は平癒される」といつたが、果してその通りであつた。報酬として千緡を賜つた。ある者がその療法に就いての說明を問ふと、琳は「小兒に淋のあらうわけはない。ただこれは水道が利せぬだけのもので

ある。三物はいづれも能く通利するものだ。故にかやうな結果を得ただけのことで、私如きは醫術をかれこれ申上げる程の者ではない」といつた』とある。

［附方］　新六。【積年の下血】寒食蒸餅、烏龍尾各一兩、皂角七挺を皮を去つて酥で炙き、末にして蜜で丸にし、二十丸づつを米飲で服す。(聖惠方)【赤、白下痢】營衛の氣虚で風の邪が腸、胃の間に襲ひ入り、赤、白の便を痢し、臍腹が疞痛し、裏急後重し、煩渴し脹滿し、飲食の進まぬを治す。乾蒸餅に蜜を拌ぜて炒つて二兩、御米殼を蜜で炒つて四兩を末にし、煉蜜で芡子大の丸にし、一丸づつを水一盞で煎じ化して熱服する。(傳信適用妙方)【崩中下血】幾年かの陳き蒸餅を燒いて性を存し、二錢を米飲で服す。【盜汗、自汗】毎夜就寢時に、やや空腹にして蒸餅一箇を喫ふ。數日に過ぎずして止む。(醫林集要)【一切の折傷】寒食蒸餅を末にし、二錢づつを酒で服す。甚だ效驗がある。(肘後方)【湯火傷灼】饅頭餅を燒いて性を存して研末し、油で調へて塗傅する。(肘後方)

女麴 (一)(拾遺)

和名　こむぎのかうぢ
洋名　Fermentic mould on Wheat

【校正】もとは小麥の條下に附錄してあつたが、本書には一條を分離して掲載した。

【釋名】**䴷子**　音は桓(クワン)である。**黃子**　時珍曰く、これは婦人達が完き麥を罨ふて黃子にしたものだ。故にかかる諸名があるのだ。

【集解】恭曰く、女麴は完き小麥の飯を和成して罨ひ、黃衣が表面に現はれるを待つて取つて晒したものだ。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【食を消し、氣を下し、洩痢を止め、胎を下し、冷血を破る】(蘇頌)

黃蒸 (二)(拾遺)

和名　きかうぢ(新稱)
洋名　Yellow cake (Fermentic mould on rice and wheat)

【校正】もとは小麥の條下に附錄してあつたが、本書には一條を分離して掲載した。

(一)拾遺ハ唐本ノ誤。

(二)牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ「こむぎのかうぢ、ひきわりむぎのかうぢナリ」トアレドモ、今集解ノ文ヲ按ジテ之レヲ

きかうぢト新稱シタ。
（三）拾遺ハ唐本ノ誤。

【釋　名】黃衣（蘇恭）　麥黃　時珍曰く、これは米、麥の粉を和して罨ひ、黃蒸して黃にならしめたものだ。故にかかる諸名がある。

【集　解】恭曰く、黃蒸は、小麥を磨つた粉に水を拌ぜ和し、餅にして麻葉で裹み、黃衣の生ずるを待つて取つて晒したものである。

藏器曰く、黃蒸は麲子と相異のないものだ。北方の地では小麥で造り、南方の地では粳米で造る。六七月に作るもので、綠塵の生じたものが佳し。

時珍曰く、女麴は麥を飯に蒸して罨つて造るもの、黃蒸は米、麥を磨つた粉を罨つて造るものだからやや相異がある。

【氣　味】【主　治】【いづれも女麴に同じ】（蘇恭）【溫補し、能く諸種の生物を消化する】（藏器）【中を溫め、氣を下し、食を消し、煩を除く】（日華）【食黃、黃汗を治す】（時珍）

【附　方】新一。【癊黃疸疾】或は黃汗が衣服に染り、涕唾までみな黃なるには、好き黃蒸二升を每夜水二升に浸し、微し暖めて銅器中に入れ、早朝汁半升を絞つて用ゐるが極めて效がある。（必效方）

(一)麴（宋嘉祐）

和名　かうぢ
洋名　"Koji" (Fermentic mould on boill rice)

【釋名】**酒母**　時珍曰く、麴は米、麥を包罨して造るものだ。故にその文字は麥に從ひ、米に從ひ、包に從ふ省文の會意の文字である。酒は麴を用ゐねば出來ないものだから酒母といふ。書經に『若し酒醴を作らば、爾惟れ麴、糵』とあるがそれだ。劉熙の釋名には『麴は朽である。鬱して衣を生ぜしめ、敗朽せしめたものだ』とある。

(二)【集解】藏器曰く、麴は六月に作つたものが良し。藥に入れるには、陳久なるものを香しく炒つて用うべきものである。

時珍曰く、麴には、麥、麪、米で造るものがあつて一樣でないが、いづれも酒、醋に必要なものだ。いづれもその消導の功能は甚だ遠からざるものである。

大、小麥麴を造る法は、大麥米、或は小麥を皮のままを用ゐ、井水で淘淨して晒し乾し、六月六日に磨り碎き、麥を淘つた水で和して塊にし、楮葉で包み括つて風の當る場所に七十日間懸けて置けば使用し得るやうになる。

(一)牧野云フ、我ガかうぢニ適當ナ洋語ヲ見付ケ得ナイノデ止ムヲ得ズ Koji ヲ新洋名化シタ。

(二)木村(康)曰ク、日本酒ノ麴ノ製法、通常ノ飯米即チ粳米ヲ搗臼シテ、成ル可ク精白トナシタル後桶ニ盛リ水ヲ加ヘ、數回淘洗シテ其洗水ノ乳狀ヲ呈セザルニ至リ一夜水漬シ、蒸籠ニ盛リテ蒸シ藁席上ニ擴ゲ攪拌シ、其溫度下降シテ約三〇度ニ至レバ、米一石ニ付キ種麴約三十五匁ノ割合ヲ以テ種麴

ヲ加ヘ、ヨク混和シタル後所謂麴室内ニ貯フ、其際先ヅ藁筵上ニ於テ丘狀ニ積上ゲ温度ノ下降ヲ防グ爲メ數枚ノ蓆ヲ以テ覆ヒ、一〇數時間ヲ經ル時ハ米穀上ニ白色ノ斑點ヲ生ジ、麴ノ菌絲少シク發育スルヲ以テ堆積ヲ崩シ、手ヲ以テ揉ミ碎キ善ク攪拌シ、再ビ元ノ如ク堆積シ蓆ヲ以テ覆ヒ、一〇數時間ノ後揉ミ碎キ麴蓋ニ攤ゲ、棚上ニ數枚ヅツ積ミ重ネ蓆ヲ以テ覆ヒ、數時間ノ後手モテ碎塊攪拌シテ放置シ、六、七時間ノ後更ニ碎塊攪拌シ、一〇數時間放置スレバ米粒全面ニ白色ノ菌絲浸育シ甘味ヲ生ジ、麴成熟スルヲ以テ室外ニ出ダシ冷處

麪麴を造る法は、三伏の時、白麪五斤、綠豆五斤を蓼汁(れうじふ)で煮爛し、蓼末五兩、杏仁泥十兩を和して踏んで餅にし、楮葉で裹んで風の當る場所に懸け、黄の生ずるを待つて取收める。

白麴を造る法は、麪五斤、糯米粉一斗を用ゐ、水を拌ぜて微し潤(うる)ほして篩(ふる)ひ、踏んで餅にし、楮葉で包んで五十日間風の當る場所に掛けて置けば出來上る。

又、米麪の法は、糯米粉一斗を蓼の自然汁で和して圓丸にし、楮葉で包んで風の當る場所に四十九日間掛けて晒(さら)して取收める。

この數種の麴はいづれも藥に入れ得るが、各地方にある諸藥草を入れたもの、毒藥を入れたものはいづれも有毒だ。故に酒を造るに用ゐるだけのもので、藥には入れられない。

小麥麴 [氣味] 【甘し、溫にして毒なし】震亨曰く、麩皮麴(ふひきく)は涼であつて大腸の經に入る。[主治] 【穀を消し、痢を止める】(別錄) 【胃氣を平にし、食痔を消し、小兒の食癇を治す】(蘇恭) 【中を調へ、氣を下し、胃を開き、臟腑の中風寒氣(大觀)を療ずる】(藏器) 【霍亂(くわくらん)、心膈の氣、痰逆に主效があり、煩を除き、癥結(ちようけつ)を破る】

（孟詵）【虚を補し、冷氣を去り、腸、胃中塞で食物の下らぬを除き、人をして顏色あらしめる】（吳瑞）【胎を落し、幷に鬼胎を下す】（日華）【河腹（大）魚の疾を止める】（藥簡帝衞經文）

大麥麴【氣味】前に同じ。【主治】【食を消し、中を和し、生胎を下し、血を破る。五升を取つて水一斗で煮て三沸し、五回に分服すれば、その子は糜のやうになり、母を肥盛ならしめる】（時珍）

麪麴　**米麴**【氣味】前に同じ。【主治】【食積、酒積、糯米積を消す。研末して酒で服すれば立ろに癒える。その他の功は小麥麴と同じ】（時珍）　記載は千金にある。

【附方】舊五、新四。【米穀食積】炒麴末二錢づつを白湯で調へて服す。一日三回、【三焦の滯氣】陳麴を炒り、萊菔子を炒り、等分を三錢づつ水で煎じ、麝香少量を入れて服す。（普濟）【小腹の堅大】盤のやうになり、胸滿し、食物の消化不能なるには、麴末方寸匕を湯で服す。一日三回（千金）【あらゆる水痢】六月六日の麴を黃に炒り、馬藺子と等分を末にし、方寸匕を米飮で服す。馬藺子がないときは牛骨灰を

ニ貯フ、抑種麴（現今ハ專業者之ヲ製造販賣ス）ナルモノハ、麴菌 Aspergillus Oryzae ノ芳胎ト清酒酵母（日本酒ハ）Saccharomyces Sake トヨリ成リ、製麴ハ麴菌ノ發育ニヨリ澱粉ヲ糖ニ變化スル性アル發酵素ヲ生ゼシメ且清酒酵母ヲ培養スルニアリ、又製麴ノ際ニ堆積及ビ碎塊ヲ反覆スルハ、米粒ノ塊結シテ麴菌ノ發育ヲ害スルヲ豫防スルノミナラズ、亦過度ノ熱ヲ低降セシメ、且ツ温度ノ均一ヲ保持スルノ目的ニ外ナラズ。

尙山崎百治氏ハ、上海自然科學研究所彙報第一卷第一號（一九二九）ニ支那產「麴」ニ就テ詳細ナル

代用する。(普濟方)【赤、白痢下】水、穀の消化せぬには、麴を熬つて方寸匕づつを粟米粥(ぞくべいしゆく)で服す。一日四五回。(肘後方)【酒毒の便血】麴一塊を濕紙で包んで煨(や)いて末にし、二錢づつを空心に米飲で服す。神效がある。【傷寒の食復】麴一餅を煮て汁を飲むが良し。(類要方)【胎動不安】或は上に心を搶(つ)き、下血するには、生麴餅を研末し、水を和して絞つた汁三升を服す。(肘後)【狐刺尿瘡】麴末に獨頭蒜(どくとうさん)を和して杵き、麥粒ほどを瘡孔中に納れる。蟲が出て癒える。(古今錄驗)

研究ヲ發表セリ、ソノ研究材料ハ浙江、江蘇、湖南ノ三省ヨリ出ヅルモノヲ主トシ二〇五例ニ及ブ、ソノ形態、大サ、重量等ニヨリ支那産麴ヲ二大別ス、ソノ一ハ通常「酒薬」「酒餅」「酒麴」「麴薬」等ト稱セラルルモノニシテソノ二ハ「麴」(狭義)又ハ「大麴」ト呼バレ。黄酒用及ビ高粱酒用ノモノハ「麴子」、紹興酒用ノモノハ「麥麴」「麴麥」「米麴」、米酒用ノモノハ「大酒餅」等ト呼バレル。

支那産「麴」ノ成分ハ(一)主成分トシテ、米粉混和成分トシテ紅花子(Polygonum vulgare)ヲ含ムモノ最モ多ク、小麥ノ全粒及搗碎粒ノミヨリナルモノ是ニ次グ、是等ハソレゾレ化學的成分モ相類似スル所大ニシテ、各共通ノ用途アル可キヲ思ハシム、實ニ前者ハ酒醸製造用ニ後者ハ麴子又ハ麥麴トシテ、紹興酒醸造上ニ使用セラルルモノナリ。前記以外ノモノハ主混和兩成分共ニ著シク複雜多岐ニ亙リ、化學的成分ノ如キヨク之ヲ證ス。(二)米粉ハ主成分若クハ混和成分トシテ大多數ノ酒薬ニ含有セラレ、大麴ト成分上主タル相違點ヲナスモノナリ。主成分トシテ米粉ニ次デ多數ノ酒薬ニ含有セラルルモノハ稍粗細末ニシテ、植物薬材ノ細末無機物ニシテ植物薬材ノ細末稍粗細末ノ順ニアリ、要スルニ酒醸用酒薬、麴子、麥麴、米麴、大餅等ヲ除キテハソノ成分ハ多種多樣ニシテ複雜ヲ極ム、ソノ中ニ含マルル醱酵菌類ハ Rhizopus ノ含マルルモノ最モ多數ニシテ、コレニ Mucor, Monilia, Yeast, Aspergillus ノ順ニ次グ、Absidia, M. tusseus, Penicillium, Syncephalastrum, Chlamydomucor 等之ニ次グ、支那産麴ノ用途ハ

(一)發酵酒用
- (イ)酒醸用……酒薬
- (ロ)紹興酒用 ― 酒薬／麥麴及ビ米麴
- (ハ)黄酒用……麴子

(二)蒸溜酒用
- (イ)米酒用 ― 酒薬／大酒餅
- (ロ)麥酒用……酒薬
- (ハ)高粱酒 ― 酒薬／麴子
- (ニ)汾酒用 ― 酒薬／麴子
- (ホ)包穀酒用……酒薬
- (ヘ)穀酒用……酒薬

歐洲大戰ノ際ニハ獨逸ニ於テ酒母ヲ食料トシテ利用スルコト研究セラレタリ。

神麴（藥性論）

和名　くすりかうぢ
洋名　Medicinal Koji.

【釋名】【集解】時珍曰く、昔一般に用ゐた麴は多くは酒を造る麴そのものであつたが、後の醫家は神麴といふを造つて專ら藥用に供した。功力は更に勝れてゐる。蓋し諸神聚會の日にこれを造るといふ意味で神なる名稱を冠したのだ。賈思勰の齊民要術に神麴を造る方法が記されてあるが、繁瑣なもので使用に便でない。近世の製造法の方が更に簡便だ。葉氏の水雲錄に『五月五日、或は六月六日、或は三伏の日に、白麪百斤、青蒿の自然汁三升、赤小豆末、杏仁泥各三升、蒼耳の自然汁、野蓼の自然汁各三升を用ゐて、それぞれを白虎、青龍、朱雀、玄武、勾陳、螣蛇の六神に配し、その汁でその麪、豆、杏仁を和して餅にし、麻葉、或は楮葉で包罯して醬黃を造る法のやうにし、黃衣の生ずるを待つて晒して取收める。

【氣味】【甘く辛し、溫にして毒なし】元素曰く、陽中の陽であつて、足の陽明の經に入る。凡そこれを用ゐるには、火で黃炒すれば土氣を助ける。陳久なるものが良し。【主治】【水穀の宿食、癥(一)結、積滯を化し、脾を健にし、胃を暖にする】

(一)大觀ニ氣ニ作ル。

（藥性）【胃の氣を養ひ、赤、白痢を治す】（元素）【食を消し、氣を下し、痰逆、霍亂、泄痢、脹滿の諸疾を除く。その功は麴と同じ。閃挫、腰痛には、煆いて酒に淬して溫服すれば效がある。婦人產後に乳を回さんとするには、炒つて硏り、一日二回、二錢づつを酒で服す。直ちに止んで甚だ效驗がある】（時珍）

【發明】時珍曰く、按ずるに、倪維德の啓微集に『神麴は目病を治す。生で用ゐれば能くその生氣を發し、熟して用ゐれば能くその暴氣を斂める』とある。

【附方】舊一、新六。【胃虛で食物の尅化せぬもの】神麴半斤、麥芽五升、杏仁一升を各〻炒つて末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを每食後に嚼み化かす（普濟方）【脾を壯にし、食を進める】痞滿、暑泄を療ずる。麴朮丸——神麴を炒り、蒼朮を泔制して炒り、等分を末にして糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。冷える者には乾薑、或は吳茱萸を加へる（肘後百一選方）【胃を健にし、食思をつける】養食丸——脾、胃倶に虛して水穀の消化不能となり、胸膈が痞悶し、腹脇が膨脹して幾年月に亙り、食減じ、臥すことを嗜み、口に味なきものを治す。神麴六兩、麥蘖を炒つて三兩、乾薑を炮いて四兩、烏梅肉を焙じて四兩を末にし、蜜で梧

子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを米飲で服す。（和剤局方）【虚寒反胃】方は上に同じ。【暴泄の止まぬもの】神麴を炒つて二兩、茱萸を湯に泡けて炒つて半兩を末にし、醋糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飲で服す。（百一選方）【産後の運絶】神麴を炒つて末にし、水で方寸匕を服す。（千金方）【食積の心痛】陳神麴一塊を紅く燒いて酒に淬し、二大椀を服す。（摘玄方）

紅麴（丹溪補遺）

和名　あかかうじ
洋名　Red Kōji. (Monascus purpureus, Went)

【集解】時珍曰く、紅麴は本草には記載がない。その方法は近世に起つたもので、奇異なる術である。その方法は、白粳米一石五斗を水で淘つて一夜浸し、飯にして十五个處に分け、麴母三斤を入れてよく揉み匀ぜ、それを一个處に聚めて帛で密覆し、熱して帛を去り、攤し開いて溫むを覺えたとき急に堆く盛上げてまた密覆し、翌日日中にまた三个處に盛上げ、一時過ぎてから五个處に分けて盛り上げ、再び一時して一个處に盛り聚め、また一時過ぎに十五个處に盛分け、やや溫んだときまた一个處に盛聚める。かく數回繰返して、第三日目に大桶に新汲水を盛り、麴を

竹籮に盛り、五六分に分けてその桶の水に醮し濕ほし、完全に濕はしてからまた一个處に盛上げて前の方法のやうに一回繰返し、第四日目にもまた前日のやうに水に醮す。若し麹が半沈み半浮くときは再び前の方法を一回繰返し、また醮して見て盡く浮くときは出來上つたのだ。それを取出して日光で乾して貯藏する。その米が心に透つたものを生黄といふ。酒、及び鮓、醢の中に入れると鮮紅で美しく見える。まだ心に透らぬものは甚だ佳くない。藥に入れるには陳久なるものを良しとする。

【氣味】〔甘し、溫にして毒なし〕瑞曰く、これで釀した酒は、辛く、熱であつて小毒があり、腸風、痔瘻、脚氣、哮喘、痰嗽の諸疾を發する。

【主治】〔食物を消化し、血を活かし、脾を健にし、胃を燥し、赤、白痢を治し、水、穀を下す〕（震亨）〔釀した酒は血を破り、藥勢を行らし、山嵐瘴氣を殺し、打撲傷損を治す〕（吳瑞）〔婦人の血氣痛、及び產後の惡血の盡きぬものを治す。酒に擂つて飲むが良し〕（時珍）

【發明】時珍曰く、人間の食つた水、穀は、胃に入つて中焦の濕熱を受けて薰蒸し、游溢する精氣が日に日に化して紅となり、臟腑、經絡に散布する。それが營血

だ。これは造化自然の微妙なる働である。紅麹を造るには、白米飯に濕熱を受けて鬱蒸し、變じて紅となすのであつて、その色は眞色をなし久しく經つてもやはり渝らない。これは人間が造化の巧を竊つたものだ。故に經に、麹に脾、胃、營血を治する功があるといつたのであつて、同氣相求むるの理を得たものだ。

附方 舊四。【濕熱泄痢】丹溪の青六丸——六一散に炒つた紅麹五錢を加へて末にし、蒸餠で和して梧子大の丸にし、一日三回、五七十丸づつを白湯で服す。(丹溪心法)【小兒の吐逆】頻頻として乳、食物が進まず、手、足の心の熱するには、紅麹の年久しきもの三錢半、白朮を麩で炒つて一錢半、甘草を炙いて一錢を末にし、半錢づつを棗子米の煎湯で服す(經濟)【小兒の頭瘡】濕の傷みが原因で水が入つて毒となり、濃汁の止まぬには、紅麹を嚼んで罨ふが甚だ有效だ。(百一選方)【心腹の痛むもの】赤麹、香附、乳香等分を末にして酒で服す。(摘玄方)

蘗米 (別錄中品)

和名　もやし
洋名　Rice-malt

釋名 弘景曰く、これは米で作る蘗のことで、別の米の種類にある名稱では

ない。恭曰く、蘖とは孽といふやうなものだ。その生じたことが正しき理に因らぬものの意味をいひ表したものであつて、いづれも生ずる可能性のあるもので生ずるのである、その蘖中の米を取つて藥に入れる。按ずるに、食經には『稻蘖を用う』とある。稻とは卽ち穬のある穀物の總名だ。陶氏が米で蘖を作ると考へたのは正しくない。米では更に生ずべきわけがあるまい。

[集解] 宗奭曰く、蘖米は粟蘖である。

時珍曰く、別錄には蘖米といつただけで粟で作るとはいつてない。蘇恭の、凡ての穀物はいづれも生ずる可能性があるといつたのが正しい。粟、黍、穀、麥、豆の諸蘖があるが、いづれも水に浸して脹らませ、芽の生えるを俟つて曝乾し、鬚を去つてその中の米を取り、炒り研つて麪にして用ゐるのであつて、使用上の功力はいづれも主として消導にある。此に倂集して左に揭げる。日華子が蘖米を醋黃子を作るものとしたのも誤である。

粟蘖 一名 **粟芽** [氣味] 【苦し、溫にして毒なし】 宗奭曰く、今の穀神散中に用ゐてある。性は麥蘖よりも溫である。 [主治] 【寒中。氣を下し、熱を除

く】(別錄)【煩を除き、宿食を消し、胃を開く】(日華)【末にして脂で和して顔に傅ければ、皮膚を悅澤ならしめる】(陶弘景)

稻蘗　一名　**穀芽**　【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【脾を快くし、胃を開き、氣を下し、中を和し、食を消し、積を化す】(時珍)

【附方】新一。【脾を啓き、食を進める】穀神丸 ― 穀蘗四兩を末にし、薑汁、鹽少量を入れ、和して餅にして焙じ乾し、炙甘草、砂仁、白朮を麩で炒り、各一兩を末にして白湯に點て服す。或は丸にして服す。(澹寮方)

穬麥蘗　一名　**麥芽**　【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】【主治】【食を消し、中を和す】(別錄)【冷氣を破り、心腹脹滿を去る】(藥性)【胃を開き、霍亂を止め、煩悶を除き、痰飲を消し、癥結を破る。能く分娩を催し、胎を落す】(日華)【脾、胃の虛を補し、腸を寬にし、氣を下す。腹鳴のものに用ゐる】(元素)【一切の米麪、諸果の食積を消化する】(時珍)

【發明】好古曰く、麥芽、神麴の二藥は胃氣の虛した患者が服するに適する。それが戊己に代るに依つて水、穀を腐熱するのである。豆蔲、縮砂、烏梅、木瓜、

芍藥、五味子が使となる。

時珍曰く、麥蘖、穀芽、粟蘖は、いづれも能く米麪、諸果の食積を消導する。それは餳を製するにこれを用ゐるに觀ても類推し得ることだ。但し積ある者に對しては消化の功能があるが、積なきものが久しく服しては元氣を消するものだから注意を要する。久しく服するには、白朮などの諸藥と兼用するやうにすれば害がない。

【附方】 舊三、新五。「脾を快くし、食を進める」麥蘖四兩、神麴二兩、白朮、橘皮各一兩を末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、三五十丸づつを人參湯で服すれば效がある。「穀勞で臥すことを嗜むもの」飽食して直ちに臥すと穀勞病となり、四肢が煩重して嘿嘿として臥したがり、食事が畢るとそれが甚しくなる。大麥蘖一升、椒一兩をいづれも炒り、乾薑三兩と擣いて末にし、一日三回、方寸匕づつを白湯で服す（肘後）「腹中の虛冷」食へば消化せず、羸瘦し、弱乏するは、ためにあらゆる疾を生ずる原因となる。大麥蘖五升、小麥麪半斤、豉五合、杏仁二升、いづつも黃熬して香しくし、擣き篩つて糊で彈子大の丸にし、一丸づつを白湯で服す（肘後方）「產後の腹脹」通轉せず、氣急し、坐臥不安なるには、麥蘖一合を末にし、酒で和

して服す。良久して通轉して神驗がある。これは供奉輔太初が崔郎中に傳へた方である。（李絳兵部手集方）【產後の青腫】乃ち血水積(けつすゐしやく)である。乾漆、大麥蘖等分を末にし、新瓦中に漆を一層鋪いて蘖一層を鋪き、重重に滿てて鹽泥で固濟し、赤く煆(や)いて研末し、二錢を熱酒で調へて服す。產後の諸疾にいづれも宜し。（婦人經驗方）【產後の祕塞】五七日通ぜぬは妄(みだり)に藥丸を服してはならぬ。大麥芽を黃に炒つて末にし、三錢づつを沸湯で調へて服し、粥を與へて間服せしめるがよし。（婦人良方）【妊娠去胎】外臺では、妊娠して胎を去らんとするを治す。麥蘖一升、蜜一升を服すれば下る。○小品では、大麥芽一升、水三升を二升に煮取り、三回に分服する。神效がある。【產後の回乳】產婦が子を亡(な)くして乳を飮ませるものがなく、ために乳房内の乳が消せず、發熱し惡寒(をかん)するには、大麥蘖二兩を炒つて末にし、五錢づつを白湯で服するが甚だ良し。（丹溪纂要方）

飴餹（別錄上品）

和名　あめ
洋名　Wheat- and rice-gluten

【釋名】餳　音は徐盈の切（ジョウ）である。時珍曰く、按ずるに、劉熙の釋名に

『餹の淸めるものを飴といふ。狀態の怡怡然たるものだ。稠きものを餳といふ。强硬にして餳の如きものだ。餳の如くにして濁れるものを餔といふ。方言ではこれを餦餭――音は長皇(チヤウクワウ)――といふ。楚辭に「粔籹蜜餌用餦餭」とあるがそれだ』とある。嘉謨曰く、色が紫で琥珀に類するところから、方中にこれを膠飴といふ。乾枯せるものをば餳といふ。

[集解] 弘景曰く、方家で用ゐる飴は膠飴といふもので、濃い蜜のやうな濕餹である。その(一)寧結したもの、及び(二)牽白なものは餳餹である。藥用には入れない。

韓保昇曰く、飴とは軟餹のことだ。北方の地ではこれを餳といふ。糯米、粳米、秫粟米、蜀秫米、大麻子、枳椇子、黄精、白朮いづれも熬つて造れるものだが、糯米で作つたものだけを藥に入れ、粟米のものがこれに次ぐ。その他のものはただ食へるだけだ。

時珍曰く、飴、餳は、諸種の米に麥糵、或は穀芽を入れて共に熬煎して造るものだ。古代には寒食に多く餳を食つた。故に醫方でもやはりこれを使用するものの中に入れたのである。

(一)寧結ハ固マリオチツイテヰル狀態。
(二)牽白ハ引キ伸ベテ白ク連ナル狀態。

(三)「氣　味」『甘し、大溫にして毒なし』太陰の經に入る。宗奭曰く、多食すればば脾氣を動ずる。震亨曰く、飴餹は土に屬して火に依つて成る。大いに濕中の熱を發するものだ。寇氏がこれを『脾風を動ずる』といつたのは、末を言つて本を遺れたものだ。時珍曰く、凡そ中滿、吐逆、秘結、牙䘌、赤目、疳病の者は切に忌むべきものである。痰を生じ、火を動ずることが最も甚しい。甘は土に屬する、腎病には甘を多食してはならない。甘は腎を傷るもので、骨痛して齒が落ちるはみなその類である

「主　治」『虛乏を補し、渴を止め、血を去る』(別錄)『虛冷を補し、氣力を益し、腸鳴、咽痛を止め、唾血を治し、痰を消し、肺を潤ほし、嗽を止める』(思邈)『脾、胃を健にし、中を補す。吐血、打撲瘀血を治するには、熬り焦して酒で服す。能く惡血を下す。又、傷寒の大毒嗽には、蔓菁、薤の汁の中に入れ、煮て一沸して頓服するが良し』(孟詵)『脾弱で食思なき者は、少しづつ用ゐれば能く胃氣を和す。またこれで藥を和して用ゐる』(寇宗奭)『附子、草烏頭の毒を解す』(時珍)

「發　明」弘景曰く、古方の建中湯に多くこれを用ゐる。餹と酒とはいづれも米

(三)木村(康)曰ク、(水飴ノ製法)糯米二升四合ヲ洗ヒ、約二晝夜間浸シテ之ヲ蒸シ、攝氏一〇度ノ温度ニ冷却スルマデ待チ、之ヲ釀造室ニ運ビ麥酒製造ニ用ウル麥芽粉一合六勺ヲ混ジ、攝氏六十一度ヲ保テル温水九合ヲ加ヘテ充分ニ攪拌シ、桶ノ周圍ニ莚ヲ卷キテ蓋ヲナシ、九合ノ麥芽粉ヲ三度ニ加ヘ混合セシムベシ、然ル時ハ約六時間ヲ搾リトリ、後煮沸シテ粘稠ナラシムレバ飴トナル。

蘖を用ゐて造るものだが、餹は上品に編入され酒は中品に編入されてある。これは餹は和潤だから優れたものとし、酒は醺亂するものだから劣るとしたのである。

成無已曰く、脾は緩ならんことを欲する。急に甘を食つて以てこれを緩にする。膠飴の甘は以て中を緩にするものだ。

好古曰く、飴は脾の經の氣分の藥であつて、甘は能く脾の不足を補するものだ。

時珍曰く、集異記に『刑曹進は河朔の健將であつた。流矢が目に中つたとき、矢をば拔いたが鏃が中に留つてゐて、鉗で拔かうとしても動かず、痛困して死を俟つばかりになつてゐると、ふと夢に胡僧が現はれて「米汁を注ぐがよい、必ず瘥える」といつた。しかしその方法が判らぬので、さまざまな人人に詢ねたがやはり判らない。ところがある日一人の托鉢僧が來た。それが夢の胡僧によく似てゐたので、またその方法を詢ねて見ると、僧は「それはただ寒食餳を點ければよいのだ」といつた。そこで教へられた方法に從つて用ゐると、清涼を覺えて頓に酸楚痛が減じ、夜に入つて瘡が痒くなり、力を込め鉗を當てると直に鏃が出た。かくて十日ばかりで瘥えたのであつた』とある。

附方　舊二、新九。【老人の煩渴】寒食大麥一升、水七升を五升に煎じ、赤餳二合を入れ、渴するときに飲む。（奉親書）【蛟龍癥病】世間では一般に正月、二月に芹菜を食ふが、その際誤つて蛟龍の精を食ふと蛟龍病といふ病になる。その病は、發すると癇のやうで、顔色が青黄になるものだ。寒食餳五合づつを一日に三回服すれば蛟龍を吐出する。その物に兩頭のあるがその驗だ。蚘を吐くに用ゐてはならぬ。（金匱要略）【魚臍疔瘡】寒食餳を塗るが良し。乾けるものは灰に燒いて用ゐる。（千金方）【瘭疽毒瘡】臘月の飴餳を晝夜塗る。數日で癒える。（千金方）【誤つて稻芒を呑んだとき】白餳を頻に食ふ。（簡便方）【魚骨骾咽】出し得ぬには、飴餹を雞子黄大の丸にして呑む。下らぬときは再び呑む。（肘後）【誤つて錢、釵を呑んだとき】及び竹木を呑んだときは、飴餹一斤を取つて漸漸に食へ盡せば出る。（外臺）【箭鏃の出ぬもの】發明の項を見よ。【服藥過劑】悶亂するには、飴餹を食ふ。（千金）【草烏頭の毒】及び天雄、附子の毒には、いづれも飴餹を食へば解す。（總錄）【手、足の腐瘡】臘月の餹を炒つて薄る。（千金方）【火燒で瘡となつたもの】白餹を灰に燒いて粉せば燥いて瘥え易い。（小品方）

醬 （別錄下品）

和名 しやうゆ
洋名 Sauce 又 Soy.

〔釋名〕 時珍曰く、按ずるに、劉熙の釋名に『醬は將であつて、能く食物の毒を制すること將が暴惡を平げるが如きものだ』とある。

〔一〕〔集解〕 時珍曰く、麪醬に大麥、小麥、甜醬、麩醬などの種類があり、豆醬に大豆、小豆、豌豆、及び豆油などの種類がある。その釀造法は、

豆油——大豆三升を水で煮糜し、麪二十四斤を拌ぜて罨ふて黃にし、十斤毎に鹽八斤、井水四十斤を入れて攪きまぜ、晒して油にして貯藏する。

大豆醬——豆を炒り磨つて粉にし、一斗に麪三斗を入れて和匀し、切片して罨ふて黃にしたものを晒し、十斤毎に鹽五斤を入れ、井水に淹けて晒し、出來上つたものを貯藏する。

小豆醬——豆を磨り淨めて麪を和し、罨ふて黃にし、翌年再び磨り、十斤毎に鹽五斤を入れ、臘水に淹けて晒し、出來上つたものを貯藏する。

豌豆醬——豆を水に浸して軟に蒸し、晒し乾して皮を去り、一斗毎に小麥一斗を

〔一〕木村(康)曰ク、參考ニ本邦ノ醬油ニツイテ述ブレバ、醬油ハソノ原料等ノ異ナルニ從ヒ左ノ如ク區別スルヲ得。
(一)普通醬油　豆類(大豆等)、小麥(或ハ裸麥)及食鹽水ヲ以テ釀造シ、時トシテ米其他ノ穀類ヲ添加シ、又釀成後少量ノ味淋カラメル、或ハ甘草羮ヲ混和セルモノナリ。
(二)溜醬油　原料トシテ單ニ豆類及ビ食鹽水ヲ用キ釀造シタルモノヲ生引溜ト稱

シ、生引溜分離後ノ粕ニ砂糖若クハ蜂蜜及ビ食鹽水ヲ混和セシモノヲにいら醬油トイフ。
(三)複製醬油　普通醬油製造原料ノ他ニ海藻及魚介類ノ煎汁又ハ米粒、酒精等ヲ混和シ釀成セシメタルモノニシテ、昆布醬油、牡蠣醬油、混糟醬油、糯米醬油等之ニ屬ス。
(四)固形醬油　普通醬油或ハ溜醬油ヲ蒸發乾燥シテ運搬ニ便ナラシメタルモノニシテ、間間濃粉ノ如キ物質ヲ混和シ製スルコトアリ、醬油エキス、便利醬油、濃厚醬油、粉末醬油等是ニ屬ス。

麪に磨つて入れ、和して切り、蒸してから𥧱ひ、黄にして晒し乾し、十斤毎に鹽五斤、水二十斤を入れて晒し、出來上つたものを貯藏する。

麩醬——小麦麩を蒸熟して罨ふて黄にし、晒し乾して磨碎し、十斤毎に鹽三斤、熟湯二十斤を入れて晒し、出來上つたものを貯藏する。

甜麪醬——小麦麪を和劑し、切片して蒸熟し、𥧱ふて黄になつたものを晒して簸ひ、十斤毎に鹽三斤、熟水二十斤を入れて晒し、出來上つたものを貯藏する。

小麦麪醬——生麪を水で和し、布で包んで踏んで餅にし、罨ふて黄にして晒鬆し、十斤毎に鹽五斤、水二十斤を入れて晒し、出來上つたものを貯藏する。

大麥醬——黑豆一斗を炒熟して水に半日浸し、その水で煮爛し、大麥麪二十斤を拌ぜ合せながら麪を篩ひ下し入れ、豆を煮た汁で和劑して切片し、蒸熟し罨ふて黄にして晒し搗き、一斗毎に鹽二斤、井水八斤を入れて晒せば出來上る。黑く甜くして汁が淸むものだ。

又、麻滓醬といふがある——麻枯餅を搗いて蒸し、麪を和勻して罨ふて黄にし、普通の方法と同じく鹽、水を用ゐて晒せば出來上る。色、味の甘美なものだ。

(二)木村(康)曰ク、(成分)醤油ノ正常成分中既ニ知ラレタルモノハ、水分、蛋白質、アミノ酸類、有機鹽基、葡萄糖、糊精、乳酸、醋酸、酒精、「グリセリン」、食鹽、硫酸鹽、石灰、「マグネシア」、「カリ」等ニシテ、其他尚不明ノ物質ヲ含有ス。

(一)〔氣味〕【鹹し、冷、利にして毒なし】時珍曰く、麪醤は鹹し。豆醤、甜醤、豆油、大麥醤、麩醤はいづれも鹹く甘し。(○)詵曰く、多食すれば小兒の無辜を發し、痰を生じ、氣を動ずる。妊婦が雀肉と食合せれば生れる兒の顔が黒くなる。頌曰く、麥醤を鯉魚に和して食へば口瘡を生ずる。

〔主治〕【熱を除き、煩滿を止め、あらゆる薬、及び熱湯の火毒を殺す】(別錄)【一切の魚肉、菜蔬、蕈の毒を殺し、幷に蛇蟲、蜂蠆等の毒を治す】(日華)【醤汁を下部に灌入すれば大便不通を治す。耳中に灌げば飛蛾、蟲蟻の耳に入りたるを治す。狂犬の咬傷、及び湯火傷灼のまだ瘡とならぬものに塗れば效がある。又、砒の中毒には、水で調へて服すれば解す】(袖珍方)

〔發明〕弘景曰く、醤は多くは豆を用ゐて作るもので、純然たる麥のみのものは少だ。薬に入れるには豆醤を用ふべきもので、陳久なるものほど好し。又、魚醤、肉醤といふがあるが、それはみな醢と呼ぶものだ。薬用には入れない。詵曰く、小麥醤は薬力を殺すが豆醤には及ばない。又、麞、鹿、兎、雉、及び鱧魚の醤もあるが、いづれも久しく食つてはならぬ。

宗奭曰く、聖人は『醬を得ざれば食はず』といつた。その意味は、五味が和し、五臟が悦んで受け入れるやうにするといふのであつて、これはやはり安寧、平和を得る方法の一端だ。

時珍曰く、『醬を得ざれば食はず』といふは、やはり飲食、百藥の毒を殺すことを同時に目的としたものだ

附方　舊六。【手指の掣痛】醬の淸んだものに蜜を和し、温熱にして漬す。癒えれば止める。（千金）【癧瘍風駁】醬淸で石硫黄の細末を和して日毎に揩る。（外臺祕要）【妊娠下血】豆醬二升から汁を去つて豆を取り、炒り研つて酒で方寸匕を服す。一日三回。（古今錄驗）【妊娠尿血】豆醬一大盞を熬り乾し、生地黄二兩と末にし、一錢づつを米飮で服す。（普濟方）【浸淫瘡癬】醬瓣に人尿を和して塗る。（千金翼）【輕粉の毒を氣す】輕粉を服して口が破れたるには、三年の陳醬を水に溶かして頻りに漱ぐ。（瀕湖集簡方）

楡仁醬（食療）

和名　にれのみのしやう
洋名　Elm-fruit Soy.

【校　正】もとは醬の條に附錄されたが、本書には分離して記載した。

【集　解】時珍曰く、釀造法は、楡仁を取つて水に一伏時浸して洗袋に盛り、揉みつて涎を去り、蓼汁を拌ぜて晒す。かく七回繰返してから、發酵した麪麹と共に一般釀造法の通りにして鹽を入れて晒す。一升に對して麹四升、鹽一升、水五升の割合である。崔寔の月令に醔醶——音は牟偷（ボウトウ）——と謂つてあるがこのものだ。

【氣　味】【辛美である。温にして毒なし】【主　治】【大、小便、心腹の惡氣を利し、諸蟲を殺す。多食は宜しくない】（孟詵）

蕪荑醬（食療）

和名　ぶいのみのしやう
洋名　Soy prepared form the fruits of Ulmus macrocarpa, Hance.

【校　正】もとは醬の條に附錄されたが、本書には分離して記載した。

【集　解】時珍曰く、釀造法は楡仁醬と同じ。

【氣　味】【辛美にして微臭がある。温にして毒なし】多食すれば髮が落ちる。

【主治】「三蟲を殺す。功力は楡仁醤よりも强し」（孟詵）

【發明】張從正曰く、北方の地では、一般に多く乳酪、酥、脯などの甘美な物を食ふので、いづれも蟲が生ずる萠があるのだが、しかし蟲の生ぜぬのは、蓋し食物中に胡荽、蕪荑、鹵汁など九蟲を殺す物が多くあるからだ。

醋（別錄下品）

和名　す
洋名　Vinegar.

【釋名】**酢**　音は醋（ソ）である。**醯**　音は兮（ケイ）である。**苦酒**　弘景曰く、醋、酒は入れぬものがないといふほどに利用される。久しく經たものほど良し。またこれを醯ともいひ、苦味があるところから俗に苦酒と呼び、丹家ではまた他の物を加へて華池左味といふ。時珍曰く、劉熈の釋名には『醋は措である。能く食毒を措置する』とある。古方には多く酢の字を用ゐてある。

（二）【集解】恭曰く、醋には米醋、麥醋、麴醋、糠醋、糟醋、餳醋、桃醋などの數種がある。葡萄、大棗、蘡薁等諸種の雜果醋は會意のもので、やはり極めて酸烈だ。しかし米醋の二三年を經たものだけを藥に入れるので、その他のものはただ食

（二）木村（康）曰ク、醋ハ古キ酒又ハ酒粕ヲ原料トシ、醋酸菌 Bacterium aceti ニヨリ酒精ノ酸化シテ

醋酸トナリタルナリ。西洋ニテハ葡萄酒、麥酒、果汁等ヲ原料トス、又木醋ヨリモ製ス、近時ハ醋酸ヲ稀薄液トナシ、又ハ無機酸ニテ僞造スルコトアリ。

(二)江河トハ黄河ト揚子江ノ中間地帯ヲ指スカ。

ふだけに止まり、藥には入れられない。

詵曰く、北方では一般に多く糟醋を作り、(二)江河地方では一般に多く米醋を作る。小麥醋は糟醋に及ばない。それは他の物と妨げ忌む關係が多いためだ。大麥醋は良し。

藏器曰く、蘇氏は、葡萄、大棗などの諸果も醋に作れるといつたが、彼は荊楚の出身で、その地方は儉約で極端に始末のよい處だから、果物が腐敗するとそれで醋を醸造するのである。糟の醋でさへ藥に入れる位だから、果物のものは申すに及ばずだ。

時珍曰く、米醋——三伏の時期に、倉米一斗を淘淨して飯に蒸し、攤し冷し、盦ふて黄にし、晒し簸つて水で淋淨し、別に倉米二斗を飯に蒸してそれと和勻し、甕に入れ水に淹けて密封し、二十一日間暖かな場所に置けば出來上る。

糯米醋——秋社の日に糯米一斗を淘つて蒸し、六月六日に造つた小麥大麴をそれと和勻し、水二斗と甕に入れて封じ、二十一日間醸せば出來上る。

粟米醋——陳粟一斗を淘つて七日間浸し、再び蒸して淘熟し、甕に入れて密封し、

朝夕攪き廻す。七日で出來上る。

小麥醋——小麥を水に三日間浸して蒸熟し、盦ふて黄にし、甕に入れて水に四十九日間淹けて置けば出來上る。

大麥醋——大麥米一斗を水に浸して飯に蒸し、盦ふて黄にし、晒し乾して水で淋過し、再び麥飯二斗をそれに和勻し、水を入れて封閉し、二十一日間置けば出來上る。

餳醋——餳一斤、水三斗を煎じ化して白麴末二兩を入れ、瓶に封じて晒して置けば出來上る。

その他、糟、糠等の醋はいづれも藥には入れない。盡くは記述しきれない。

米醋（三）　氣味　【酸く苦し、溫にして毒なし】　詵曰く、大麥醋は微寒である。その他の醋はいづれも同じ。弘景曰く、多食すれば肌、臟を損ずる。藏器曰く、多食すれば筋骨を損じ、また胃をも損ずる。男子に益せず、顏色を損ずる。醋は諸藥を發するものだから共に食つてはならぬ。時珍曰く、酸は木に屬する。脾病の者は酸を多く食つてはならぬ。酸は脾を傷め、肉が腡んで唇が揭れる。○茯苓、丹參を

（三）木村（康）曰ク、（成分）參考マデニ日本醋ノ組成ヲカカグレバ水分九三・一六%、醋酸三・八四%、葡萄糖）・九九%、糊精〇・三一%、灰分〇・二%ナリ。

服するものは醋を食つてはならぬ。鏡源に曰く、米醋で煮れば四黃、丹砂、膽礬、常山の諸藥を制す。

〔主治〕【癰腫を消し、水氣を散じ、邪毒を殺す】(別錄)【諸藥を理し、毒を消す】(扁鵲)【産後の血運を治し、癥塊堅積を除き、食を消し、惡毒を殺し、結氣、心中の酸水、痰飮を破る】(藏器)【氣を下し、煩を除き、婦人の心痛、血氣、幷に産後、及び傷損、金瘡出血、昏運を治し、一切の魚肉、菜の毒を殺す】(日華)【醋に靑木香を磨つたものは卒心痛、血氣痛を止める。黃蘗を浸して含めば口瘡を治す。大黃末を調へて腫毒に塗る。生大黃を煎じて服すれば痃癖を治するに甚だ良し】(孟詵)【瘀血を散じ、黃疸、黃汗を治す】好古曰く、張仲景の黃汗を治するものに黃芪芍藥桂枝苦酒湯があり、黃疸を治するものに麻黃醇酒湯があつて、苦酒、淸酒を用ゐてある。方は金匱要略に記載されてある。

〔發明〕宗奭曰く、米醋は諸醋に比して最も釅い。藥に多くこれを用ゐるは穀氣が完全だからだ。故に糟醋に勝る。産婦の室内は常に炭火を置いて醋氣を沃ぐが佳し、酸は血を益するものだ。これで雄黃を磨つて蜂蠆の毒に塗るは、やはりその

（四）大觀ニ强ヲ盛ニ作ル。

（五）大觀ニ意ヲ說ニ作ル。

收して散ぜざる作用を利用するのだ。現に一般に酸を食へば齒が軟になるといふが、それは水は木を生じ、水氣が弱ければ木氣が（四）强いからさうなるのだ。靴皮を造るに醋を用ゐて紋皺することになつてゐるから見ても、その性の收斂することが判る。酸、收なりといつた（五）意と矛盾しない。

○○時珍曰く、按ずるに、孫光憲の北夢瑣言に『下婢が兒を抱いて炭火の上に落して燒灼したとき、醋泥を傅けるとやがて癒えて痕がなくなつた。又、ある少年は眼中に常に一枚の鏡があるやうに見えるのであつたが、趙卿が「明朝魚鱠を馳走したい」とその少年を招ぎ、少年が約束の時刻に訪ねて往くと、そのまま一向に何の樣子もなく待たせて置いた。少年は甚しく空腹を感じ始め、ふと卓上に一箇の瓶の中に芥醋が入れてあるのを見て、やがて少しづつそれを啜つた。すると胸中が大そうさつぱりして、眼花が見えなくなつて了つた。そのとき趙卿が「君は魚鱠を多く食ひ過ぎたのだ。魚は芥、醋を畏れるものだから、計略で今その疾を癒して進ぜたのだ」といつた』とある。この二例は別錄に『癰腫を治し、邪毒を殺す』ある事實を驗證するものともいへる。概して醋の諸瘡腫、積塊、心腹疼痛、痰水、血病を治し、魚

(六)大觀ニ三ニ作ル。

肉、菜、及び諸蟲の毒氣を殺すは、その酸收の作用を利用する以外ではないのであつて、また瘀を散じ、毒を解する功力がある。李廷飛は『醋は能く飮を少くし、寒を辟けること酒に勝るものだ』といひ、王讖は幼より醋を食はなかつたが、年八十を踰えてなほ能く神を傳へたといふ。

附方　舊二十、新十三。【身體の卒腫】醋で蚯蚓屎を和して傅ける。(千金)【白虎風毒】三年の釅醋五升を煎じて五沸し、葱白三升を切つて煎じて一沸し、漉し出して布に染め、熱に乘じて裹む。痛が止まつたならば已める。(外臺祕要)【霍亂吐利】鹽、醋を煎じて服するが甚だ良し。(如宜方)【霍亂煩脹】なほ吐下せぬには、好き苦酒三升を飮む。(千金方)【足上の轉筋】故綿を醋中に浸し、甑で蒸し熱して裹み、冷えれば易へる。瘥えるまで手を停めず試みる。(外臺)【汗が出て滴らぬもの】腰脚が痩せ、幷に耳の聾するには、米醋に荊三稜を夏は四日、冬は六日浸して末にし、(六)二錢を醋湯で調へて服すれば瘥える。(經驗後方)【腋下の狐臭】三年の釅醋で石灰を和して傅ける。(外臺)【癧瘍風病】酢で硫黄末を和して傅ける。(外臺祕要)【癰疽の潰れぬもの】苦酒で雀屎を和し、小豆大ほどを瘡頭に傅ける。上が穿つものだ。(肘後方)【舌

(七)大觀ニ脫下ニ皮字アリ。
(八)大觀ニ醋下ニ一升ノ二字アリ。
(九)布ハ朮ノ誤。
(一〇)大觀ニ胡字ナシ。

腫の消かぬもの】酢で釜底墨を和して舌の上下に厚く傅け、(七)脱ちるときは更に傅ける。須臾に消くものだ。(千金方)【木舌の腫强】醋で時時に含漱する。(普濟方)【牙齒の疼痛】大醋(八)で枸杞白皮一升を煮て半升を取り、含嗽すれば瘥える。(肘後方)【鼻中の出血】酢で胡粉を棗半箇ほど和して服す。○又、ある法では、醋で土を和して陰囊に塗り、乾けば易へる。(千金方)【耳を塞いで聾を治す】醇酢を用ゐて微火で附子を炙き、尖に削つて塞ぐ。(千金方)【面䵟雀卵】苦酒に(九)布を漬けて常に拭ふ。(肘後方)【砒石の中毒】釅醋を飲んで吐けば瘥える。水を飲んではならぬ。(廣記)【硫を服して發した癰】酢で豉を和し、膏に研つて傅け、燥けば易へる。(千金方)【雞子の中毒】醋少量を飲めば消する。(廣記)【全身に虱の出たとき】方は石部鹽石にある。【毒蜂の螫傷】淸醋一二盌を急に飲んで毒氣の散らぬやうにし、然る後に藥を用ゐる。(濟急方)【蠍の刺螫】醋に附子を磨つて汁を傅ける。(醫學心鏡)【蜈蚣の咬毒】醋に生鐵を磨つて傅ける。(篋中方)【蜘蛛の咬毒】上記の方に同じ。【蠼螋尿瘡】醋で(一〇)胡粉を和して傅ける。(千金方)【諸蟲の耳に入つたとき】凡そ百節、蚰蜒、蟻が耳に入つたときは、苦酒を注入して起つて歩めば出る。(錢相公篋中方)【湯火傷灼】直ち

に酸醋で淋洗し、幷に醋泥を塗るが甚だ妙である。瘢痕もなくなる。【狼烟の口に入つたとき】醋少量を飮む。（祕方）【足上の凍瘡】醋で足を洗つて藕を研つて傅ける。【胎兒が死亡して下らぬもの】月の足らぬには、大豆を醋で煮て三升を服すれば立ろに分解する。なほ下らぬときは再服する。（子母祕錄）【胞衣不下】腹が滿すれば死亡する。水に醋少量を入れて顏面に噀くが神效がある。（聖惠方）【鬼擊卒死】醋少量を鼻中に吹入る。（千金）【乳癰の堅硬なるもの】罐に醋を作り、石を燒熱して投ずること二回、それを溫めて癰を漬け、冷えたときは更に石を燒いて投じて漬ける。三回に過ぎずして瘉える。（千金）【疔腫の初期】腫を麪で圍み、針で瘡上を亂刺し、銅器で醋を煎じ沸して麪の圍の中に傾け入れ、一盞ほどを容れて置き、冷えれば易へる。三回にして根が出る。

酒（別錄中品）

和名 さけ
洋名 Sake. (Rice-beer)

【校正】拾遺の糟筍酒、社酒をこの一條に併記した。

【釋名】時珍曰く、按ずるに、許氏の說文に＝酒は就である。人の善惡を就す

所以である』とある。一説に、酒の字の篆文は、酒が卣中にある狀態の形容だといふ。飲饍標題には『酒は、淸めるものを釀といひ、濁れるものを盎といひ、厚きを醇といひ、薄きを醨といひ、二重に釀したものを酎といひ、一夜作りのものを醴といひ、美なるを醑といひ、まだ搾らぬものを醅といひ、紅なるを醍といひ、綠なるを醽といひ、白きを醝といふ』とある。

【集解】恭曰く、酒には、黍、秫、粳、糯、粟、麴、蜜、葡萄等の種類がある。凡そ酒醴を作るには麴を用ゐることになつてゐるが、葡萄、蜜等の酒だけは麴を用ゐない。諸種の酒それぞれ醇、醨の差異がある。米の酒だけを藥用に入れる。

藏器曰く、凡そ好酒の熟せんとするときは、みな能く風潮を候て轉ずる。これは陰陽に合するものだ。

詵曰く、酒に紫酒、薑酒、桑椹酒、葱豉酒、葡萄酒、蜜酒があり、また地黃、牛膝、虎骨、牛蒡、大豆、枸杞、通草、仙靈脾、狗肉等、いづれも和して酒に釀し得る。いづれもそれぞれに方がある。

宗奭曰く、戰國策に『帝女儀狄が酒を造つて禹に進めた』とあり。說文には『少

康が酒を造る。卽ち杜康なり』とあるが、しかし、本草には已に酒の名の記載があり、素問にも酒、漿といつてあるところを見ると、酒は黄帝の時から始つたので、儀狄から始つたものではない。古方に用ゐてある酒には、醇酒、春酒、白酒、淸酒、美酒、糟下酒、粳酒、秫黍酒、葡萄酒、地黄酒、蜜酒、有灰酒、新熟無灰酒、社壇餘酢酒があり、今一般に用ゐるものには、糯酒、煮酒、小豆麴酒、香藥麴酒、鹿頭酒、羔兒等の酒がある。江浙、湖南、湖北にはまた糯粉にさまざまの藥を入れて作つた麴で作る餅子酒がある。官で取扱ふものの中にはまた四夷の酒もあるが、中國でそれを標準的なものとして採用するわけには行かない。今醫家で用ゐるには、それ等に就いて十分に斟酌を要する。但し酒を飲むといふことはただその味を取るので、藥に入れて如何なるものであるかをば顧みないのであるが、しかし、久しくこれを用ゐるときは大抵病を作すのである。蓋しこの物は損と益とを兼行するものだから、十分愼まねばならぬものだ。漢の時に丞相に賜つた上尊酒といふは、糯を上とし、稷を中とし、粟を下としたが、現に佐、使として藥に入れるには專ら糯米を用ゐ、淸水と白麪麴とで釀造するを正しいものとする。古代には諸藥を入れて麴を

造るといふことはなかつたので、隨つて功力が和厚で他の酒のいづれにも勝つたのである。今一般にはまた蘖で釀造するが、あれはただ醴といふもので酒ではない。書經に『若し酒、醴を作らば、爾ぢ惟れ麴蘖』とあるのだから、酒といふときは麴を用ゐたもの、醴といふときは蘖を用ゐたものであつて、氣味に甚しい懸隔がある。治療上にも差異のなかるべき道理はあるまい。

穎曰く、藥に入れて用ゐるには東陽酒が最も佳し。その酒は古から有名なもので、事林廣記にその釀造法の記載があるが、麴にはやはり藥を用ゐたものだ。今はその方法が絕えて無くなつて、ただ麩、麪を用ゐ、蓼汁を拌ぜて造るのだが、それはその物の辛辣なる力を假るためであつて、蓼はまた解毒の作用もある。その酒は淸香が遠くまで達し、色はまた金のやうな黃色で、醉ふほど飲んでも頭痛せず、口が乾かず、瀉を作さない。その酒の釀造に用ゐてゐる水を秤つて見るに、他の土地の水に比して重量があり、隣接した土地で使用する水でもみなさうは行かぬところを見ると、これは全然水の美なるに因するものらしい。處州の金盆露は、水に薑汁を和して造つた麴と浮飯とで釀造し、味も醇美で結構なものだが、色、香の點で東陽に

劣る。これはその水が及ばないからだ。江西の麻姑酒（まこしゆ）は釀造用水の（一）泉から名を得たものだが、麴には群（おほ）くの藥が入つてゐる。金陵の瓶酒は麴、米に非難すべきところはないが水に鹼があり、且つ灰を用ゐてあつて、味に甚だ甘味が多く、能く痰を聚める。山東の秋露は色が白く、味は純にして烈しい。蘇州の小瓶酒は麴に葱、及び紅豆、川烏の類が入れてあつて、飲めば頭痛し、口が渇く。淮南（わいなん）の綠豆酒は麴に綠豆があつて能く毒を解するが、しかしこれも灰があるので美味でない。

○時珍曰く、東陽酒、卽ち（二）金華酒である。古の蘭陵の地で、李太白の詩に所謂『蘭の美酒、鬱金香（うつこんかう）』とはこの酒のことだ。平常の飲料として、藥用としていづれも良し。山西の（三）襄陵酒、薊州（けいしう）の薏苡酒（よくいしゆ）はいづれも淸烈だが、ただ麴中にやはり藥物がある。黃酒には灰がある。（四）秦、蜀にある咂嘛酒（さうましゆ）といふは、稻、麥、黍、秫、（五）藥麴を用ゐ、小罌（せうえい）に封じて釀造するもので、筒で吸つて飲むものだ。これは穀氣が雜つてゐるので酒が淸美でない。いづれも藥用には入れられぬ。

米酒 （六）氣味 【苦く甘く辛し、大熱にして毒あり】 ○詵曰く、久しく飲めば神（しん）を傷り、壽を損じ、筋骨を軟にし、氣痢を動ずる。酔臥して風に當れば癲風（でんぷう）となり、

（一）麻姑泉ハ江西省南城縣ノ西南ニアル麻姑山ニ發源ス。
（二）金華ハ隋ノ縣名、今ノ縣城ノ北ニアル金華山ニヨリテソノ地ヲ呼ビタルモノナリ。
（三）襄陵ハ漢ノ縣名、今ハ山西省河東道ニ屬ス。
（四）秦蜀、秦ハ陝西、蜀ハ四川地方ヲイフ。
（五）食療正要ニ藥ヲ作ニ作ル。
（六）木村（康）曰ク、參考ノ爲ニ日本酒ニツイテ述ブレバ、本邦ニ於テ清酒釀造ノ起源ハ明瞭ナラズト

雖モ、ソノ釀造法ハ支那ヨリ出テ、朝鮮人初メテ之ヲ傳ヘタルモノナリト云フ。明治三七年一二月法律第三號ヲ以テ改正セラレタル酒造税法中ニ定ムル清酒ノ定義ハ次ノ如シ、即チコノ税法ニ於テ清酒ト稱スルハ米、米麹及水ヲ原料トシテ醱酵セシメ、又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ、之ヲ濾過シタルモノヲ謂フ、尙左ニ揭グルモノハ清酒ト看做ス。
一、前項原料ノ他麥粟、玉蜀黍、稗、清酒粕又ハ燒酎ヲ原料トシ醱酵セシメ、又ハ酒酵母ヲ加ヘテ醱酵セシメ之ヲ濾過シタルモノ。
二、清酒又ハ清酒ト看做シタルモノヲ粕

醉ふて冷水を浴すれば痛痺となり、丹砂を服する人が飲めば頭痛し、吐し、熱する。

○○士良曰く、凡そ丹砂、(七)北庭、石亭脂、鍾乳の諸石、生薑を服するには、長く酒を用ゐて服してはならぬ。能く石藥の氣を引いて四肢に入れ、滯血が化して癰疽となる。

○○藏器曰く、凡そ酒は諸種の甜き物を忌む。酒漿は人を照映して見て影のないものは飲んではならぬ。祭りに用ゐた酒で自ら耗つたものは飲んではならぬ。酒と乳とを合せ飲めば人をして氣結せしめる。牛肉と共に食へば人をして蟲を生ぜしめる。酒を飲んで後に黍穰の上に臥し、猪肉を食へば大風を患ふ。

○○時珍曰く、酒後に茶、及び辣き物を食へば人の筋骨を緩にする。酒後に茶を飲めば腎臟を傷めて腰脚が重墜し、膀胱が冷痛し、兼て痰飲、水腫、消渴、攣痛の疾を患ふ。一切の毒藥を酒で用ゐた場所には治し難い。又、酒は鹹を得て解するは水が火を制するのであつて、酒の性は上り、鹹は潤下するものだ。又、枳椇、葛花、赤豆花、綠豆粉を畏れるは寒が熱に勝つのである。

【主治】【藥勢を行らし、百邪、惡毒の氣を殺す】(別錄)【血脈を通じ、腸、胃を

厚くし、皮膚を潤ほし、濕氣を散し、憂を消し、怒を發し、言を宣べ、意を暢べる】(藏器)【脾氣を養ひ、肝を扶け、風を除き、氣を下す】(孟詵)【馬肉、桐油の毒、丹石發動の諸病を解す。熱飲するが甚だ良し】(時珍)

糟底酒 三年目の臘月に糟下から取る。【胃を開き、食を下し、水臟を暖め、腸、胃を溫め、宿食を消し、風寒を禦ぎ、一切の蔬菜の毒を殺す】(日華)【嘔噦を止める。風瘙、腰膝の疼痛を摩する】(孫思邈)

老酒 臘月に釀造したものは數十年經つても腐敗せぬ。【血を和し、氣を養ひ、胃を暖め、寒を辟け、痰を發し、火を動ずる】(時珍)

春酒 清明に釀造したものはやはり久しく持てる。【常に服すれば人體を肥白ならしめる】(孟詵)【蠼螋尿瘡には、これを飲んで醉ふ。須臾にして米のやうな蟲が出る】(李絳兵部手集)

社壇餘胙酒(拾遺)【小兒の語遲を治す。口中に納れるが佳し。又、これを屋根の四隅に噴けば蚊子を辟ける】(藏器)【これを飲めば聾を治す】時珍曰く、按ずるに、海錄碎事に『俗間の傳說に、社酒は聾を治すといふ。故に李濤の詩に「社翁今日心情

漉シタルモノ。

三、清酒又ハ前二號ニ依リ清酒ト看做シタルモノニ、其容量百分ノ一以內ノ燒酎又ハ酒精ヲ混和シタルモノ。

清酒ニ對シテハ未ダソノ鑑定標準ヲ定ムルノ域ニ達セズ、次ニ各税務監督局ニ於テ行ヘル四百三十餘種ノ分析成績ヲ掲ゲテ參考ニ資ス。比重ハ〇・九一六五—一・〇六〇八、「アルコホル」一〇・七—二〇・六容%、「エキス」一・八〇—九・〇六%、總酸〇・一四—一・七九%、「グリセリン」〇・一〇—二・五七%、鑛物質〇・〇一—〇・四一%、燐酸〇・〇〇二—〇・〇七%、糖分〇・〇一—二・四〇%、糊精〇・〇一—二・一

二%。
(七)北庭ハ硇砂ノ別名。
(八)大觀ニ石上ニ磬字アリ

沒し。爲に寄す聾を治する酒一瓶」の句がある』とある。

糟筍節中酒　[氣　味]【鹹し、平にして毒なし】[主　治]【飮めば噎氣、嘔逆に主效がある。或は小兒乳、及び牛乳を加へて共に服す。又、癧瘍風を摩する】(藏器)

東陽酒　[氣　味]【甘く辛し、毒なし】[主　治]【用ゐて諸藥を制するに良し】

[發　明]　弘景曰く、大寒には海が凝るが酒は氷らない。その性の熱なること特に群くのものに冠絶することが明だ。藥家では多くこれを用ゐて藥の勢力を行らすが、一般人が多く飮めば體弊し、神昏する。これはその物に毒のあるためである。博物志に『王肅、張衡、馬均の三人が早朝に霧を冒して旅行したとき、一人は酒を飮み、一人は十分に食事を攝り、一人は空腹で出發したが、空腹のものは死亡し、十分に食つたものは病に罹り、酒を飮むだものは健全だつた』とある。これは酒の勢が惡を辟けること他の食物に勝ることの例證だ。

好古曰く、酒は、能く諸經に引いて止まぬこと附子と同様だ。味の辛は能く散じ、苦は能く下し、甘は能く中に居て緩にする。これを他の藥を導引するに利用すれば、全身の表に通行し、極高の部分にまで到達させることを得るものだ。味の淡なるも

のは小便を利して速に下るものである。古代にはただ麥で造つた麹で黍を醸したものだが、それすら辛、熱にして毒ありとされたのである。當今の醞(かも)すものは烏頭、巴豆、砒霜、薑、桂、石灰、竈灰(さうくわい)の類の大毒、大熱の藥を加へてその氣味を增すものだ。いかで沖和を傷(やぶ)り、精神を損じ、營衛を涸(から)し、(九)天癸を竭(つく)して人間の壽命を夭(えう)せぬわけに行かうぞ。

震亨曰く、本草には、ただ『酒は熱にして毒あり』といつただけで、中を濕し、熱を發することを説いてないが、相火を近(まね)ぐものなることが、醉ふて後に振寒し、戰慄することを以ても首肯される。又、性は喜んで升り、氣が必ずそれに隨ふもので、痰が上に鬱し、溺(にょう)が下に澀し、恣(ほしいまま)に寒、涼のものを飲めば、その熱が內鬱して肺氣が大いに傷め、その初期で病の淺いうちは、或は嘔吐し、或は自汗し、或は瘡疥を生じ、或は鼻皶(びさ)となり、或は泄利し、或は心、脾が痛む。かかる症狀の內は散じても去るのであるが、久しく經過すれば病が深くなつて、或は消渴となり、或は內疸となり、或は肺痿となり、或は鼓脹し、或は失明し、或は哮喘(かうぜん)し、或は勞瘵(らうさい)となり、或は癲癇となり、或は痔漏となり、病名の付け難い病となる。かうなつては具眼の

(九)天癸ハ女血、男精ノ稱。

名醫ならでは容易に處し得ないものである。そもそも醇酒は性の大熱なものだ。飲む者には飮んで旨いといふだけでそれ等の事に全然迂濶であるが、正しい考からすれば冷で飮むがよい。それには三種の益があつて、肺を過ぎ胃に入つて然る後に肺を微溫にし、中を溫むるの意味から氣を補すことになり、次には寒中の溫の作用から胃を養ふことになる。冷酒は行ることが遲くして傳化が漸漸に行はれるものだ。一般に恣に飮むべきものではないのだが、世間の狀態はさうでない。ただ喉と舌とに快く感ずればよいといふだけに心得てゐる。

○穎曰く、一般に朝の酒を戒めることは心得てゐて、夜飮むことの更に甚しいに氣がつかないが、十分に醉ゐ、十分に食つてから睡つて枕に就けば、熱擁して心を傷ひ、目を傷ふ。夜の收斂する氣を酒で發するから、その淸明を亂し、その脾、胃を勞し、濕を停め、瘡を生じ、火を動じ、慾を助け、ために病を惹き起すものが多いのである。朱子のいつた『醉を以て節を爲す』位がよいところなのだ。

○機曰く、按ずるに、扁鵲は『過飮すれば腸を腐し、胃を爛し、髓を潰し、筋を蒸し、神を傷り、壽を損ずる』といつた。昔、ある客が周顗を訪ねたとき、美酒二石

（一〇）脇穿ハ心臓麻痺ヲ云フナルベシ。

を出して、顗が一石二斗を飲み、客が八斗を飲んだ。翌朝顗は一向苦まなかつたが、客は已に（一〇）脇穿して死んでゐたといふ。これは扁鵲の戒を犯したものであらうと思ふ。

時珍曰く、酒は天の美祿であつて、麪、麴の酒少量を飲めば血を和し、氣を行らし、神を壯にし、寒を禦ぎ、愁を消し、興を遣るが、痛飲すれば神を傷り、血を耗し、胃を損じ、精を亡ひ、痰を生じ、火を動ずるものだ。邵堯夫の詩に『美酒を飲んで微醉せしめて後』とある。これは飲酒の妙を得たもので、所謂醉中の趣、壺中の天である。若し夫れ、沈湎して度なく、醉て以て常となすものは、輕きは疾を起し、操行を敗り、甚しきは邦を喪ひ、家を亡ぼして身命を隕するに至る。その害言語の及ぶところでない。それゆゑに大禹は儀狄を疎んじ、周公は酒誥を著して世の範戒としたのである。

【附方】 舊十一、新六。【驚怖卒死】溫酒を灌げば醒める。【鬼擊の諸病】突然襲はれて刀で刺されたやうになり、胸脇、腹內が切痛して抑へることも按でることもならず、或は吐血し、鼻血し、下血するものは、一名鬼排と名ける。醇酒を兩鼻中

に吹くが良し。(肘後)【馬氣の瘡に入つたもの】或は馬汗、馬毛が瘡に入つたものは、いづれも腫痛、煩熱を起す。腹に入れば死亡する。多く醇酒を飲んで醉ふ。癒えること妙である。(肘後方)【虎に傷けられた瘡】ただ酒を飲んで常に大醉する。毛を吐出すものだ。(梅師)【蛇咬の瘡】煖酒で一日三回瘡上を淋洗する。(廣利方)【蜘蛛瘡毒】上記の方に同じ。【毒蜂の螫傷】方は上に同じ。【咽が傷んで聲の破れるもの】酒一合、酥一匕、乾薑末二匕を和して一日二回服す。(十便良方)【三十年の耳聾】酒三升に牡荊子一升を七日間漬けて滓を去り、性に任せて飲む。(千金方)【天行餘毒】手、足が腫れて斷れんとするほど痛むには、深さ三尺の坑を掘つて燒き熱し、その中に酒を灌ぎ入れ、屐を着けその坑中に入つて坐り、衣類を被せて氣の泄れぬやうにする。(類要方)【下部の痔䘌】地に小坑を掘つて赤く燒き、酒を沃いで吳茱萸を(一)投じ、その上に坐る。三回に過ぎずして良し。(外臺)【產後の血悶】淸酒一升に生地黃汁を和して煎じて服す。(梅師)【身體、面部の疣目】酸酒酢を盜んで洗ひ『疣疣不知羞酸酒醇洗儞頭急急如律令』と七遍咒文を唱へれば自ら癒える。(外臺)【禁酒法】酒七升、硃砂半兩を瓶に浸して堅く封じ、それを豬の檻に入れて豬の搖動するに任せ、七日

(一)大觀ニ杵ニ作ル。

の後に取り出して頓に飲む。○又、ある法では、正月一日に酒五升を碓の中へ淋ぎ、杵き下して取つて飲む。（千金方）【男子の脚冷】不隨で歩行不能なるには、淳酒三斗、水三斗を瓷中に入れて灰火で温め、膝まで脚を漬ける。常に灰火を置いて冷えぬやうにし、三日で止める。（千金方）【海水の傷裂】凡そ海水や鹹い物にかぶれ、または風に吹かれて裂け、忍び難く痛むには、蜜半斤、水、酒三十斤を用ゐ、防風、當歸、羌活、荊芥各二兩を末にして湯に煎じて浴する。一夕で癒える。（使琉球錄）

【附諸酒方】時珍曰く、本草、及び諸書に、いづれも治病用に醸す酒の方がある。此にその簡要なものを輯めて參考に備へる　藥品の多いものは盡くを掲げるわけに行かない。

愈瘧酒　諸種の瘧疾を治す。頻頻これを温飲する。四月八日に水一石と麴一斤を用ひ、麴を末にして水中に酘じ、酢くなるを待つて煎じて一石から七斗を煎じ取り、冷えるを待つて麴四斤を入れ、一夜置いて上に白沫が生じたとき、秫一石を炊いて冷して酘ずる。三日にして酒が出來上る。（賈思勰齊民要術）

屠蘇酒　陳延之の小品方に『これは華佗の方であつて、元旦に飲めば、疫癘、一

切の不正の氣を辟ける。醸造法は、赤朮、桂心七錢五分、防風一兩、菝葜五錢、蜀椒、桔梗、大黃五錢七分、烏頭二錢五分、赤小豆十四粒を用ゐ、三角に縫つた囊に盛つて除夜に井底に懸け、元日に取出して酒中に入れ、煎じて數沸し、一家擧つて東に向ひ、年少者から年長者の順に飲み、藥滓はまた井戸に投入する。每歲この水を飲めば一代の間無病である」とある。(一)時珍曰く、蘇とは魑鬼の名で、この藥が鬼爽を屠割するといふところからかく名けたのだ。或はこれは屠蘇庵といふ草庵の名だともいふ。

逡巡酒　虛を補し、氣を益し、一切の風痺、濕氣を去り、久しく服すれば壽を益し、老に耐へ、顏色を好くする。醸造法は、三月三日に取つた桃花三兩三錢、五月五日に取つた馬蘭花五兩五錢、六月六日に取つて脂麻花六兩六錢、九月九日に取つた黃甘菊花九兩九錢を陰乾し、十二月八日に臘水三斗を取り、春分の日を待つて好き桃仁四十九箇を皮尖を去り、白麪十斤と前の花と共に和して麴にし、紙に包んで四十九日間置き、(二)糯米飯一升、白水一瓶、麴一丸、麪一塊を用ゐ、封じて良久すれば出來上る。もし淡いときは再び一丸を加へる。

(二)糯米飯一升ハ順治本ニ據ル。

五加皮酒　一切の風濕、痿痺を去り、筋骨を壯にし、精髓を塡てる。五加皮を洗つて骨を刮り去り、汁に煎じて麴、米を和し、釀して出來上つたものを飮む。或は切り碎いて袋に盛り、酒に浸して煮て飮む。或は當歸、牛膝、地楡の諸藥を加へる。

白楊皮酒　風毒脚氣、腹中痰癖の石の如くなるを治す。白楊皮を切片し、酒に浸して藥力を發生させて飮む。

女貞皮酒　風虛を治し、腰膝を補す。女貞皮を切片し、酒に浸して煮て飮む。

仙靈脾酒　偏風不遂を治し、筋を强くし、骨を堅くする。仙靈脾一斤を袋に盛り、無灰酒二斗に浸して三日間密封して飮む。（聖惠方）

薏苡仁酒　風濕を去り、筋骨を强くし、脾、胃を健にする。絕好の薏苡仁粉と麴米とを共に酒に釀し、或は袋に盛つて酒で煮て飮む。

天門冬酒　五臟を潤ほし、血脈を和し、久しく服すれば五勞、七傷、癲癇、惡疾を除く。常に酒氣を繼續せしめる。大醉に至つてはならぬ。十日にして風疹の毒氣を出し、三十日にして瘥え、五十日にして風の吹くを知らなくなるものだ。冬期に天門冬を心を去つて煮た汁と麴米とを共に釀して造る。熟した初めには微し酸いが、

久しく經つと味が佳くなる。(千金方)

百靈藤酒　諸風を治す。百靈藤十斤、水一石を三斗に煎じ取つた汁に糯米三斗、神麹九斤を入れ、普通の方法のやうに釀して造り、三五日經つて更に糯飯を炊いて投ずれば熟する。それを澄清して日毎に飲む。汗を出して效がある。(聖惠方)

白石英酒　風濕周痺、肢節濕痛、及び腎虚の耳聾を治す。白石英、磁石を煆いて醋に淬すこと七回、各五兩を絹袋に盛つて酒中に浸し、五六日して温飲する。酒が少くなつたときは更に添加する。(聖濟總錄)

地黄酒　虚弱を補し、筋骨を壯にし、血脈を通じ、腹痛を治し、白髮を變ずる。生の肥えた地黄の汁を絞り、麹米と共に器中に密封すること五七日にして啓く。中にある緑汁が眞の精英である。先づそれを飲むがよし。そこで汁を濾して貯藏する。牛膝汁を加へれば效果が更に速だ。また群くの藥を加へることもある。

牛膝酒　筋骨を壯にし、痿痺を治し、虚損を補し、久瘧を除く。牛膝の煎汁に麹米を和して酒に釀す。或は切り碎いて袋に盛り、酒に浸して煮て飲む。

當歸酒　血脈を和し、筋骨を堅くし、諸痛を止め、經水を調へる。當歸の煎汁で

或は醸し、或は浸す。いづれも前記の法のやうにする。

菖蒲酒　三十六風、十二痺を治し、血脈を通じ、骨痿を治し、久しく服すれば耳、目が聰明になる。石菖蒲の煎汁で或は醸し、或は浸す。いづれも前記の法のやうにする。

枸杞酒　虚弱を補し、精氣を益し、冷風を去り、陽道を壯にし、目涙を止め、腰脚を健にする。甘州の枸杞子を煮爛して搗き、その汁で麴米を和して酒に釀し、或は子と生地黄とを袋に盛つて酒に浸し、煮て飲む。

人參酒　中を補し、氣を益し、諸虚を通治する。人參末と麴米とで酒に釀し、或は袋に盛つて酒に浸して煮て飲む。

薯蕷酒　諸風眩運を治し、精髓を益し、脾、胃を壯にする。薯蕷粉と麴米とで酒に釀し、或は山茱萸、五味子、人參の諸藥と共に酒に浸して煮て飲む。

茯苓酒　頭風虚眩を治し、腰脚を暖め、五勞、七傷に主效がある。茯苓粉と麴米とで酒に釀して飲む。

菊花酒　頭風を治し、耳、目を明にし、痿痺を去り、あらゆる病を消す。甘菊花

の煎汁と麹米とで酒に釀す。或は地黄、當歸、枸杞の諸藥を加へるも佳し。

黄精酒　筋骨を壯にし、精髓を益し、白髪を變じ、あらゆる病を治す。黄精、蒼朮各四斤、枸杞根、柏葉各五斤、天門冬三斤の煮汁一石と麹十斤、糯米一石とで普通のやうに酒に釀して飲む。

桑椹酒　五臟を補し、耳、目を明にし、水腫で下さねば滿し、下せば虛し、腹に入れば十中に一人も活きぬものを治す。桑椹の搗汁を煎じて麹米と共に普通の方法で酒に釀して飲む。

朮酒　一切の風濕、筋骨の諸病を治し、顏色の衰を駐め、寒暑に耐へる。朮三十斤を皮を去つて搗き、東流水三石に三十日間漬けて取つた汁を一夜露し、麹米をそれに浸して釀して飲む。

蜜酒　孫眞人曰く、風疹、風癬を治す。沙蜜一斤、糯飯一升、麪麹五兩、熟水五升を共に瓶に入れ、七日間封ずれば酒に成る。尋で蜜を入れて酒に代へるも良し。

蓼酒　久しく服すれば耳、目を聰明にし、脾、胃を壯健にする。蓼の煎汁で麹米

を和して酒に釀して飮む。

薑酒　誌曰く、偏風、中惡、疰忤、心腹冷痛を治す。薑を酒に浸し、一椀を煖服すれば止まる。○ある法では、薑汁で麴を和し、普通の方法のやうにして酒に造つて服するも佳し。

葱豉酒　誌曰く、煩熱を解し、虛勞を補し、傷寒の頭痛、寒熱、及び冷痢、腸痛を治し、肌を解し、汗を發す。いづれも葱根、豆豉を酒に浸して煮て飮む。

茴香酒　突然の腎氣痛で偏墜し、牽引するもの、及び心腹痛を治す。茴香を酒に浸して煮て飮む。舶來の茴香が就中妙である。

縮砂酒　食物を消化し、中を和し、氣を下し、心腹痛を止める。砂仁を炒つて研り、袋に盛つて酒に浸して煮て飮む。

莎根酒　心中の客熱、膀胱、脇下の氣鬱で常に憂鬱なるを治す。莎根一斤を切り、香しく熬つて袋に盛り、酒に浸して晝夜服す。酒氣を繼續さすべきものだ。

茵蔯酒　風疾の筋骨攣急を治す。茵蔯蒿を黃に炙いて一斤、秫米一石、麴三斤を普通のやうに酒に釀して飮む。

靑蒿酒　虛勞、久瘧を治す。靑蒿の搗汁を煎じ、普通のやうに酒に釀して飮む。

百部酒　一切の久近咳嗽を治す。百部根を切つて炒り、袋に盛つて酒に浸し、頻頻と飮む。

海藻酒　癭風を治す。海藻一斤を洗淨し、酒に浸して晝夜に少しづつ飮む。

黃藥酒　諸癭氣を治す。萬州の黃藥を切斤して袋に盛り、酒に浸して煮て飮む。

仙茆酒　精氣虛寒、陽痿、膝弱、腰痛、痺緩、諸虛から起る病を治す。仙茆を九蒸九晒して酒に浸して飮む。

通草酒　五臟の氣を續け、十二經脈を通じ、三焦を利す。通草子の煎汁と麴米とで酒に釀して飮む。

南藤酒　風虛を治し、冷氣を逐ひ、痺痛を除き、腰脚を强くする。石南藤の煎汁と麴米とで釀して飮む。

松液酒　一切の風痺、脚氣を治す。大なる松樹の下に坑を掘つて甕を置き、その津液を承けて取り、一斤で糯米五斗を釀して酒を取つて飮む。

松節酒　冷風虛弱、筋骨攣痛、脚氣緩痺を治す。松節の煮汁と麴米とで酒に釀し

て飲む。松葉の煎汁でもよし。

柏葉酒　風痺の歴節痛を治す。東に向つた側柏葉の煮汁と麹米とで酒に釀して飲む。

椒柏酒　元旦にこれを飲めば、一切の疫癘、不正の氣を辟ける。除夜に椒二十一粒、東に向つた側柏葉七枚を酒一瓶に浸して飲む。

竹葉酒　諸風熱病を治し、心を淸し、意を暢べる。淡竹葉の煎汁で普通のやうに酒に釀して飲む。

槐枝酒　大麻痿痺を治す。槐枝の煮汁で普通のやうに酒に釀して飲む。

枳茹酒　中風で身が直し、口僻み、眼急するを治す。枳殼を刮つて茹にし、酒に浸して飲む。

牛蒡酒　諸風毒を治し、腰脚を利す。牛蒡根を切片し、酒に浸して飲む

巨勝酒　風虛痺弱、腰膝の疼痛を治す。巨勝子二升を香しく炒り、薏苡仁二升、生地黃半斤と袋に盛つて酒に浸して飲む。

麻仁酒　骨髓の風毒で動けぬものを治す。大麻子中の仁を取つて香しく炒り、袋

に盛つて酒に浸して飲む。

桃皮酒　水腫を治し、小便を利す。桃皮の煎汁と秫米とを酒に醸して飲む。

紅麹酒　腹中、及び産後の瘀血を治す。紅麹を酒に浸して煮て飲む。

神麹酒　閃肭、腰痛を治す。神麹を赤く焼いて酒に淬して飲む。

柘根酒　耳聾を治す。柘根の條に詳記してある。

磁石酒　腎虚耳聾を治す。磁石、木通、菖蒲等分を袋に盛り、酒に浸して日毎に飲む。

蠶沙酒　風緩、頑痺、諸節不隨、腹内の宿痛を治す。原蠶沙を黄に炒つて袋に盛り、酒に浸して飲む。

花蛇酒　諸風の頑痺、癱緩、攣急、疼痛、惡瘡、疥癩を治す。白花蛇肉一條を袋に盛り、麹と共に缸底に置き、糯飯でその上を蓋ひ、二十一日置いて酒を取つて飲む。又、群くの薬と酒で煮る方もあつて、方は甚だ多い。

烏蛇酒　主治諸症、醸造法は上に同じ。

蚺蛇酒　諸風痛痺を治し、蟲を殺し、瘴を辟け、癩風、疥癬、惡瘡を治す。蚺蛇

肉一斤、羌活一兩を袋に盛り、麹と共に紅底に置いて糯飯で蓋ひ、醸して酒に成つたとき飲む。また酒に浸してもよし。詳細は本條に掲げてある。〇頴曰く、廣西の蛇酒は、罐上に蛇を數寸置いてあつて、その麹には山中の草藥を取つて入れる。故に毒のないわけに行かぬ。

蝮蛇酒　惡瘡、諸瘻、惡風、頑痺、癲疾を治す。活きた蝮蛇一條を取り、醇酒一斗と共に封じて馬尿の中に埋め、一个年後に取出す。蛇は已に消けて了ふものだ。毎に數盃を服すれば、身體が習習として癒えるものだ。

紫酒　卒風で口が偏して言語不能のもの、及び角弓反張し、煩亂して死せんとするもの、及び鼓脹して消かぬものを治す。雞屎白一升を炒り焦し、酒中に投じて紫色になるを待ち、滓を去つて頻りに飲む。

豆淋酒　血を破り、風を去り、男子の中風口喎、陰毒腹痛、及び小便尿血、婦人產後の一切の中風諸病を治す。黑豆を炒り焦し、酒で淋して溫飲する。

霹靂酒　疝氣偏墜、婦人の崩中下血、胎產不下を治す。鐵器を赤く燒いて酒に浸して飲む。

黿肉酒　十年の咳嗽を治す。醸造法は黿の條に詳記してある。

虎骨酒　臂、脛の疼痛、歴節風、腎虛、膀胱の寒痛を治す。虎脛骨一頭分を黄に炙いて槌き碎き、麴米と共に通常のやうに酒に醸して飲む。また酒に浸すもよし。虎の條に詳記してある。

麋骨酒　陰虛、腎弱を治し、久しく服すれば人體を肥白ならしめる。麋骨の煮汁と麴米とで普通のやうに酒に醸して飲む。

鹿頭酒　虛勞、不足、消渇、夜間鬼物を夢みるを治し、精氣を補益する。鹿頭を煮爛して泥に搗き、汁共に麴米に和して酒に醸して飲む。少し葱、椒を入れる。

鹿茸酒　陽虛痿弱、小便頻數、勞損、諸虛を治す。鹿茸、山藥を酒に浸して服す。詳細は鹿茸の條下に記載した。

戊戌酒　詵曰く、大いに元陽を補す。頴曰く、その性は大熱である。陰虛で冷なき病人は飲むべきものでない。黄狗肉一頭分を煮糜し、汁共に麴米に和して酒に醸して飲む。

羊羔酒　大いに元氣を補し、脾、胃を健にし、腰腎を益す。宣和化成殿の眞方で

ある。米一石を通常のやうに漿に浸し、嫩く肥えた羊肉七斤、麴十四兩、杏仁一斤と共に煮爛し、汁共に拌ぜて末にし、木香一兩を入れて共に醸す。水を犯してはならぬ。十日にして熟し、極めて甘く滑かなものだ。○ある法では、羊肉五斤を蒸し爛らして酒に一夜浸し、消梨七箇を入れて共に搗いて汁を取り、麴米を和して酒に醸して飲む。

膃肭臍酒 陽氣を助け、精髓を益し、癥結冷氣を破り、大いに人體を補益する。膃肭臍を酒に浸して擂り爛らし、麴米と共に普通のやうに酒に醸して飲む。

燒酒（綱目）

和名 せうちう
洋名 Spirits. (Alcohol)

【釋名】 **火酒**（綱目） **阿剌吉酒**（飲膳正要）

【集解】 時珍曰く、燒酒は古法ではなくて、元の時に始めて起つたものだ。その法は、濃酒を糟に和して甑に入れ、蒸して氣を上升させ、器にその滴る露を承けて取るのであつて、凡そ酸壞した酒はいづれもかくして蒸燒し得るものだ。近代はただ糯米、或は粳米、或は黍、或は秫、或は大麥を蒸熟して麴を和し、甕中に入れ

(二)木村(康)曰ク、米、麥、玉蜀黍、甘藷、馬鈴薯ナドヲ醱酵セシメテ製ス、又腐敗酒、酒粕ナドヲ蒸溜シテ製ス、故ニ酒精ノ含量ナリ。泡盛ハ琉球ニスル一種ノ燒酒ナリ。

て七日間醸し、それを甑で蒸して取る。それは清んで水のやうなもので、味は極めて濃烈だ。蓋し酒露である。

○穎曰く、暹羅酒は、燒酒を更に二回燒して高貴な香料を入れ、その壜は一箇に對して十數斤の檀香を燒いて烟で薫じ、漆のやうにしてからその酒を入れ、蠟で封じて二三年間土中に埋めて燒氣を絕ち去り、それを取り出して用ゐるのである。嘗てある者が携へて來て輸入したが、三四盃飮めば醉ふ。價格は普通のものの數倍であつた。積病のあるものは一二盃飮めば癒え、且つ蠱を殺すもので、予は親しく二人のその例を見たが、長さ二寸ばかりの活きた蟲を下した。それは魚蠱といふものだといふことであつた。

(二)【氣　味】【辛く甘し、大熱にして大毒あり】時珍曰く、飮み過せば胃を敗り、膽を傷ひ、心を喪し、壽を損じ、甚しきは腸を黑くし、胃を腐して死亡する。薑、蒜と共に食へば痔を生ずる。○鹽冷水、綠豆粉がその毒を解す。

【主　治】【冷積寒氣を消し、濕痰を燥し、鬱結を開き、水泄を止め、霍亂、瘧疾、噎膈、心腹冷痛、陰毒で死せんとするを治し、蟲を殺し、瘴を辟け、小便を利

（成分）參考マデニアグレバ、

品種	比重	酒精%	エキス分%	酸%	糖分%	灰分%
燒酎（伊丹產）	0.9552	39.50	0.495	0.026	0.417	0.005
〃（〃）	0.9161	59.00	0.082	0.045	1	0.001
泡盛	0.9513	40.60	0.042	0.040	1	0.011
泡盛	0.9367	49.60	0.042	0.025		0.025

し、大便を堅くする。赤目腫痛に效がある】（時珍）

【發明】時珍曰く、燒酒は純陽の毒物であつて、表面に細花のあるものが眞なるものだ。火と性を同うし、火を得れば燃えること焔消と同樣なものだ。北方の地では四季を通じてこれを飲むが、南方の地ではただ暑期に飲むだけである。味は辛く甘く、升揚し、發散し、その氣は燥熱であつて、濕に勝ち、寒を祛る。故に能く怫鬱を開いて沈積を消し、膈噎を通じて痰飮を散じ、泄瀉を治して冷痛を止めるのである。辛は先づ肺に入るもので、水に和して飲めば抑へて下行せしめ、水道を通調して小便を長くし白からしめる。熱は能く金を燥し、血を耗するもので、大腸がその刑を受けるから大便が燥結し、薑、蒜と共に飲めば痔を生ずるものである。かの暑期に飲めば汗が出て膈が快く、身體が涼し、赤目を洗へば涙が出て腫が消する事實は、乃ち從治の方である。程度を越えて飲み過せば頃刻にして死亡する。近頃商店で取扱ふものは、またそれに砒石、草烏、辣灰、香薬などを加へてその力を助け導くやうにしてあるが、それは盜に假すに方を以てするといふものだ。攝生を重ずるものは深く注意を要する。按ずるに、劉克用の病機賦に『ある者が赤目を病ん

だとき、燒酒に鹽を入れて飲むと病が止まり、腫が消いた』とある。蓋し酒はその性が走る。それを導くに鹽を以てすれば、經路に通行し、鬱結を開いて邪熱を散ぜしめるのであつて、これはやはり反治の劫劑である。

【附方】新七。【冷氣心痛】燒酒に飛鹽を入れて飲めば止まる。【陰毒腹痛】燒酒を溫めて飲む。汗が出て止まる。【嘔逆の止まぬもの】眞火酒一盃、新汲水一盃を和して服するが甚だ妙である。（瀕湖）【寒濕泄瀉】小便の淸めるには、頭燒酒を飲めば止まる。【耳中に核あるもの】棗核ほどの大いさのものがあつて、痛んで動けぬものには、火酒を滴入して半時ほど仰いでゐて箝出する。（李樓奇方）【風蟲牙痛】燒酒に花椒を浸して頻りに漱ぐ。【寒痰咳嗽】燒酒四兩に猪脂、蜜、香油、茶末各四兩を共に浸し、一處に煮て置いて每日それを挑げ取つて食ひ、茶で飲下して效を取る。

葡萄酒（綱目）

和名　ぶだうしゆ
洋名　Wine.

【集解】詵曰く、葡萄は酒に釀せる。その藤の汁も佳し。

時珍曰く、葡萄酒には二様あつて、醸して造つたものは味が佳く、燒酒のやうな方法で造つたものは大毒がある。醸造するには、葡萄の汁を取り、通常糯米飯を醸す方法のやうに麴と共に醸すのであるが、汁の無い場合には乾葡萄末を用ゐてもよし。魏の文帝の所謂『葡萄で醸した酒は麴米のものよりも甘く、醉ふても醒め易い』といふそのものだ。燒して取るには、葡萄數十斤を取つて大麴と共に酢に醸し、それを取つて甑に入れて蒸し、その滴る露を器に承けて取るのだが、それは紅色にして美しいものだ。古代には西域で造つてゐたものだが、唐の時に(一)高昌を破つた際に始めてその法を得たのであつた。按ずるに、梁の四公記に『高昌から蒲桃乾凍酒を獻じた。杰公は「蒲桃は、皮の薄いものは味が美く、皮の厚いものは味が苦い。(二)八風で谷が凍つて出來る酒で、一年中腐敗しない」といつた』とある。葉子奇の草木子には『元朝には(三)冀寧路等の地方で蒲桃酒を造つた。八月になつて(四)太行山でその酒の眞僞を試驗するのだが、眞のものは水に下すと流れ、僞のものは水に遇ふと氷凍する。久しく貯藏したものには中に一箇の塊が出來てゐて、極寒の際、その他のものがみな氷つてもこの物だけが氷らない。これは酒の精液であつて、

(一)高昌ハ漢ノ車師前部高昌壁ノ地、即チ今ノ新疆省哈密、土魯番地方ナリ。石部鹵石類光明鹽ノ註參照。

(二)八風ハ八方ノ風、淮南子、說文、呂氏春秋等ニ各ソノ名ヲ擧ゲタリ。

(三)冀寧路ハ元ニ置ク、今ノ山西省陽曲縣等ノ地ナリ。

(四)太行山ハ石部鹵石類石硫黃ノ註ヲ見ヨ。

(五)哈喇火ハ元ニ置キタル州名、今ノ新疆省吐魯番城東ニ在リ。今ノ哈喇和卓ノ地ナリ。

人がこれを飲めば腋(わき)に透つて死亡する。その酒の二三年經つた古いものにはやはり大毒がある』とある。飲膳正要には『酒に數等あつて、(五)哈喇火(はらこ)に產するものは最も烈しく。西番のものはこれに次ぎ、(六)平陽、太原のものはまたそれに次ぐ』とある。或は、葡萄を久しく貯へて置くとやはり自然に酒が出來て、芳香と甘味の酷烈である。それが眞の葡萄酒だともいふ。

釀酒　(七)〔氣　味〕【甘く辛し、熱にして微毒あり】　時珍曰く、熱疾、齒疾、瘡疹あるものは飲んではならぬ。

〔主　治〕【腰腎を暖め、顏色の衰へるを駐(とど)め、寒に耐へる】(時珍)

燒酒　〔氣　味〕【辛く甘し、大熱にして大毒あり】　時珍曰く、大熱、大毒なることは燒酒よりも甚しい。北方の人は習慣性で害毒と感じなくなつてゐるが、南方の人は決して輕輕しくこれを生で飲んではならない。

〔主　治〕【氣を益し、中を調へ、饑(き)に耐へ、志を強くする】(正要)【痰を消し、癖を破る】(汪穎)

(六)平陽ハ鱗部龍類石龍子ノ註ヲ見ヨ。太原ハ石部爐甘石ノ註ヲ見ヨ。

(七)木村(康)曰ク、參考マデニ葡萄酒成分ノ數例ヲ揭グ。

品　種	比重	アルコール重量	エキス	遊離酸(酒石酸トシテ)	糖分	グリセリン	鑛物質
佛國產赤酒	0.9982	7.80	2.56	0.57	0.30	0.73	0.245
同　白　酒	0.9963	8.30	3.03	0.66	—	0.97	0.250
モーゼルザール	0.9964	7.99	2.24	0.79	0.03	0.72	0.178
ラインガウ	1.0005	8.00	2.60	0.81	—	0.85	0.023

糟（綱目）

和名　さけのかす
洋名　Sake Mash.

〔釋名〕粕（綱目）

〔集解〕時珍曰く、糯、秫、黍、麥いづれも蒸して酒、醋を釀し、熬煎して餳、飴を造れば化して糟粕となる。酒糟は臘月、及び清明、重陽に造つたものを用うべきものであつて、瀝乾して少量の鹽を入れて貯藏する。物をその中に貯藏すれば腐敗しない。物を揉めば能く軟にする。搾つて乾しては味がなくなるものだ。醋糟は三伏に造つたものを用ゐるが良し。

酒糟　〔氣味〕【甘く辛し、毒なし】〔主治〕【中を溫め、食物を消化し、冷氣を除き、腥を殺し、草菜の毒を去り、皮膚を潤ほし、臟腑を調へる】（蘇恭）【撲損瘀血を署する。水に浸して凍瘡を洗ふ。搗いて蛇蛟、蜂叮の毒に傅ける】（日華）

〔發明〕時珍曰く、酒糟には麴、蘖の性があつて、能く血を活し、經を行らし、痛を止めるものだから傷損を治するに功がある。按ずるに、許叔微の本事方に『踠折して筋骨を傷め、痛み忍び難きを治す。生地黄一斤、瓜、薑を貯藏した糟一斤、

生薑四兩を用ゐ、全部を炒り熱して布に裹み、傷處を罨して冷えれば易へる。曾てある者が傷折したとき、生龜を一箇捕へてそれを殺して用ゐようとした。ところがその夜の夢に龜が右の方を傳へたので、それを用ゐて見ると癒えたのであつた』とある。又、類編には、ただ瓜、薑を貯藏した糟一物に赤小豆末を和匀して斷傷した處を罨し、杉片、或は白桐片で夾む。三日に過ぎずして痊えるものだといふ記載がある。

附方　新四。【手、足の皸裂】紅糟、臘猪脂、薑汁、鹽等分を研り爛らし、炒り熱して擦る。裂けた內部が甚だ痛み、少頃して合する。數回擦れば安らかになる。（袖珍方）【鶴膝風病】酒醅糟四兩、肥皂一個を子を去り、芒消一兩、五味子一兩、砂糖一兩、薑汁半甌を研り勻ぜ、日每に塗る。燒酒を加入するが尤も妙である。【暴に發した紅腫】痛み忍び難きには、臘糟で罯する。（談埜翁試驗方）【杖瘡の靑腫】濕綿紙を傷處に鋪き、燒して殘つた酒糟を搗き爛してその紙上に厚く鋪く。良久して痛處に蟻が行くやうに感じ、熱氣が上升して散ずる。（簡便方）

大麥醋糟　氣味　【酸し、微寒にして毒なし】　主治　【氣滯、風壅で手背、

脚膝の痛むには、炒り熱して布に裹んで熨す。二三回換へれば癒えるものだ】(孟詵)

乾餳糟 〔氣味〕【甘し、温にして毒なし】〔主治〕【反胃吐食。脾、胃を暖め、飲食を消化し、氣を益し、中を緩にする】(時珍)

〔發明〕 時珍曰く、餳は糵で造るもので、暖にして消導する。故にその糟は能く滯を化し、中を緩にし、脾を養ひ、吐を止めるのである。按ずるに、繼洪の澹寮方に『甘露湯は反胃で吐食して止まぬを治す。これを服すれば胸膈を利し、脾、胃を養ひ、飲食を進めるものだ。乾餳糟六兩、生薑四兩の二味を共に搗き、餅にして或は焙じ、或は晒し、炙甘草末二兩、鹽少量を入れて湯に點て服す。常熟のある富豪が反胃を病んでゐたが、京口の甘露寺へ往つて施餓鬼を營んだとき、岸下に舟を停めて一泊すると、夢にある僧が一杯の湯を持つて來て飲ませてくれた。それを飲んだ後で胸が直ちに快くなつたと見て、翌早朝寺へ往つて見ると、湯を酌んで出す僧がやはり昨夜の夢に見たその僧であつた。この寺では平常この湯を來客に進める慣例だつたから甘露湯と名を易へて呼ぶやうになつた。予が臨汀に住んでゐたとき、これで一人の小役人を治療してやつたが、間もなく癒えた。必ず忽せにしてはなら

ぬ』とある。

［附方］新一。【脾、胃の虚弱】平胃散等分を末にして一斤に、乾糖糟を炒つて二斤半、生薑一斤半、紅棗(こうさう)三百箇を煮て取つた肉を焙じ乾して入れ、通じて末にし、逐日湯に點て服す。（摘玄）

米粃（食物）

和名　ぬか
洋名　Rice-bran.

［釋名］**米皮糠**　時珍曰く、粃とはやはり紕薄(ひはく)の意味である。

［集解］穎曰く、米粃、卽ち精米上の細糠である。昔、陳平は糠(かう)〔一〕覈(けう)を食つて肥えたといふ。

時珍曰く、糠は諸粟の〔二〕谷の殼である。その殼にして米の肌に最も近い部分の細かなものを米粃といふ。味は極めて甜(あま)い。凶作の歳には、一般に多く豆屑(こうせつ)、或は草木の花實の食へるものと和劑して蒸煮し、それで饑餓を救ふ。

［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【腸を通じ、胃を開き、氣を下し、積塊を磨す。糗(きう)にして食へば饑ゑず、克(よ)く膚、體を滑にする。口、腹を塡(み)て養ふに

〔一〕覈トハ米糠中ノ破レザルモノチイフ。

〔二〕谷ハ穀ニ通ズ。

十分だ】(汪穎)

舂杵頭細糠 (別錄中品)

和名 きねさきのこぬか
洋名 Rice-bran attached to the end of pestle.

[校正] 禹錫曰く、草部から此に移し入れた。

[集解] 時珍曰く、凡て穀にはいづれも糠があるが、此には粳稲、粟秫の糠を用うべきものとしてある。北方では多く杵を用ゐ、南方では多く碓を用ゐるが、藥に用ゐてはいづれも同樣だ。丹家では『糠火は、物を錬るに用ゐて普通の燃料に倍する力がある』といふ。

[氣味] 【辛く甘し、熱なり】 震亨曰く、穀殼は金に屬し、糠の性は熱である。

[主治] 【卒噎には、刮り取つて含む】(別錄) ○また湯に煎じて呷ふもよし。【燒き研つて水で方寸匕を服すれば、婦人をして分娩を容易ならしめる】(時珍) 記載は子母秘錄にある。

[發明] 弘景曰く、噎を治するにこれを用ゐるは、やはり舂、擣の意味を取つたものだ。天下の事理は多くはかやうに相影響する。

附方　舊一、新一。【膈氣噎塞】飲食の下らぬには、碓觜上の細糠を蜜で彈子大の丸にし、(一)時時に(二)含んで津液を嚥む。(聖惠)【咽喉の妨礙】物があるやうで呑吐しても利せぬには、杵頭糠、人參各一錢、石蓮肉を炒つて一錢を水で煎じ、一日三回服す。(聖濟總錄)

(一)大觀ニハ非ニ作ル。
(二)大觀ニハ含下ニ二丸ノ二字アリ。

本草綱目穀部第二十五巻　終

本草綱目菜部

第二十六卷

本草綱目菜部目錄第二十六卷

李時珍曰く、凡そ草木にして茹ひ得るものをば菜といふ。韭、薤、葵、葱、藿は五菜と稱するもので、素問に『五穀は養を爲し、五菜は(一)克を爲す』とある。穀氣を輔佐して壅滯を疏通する作用をなすものだといふのである。古は(二)三農(三)九穀を生じ、場圃に草木を蓺ゑて以て饑饉に備へたといふから、菜は固より五種のみと限られたものではない。我が明朝の初、周憲王は草木にして一般人の食料に供し得るもの四百餘種を圖載して救荒本草を著述されたが、まことに有意義な事業であつた。

そもそも陰の生ずる根本は五味に在り、(四)五宮を傷めるものも五味に在るのであつて、五味を最も正確に調和すれば、臟、腑はそれに因つて疏通し、氣、血はそれに因つて周流し、骨は正しく、筋は柔に、腠理はそれで密になり、それに因つて生命を長久ならしめ得るのである。それゆゑに內則には據るべき基準を示し、食醫には用うべき方を載せてあるのであつて、菜なるものの人間の生命を補する功果は決して輕視すべきものではないのであるが、ただ(五)五氣の良、毒それぞれ不同があり、

(一)克ハ充ニ通ズ、周禮ニ地官人ヲ充ストアリ、註ニ充ハ猶肥ノ如シトアリ。

(二)三農ハ山農、澤農、平地農ヲ云フ。

(三)九穀ハ黍、稷、秫、稻、麻、大小豆、大小麥ヲ云フ。

(四)五宮ハ五臟ヲ指ス。

(五)五氣ハ香、臭、腥、臊、膻ナリ。

五味の入る所に偏勝（へんしよう）のあることには、一般人が日日に用ゐてゐながらその智識がない。そこで草にして茹ひ得るもの凡て一百五種を取り集めて菜部とし、葷辛類（くんしんるゐ）、柔滑類、蓏菜類（くわさいるゐ）、水菜類、芝栭類（しじるゐ）の五類に分類して記載した。舊本の菜部は三品共六十五種であるが、本書では五種をば併入し、十三種をば草部に移し入れ、六種をば果部に入れ、草部から移し入れたものは併せて二十三種に及び、穀部から一種を移し入れ、果部から一種を移し入れ、外類、有名未用から三種を移し入れた。

神農本草經十三種　梁の陶弘景註。　名醫別錄十七種　梁の陶弘景註。
唐本草七種　唐の蘇恭。　千金食治二種　唐の孫思邈。
本草拾遺十三種　唐の陳藏器。　食療本草三種　唐の孟詵、張鼎。
食性本草一種　南唐の陳士良。　蜀本草二種　蜀の韓保昇。
日華本草二種　宋人大明。　開寶本草六種　宋の馬志。
嘉祐本草十種　宋の掌禹錫。　圖經本草四種　宋の蘇頌。
證類本草一種　宋の唐愼微。　日用本草三種　元の吳瑞。
食物本草二種　明の汪穎。　食鑑本草一種　明の寗原。

救荒本草一種 明の周王。　本草綱目十七種 明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　吳普本草　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對
唐甄權藥性　蕭炳四聲　唐李珣海藥　楊損之删繁
宋寇宗奭衍義　金張元素珍珠囊　元李杲法象　王好古湯液
元朱震亨補遺　明汪機會編　明陳嘉謨蒙筌

菜の一　葷辛類三十二種

韭 別錄　山韭 千金 孝文韭を附す。　葱 本經
茖葱 千金　胡葱 開寶　薤 本經 即ち藠子。蓼蕎を附す。
蒜 別錄　山蒜 拾遺　葫 別錄 即ち大蒜。　五辛菜 拾遺
蕓薹 唐本 即ち油菜。　菘 別錄 即ち白菜。　芥 別錄　白芥 開寶
蕪菁 別錄 即ち 蔓菁。　萊菔 唐本 即ち蘿蔔。　生薑 別錄　乾薑 本經 天竺乾薑を附す。
同蒿 嘉祐　邪蒿 嘉祐　胡荽 嘉祐　胡蘿蔔 綱目
苦斳 本經 即ち芹菜。　菫 唐本 即ち旱芹。　紫菫 圖經　馬蘄 唐本

右附方　舊一百五十、新二百九十二。

（一）牧野云フ、にらハ今一般ニ栽培シテヰルガ又諸州ニ野生スル處ガアル、にらハ二字カラ成ツテヰルノデ此レニ又ふたもじ（二タ文字）ノ名ガアル。

（二）大觀ニ韮下ニ菜字アリ。

菜の一　葷辛類三十二種

（一）韮（別錄中品）

和名　にら
學名　Allium odorum, L.
科名　ゆり科（百合科）

〔韮〕

釋名　**草鍾乳**（拾遺）　**起陽草**（侯氏藥譜）　頌曰く、按ずるに、許愼の說文に、韮の字を葉が地上に出た形を形象してあつて『一種にして久生する。故に韮といふ』とある。一歲に三四回その根を割き取つても傷まない。冬になつて壅ひ培へば春に先つて復た生える。如何にも久生そのものだ。

藏器曰く、俗に（二）韮といふがこのものだ、草鍾乳とはこの物の溫補する點を表した名稱だ。

時珍曰く、韮は莖を韮白と名け、根を韮

黄と名け、花を韭菁と名ける。禮記に韭を豐本といつてあるは、美なる點が根にあるといふ意味で、薤の美は白にあり、韭の美は黄に在る。黄とはまた地上に出ない部分のことだ。

【集解】時珍曰く、韭は叢生して本が豐かに、葉が長くして青翠なもので、根を分けてもよく、子で種ゑてもよし。その性は内に生ずるもので外には長じ得ないものだ。葉の高さ三寸になつたときに剪る。剪るには日中を忌む。一歳に五回以上は剪れない。子を收穫するにはただ一回剪るがよい。八月に花を開いて叢になつたとき取收め、醃けて貯へて料理に使ひ、長生韭と呼ぶ。それは剪つても復た生えて久しい間無くならぬといふ意味だ。九月に子を取收める。その子は黑色で扁いものだ。風に當て陰乾すべきもので、(三)浥鬱してはならない。北方の地では、冬になつて根を土窖中に移し、馬糞で培つて暖にする。すると高さ一尺ばかりに長くなり、風や日光に當らぬからその葉が黄色で嫩になる。これを韭黄と呼ぶ。いづれも貴族、富豪の珍味とするものだ。韭なる菜は生でもよく、熟してもよく、菹にしてもよく、久しく經てもよく、菜類中での最も益あるものだ。羅願の爾雅翼には『物久

(三) 浥鬱ハ風ノ通ラヌ處デシメルコト。

しければ必ず變ずる。故に老韮は莧となるのだ』とある。
頌曰く、鄭玄は『政道(四)利を得れば陰物變じて陽となる。それは葱が變じて韮となるが驗だ』といつた。葱は冷だが韮は溫なるものだ。

(五)［氣味］【辛く微し酸し、溫、濇にして毒なし】時珍曰く、生では辛くして濇り、熱すれば甘く酸し。大明曰く、熱である。宗奭曰く、春食つては香しく、夏食つては臭い。多く食へば能く神を昏くし、目を暗くする。酒の後は就中忌む。詵曰く、熱病後十日以內に食へば發困する。五月に多く食へば氣力を耗乏する。冬期に多く食へば宿飮を動じて水を吐く。蜜、及び牛肉と食合せてはならぬ。

［主治］【心に歸し、五臟を安じ、胃中の熱を除く。病人に利あり、久しく食ふがよし】(別錄) 時珍曰く、按ずるに、千金方には、久しく食つてはならぬ。病人を利せぬものだとしてある。【薤で鯽魚鮓を煮て食へば卒下痢を斷つ。根は髮を生ずる膏に入れて用ゐる】(弘景)【根、葉を煮て食へば、中を溫め、氣を下し、虛を補し、陽を益し、臟腑を調和して食をよくし、血膿を洩して腹中の冷痛するを止める。生の擣汁を服すれば、胸痺、骨痛で觸れるさへならぬものに主效があり、又、藥毒

(四)大觀ニ利字則ニ作ル、卽政道得レバ則トヨムベシ。
(五)木村康一曰ク、食用植物誌ニヨレバ、內地及臺灣產ノにらノ組成左ノ如シ。

產地	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素	糖分	纖維	灰分
內地產	87.70	2.70	0.20	澱粉 7.00	0.40	1.10	0.90
臺灣產	92.926	1.781	0.462	3.844	—	—	0.787

を解し、狂犬の咬毒の(六)數〻發するものを療ず。また諸蛇虺、蝎蠆、惡蟲の毒にも塗る】(藏器)【煮て食へば、肺氣を充て、心腹の痼冷、痃癖を除く。擣汁を服すれば、肥白なる人の中風失音を治す】(日華)【煮て食へば、腎に歸して陽を壯にし、泄精を止め、腰膝を暖める】(寗原)【熯熟し、鹽、醋で空心に十頓喫へば胸膈噎氣を治す。擣汁を服すれば、胸痺で錐で刺すやうに痛むを治して胸中の惡血を吐出し、甚だ效驗がある。又、初生小兒に灌いで(七)惡水、惡血を吐去すれば永く諸病がなくなる】(詵)【吐血、唾血、衄血、尿血、婦人の經脈逆行、打撲傷損、及び膈噎病に主效がある。擣汁を澄淸して童尿を和して飮めば、能く胃脘の瘀血を消散して甚だ效がある】(震亨)【生の汁を飮めば、上氣喘息で絕せんとするに主效があり、肉脯の毒を解す。煮汁を飮めば、消渴、盜汗を止める。產婦の血運を熏じ、腸痔脫肛を洗ふ】(時珍)

【發明】弘景曰く、この菜は殊だ辛く臭いもので、煮て食つてもその便がやはり熏灼して出る。葱、薤のやうに熟すれば氣が無くなるものでない。その點からして最も養生には忌むところのものだ。

頌曰く、菜類中でこの物が最も溫なるもので、人體を益する。常にこれを食ふが

(六)數字、大觀ニ欲ニ作ル。

(七)大觀ニ惡水ノ二字、胸中ニ作ル。

よい。昔は一般に正月の節に五辛を食つて癘氣を辟けたものだ。五辛とは韮、薤、葱、蒜、薑である。

宗奭曰く、韮黄はまだ糞芥中から上に現れないものであつて、最も人體に益せない。これを食へば滯氣する。蓋し抑鬱してまだ伸びない氣が含まれてゐるからだ。孔子は『時ならざれば食はず』といつたが、正にこの類をいつたものだ。花を食つてもやはり風を動ずる。

思邈曰く、韮は味が酸い、肝臟の病にこれを食ふがよし。大いに心臟を益する。

時珍曰く、韮は、葉は熱、根は溫であつて、功用は同じものだ。生では辛くして血を散じ、熟すれば甘くして中を補し、足の厥陰の經に入るもので、肝の菜である。素問には『心病には韮葉を食ふべし』といひ、食鑑本草には「腎に歸す」とあつて、記載の文に相異はあるが、しかし道理からいへば一貫してゐる。蓋し心は肝に對して子の關係にあり、腎は肝に對して母の關係にあるので、母からしてよく子を實せしめる「虛すればその母を補す」の道理である。道家で五葷の一としてあるのは、この物は能く人の神を昏まして虛陽を動ずるといふ考からである。ある中年の一貧

者が噎膈を病み、食物が入れば直ちに吐いて胸中が刺痛するのであつたが、或る者が、韮汁に鹽梅鹵汁少量を入れて少しづつ呷はせ、入るだけ漸次に加へて呷はせると、忽ち稠い涎を數升吐いて癒えた。これはやはり仲景が胸痺を治するに薤白を用ゐたと同じで、いづれもその辛、溫にして能く胃脘の痰飮、惡血を去る意味を應用したものだ。

○震亨曰く、心痛には、熱物を食つたため、及び怒鬱のためで死に陷り、血が胃口に留つて痛を作すものがある。これには韮汁、桔梗を藥中に加入して氣血を開提するが宜し。腎氣上攻のために心痛を起すものがある。これには韮汁で五苓散を和して丸にし、空心に茴香湯で服するが宜し。蓋し韮は性が急にして能く胃口の血滯を散ずるからだ。又、反胃には、韮汁二盃に薑汁、牛乳各一盃を入れて少しづつ溫服するが宜し。蓋し汁韮は血を消し、薑汁は氣を下し、痰を消し、胃を和し、牛乳は能く熱を解し、燥を潤し、虛を補するものだからである。一患者は、臘月に刮裂酒を三盃飮んでから食事を攝つてゐたが、必ず屈曲して膈に下り、硬澁して微痛し、右脈が甚だ濇し、關脈が沈するのであつた。これは汚血が胃脘の口に在るのであつ

（八）大觀ニ徹上ニ痛字アリ。

て、氣が鬱するために、痰となつて食道を隘塞するのである。そこで韭汁半琖を冷で少しづつ呷はせると、半斤まで服して癒えた。

附方　舊十一、新二十一。【胸痺急痛】詵曰く、胸痺で錐で刺すやうに痛み俛仰し得ず、白汗を出し、或は背上に（八）徹するは、治療せねば死に至ることがある。生韭、或は根五斤を取つて洗ひ、その擣汁を服するがよし。（食療本草）【陰陽易病】男子が陰腫し、小腹絞痛し、頭重く、眼華を見るには、豭鼠屎湯でこれを煮たものが宜し。豭鼠屎十四箇、韭根一大把、水二琖を七分に煮て滓を去り、再び煎じて二沸して溫服し、汗を取れば癒える。なほ發汗せぬときは再服する。（南陽活人書）【傷寒の勞復】方は上に同じ。【突然の中惡】韭の擣汁を鼻中に灌げば甦る。（食醫心鏡）【寢てそのまま寤めぬもの】火で照してはならぬ。ただ拇指の甲の際を痛く嚙み、その顏に唾すれば復活する。その時、韭の擣汁を鼻中に吹き入れる。冬期には韭根を用ゐる。（肘後方）【風忤邪惡】韭根一把、烏梅十四箇、吳茱萸を炒つて半升、水一斗を煮て、病人の櫛をその中に入れて煮て三沸する。櫛が浮くときは生きるが沈むときは死ぬ。それを三升までに煮て三回に分服する。（金匱要略）【喘息で絕せんとするもの】韭汁一升を

飮めば效がある。(九)【夜中に盜汗するもの】韮根四十九本、水二升を一升に煮て頓服する。(千金方)【消渇引飮】韮苗を日に三五兩を用ゐ、或は炒り、或は羹にし、鹽を入れてはならぬ。醬を入れるは差閊なし。それを十斤まで喫つて住める。極めて效がある。淸明節後には喫つてはならぬ。ある者はこの病で極度に引飮したが、この方を得て癒えた。(秦憲副方)【喉腫で食事困難なるもの】韮一把を擣いて熬つて傅け、冷えれば易へる。(千金方)【水穀痢疾】韮葉で羹、粥を作り、燥炒して任意に食ふが良し。(食醫心鏡)【脫肛の收らぬもの】生韮一斤を切り、酥を拌ぜて炒熟し、綿で二包に裹んで更互に熨す。入るを度とする。(聖惠)【痔瘡の痛み】盆に沸湯を盛つて器で蓋ひ、その蓋に一箇の孔を穿ち、洗淨した韮菜一把をその湯中に泡け、熱に乘じてその孔に痔を當てて先づ熏じ、後に洗ふ。數回試みれば自然に痛みがなくなる。(袖珍方)【小兒の胎毒】初生の時に韮汁少量を灌ぐ。惡水、惡血を吐出して永く諸疾がなくなる。(四聲本草)【小兒の腹脹】韮根の擣汁に猪(一〇)肪と和して煎じ、一合づつを一日隔てて一回服して癒效を取る。(秘錄)【小兒の患黃】韮根の擣汁を日毎に鼻中に滴し、黃水を取つて效を取る。(同上)【痘瘡の發せぬもの】韮根の煎湯を服す。(海上方)【產

(九)大觀ニ肘後方ノ三字アリ。

(一〇)肪、大觀ニ脂ニ作ル。

（一一）數字、大觀ニ三ニ作ル。

後の嘔水】産後に憤怒、哀傷のために肝を傷め、青綠の水を嘔くには、韮葉一斤から取つた汁に薑汁少量を入れ、和して飲めば癒える。（摘玄方）【産後の血運】韮葉を切つて瓶中に置き、熱醋を沃いでその氣を鼻中に入れば正氣になる。（丹溪心法）【赤、白帶下】韮根の擣汁に童尿を和して一夜露し、空心に溫服して效を取る。（海上仙方）【鼻衄の止まぬもの】韮根、葱根を共に擣き、棗大にして鼻中に塞ぎ入れ、頻りに易へる。兩三回で止まる。（千金方）【五種の瘡癬】韮根を炒つて性を存し、末に擣いて猪脂と和して塗る。（一一）數回で癒える。（經驗方）【金瘡出血】韮汁で風化石灰を和して日光で乾し、毎にそれを末にして傅ければ效がある。（瀕湖集簡方）【刺傷の中水】腫痛するには、韮を煮て熱して搨する。（千金）【漆瘡の痒きもの】韮葉を杵いて傅ける。（斗門方）【狂犬の咬傷】七日に一回發するもので、三七日間發せねば毒が脱したのである。急に風のない場所で冷水で洗淨し、直ちに韮汁一盌を服し、七日隔てて又一盌服し、四十九日間に都合七盌服す。百日間は酸、鹹の物を食ふことを忌み、一年間は魚、腥き物を食ふことを忌み、終身狗肉を食ふことを忌めば安全に健康を保てるが、犯せば十中の九は死亡する。徐本齋は『この法は肘後方の記載から出た

ものだ。ある時狂犬が一日に三人を咬んだことがあるが、その內のただ一人この方を用ゐて生命を取り止めた。その效果を親しく實見した』といつてある。(簡便)【あらゆる蟲の耳に入りたるとき】韭汁を灌げば出る。(千金方)【聤耳の汁の出るもの】韭汁を一日三回滴す。(聖惠方)【牙齒の蟲䘌】韭菜を根共に洗つて擣き、人家の地板上の泥と共に和し、痛む處の腮上に傅けて紙で蓋ふて押へ、一時して取下す。泥上に細蟲が著いて出て根を除くものだ。○又ある方では、韭根十箇、川椒二十粒、香油少量を水桶上の泥と共に擣き、病牙の頰上に傅ける。良久して蟲が出て數回で癒える。【肉脯の毒を解す】凡そ肉は、密器に入れて蓋ふたまま一夜過ごしたものを鬱肉といひ、屋漏で沾ひの著いたものを漏脯といひ、いづれも毒がある。韭の擣汁を飮む。(張文仲備急方)【食物中毒】生韭汁數升を服するが良し。(千金)

韭子　修治　(一二)大明曰く、藥に入れるには、揀り淨めて蒸熟し、暴乾して黑皮を簸ひ去り、黃に炒つて用ゐる。

氣味　【辛く甘し、溫にして毒なし】時珍曰く、陽である。石鍾乳、乳香を伏す。

(一二)大明、當ニ頌ニ作ルベシ。

(一三)血、大觀ニ白ニ作ル。

【主治】【夢中の洩精、溺(一三)血】(別錄)【腰膝を暖め、鬼交を治するに甚だ效がある】(日華)【肝、及び命門を補し、小便頻數、遺尿、婦人の白淫、白帶を治す】(時珍)

【發明】頌曰く、韭子は、龍骨、桑螵蛸と配合すれば漏精に主效があり、中を補す。葛洪、孫思邈の諸方に多く用ゐてある。

弘景曰く、韭子は棘刺諸丸に入れ、漏精に主效がある。

時珍曰く、棘刺丸の方は外臺祕要に記載がある。諸勞洩、小便數を治するもので、多種の藥を用ゐてあるが、此には載錄せぬ。按ずるに、梅師方には『遺精を治するに、韭子五合、白龍骨一兩を用ゐ、末にして空心に酒で方寸匕を服す』とあり、千金方には『夢遺、小便數を治するに、韭子二兩、桑螵蛸一兩を用ゐ、微し炒つて研末し、毎早朝酒で二錢を服す』とあり、三因方には、下元の虛冷、小便禁ぜず、或は白濁となるを治するに家韭子丸といふがある。蓋し韭なるものは肝の菜であつて、足の厥陰の經に入る。腎は閉藏を主り、肝は疏洩を主るものであつて、素問に『足の厥陰の病は、遺尿し、思想して窮なく、房に入つて甚だしく發し、筋痿となり、及び白淫となり、男子は尿に隨つて下り、婦人は綿綿として下る』とある。韭子が遺精、

(一四)大觀ニ一二十ヲ三ニ作ル。

(一五)大觀ニ二ニ作ル。

漏洩、小便頻數、婦人の帶下を治するは、能く厥陰に入つて下焦、肝、及び命門の不足を補するのである。命門は精を藏するの府だから同じく治するわけである。

【附方】舊三、新四。【夢遺溺白】藏器曰く、毎日空心に韭子を生で(一四)一二十粒呑み、鹽湯で飲み下す。○聖惠では、虛勞、傷腎で夢中に洩精するを治するに、韭子二兩を微し炒つて末にし、食前に二錢匕を溫酒で服す。【虛勞溺精】新韭子二升——十月霜後に採る——を好酒八合に一夜漬け、好く晴れた日に童子に南に向つて一萬杵擣かせ、早朝に溫酒で方寸匕を服し、日中に再服する。(外臺祕要)【夢洩、遺尿】韭子一升、稻米二斗、水一斗七升で粥を煮て汁六升を取り、三回に分服する。(千金方)【玉莖强中】玉莖が强硬して痿せず、精流れて住まず、時時に針で刺すやうに覺え、捏すれば痛む病を强中と名ける。これは腎滯漏の疾である。韭子、破故紙各一兩を末にし、一日三回、三錢づつを水一盞で煎じて服すれば住む。(經驗方)【腰脚の無力】韭子一升を揀り淨め、二回炊蒸して久しく暴乾し、黑皮を簸ひ去り、黃に炒つて粉に擣き、安息香二大兩を水で煮て一二百沸し、慢火で炒つて赤色にし、和し擣いて梧子大の丸にし——乾くときは少量の蜜を入れる——毎日空腹に酒で(一五)三十丸を

服し、飯三五匙食つて壓する。大いに佳し（崔元亮海上方）【婦人の帶下】幷に男子の腎の虛冷、夢遺。韮子七升を醋で煮て千沸し、焙じて研末し、煉蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に温酒で服す。（千金方）【蟲牙を烟熏する】瓦片を紅く煅いた上へ韮子數粒を置き、それに清油を數點して烟の起つを待ち、筒でその烟を痛む處へ吸ひ込み、良久して温水で漱吐すれば、小蟲が出て奏效する。なほ出盡きぬときは再び熏ずる。（救急易方）

（一）山韮（千金）

和名　無し
學名　Allium sp.
科名　ゆり科（百合科）

【釋名】藿　音は育（イク）である。韱　音は纖（セン）である。いづれも詳でない。

【集解】頌曰く、藿は山韮である。山中に往往あるものだが、一般人は多く識らない。形も性もやはり家に作る韮と相類するものだが、ただ根が白く、葉が燈心の苗のやうなものである。韓詩に『六月鬱、及び薁を食ふ』といふはこれを指したのだ。

（一）牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ本品ヲ山地ニ野生スルにら（やまにら）トスルハ當ラヌ、此レハ一種特立ノ品デ我日本ニハ産セヌモノデアル、ソレ故之レヲ我邦ノやまらつきようトスルモ誤リデアル、又同書ニ水韮ヲみづにら即チせきしやうもトスルモ非デアル。

時珍曰く、按ずるに、爾雅に『藿、山韭なり』とあり、許愼の說文に『韱は山韭なり』とあり。金幼孜の北征錄に『北邊の(二)雲臺(三)戎地には野韭、沙葱が多く、地方民はみなそれを採つて食ふ』とあるはこの物だ。蘇氏は詩に鬱とあるをこの物としてゐるが、正否いづれとも斷言されない。又、呂忱の字林には『薟——音は嚴(ゲン)である——は水韭であつて、水涯に野生し、葉は韭のやうで細長い。食へるものだ』とある。これで觀ると野生にもまた山、水の二種あるのだが、氣味は甚しい相異のないものらしい。

氣味　【鹹し、寒、濇にして毒なし】　主治　【腎に宜く、大、小便數に主效があり、煩熱を去り、毛髮を治す】(千金)

發明　時珍曰く、藿は腎の菜であつて、腎病にはこれを食ふが宜し。諸家の本草には記載がないが、孫思邈の千金方に收めてある。他の諸書にはこの字を訛つて多くは藿の字に書いてあるが、藿とは豆葉のことだ。陳直の奉親養老書にある藿菜羹はこの物で、その方は老人の脾、胃の氣弱で飲食の思はしからぬを治す。藿菜四兩、鯽魚肉五兩を煮た羹に五味、并に少量の麪を下し、三五日每に一回作つて食

(二)雲臺、未詳。
(三)戎ハ戍ノ誤。

ふ。極めて補益がある。

【附錄】（四）**孝文韮**（拾遺）　藏器曰く、辛し、溫にして毒なし。腹內冷、脹滿、洩痢、腸澼に主效があり、中を溫め、虛を補し、人をして能く步行せしめる。塞北の山谷に生じ、形狀は韮のやうだ。住民は多くこれを食ひ、これは後魏の孝文帝が種ゑたものだといつてゐる。又、諸葛韮といふがあつて、孔明が種ゑたものだといふ。この韮は更に長いもので、彼の地では食つてゐる。

時珍曰く、これもやはり山韮だ。ただ人に因んで命けただけである。

（一）葱　（別錄中品）

和名　ねぎ
學名　Allium fistulosum, L.
科名　ゆり科（百合科）

【釋名】**芤**（綱目）　**菜伯**（同）　**和事草**（同）　**鹿胎**　時珍曰く、葱の文字は悤に從ふ。外が直く中が空で悤通の象があるからだ。芤とは草で中に孔があるからその文字を孔に從つて書いたので、芤脈はこれに象つたのだ。葱は、初生を葱針といひ、葉を葱青といひ、衣を葱袍といひ、莖を葱白といひ、葉の中の涕を葱苒といふ。諸

（四）牧野云フ、孝文韮ハ山韮ト同品ダト謂ハレテヰル。

（一）牧野云フ、本品ハ亞細亞大陸ノ原產デアルガ我邦ヘハ舊ク支那カラ傳ヘタモノト思フ、今ハ一般ニ栽培セラレ日常必要ノ蔬トナツテヰル、古名ハきデアルカラ又ひともじ（一ト文字）ノ名ガアル。集解中ニアル冬葱ハわけぎ、漢葱ハかりぎ、胡葱ハ詳カデナ

物にみな宜きものだから菜伯、和事といつたのである。

［集解］恭曰く、葱には數種あつて、山葱をば茖葱といふ。療病の功は胡葱に似たものだ。一般人の食ふ葱には二種あつて、一種は凍葱といひ、冬を經て枯死せず、莖を分けて栽培するもので子がない。一種は漢葱といひ、冬には葉が枯れる。食料、藥用としては凍葱が最も善く、氣味も佳し。

保昇曰く、葱には凡そ四種ある。冬葱、卽ち凍葱であつて、夏衰へて冬盛になり、莖、葉倶に軟美なもので、(二)山南、江左にある。漢葱は莖が實して硬く、味が薄く、冬は葉が枯れる。胡葱は莖、葉が粗く硬く、根は金燈のやうだ。茖葱は山谷に生ずるもので、藥用には入れない。

頌曰く、藥には山葱、胡葱を用ゐ、食品には冬葱、漢葱を用ゐる。又、樓葱といふ一種があつて、やはり冬葱の類のものだ。江南地方ではこれを龍角葱と呼び、(三)荊楚地方で多くこれを種ゑる。その皮は赤く、莖每に上に双方に分れた角のやうな岐が出るからさう呼ばれるのだ。

瑞曰く、龍角、卽ち龍爪葱である。又、羊角葱と名ける。莖上に生える根を下に

イ(本條ガアル)、茖葱ハぎやうじやにんにく(本條ガアル)デアル、樓葱ハやぐられぎ一名かろわざれぎデ、我邦ノ農家之レヲ作リヲル處ガアル、是レハれぎノ一變種デ、學名ヲ Allium fistulosum, L. var. viviparum, Makino. ト稱スル。

(二) 山南ハ唐十道ノ一、草部隰草類漏盧ノ註ヲ見ヨ。江左ハ草部山草類狗脊ノ註ヲ見ヨ。

(三) 荊楚ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。

(日)木村(康)曰ク、植物食物誌ニヨレバ内地及臺灣産ノ葱ノ組成左ノ如シ。

産地	水分	蛋白質	脂肪	炭水化物	纖維	灰分
内地産	91.50	1.50	0.20	4.80	2.00	0.50
同	92.63	1.47	0.07	4.33	1.06	0.44
臺灣産	92.926	1.774	0.193	4.172	—	0.703

ねぎ類一種ノ香氣ハソノ含有スル葱油ニ歸スベク、ソノ主成分ハ揮發油及ビ「フイチン」ナリ。

(應用)ねぎハ四時食

移して植ゑる。

時珍曰く、冬葱、卽ち慈葱であつて、或は太宮葱と名ける。それは莖が柔く細くして香しく、冬を經て太宮の食料に供するによしといふ意味で、故に數種の名を呼ばれたのだ。漢葱は一名木葱といふ。その莖が粗く硬いから木をつけて呼んだのだ。冬葱には子がない。漢葱は春末に叢になつた青白色の花を開き、その子は味辛く、色黑く、皺文があり、三瓣狀をなしてゐる。取收めて陰乾する。浥鬱してはならぬ。これは子を種ゑるもよく、分けて栽培するもよし。

〔樓葱〕

〔葱〕

葱莖白 (日)氣味 【辛し、平なり。葉は温なり。根鬚、汁、いづれも毒なし】

弘景曰く、葱には寒と熱とあつて、白は冷、青は熱である。傷寒に用ゐる湯藥中には青を用ゐてはならぬ。宗奭曰く、葱は發散を主とする。多食すれば神を昏する

用ニ供セラルル蔬菜中ノ重要ナルモノニシテ、我ガ國ニ於テハ青葉ヲ賞用スレドモ、關東ニテハ白色部ヲ喜ブ。葱油ハヨク神經ヲ刺戟シ、消化液ノ分泌ヲ促シ、消化器内ノ寄生蟲ノ養生ヲ豫防シ、又僂麻質ニ效アリ。

詵曰く、葱は冬期の食物としてよし、過多に食つてはならない。鬚髮を損じ、虚氣を發して上沖し、五臟を閉絶する。それは骨節を開き、汗を出す結果である。思邈曰く、正月に生葱を食へば顔面に遊風を起す。生葱と蜜と食合せれば下利を作す。燒いた葱と蜜と食合せれば壅氣して死亡する。張仲景曰く、生葱と棗とを食合せれば病となる。犬、雉の肉と食合せれば血を病む。時珍曰く、地黄、常山を服する者は葱を食ふことを忌む。

主治　【湯にすれば傷寒寒熱、中風、面目の浮腫を治し、能く汗を出す】(本經)【傷寒の骨肉碎痛、喉痺不通。胎を安じ、目に歸し、目睛を益し、肝中の邪氣を除き、中を安じ、五臟を利し、あらゆる藥毒を殺す。根は傷寒頭痛を治す】(別錄)【天行時疾の頭痛、熱狂、霍亂轉筋、及び奔豚氣、脚氣、心腹痛、目眩に主效があり、心の迷悶を止める】(大明)【關節を通じ、衄血を止め、大、小便を利す】(孟詵)【陽明の下痢、下血を治す】(李杲)【表に達し、裏を和し、血を止める】(寗原)【風濕の身痛、麻痺、蟲積の心痛を除き、大人の腸脫、陰毒腹痛、小兒の盤腸內釣、婦人の妊娠溺血を止め、乳汁を通じ、乳癰を散じ、耳鳴を利す。狂犬の咬傷に塗り、蚯蚓の毒を制

す】（時珍）【一切の魚肉の毒を殺す】（士良）

【發明】元素曰く、葱莖白は味辛くして甘し、平である。氣は厚く、味は薄く、升であり陽であつて、手の太陰、足の陽明の經に入り、專ら發散を主として上下の陽氣を通ずるものだ。故に活人書では、傷寒の破れるやうな頭痛を治するに連鬚葱白湯を主とし、張仲景は少陰の病の淸穀を下利し、裏寒し、外熱し、厥逆し、脈の微なるを治するに白通湯を主とし、その中に葱白を用ゐ、顏色赤きものの場合には四逆湯に葱白を加へ、腹中の痛むには葱白を去つた。成無已はこれを解釋して『腎は燥を惡む。急に辛を食つて以て潤ほす。葱白の辛、溫は以て陽氣を通ずるものだ』といつてある。

時珍曰く、葱は佛教徒が五葷の一に數へるものだ。生では辛くして散じ、熟すれば甘く溫である。外實し、中空であつて肺の菜である。肺の病にはこれを食ふが宜しい。肺は氣を主とし、外には皮毛に應じ。その合は陽明である。故にその治するところの症は多く太陰、陽明に屬し、いづれもこの物の發散し氣を通ずる功力を取るのであつて、氣を通ずるから能く毒を解し、また血病を理するのだ。氣は血の帥

であつて、氣が通ずれば血が活きる。金瘡、磕損、折傷の出血し疼痛して止まぬものに、王璆の百一方では葱白、砂糖を用ゐ、等分を研つて封すれば痛が去つて立ろに止み、更に瘢痕がなくなる。葱葉もやはり用ゐられる。又、葱管で鹽を玉莖内に吹入れると、小便不通、及び轉脬の危急なるものを治するに極めて捷に奏效する。

余は嘗て用ゐて數人の治療に效驗を擧げた。

【附方】舊十二、新三十一。【感冒風寒】初期に葱白一握、淡豆豉半合を湯に泡けて服し、汗を取る。(瀕湖集簡方)【傷寒頭痛】破れるやうに烈きには、鬚の附いたままの葱白半斤、生薑二兩を水で煮て溫服する。(活人書)【時疾頭痛】發熱するには、根の附いた葱白二十本を米に和して粥に煮、醋少量を入れて熱して食ひ、汗を取れば解す。(濟生祕覽)【數種の傷寒】初期の一二日でまだ判然せぬには、上記の法を用ゐて汗を取る。【傷寒の勞復】房事が原因で腹痛し、卵腫するには、葱白を擣き爛らし、苦酒一盞を入れて和して服す。(千金方)【風濕身痛】生葱を擂り爛し、香油數點を入れて水で煎じ、川芎藭、鬱金の末一錢を調へて服し、吐かす。(丹溪心法)【妊娠傷寒】赤斑があり、變じて黑斑となり、尿血するには、葱白一把、水三升を煮て汁を熱服

し、その葱全部を食つて汗を取る。(傷寒類要)【妊娠六个月の孕動】危篤に陷つて救ひ難きには、葱白一大握、水三升を一升に煎じ、滓を去つて頓服する。(楊氏產乳)【胎動下血】(五)病痛が心を搶くには、葱白を煮た濃汁を飲む。なほ胎兒の死なぬものは安かになり、已に死んだものは出る。なほ奏效せぬときは再服する。ある方では、川芎を加へる。ある方では銀器で米と共に粥に煮、また羹にして食ふ。(六)(深師方)【中惡の卒死】或は豫め病があり、或は平常と變りなくして就寢中そのまま卒死するは、いづれも中惡である。急に葱心黃を取つて鼻孔中に刺し入れ、男は左、女は右に七八寸入れる。鼻、目から血が出て甦る。〇又ある法では、葱を耳中に五寸刺し入れる。それで鼻中から血が出て活きる。血の出ないものは活きない。これは扁鵲の祕方だと言ひ傳へてある。(崔氏纂要)【小兒の卒死】故なくして卒死せるには、葱白を取つて下部、及び兩鼻孔中に納れる。氣が通じ、或は(七)嚏して復活する(陳氏經驗方)。【小兒の盤腸】內釣して腹痛するには、葱湯で病兒の腹を洗ひ、同時に葱を炒り擣いて臍上に貼る 良久して尿が出て痛が止まる。(湯氏嬰孩寶鑑)【陰毒腹痛】厥逆し、唇靑く、卵縮し、六脈の絕えんとするには、葱一束を根、及び靑を去つて白を

(五)大觀ニ病ヲ腰ニ作ル。

(六)大觀ニ梅ニ作ル。

(七)嚏ハ噴ニ同ジ、魚ノ水ヲ吸フ如キ貌ヲイフ。

(八) 大觀ニ梅ニ作ル。

留め、二寸を臍上に置いて熨斗火でその上から熨し、葱が壊れたときは易へる　良久して熱氣が透入して手、足が溫まり、汗が出れば痊える　そこで四逆湯を服する　熨して手、足が溫まらぬものは活きない。(朱肱南陽活人書)【脫腸の危症】凡そ大吐し、大泄して、四肢が厥冷して人事不省となり、或は房事後に小腹、腎が痛み、外腎が搐縮し、冷汗が出て厥逆するは須臾にして絕望になる。先づ葱白を炒り熱して臍を熨し、後に葱白二十一莖を擂り爛して酒で煮て灌ぐ　陽氣が直ちに回復するものだ。これは華佗が卒病を救つた方である。【突然心の急痛するもの】牙關が緊閉し、絕せんとするには、老葱白五本を皮、鬚を去り、膏に擣いて匙で咽中に送入し、麻油四兩を灌ぐ。ただ咽を下れば甦り、少頃して蟲積がみな黃水に化して下り、永く再發せぬ。累りに人命を救ひ得た(瑞竹堂方)。【霍亂煩躁】坐臥不安なるには、葱白二十本、大棗二十箇、水三升を二升に煎じて分服する。(八)(深師方)【蚘蟲心痛】葱莖白二寸、鉛粉二錢を擣いて丸にして服すれば止む。葱は能く氣を通じ、粉は能く蟲を殺すものだ。(楊氏經驗方)【腹皮の痲痺】不仁なるには、葱白を多く煮て食へば自ら癒える。(危氏方)【小便閉脹】治療せねば死に至る。葱白三斤を剉んで炒り、帕に二箇

に盛り別けて更互に小腹を慰す。氣が透つて通じる。(許學士本事方)【大、小便閉】葱白と酢とを擣き和して小腹を封じ、同時に七壯灸する。(外臺秘要)【大腸の虚閉】勻氣散——連鬚葱一根、薑一塊、鹽一捻、淡豉二十一粒を擣いて餅にし、烘いて臍中を掩ふて紮定する。良久してその氣が通ずれば通じがある。通ぜぬときは再び試みる。(楊氏直指方)【小兒の虚閉】葱白三根の煎湯で生蜜、阿膠末を調へて服し、同時に葱頭に蜜を染めて肛門に挿入すれば少頃して通ずる(全幼心鑑)【急淋陰腫】泥葱半斤を煨熟して杵き爛し、臍上に貼る。(外臺)【小便淋澀】或は尿に[九]白あるには、赤根樓葱を根に近い部分一寸ばかりを截つて臍中に置き、艾で七壯灸する。(經驗方)【小兒の不尿】胎熱のためだ。大葱白を四斤に切つて乳汁半盞と共に煎じ、片時して四回に分服すれば通じる。乳を飲まぬものもこれを服すれば乳を飲む。若し臍の四旁に青黑色があり、また口を撮するものならば望なし。(全幼心鑑)【腫毒尿閉】腫毒が潰れぬために小便が通ぜぬには、葱を切つて麻油に入れて黑色になるまで煎じ、葱を去り油を取つて腫處に塗れば通じる。(普濟)【水癊病腫】葱根白皮の煮汁一盞を服す。水を下出するものだ。病が已に困篤なるには、根を擣き爛してそれに坐る。白

(九) 大觀ニ血ニ作ル。

ら氣水を取下す。（聖濟錄）【陰囊腫痛】葱白、乳香を擣いて塗る。卽時に痛が止み、腫が消く。又ある方では、煨葱に鹽を入れて泥のやうに杵いて塗る。【小便溺血】葱白一握、鬱金一兩、水一升を二合に煎じ、一日三回溫服する（普濟方）【腸痔で血の出るもの】葱白三斤を湯に煮て熏じ洗へば立ろに效がある（外臺）【赤、白下痢】葱白一握を細かに切り、米を和し粥に煮て日每に食ふ（食醫心鏡）【便毒の初期】葱白を炒り熱して布に包み、數回熨して藥を傅ければ消く。○永類方では、葱根に蜜を和して擣いて傅け、紙でそれを密護し、外に通氣藥を服すれば癒える。【癰疽腫硬】烏金散——癰癤の硬く腫れて頭がなく、色の變ぜぬものを治す。米粉四兩、葱白一兩を共に黑く炒り、研末して醋で調へて貼り、一伏時してまた換へ、消するを度とする。（外科精義）【一切の腫毒】一日四五回葱汁に漬ける。【乳癰の初期】葱汁一升を頓服すれば散る。（いづれも千金）【疔瘡惡腫】刺し破つて老葱、生蜜を杵いて貼る。三四時間で疔が出てから醋湯で洗ふ。神效がある。（聖濟錄）【小兒の禿瘡】冷泔で洗淨し、羊角葱を泥に擣いて蜜を入れて和して塗る。神效がある。（楊氏）【刺瘡、金瘡】あらゆる治療も效なきには、葱の濃煎汁に漬けるが甚だ良し。【金瘡の瘀血】腹に

（一〇）大觀ニ入煻灰火ニ作ル。

在るには、大葱白二十箇、蕪子三升を杵き碎き、水九升で一升半に煮て頓服する。膿血を吐出して癒えるものだ。なほ盡きぬときは再服する。（いづれも千金方）【血壅怪病】全身から突然錐のやうに肉が出て、痒く且つ痛み、飲食不能なるを血壅と名ける。速に治療を加へねば必らず潰膿血となる。赤皮の葱を灰に燒いて淋し洗ひ、豉湯數盞を飲めば自ら平安になる。（夏子益怪病奇方）【金銀の毒を解す】葱白の煮汁を飲む。（外臺祕要）【腦破骨折】蜜と葱白とを搗きまぜて厚く封ずれば立ろに效がある。（肘後方）【自縊して垂死のもの】葱心で耳、鼻中を刺す。血が出れば甦へる。

葉 【主治】【煨き研つて金瘡が水に入つて皸腫せるに傅け、鹽で研つて蛇虫傷、及び射工、溪毒に中りたるに傅ける】（日華）【水病足腫に主效がある】（蘇頌）【五臟を利し、目、精を益し、黄疸を發する】（思邈）

【發明】頌曰く、煨葱で打撲損を治することは劉禹錫の傳信方に記載があつて『崔給事が傳へたものだ。葱の新に折り取つて（一〇）煻火で煨熱して皮を剝ぎ、その間にある涕を取つて損した處を罨ひ、同時に多く煨いて置いて次ぎ次ぎと熱したものに易へる。崔給事の話に、近頃李抱眞と澤潞に判官を勸めてゐた時、李相が毬杖で毬

を打つてゐると、同じく駐屯中の某軍將も杖を以て互にその技を鬪はし、勢に乘じて李相の拇指を傷め、爪甲まで劈裂したことがあつた。その際遽に金創藥を求めて創を裹み、强ひて酒を飲み始めたが、飲めば飲むほど顏色がますます靑くなり、非常な痛を耐へてゐた。するとある軍吏がこの方の話をしたので、早速それを三回まで易へて試ると、顏色が反對に赤くなり、少時すると、もう痛まなくなつた。凡そ十數回熱葱、幷に涕でその指を纏裹して、その席の畢るまで愉快に談笑を續けた」といふ』とある。

時珍曰く、按ずるに、張氏經驗方に『金創、折傷の出血には、葱白を葉附きのまま煨き熱し、或は鍋烙で炒熱して擣き爛して傅け、冷えれば再び易へる。石城の尉戴堯臣が馬を試みて大指を損じ、血出淋漓たる有樣だつたが、余がこの方を用ゐて再び易へると痛が止み、翌日洗面の際に見ると痕跡がなくなつてゐた。宋推官、鮑縣尹いづれもこの方を得て、殺傷者がある毎に、呼吸のまだ絕えぬときは早速この方を用ゐしめて、人命を救つたことが甚だ多い』とある。又、凡そ頭、目が重悶し、疼痛するものには、余は每に葱葉を鼻中に二三寸、幷に耳中に挿入させるが、

氣が通じて淸爽になる。

【附　方】　舊三、新二。　【水病の足腫】葱莖葉を湯に煮て一日三五回漬けるが妙である。(韋宙獨行方)【小便不通】葱白を葉共に擣き爛らして蜜を入れ、外腎上に合せれば通ずる。(永類鈐方)【瘡傷風水】腫毒には、葱青葉を取つて乾薑、黄蘗と等分を湯に煮て浸し洗へば立ろに癒える。(食療)【蜘蛛咬瘡】全身に瘡を生じたるには、青葱葉一莖を尖を去り、蚯蚓一條をその中に入れ、化けて水となるを待つて取り出し、それを咬まれた患部に點ければ癒える。(李絳兵部手集)【代指毒痛】黄に萎れた葱葉を取つて煮た汁を熱して漬ける。(千金方)

汁　【氣　味】【辛し、溫、滑にして毒なし】

【主　治】【溺血にはこれを飲む。藜蘆、及び桂の毒を解す】(別錄)【瘀血を散じ、衄を止め、痛を止め、頭痛、耳聾を治し、痔瘻を消し、衆くの藥の毒を解す】(時珍)【能く玉を消して水となし、五石を化す。仙方で使用する】(弘景)

【發　明】　時珍曰く、葱汁、卽ち葱涕である。功は葱白と同じ。古方に多く葱涎を用ゐて藥を丸にすとあるは、やはりその上焦の風氣を通散する點を取つたのだ。

勝金方では、汁を取り、酒少量を入れて鼻中に滴し、衄血の止まぬを治し『直ちに血が腦から散下するを覺える』といつてある。又、唐瑤經驗方では、葱汁に蜜少量を和して服するも佳しとして『隣媼もこれを用ゐて甚だ效があつた。老僕にもこれを試みてやはり效驗があつた』といつてある。この二物は共に食へば人體に害がある。如何なる關係でこの疾には治癒の效能があるものか。恐らくその人の脾、胃が異常であつたのだらう、甚だ急切な場合以外には輕輕しく試むべきでない。

愼微曰く、三洞要錄に『葱は菜の伯であつて、能く金、錫、玉、石を消す。神仙金玉漿の法は、冬至の日に葱汁、及び根を壺廬に盛つて庭中に埋め、翌年の夏至に掘り出して見ると盡く化けて水になつてゐる。ある一定の方法に依つてその水に金、玉、銀、靑石各三分を漬けると自から消ける。それを暴乾すると飴のやうになり、食へば糧食を休め得る。また金漿ともいふ』とある。

【附方】　舊四、新二。【衄血の止まぬもの】方は前項を見よ。【金瘡出血】止まぬには、葱を取つて炙き熱し、挼んで汁を塗る。直ちに止まる。（梅師方）【火焰丹毒】頭から起つたものには、生葱汁を塗る。【痔瘻の痛むもの】葱涎と白蜜を和して塗

る。豫め木鼈子の煎湯で熏じ洗ふ。塗ると水のやうに冷くして效がある。ある者がこの病のとき、早朝これを用ゐると正午頃には平安になつた（唐仲擧方）【鉤吻の毒を解す】顏色青く、口噤して死せんとするには、葱涕を啖へば解す。（千金）

鬚【主治】【氣を通ずる】（孟詵）【飽食、房勞のために血が大腸に滲入して便血、腸澼、痔となり、口乾くものを療ず。研末して二錢づつを溫酒で服す】（時珍）

【附方】舊一。【喉中腫塞】氣の通ぜぬには、葱鬚を陰乾して末にし、二錢づつに蒲州膽礬末一錢を入れて和勻し、一字づつを吹く。（杜壬方）

花【主治】【心、脾が錐、刀で刺すやうに痛み、腹脹するには、一升を吳茱萸一升、水（一二）八合と共に七合に煎じて滓を去り、三回に分服する。立ろに效がある】（頌）記載は崔元亮の方にある。

實【氣味】【辛し、大溫にして毒なし】

【主治】【目を明にし、中氣不足を補す】（本經）【中を溫め、精を益す】（日華）【肺に宜く、頭に歸す】（思邈）

【附方】舊一。【眼の暗きに中を補す】葱子半升を末にし、一匙を湯一升半に

（一二）大觀ニ一大升ノ三字水下ニアリ。

煎じて滓を去り、米を入れ粥に煮て食ふ。また末にして蜜で梧子大の丸にし、食後に米湯で一二十丸を服するもよし。一日三回。(食醫心鏡)

茖葱(一) 音は格(カク)である。(千金)

和名　ぎやうじやにんにく
學名　Allium victorialis, L.
科名　ゆり科(百合科)

釋名　山葱

集解　保昇曰く、茖葱は山谷に生ずる。藥用には入れない。

頌曰く、爾雅に『茖は山葱なり』とあり、説文には『茖葱は山中に生ずる。莖細く、葉が太い』とある。食つては通常の葱より香美だ。藥用に入るに宜し。

時珍曰く、茖葱は野葱であつて、山原、平地いづれにもある。沙地に生えるものをば沙葱と名け、水澤に生えるものをば水葱と名け、野人はいづれも食ふ。白花を開いて小葱頭のやうな子を結ぶものだ。世俗には胡葱、卽ち蒜葱なることに明な智識がなく、誤つてこの物を指して胡葱としてゐる。詳細は胡葱の條を見よ。保昇は藥用に入れないといひ、蘇頌は藥用に山葱、胡葱を入れて宜しといつたが、玆に思

(一)牧野云フ、山中ニ生ズル品デ大屬中葉ノ最モ濶キ者デアル、救荒本草ニ山葱一名隔葱又ノ名鹿耳葱トシテ其レノ圖説ガアル。

邈の千金食性を調べて見ると、自ら莕葱の功用があるのだ。諸本草に記載を失してゐるが、此に採錄してその缺を補ふて置く。

【氣味】【辛し、微溫にして毒なし】時珍曰く、佛敎徒は莕葱を五葷の一に數へてゐる。蒜の條を見よ。

【主治】【瘴氣、惡毒を除く。久しく食すれば志を强くし、膽氣を益す】（思邈）
【諸惡ニ蛓、狐尿刺毒、山溪中の沙蝨、射工等の毒に主效があり、煮汁に浸し、或は擣いて傅ければ大效がある。やはり小蒜、茱萸などと兼用するもので、單獨には用ゐない。（蘇恭）

子 【氣味】葱に同じ。【主治】【洩精】（思邈）

（一）胡葱（宋開寶）

和名　無し
學名　Allium sp.
科名　ゆり科（百合科）

【釋名】**蒜葱**（綱目）**回回葱**　時珍曰く、按ずるに、孫眞人の食忌に葫葱と書いてあるは、その根が葫蒜に似てゐるからで、俗に蒜葱と稱するは正にその兩者の

（二）蛓音次、毛蟲有毒ノモノ。

（一）牧野云フ、本品ハ未詳ノ種デ我邦ニハ之レヲ見ナイ、人ニヨリ之レヲたまねぎ卽チ Allium Cepa, L. ニ充ツレドモ非デアル。

意味を合せたものだ　元朝人の作つた飮膳正要には回回葱と書いてある。この物が胡地から渡來したといふ意味を表はしたらしい。故に胡葱といふのである。

【集解】詵曰く、胡葱は蜀郡の山谷に生ずる。形狀は大蒜に似て小さく、形は圓く、皮は赤く、梢は長くして銳い。五月、六月に採る。

保昇曰く、葱に凡そ四種あつて、冬葱は夏枯れ、漢葱は冬枯れ、胡葱は莖、葉が粗く短く、根は金燈のやうだ。茖葱は山谷に生ずる。

頌曰く、胡葱は食葱に類するもので、根、莖いづれも細く白い。或は、根、莖は微し短く、金燈のやうだといひ、或は大蒜に似て小さく、皮が赤くして銳いともいふ。

時珍曰く、胡葱、卽ち蒜葱であつて、孟詵、韓保昇の說が正しい。野葱ではないのであつて、野葱は茖葱と名け、葱に似て小さいものだ。胡葱といふは一般に種植し、八月種を下して五月收取し、葉は葱に似て根は蒜に似たものだ。その味は薤のやうで甚だ臭くない。江西にある水晶葱といふは、根は蒜、葉は葱のやうなものだ。蓋しこの類のものである。李廷飛の延壽書に『葱胡、卽ち葍子』とあるは、蓋し相

似てゐるために誤つたので。現に俗間ではみな野葱を胡葱といつてゐるが、それは蒜葱を識らないところから茖葱を指してそれと謬つてゐるのである。

〔胡　葱〕
——回回葱——

【修治】斆曰く、凡そこれを採取したならば、理紋に從つて擘碎し、綠梅子と相對して拌ぜ、一伏時の間蒸して梅子を去り、砂盆に入れて研つて膏のやうにし、瓦器に盛つて晒し乾して用ゐる。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】時珍曰く、生では辛くして平である。熟すれば甘くして溫である。詵曰く、やはりこれも薰ずるもので、久しく食へば神を傷め、性を損じ、人をして多く忘れしめ、目の明を損じ、血脈を絕し、痼疾を發する。胡臭、䘌齒を患ふ人がこれを食へばますます甚しくなる。思邈曰く、四月に葫葱を食つてはならぬ。人をして氣喘し、多く驚せしめるものだ。

【主治】【中を溫め、氣を下し、穀物を消化し、食を能くし、蟲を殺し、五臟の

不足の氣を利す】(孟詵)【腫毒を療ず】(保昇)

[發明] 時珍曰く、方術家では、溪澗の白石を煮て食糧にし、また牛、馬、驢の骨を煮て軟にするが、いづれも胡葱を用ゐるので、やはり堅きを軟にする性質を有つ物である。陶弘景が『葱は能く五石を化し、桂を消して水にする』といつたがこれは諸種の葱はいづれも能く石を軟にするからである。現今では茖葱を採つて石を煮、胡葱といつてゐる。

[附方] 新一。【身體、面部の浮腫】小便利せずして喘急するには、胡葱十莖、赤小豆三合、消石一兩を用ゐ、水五升で葱と豆とを煮て、熟したときに共に擂つて膏にし、空心に溫酒で半匙づつを服す。(聖惠方)

子 [主治]【諸毒肉に中つて吐血して止まず、萎黃し憔悴するには、一升を水煮し、晝一回、夜一回、半升を冷服する。血が定つて止まる】(孟詵)

(一)薤

音は械(カイ)である。(別錄中品)

和名 らつきよう
學名 Allium Bakeri, Regel.
科名 ゆり科(百合科)

(一)牧野云フ、らつきようハ我日本ニハ野生ハ無ケレドモ、今ハ善ク民間ニ栽エ

テ其製重鮮莖即チたまれヲ食用ニシテヰル。

(二) 魯山ハ草部芳草類蕪草ノ註、隰草類惡實ノ註參照。

[釋名]

藠子 音は叫(ケウ)である。或は蕎と書くが、それは正しくない。**莜子** 音は釣(テウ)である。**火葱**(綱目) **菜芝**(別錄) **鴻薈** 音は會(クワイ)である。

時珍曰く、薤の本來の文字は䪥(かい)と書き、韭(きう)の類だ。故にその文字は韭に從ひ㪗―音は槩(ガイ)―に從ふの諧聲である。今は一般にその根が白いので藠子(けう)と呼(よ)び、江南地方では訛(なま)つて莜子(てうし)といふ。その葉が葱に類し根は蒜のやうで、採收した種をば火で熏すべきものであるところから、俗間一般に火葱と呼んでゐる。羅願は『物は芝より美なるはない。故に薤を菜芝といふ』といつた。蘇頌はまた莜子を蒜(さん)の條に附錄したが、誤だ。

[集解] 別錄に曰く、薤は(二)魯山(ろざん)の平澤に生ずる。

恭曰く、薤は韭の類のものである。葉は韭に似て濶(くわつ)く、白が多くして實がなく、赤、白の二種あつて、白いものは補して美味だが赤いものは苦くして無味だ。

〔薤〕
—藠—

○頌曰く、薤は處處にある。春、秋分に蒔き、冬になると葉が枯れる。爾雅に『勤は山薤なり』とあるは山中に生えるもので、莖、葉は家薤と相類してゐるが、根がやや長く、葉がやや太く、あだかも鹿葱のやうで、體、性もやはり家薤と同じである。今は一般に用ゐることが少だ。

○宗奭曰く、薤は、葉は金燈の葉のやうでやや狹くして更に光る。故に古人は薤露といつた。それはその光滑にして佇らぬ意味をいつたのだ。

○時珍曰く、薤は八月に根を栽ゑて正月に分蒔する。肥壤の地がよく、數枝が一本に生え、茂つて根が太くなる。葉の形狀は韭に似てゐるが、韭葉は中が實して扁く、劍脊があり、薤葉は中が空で、細い葱の葉に似て稜があり、氣はやはり葱のやうだ。二月に紫白色の細花を開き、根は小さい蒜のやうで一本に數顆相依つて生える。五月に葉の青いとき掘るもので、さなくば肉が滿たない。その根は煮て食ふもよく、酒の苞として糟で淹藏するもよく、醋で浸してもいづれもよし。故に内則に『葱、薤を切り、諸醢に實て柔かにする』といつてある。白樂天の詩に『酥は暖なり薤白の酒』とあるは、酥で薤白を炒つて酒に投じたもののことをいつたのだ。水晶葱と

いふ一種のものは、葉は葱のやう、根は蒜のやうで、薤と似てゐるが臭くない。やはりその類のものだ。按ずるに、王禎の農書に『野薤、俗に天薤と名ける。麥原中に生じ、葉は薤に似て小さく、味は益〻辛い。やはり食料に供し得るものだが、ただ多くないものだ』とあるは、爾雅にいふ山薤そのものである。

薤白 【氣味】【辛く苦し、温、滑にして毒なし】好古曰く、手の陽明の經に入る。頌曰く、薤は青を去り白を留めて用うべきもので、白は冷だが青は熱である。詵曰く、發熱する病には多食してはよくない。三四月に生のものを食つてはならぬ。大明曰く、生で食へば涕唾を引く。牛肉と食合せてはならぬ、癥瘕となるものだ。

【主治】【金瘡、瘡敗。身を輕くし、饑ゑず、老に耐へる】(本經)【骨に歸し、寒熱を除き、水氣を去り、中を温め、結氣を散ずる。羹にして食へば病人を利す。諸瘡が風寒、水氣に中つて腫痛するには、擣いて塗る】(別錄)【煮て食へば寒に耐へ、中を調へ、不足を補し、久痢、冷瀉を止め、人體を肥健にする】(日華)【洩痢下重を治し、能く下焦、陽明の氣滯を泄す】(李杲) 好古曰く、下重するは氣滯である 四逆

散にこれを加へて用ゐて氣滯を泄す。【少陰の病で厥逆し、洩痢するもの、及び胸痺刺痛を治し、氣を下し、血を散じ、胎を安ずる】（時珍）【心病はこれを食ふが宜し、産婦を利す】（思邈）【婦人の帶下赤白を治するに、羹にして食ふ。骨哽の咽に在つて去らぬには、これを食へば下る】（孟詵）【虚を補し、毒を解す】（蘇頌）【白きものは補益し、赤きものは金瘡、及び風を療じ、肌肉を生ずる】（蘇恭）【蜜と共に擣いて湯火傷に塗れば甚だ速效がある】（宗奭）【溫補して陽道を助ける】（時珍）

【發明】弘景曰く、薤は性溫補するもので、仙方、及び服食家いづれもこれを用ゐるが、偏に諸膏に入れて用ゐるのである。生では噉はない。葷辛が忌なためだ。詵曰く、薤は白色のものが最も好し。辛味はあるけれども五臟を葷せない。道術を學ぶ者は長くこれを服し、神に通じ、魂魄を安じ、氣を益し、筋力を續け得るものとしてある。

頌曰く、白薤の白は性冷にして補す。又曰く、葶子を煮て産蓐中の婦人に與へて飮ませると分娩を容易にする。また脚氣にも主效がある。

時珍曰く、薤は、味は辛く、氣は溫である。諸家は溫補するものだといひ、蘇頌

の圖經だけが冷補するといつてあるが、按ずるに、杜甫の薤の詩に『束ねて青銅の色に比し、圓くして玉筯の頭に齊し。衰年關膈の冷には、味暖にして併て憂なし』とあつて、やはり溫補することをいひ、經の文と合致する。して見ると冷補の說は蓋し當つてゐない、又按ずるに、王禎は『薤は生では氣が辛く、熟すれば甘美である。これを種ゑれば蠹せず、これを食へば益あり。故に學道の人はこれに資る。老人はこれが宜し』といつた。しかし道家では薤を五葷の一としてあるが、諸氏の說ではこれを葷せぬとしてある。如何なるわけであらうか。薛用弱の齊諧志に『安陸の郭坦の兄は、天行病を患つてから後、非常に大食になり、毎日一斛まで食ふやうになつたので、五年の後には貧の極、乞食になり、ある日饑ゑに耐へかね、野菜畑へ往つて薤を一畦、大蒜を一畦食つて了つた。ところが甚しく悶えて地に臥し倒れ、籠のやうな一物をそこに吐出した。それが漸次に縮小するのであつたが、ある者がその上へ飯を撮くと、卽時に消けて水になつた。病はそれで瘳えて了つた』とあるが、按ずるに、これもやはり薤が結を散じ、癥を消する例證だ。

〔宗奭〕曰く、薤葉は光滑で露もまた竚り難い。千金の肺氣喘急を治する方の中にこ

れを用ゐたのは、やはりその滑澁の關係を利用したのだ。

【附　方】　舊十五、新八。【胸痺刺痛】張仲景の栝樓薤白湯——胸痺して痛が心、背に徹し、喘息し、欬唾し、氣短く、喉中燥痒し、寸脈が沈遲に、關脈が弦數なるを治す。これは治療を加へねば死亡するものである。栝樓實一箇、薤白半升、白酒七升を二升に煮取り、二回に分服する。○千金の胸痺を治する半夏薤白湯——薤白四兩、半夏一合、枳實半兩、生薑一兩、栝樓實半箇を咀し、白截漿三升で一升に煮取り、一日三回に溫服する。○肘後では、胸痛で瘥えても後に發するを治す。薤根五升の擣汁を飮む。立ろに瘥える。○截の音は在（サイ）、酢漿である。【中惡の卒死】卒死し、或は豫め病があり、或は何事もなく寢に就いて忽ち死ぬものはいづれも中惡である。薤汁を鼻中に灌入すれば意識が回復する。（肘後）【霍亂乾嘔】止まぬには、薤一虎口を水三升で一半に煮取つて頓服する。三回に過ぎずして已む。（韋宙獨行方）【奔豚氣痛】薤白の擣汁を飮む。（肘後方）【赤痢の止まぬもの】薤と黃蘗とを共に煮て汁を服す。（陳藏器）【赤、白下痢】薤白一握を米と共に粥に煮て日每に食ふ。（食醫心鏡）【小兒の疳痢】薤白を生で擣いて泥のやうにし、粳米粉と蜜とを和して餠にし、炙熱

（三）瘡犯惡露ノ四字、大觀傷手足而犯惡露ノ七字ニ作ル。

（四）大觀ニ疥ヲ癬ニ作ル。

して與へて食はせる。二三服に過ぎずしてよし。（楊氏産乳）【産後の諸痢】多く薤白を煮て食ひ、同時に羊腎脂と共に炒つて食ふ。（范汪方）【妊娠胎動】腹内の冷痛するには、薤白一升、當歸四兩、水五升を二升に煮て三回に分服する。（古今錄驗）【鬱肉脯の毒】薤の杵汁二三升を服するが良し（葛洪方）（三）【瘡の惡露を犯したもの】甚しきは死亡する。薤白を擣き爛して帛に裹み、煨熟して帛を去つて傅け、冷えれば易へる。また擣いて餅にし、艾で灸するもよし。熱氣が瘡に入れば水が出て瘥える。（梅師方）【手指の赤色なるもの】月の生死に隨ふには、生薤一把を苦酒で煮熟し、擣き爛して塗る。癒えれば止める。（肘後方）【疥（四）瘡の痛癢】薤葉を煮て擣き爛して塗る。（同上）【灸瘡の腫痛】薤白一升、猪脂一斤を切つて苦酒に一夜浸し、微火で煎じて三回火にかけ三回下し、滓を去つて塗る。（梅師方）【手、足の瘑瘡】生薤一把を熱醋に投入し、それで瘡上を封じて效を取る。（千金）【毒蛇の螫傷】薤白を擣いて傅ける。（徐玉方）【虎、犬の咬傷】薤白の擣汁を飲み、幷に塗る。一日三服。瘥えれば止る。（葛洪方）【諸魚の骨哽】薤白を柔に嚼み、繩で中を括つて呑み、哽處に達したとき引けば出る。（同上）【誤つて釵、鐶を呑みたるとき】薤白を取つて曝して萎えしめ、そ

れを煮熟して切つて一大束を食ふ。釵は隨つて出る（葛洪方）【日中の風翳】痛むには、薤白を取つて截斷し、膜上全面に置き、痛むときはまた試みる。（范汪方）【咽喉腫痛】薤根を醋で擣いて腫處に傅け、冷えれば易へる。（聖惠）

【附錄】**蓼蕎**（拾遺）藏器曰く、味辛し、溫にして毒なし。霍亂の腹冷、脹滿、冷氣が攻擊して腹滿不調のもの、產後の血攻で胸膈の刺痛するに主效がある。煮て服す。平澤に生じ、その苗は葱、韭のやうだ。

時珍曰く、これもやはり山薤の類で、地方名が異ふだけだ。

蒜（一）（別錄下品）

和名　こびる
學名　Allium sativum, L.
科名　ゆり科（百合科）

【釋名】**小蒜**（別錄）**茆蒜**　音は卯（ボウ）である。**葷菜**　時珍曰く、蒜の字は祘に從ふ。音は祘（サン）の諧聲であつて、また蒜の根の形を形容したものだ。中國には初めはこの物だけだつたが、後に漢の時代に葫蒜を西域から將來したので、これをば小蒜と呼んで區別するやうになつたのだ。故に伏候の古今注に『蒜とは茆蒜

（一）牧野云フ、こびろノ和名アレドモ我邦ニハ產セヌ、にんにくニ似テ少シク小ナルモノデアル、支那ニハ全國ニ栽培シテキル普通品デアル。

（二）練形家ハ食治養生ヲ修スル人。

のことで、俗にいふ小蒜のことだ。胡國に一株に十子ある胡蒜といふ蒜がある。俗にいふ大蒜そのものだ』とある。蒜は五葷の一だから許氏の説文には葷菜といつてある。五葷、即ち五辛であつて、辛臭にして神を昏し、性を伐ふものといふ意味だ。（二）練形家では、小蒜、大蒜、韭、芸薹、胡荽を五葷とし、道家では韭、薤、蒜、芸薹、胡荽を五葷とし、佛家では大蒜、小蒜、興渠、慈葱、茖葱を五葷としてある。興渠とは阿魏のことだ。それぞれ不同はあるが、しかしいづれも辛熏のもので、生で食へば恚を増し、熟して食へば婬を發し、性靈を損するところがあるから絶つことにしてあるのだ。

〔葫　蒜〕

〔集解〕 別錄に曰く、蒜とは小蒜のことだ。五月五日に採る。

弘景曰く、小蒜は葉の生えてゐるときは煮和して食へる。五月になると葉が枯れ

るもので、そのとき根を取る。薍子と名けるが正にそれだ。啖へばこれも甚だ熏臭だ。

保昇曰く、小蒜は處處に野生してある。小なるもので、一名薍――音は亂(ラン)――一名蒚――音は力(リキ)――といひ、苗、葉、根、子いづれも葫に似てゐるが、幾分の一ほどの細かいものだ。爾雅に『蒚は山蒜なり』とあり、注に『說文に「菜は葷菜なり」とある。菜の美なる者は(三)雲夢の葷菜といふ。山中に生ずるものを蒚と名ける』とある。

頌曰く、本草では大蒜を葫といひ、小蒜を蒜といつてあつて、說文の所謂葷菜は大蒜のこと、蒚、卽ち小蒜である。典籍に傳はる記載には、物の別名にかやうな不同がある。藥に使用するには餘程正確な考査を要する。

宗奭曰く、小蒜、卽ち蒜であつて、苗は葱針のやう、根は白くして大なるは烏芋子ほどあり、根共に煮て食ふ。これを宅蒜といふ。

時珍曰く、家蒜に四種あつて、根、莖俱に小さくして瓣が少く、辣の甚しいものは蒜であり、小蒜である。根、莖俱に大きくして瓣が多く、辛くして甘を帶ぶるも

(三)雲夢ハ澤名、今ノ湖北省安陸縣ノ南ニ在リ。モト二澤ニシテ、雲澤ハ揚子江ノ北ニ在リ、夢澤ハ揚子江ノ南ニ在リ。方ハ九百支里、安陸以南、華容以北、枝江以東、ミナソノ地ナリ。後ニ悉ク邑居聚落トナル。因テ併稱シテ雲夢トイフ。此ニ雲夢トハソノ一帶ノ地方ヲ指スナリ。又、縣名ニ雲夢縣アリ。西魏ニ置ク、今ハ湖北省江漢道ニ屬ス。

（四）蕎山ハ、時珍ノ山蒜ノ註ニ據レバ、江蘇省丹徒縣附近ノ蒜山ガ古ノ蕎山ナリトイフ。

のは葫であり、大蒜である。按ずるに、孫炎の爾雅正義に「帝（四）蕎山に登り、蕕芋の毒に遭ふて將に死せんとしたとき、蒜を得て齧み食つて解した。そこで採收して來て植ゑたもので、能く腥、羶、蟲、魚の毒を殺す」とあり、又、孫愐の唐韻に『張騫が西域に使したとき、始めて大蒜の種を得て歸つた』とある。これに據つて見ると、小蒜の種は蕎から移植されたもので、古代から有つたのである。故に爾雅には蕎を山蒜と呼んで家蒜との區別を置いたのだ。大蒜の種は胡地から移入され、漢の時代に始めて中國に有るやうになつたのである。故に別錄には葫を大蒜と呼んで中國の小蒜との區別を置いたのだ。又、王禎の農書には「澤蒜といふ一種は最も滋蔓し易いもので、剷るに隨つてまた茂り合ふ。熟した時に子を採つて漫散して種ゑるものだ。吳地方では煮物の調理に多くこれを用ゐる。根は葅にすると更に葱、韭に勝るものだ」とある。按ずるに、これは正に別錄の所謂小蒜そのもので、その始には野澤から移植したものだから澤なる名稱を冠さられたのだ 寇氏は誤つて宅の字を書いてある。諸家はいづれも野生の山蒜、澤蒜の説明を移して農家で栽培する小蒜の解釋をしてゐるが、いづれも考證の正確を失してゐる。小蒜は蕎から出たに

しても、既に人工的栽培を經た以上、性氣にも相當の變化がなければならぬわけだ。故にその點に十分注意を要する。

蒜 小蒜根である。(五)【氣味】【辛し、溫にして小毒あり】弘景曰く、味辛し、性熱であつて人を損ずる。長く食つてはならぬ。思邈曰く、毒なし。三月には久しく食つてはならぬ。人の志性を傷るものだ。黃帝の書に『生魚と共に食へば人をして奪氣し、陰核を疼ましめる』とある。瑞曰く、脚氣、風病の人、及び時病後にはこれを食ふことを忌む。

【主治】【脾、腎に歸す。霍亂の腹中不安に主效があり、穀物を消化し、胃を理し、中を溫め、邪痺、毒氣を除く】(別錄)【溪毒に主效がある】(弘景)【氣を下し、蠱毒を治す。蛇蟲、沙蝨の瘡に傅ける】(日華) 恭曰く、この蒜と胡葱と配合すれば、惡戟毒、山溪中の沙蝨、水毒を治するに大效があるもので、山間の人民、狸獠(蠻人を指す)が時にこれを用ゐる。【丁腫に塗るが甚だ良し】(孟詵)

葉【主治】【心煩痛。諸毒を解す。小兒の丹疹】(思邈)

【發明】頌曰く、古方では多く小蒜を中冷霍亂を治するに用ゐて、煮汁を飲ま

(五) 木村(康)曰ク、Allium Sativum L. var. vulgare (せいやうにんにく) 鱗莖ハ水分六四(%)、糖分痕跡、含窒素物二六・三、粗纖維〇・七七、灰分一・四四、脂肪〇・〇六、又「イヌリン」ヲ有ス。油分ハ「アスルフイド」、「ツルスルフイド」等有機硫黃化合物ヨリナル。

せた。南齊の褚澄は李道念の雞瘕をこれで治して痊えた。
宗奭曰く、華佗が用ゐた蒜虀は卽ちこの蒜である。
時珍曰く、按ずるに、李延壽の南史に『李道念が已に五年も病むでゐたとき、丞相褚澄が診て「これは冷でもなく熱でもない。白瀹雞子の食過ぎだ」といつて蒜一升を取つて煮て食はせた。するとある物を吐出したが、涎に裹まれてゐるその物をよく見ると、それは雞の雛で、翅や足も完全に具つてゐた。しかし、澄は「まだ出盡きない」といつて更に吐かせ、凡て十二箇吐かせてそれで癒えた』とある。蒜の字を蘇と書いてもあるが、それは誤だ。范曄の後漢書には『華佗は、噎して食物の下らぬ一病人を見て、餅店家の蒜虀水二升ばかりを取つて飮ませた。すると立ろに一條の蛇を吐いた。やがて病人がその蛇を車に載せて華佗の家を訪ねて見ると、壁の北側に數十條の蛇が懸かつてゐたので、如何にも不思議に思つた』とある。又、夏子益の奇疾方には『人の頭部、面部に光があつて、他人の手を近けると火の燃え盛るやうに應ずるは中蠱である。蒜汁半兩に酒を和して服すれば蛇のやうな狀態のものを吐出する』とある。以上三書の所載の事實を觀ると、蒜は蠱を吐かす要藥で

ある。しかるに後世一般にはそれに關する知識がなくなつた。

附方　舊七、新七。【時氣溫病】發病の當初、頭痛壯熱し、脈の大なるには、直ちに小蒜一升を杵き、汁三合を取つて頓服する。二回に過ぎずして癒える。(肘後方)【霍亂脹滿】吐、下せぬものを乾霍亂と名ける。小蒜一升、水三升を一升に煮て頓服する。(肘後方)【霍亂轉筋】腹に入れば死亡する。小蒜、鹽各一兩を擣いて臍中に傅け、灸を七壯すれば立ろに止む。(聖濟錄)【積年の心痛】忍び難きには、十年、五年のものに拘らず、手に隨つて效が現はれる。小蒜を(六)濃汁に煮て飽くまで食ふ。鹽を著けてはならぬ。曾てこれを用ゐて奏效し、再び發しなかつた。(兵部手集)【水毒に中つたもの】一名中溪、一名中溼、一名水病といふ。射工に似たもので物がない。その初には惡寒し、頭、目が微疼し、朝は醒めて夕に劇しく、手、足逆冷し、三日にして蟲が生じ、食が下り、痒からず痛まず、六七日經過すると蟲が五臟を食ひ、注下して禁ぜぬものである。小蒜三升を煮て微熱し——大いに熱しては力が無くなる——それで身體を浴する。身體に赤斑文を發するものならば、他の病としての治療を加へてはならぬ。(肘後方)【射工の毒に中つたもの】瘡となる。蒜を取つて切片

(六)大觀ニ濃汁ヲ釅醋ニ作ル。

して瘡上に貼り、灸を七壯する。(千金)【瘧疾の止截】小蒜を多少に拘はらず泥に研り、黄丹少量を入れて芡子大の丸にし、一丸づつを東に向つて新汲水で服するが至つて妙である。(唐愼微)【刺すやうな陰腫】汁の出るには、小蒜一升、韭根一升、楊柳根二斤、酒三升を煎沸し、熱に乘じて熏ずる。(永類方)【惡核腫結】小蒜、呉茱萸等分を擣いて傅ければ散る。(肘後)【五色丹毒】不規則に、また足踝に發するには、蒜を杵いて厚く傅け、頻りに易へる。(葛氏)【小兒の白禿】頭上が團團と白色になるには、蒜を切つてその切口で揩る。(子母祕錄)【蛇、蠍の螫傷】小蒜の擣汁を服し、滓を傅ける。(肘後)【蜈蚣の咬瘡】小蒜を嚼んで塗るが良し。(肘後方)【蚰蜒の耳に入りたるとき】小蒜を洗淨して擣き、その汁を滴す。なほ出ぬときは再び滴す。(李絳兵部手集)

(一)山　蒜（拾遺）

和名　未詳
學名　Allium sp.
科名　ゆり科(百合科)

【釋名】蒚　音は歷(レキ)である。澤蒜

(一)牧野云フ、我邦ノ先輩之レチのびる(A. nipponicum, Fr. et Sav.)ニ充テテヰルガ、多少似タ點ハアルガ今遽カニサウ

【集　解】頌曰く、江南の一種の山蒜は大蒜に似て臭い。
藏器曰く、澤蒜は、根は小蒜のやう、葉は韭のやうだ。又、石間に生ずるものをば石蒜と名ける。蒜と相異がない。
時珍曰く、山蒜、澤蒜、石蒜は同一物で、ただ山と澤と石間とその生える場所に相異があるだけだ。一般に栽培される小蒜は、本來はこの三種のものが移植されたに始まるので、それで今でも澤蒜なる名稱が遺つてゐるのだ。爾雅に『蒚は山蒜なり』とあつて、現に(二)京口に蒜山といふがあつて蒜を產する。それが此蒚山である。これは處處にあるもので、獨り江南のみにあるのではない。又、呂忱の字林に『䓹は水中の蒜なり』とあるところを見ると、蒜はただ山に產するだけではなく、また水にも產するものだ。別に山慈姑、水仙花、老鴉蒜、石蒜などいふ類の根、葉いづれも蒜に似たものもあるが、それは食へないもので、花も異ふ。いづれも草部中に記載してある。

【氣　味】【辛し、溫にして毒なし】

【主　治】【山蒜は、積塊、及び婦人の血瘕を治す。苦醋に磨つて(三)傅ければ多く

斷定ハ出來難ク、且のびるが果シテ支那ニ在ルカ、別ニ其證ハナイカラ其邊頗ル不明デアル。
白井曰ク、前條蒜及此條時珍ノ說明ヲ見ルニ、蒜ハ山蒜卽蒚及澤蒜ヲ人家ニ移植シタモノトイフ事ニナツテ居ル故、此條ハ蒜ノ原種ト見ルガ妥當ノ樣ニ思ハル。
(二)京口ハ今ノ江蘇省丹徒縣治ナリ。
(三)傅、大觀ニ服ニ作ル。

效がある」(蘇頌)【澤蒜、石蒜、いづれも溫補し、氣を下し、水の源を滑する】(藏器)

葫（一）（別錄下品）

和名　にんにく
學名　Allium Scorodprasum, L. var. viviparum, Makino.
科名　ゆり科(百合科)

「釋名」大蒜(弘景)　葷菜　弘景曰く、今は一般に葫を大蒜といひ、蒜を小蒜といふ。その氣が類して相似たるものだからだ。時珍曰く、按ずるに、孫愐の唐韻に『張騫が西域に使したとき、始めて大蒜、葫荽を持つて來た』とあるところから見ると、小蒜は中國に舊からあつたものだが、大蒜は胡地に產したものだから胡なる名で呼ばれたのだ。この二種の蒜はいづれも五葷に屬するものだから通じて葷と稱して差閊ない。蒜の條に詳記してある。

「集解」別錄に曰く、蒜は大蒜である。五月五日に獨子のものを採つて藥に入れるが尤も佳し。

保昇曰く、葫は、（二）梁州に產するものは大徑二寸ほどあつて最も美く、少し辛い。（三）涇陽のものは皮が赤くして甚だ辣い。

（一）牧野云フ、にんにくハ昔ノおほびるデ、今日我邦デ普ネク栽エラレテヰルモノデアル、然シ昔支那カラ渡シタモノデ固ヨリ我邦ニハ野生ハナイ。

（二）梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

（三）涇陽ノ地名ニアリ。一ハ昔ノ縣、今尙ホソノ縣名ヲ稱シ、陝西省關中道ニ屬ス。一ハ漢縣、故城ハ今ノ甘肅省平涼縣ニ在リ。

頌曰く、現に處處で畑に種ゑる。一顆每に六七瓣あつて、初めに一瓣を種ゑ、それがその年の内に獨子葫となり、翌年にはその本に復する。その花は中に實があつて、やはり葫の瓣の形狀をなしてゐて極めて小さい。これもやはり種ゑ得る。

時珍曰く、大、小の二蒜はいづれも八月に種ゑ、春は苗を食ひ、夏の初には薹を食ひ、五月には根を食ひ、秋期に種を收穫する。北方の地では一日も缺くべからざるものとなつてゐる。

(四)氣味　【辛し、溫にして毒あり。久しく食すれば人の目を損ずる】弘景曰く、性最も熏臭で食へないものだ。俗間では一般にこれで作つた韲で鱠肉を食ふが、性を損じ、命を伐ふことこれより甚しきはない。ただ生で食ふもので、煮るべきものではない。

恭曰く、この物で煮た羹、臛は饌中の俊とされてある。しかるに陶氏は『煮るべきものでない』といつたが、これは陶氏にその經驗がなかつたからだらう。

藏器曰く、初めて食つたときは目に利あらぬものだが、多く食へば却て明になる。久しく食へば人の血を淸からしめ、毛髮を白からしめる。

(四)木村(康)曰ク、にんにくノ(成分)ハ種種ノ燐、硫黄或ハ窒素ヲ含ム有機酸、窒素及硫黄ヲ含ム鹽基及「イヌリン」ヲ含有ス。杉原氏ハ其鱗莖ヨリ一種ノ醗糖體ヲ分離シ、之ヲ「クルコミナルー」ト命名セリ、本物質ハ酸又ハ「ミロジン」ノ加水分解ニヨリ、硫黄ヲ含有スル精油ヲ分離ス。小湊氏ニヨレバ、此精油ハ大蒜特有ノ臭氣ヲ有シ、恐ラクせいやうにんにくニ於ケル「ヂアリルスルフイド」ニ類スル物質ナルベシト。加來氏ニヨレバ、朝鮮產大蒜(にんにく)ハ之ヲ水蒸氣蒸溜スルニ約〇・一九五(%)ノ精油ヲ得。本油ハ大蒜特有ノ臭

氣ヲ有シ、ソノ主成分ヲナス硫化物ハ$C_6H_{11}S_2$、$C_6H_{10}S_3$ヲ主トシ、せいやうにんにくト大差ナク、タダSemmlerノ見出セル○○○○ハ見出サズ。又○○○○ノ少量ト、一種ノ光澤アル斜狀長板狀ノ有機酸(融點攝氏七六・五―七七度、分子量三五二・五)ノ少量ヲ得タリ。ソノ他「アルギニン」、「イイチン」等ヲ含有ス。

(藥理)杉原氏ノ實驗ニヨレバ、家兎ノ體重一瓩ニ付〇・六瓦ノ「グリコミナール」ヲ與フルトキハ血壓急激ニ下降シ、遂ニ呼吸運動停止シテ死ニ至ル。

(藥用)藥用及ビ食用ニ供スルにんにくハ、鱗莖ヲ採掘シ乾

○時珍曰く、久しく食へば肝を傷り、眼を損ずる。故に嵇康の養生論に『葷辛は目を害ふ』といつて、この物を甚しとしてあり、現に北方人は蒜を嗜んで宿炕――オンドルに寢ることとなり――するところから盲瞽者が最も多い。陳氏が『多く食へば目を明にする』といつたのは別錄と相異する。その理由が判らない。

○震亨曰く、大蒜は火に屬し、性は熱であつて喜く散じ、膈を快くし、善く肉を消化する。著期には一般に多く食ふ。しかし氣を傷るの禍は久しくして自ら現れるものだ。養生家はこれを忌む。肉を消化する功力も取立ていふほどのことはない。

○頌曰く、多食すれば肺を傷め、脾を傷め、肝、膽を傷め、痰を生じ、火を助け、神を昏くする。

○思邈曰く、四月、八月に葫を食へば神を傷め、人をして喘悸せしめ、味覺が錯爽する。多く生葫を食つて房事を行へば肝氣を傷り、顏に色が無くなる。生葫と青魚鮓とを食合せれば腹内に瘡が生じ、腸中が腫れ、また疝瘕となり、黄疾を發する。蜜と食合せれば人を殺す。凡そ一切の補藥を服するにはこれを食つてはならぬ。

主治 【五臟に歸し、癰腫、䘌瘡を散じ、風の邪を除き、毒氣を殺す】(別錄)

燥シタルモノニシテ鎮静藥トス。阿魏ノ如ク惡臭ニヨリ反射的ニ神經ニ作用スルナラン、腸内寄生蟲驅除ニ效アリ、中條、黒田兩氏ハ酒精越幾斯ヲ十二指腸蟲驅除ニ用キテ效果ヲ認メタリ。(用量一回一〇瓦)硫黄含有スル精油ハ細菌ニ對シ強キ殺菌性ヲ有シ、ソノ〇・五%水溶液ハ「チプス」菌ヲ五分間ニ死滅セシム。又にんにくノ搾リ汁ヲ「プイヨン」培養基中ニ三%ノ割合ニ混ジタル場合ニハ、各種ノ菌ニ對シ殆ンド完全ニ發育ヲ制止セリト云フ。其他本精油ノ殺菌作用ニツイテ、馬場、長濱、江口、志田氏等ノ研究アリ。新藥「アールス」(東

【氣を下し、穀物を消化し、(五)肉を化す】(蘇恭)【水惡痒氣を去り、風濕を除き、冷氣を破り、痃癖を爛し、邪惡を伏して宣通、溫補し、瘡癬を療じ、鬼を殺し、痛を去る】(藏器)【脾胃を健にし、腎氣を治し、霍亂轉筋の腹痛を止め、邪祟を除き、溫疫を解し、勞瘧冷風を療じ、風損冷痛、惡瘡、蛇蟲蠱毒、溪毒、沙蝨に傅けいづれも擣いて貼る。熱醋に浸して年を經たものが良し】(日華)【溫水で擣爛して服すれば中暑の醒めぬを治す。擣いて足心に貼れば鼻衄の止まぬを止める。豆豉に和して丸にして服すれば暴下血を治し、水道を通ずる】(宗奭)【擣汁を飲めば吐血心痛を治す。煮汁を飲めば角弓反張を治す。鯽魚と共に丸にすれば膈氣を治す。蛤粉と共に丸にすれば水腫を治す。黄丹と共に丸にすれば痢瘧、孕痢を治す。乳香と共に丸にすれば腹痛を治す。擣いて膏にして臍に敷けば、能く下焦に達して水を消し、大、小便を利し、足心に貼れば能く熱を引いて下行し、泄瀉、暴痢、及び乾、濕霍亂を治し、衄血を止め、肛中に納れば能く幽門を通じて關格不通を治す】(時珍)

發明

宗奭曰く、葫は氣が極めて葷するが、臭肉中に置けば反つて能く臭を掩ふ。凡そ暑毒に中つた場合は、二三瓣を嚼み爛して溫水で送下する。咽を下れば

京日進學社）ハ本生藥ノ製劑ニシテ、一般結核性患者ニ效アリト云フ。

（五）大觀ニ化肉ヲ瘴ニ作ル。

（六）餲腊ノ毒ハ腐敗ノ乾物。

反應があるものだ。但し冷水を飲むことを禁ずる。又、鼻衄の止まぬには、擣いて足心に貼り、衄が止んだときは直ちに拭ひ去る。

時珍曰く、葫蒜は太陰、陽明に入り、その氣は薫烈にして能く五臟に通じ、諸竅に達し、寒濕を去り、邪惡を辟け、癰腫を消し、癥積、肉食を化する。これがその功である。故に王禎はこれを稱揚して『味久しく變ぜず、以て生を資くべく、以て遠く致すべく、臭腐を化して神奇となし、鼎俎を調へるに醯、醬に代へ、これを旅塗に携へるときは炎風、瘴雨も加ふる能はず、（六）餲腊の毒を食へども害する能ず、夏月にこれを食へば暑氣を解す。北方にては肉麪を食ふに尤も無かるべからず。乃ち食經の上品、日用の多助なるものなり』といつてある。蓋しその辛は能く氣を散じ、熱は能く火を助け、肺を傷め、目を損じ、神を昏し、性を伐ふの害あることを知らぬので、いつとはなく知らず知らずの間にその禍を受けながら、しかもそれとは悟らぬのである。嘗てある婦人が、一晝夜衄血が止まず、さまざまの治療も奏效しなかつたとき、余（時珍）が蒜を足心に傅けさせると卽時に血が止まつた。眞に奇方である。又、葉石林の避暑錄に『一人の下男が暑期に馬を驅つてゐて、突然地に仆れて

絶命せんとしたとき、同寮の王相が教へて、大蒜、及び道路上の熱土各一握を研り爛し、新汲水一錢で和して汁を取り、齒を決いて灌ぎ込ませると、少頃して甦つた。それが世間に傳はつて、徐州の市中にはいつしかこの方を書いて版行するものもあり、これを用ゐたものはいづれも神仙救人の方だといつてゐた』とある。

藏器曰く、昔、ある痃癖の患者が、夢にある人から毎日大蒜三顆を食へと教へられて、それを服して見ると初には瞑眩し、吐逆し、下部が火のやうに覺えるのであつたが、後にある人から、それは數片を取つて皮を合せて兩頭に截つて呑むのであつて、內灸と名けるものだと教へられて、果して大效を得た。

頌曰く、經に『葫は癰腫を散ず』とあるが、按ずるに、李絳兵部手集方には『毒瘡、腫毒で號叫して就眠し得ず、病の何なるかを判別しかねるには、獨頭蒜二顆を取つて擣き爛らし、麻油で和して厚く瘡上に傅け、乾けば易へる。屢〻用ゐて人を救つた。必ず神效のあるものだ。盧坦侍郎は肩上に瘡が生じ、心に連つて痛悶したが、これを用ゐて直ちに瘥えた。又、李僕射は腦癰を患つて久しく瘥えなかつたが、盧侍郎がこの方を與へてやはり瘥えた』とある。又、葛洪の肘後方には『凡そ

（七）大觀ニ應チ立ニ作ル。
（八）江寧府ハ草部山草類白鮮ノ註ヲ見ヨ。

背腫には、獨顆蒜を取つて横に厚さ一分に截り、それを腫の頭上に置き、炷艾を梧子大ほどでその蒜の上から百壯灸する。いつとはなく漸次に消する。多く灸するほど善し。灸するには太しく熱せしめてはならぬ。痛を覺える場合にはその蒜を取り起し、蒜が焦げたときは別の新しいものと換へる。皮、肉を損じてはならぬ。余（洪）は嘗て小腹下に一大腫が生じて苦んだが、その灸でやはり瘥えた。數〻これを他人に施して（七）應效せぬといふことはなかつた』とある。又、（八）江寧府の紫極宮には石にそのことを刻記して『但是れ發背、及び癰疽、惡瘡、腫核の初起に異あるには、皆之を灸す可し。壯數を計らず、惟だ痛む者は灸して痛まざるに至り、痛まざる者は灸して痛むに至り、極つて止むを要す。疣贅の類はこれを灸すれば亦便ち痂と成つて自ら脫す。其の效神の如し。乃ち知る方書は空言無き者なることを。但だ人意を以て詳審すること能はず、則ち盡く應ずるを得ざるのみ』とある。

時珍曰く、按ずるに、李迅は蒜錢灸法を論じて『癰疽の發したときは、灸するが藥を用ゐるに勝る。熱毒の中鬲に縁つて上下通せぬものは、必ず毒氣が發洩するを得て、然る後に解し散ずるものだ。凡そ發病の初期一日以内ならば、大獨頭蒜を小

錢ほどの厚さに切つて項上に貼り、三壯灸して一回易へ、大抵百壯を標準とする。一には瘡をして開大せざらしめ、二には內肉をして壞れざらしめ、三には瘡口を合し易からしめ、一擧にして三樣の效果を得る。但し頭、及び項以上に發した瘡の場合には絕對にこの灸を用ゐてはならぬ。氣を上に引いて更に大なる禍を惹き起す虞がある』といひ、又、史源は蒜灸の功を記して『予の母が背の髀の部位に當つて痒を覺え、半寸ばかりの赤暈が生じ、黍ほどの白粒が生じたとき、灸を二十一壯するとその赤が隨つて消えたが、二晚經つと長さ二寸ばかりの赤が流下した。すると家族の者はみな灸が惡かつたのだといひ、外科醫がそれを膏藥で貼護すると、一日に一暈を增し、二十二日にして橫斜に約六七寸になり、堪へ難く痛楚するのであつた。たまたまある人の話に、この病のとき灸で癒えたといふことをある尼が聞いたので、予は早速その尼を訪ふて訊ねると、尼のいふには、當時病が劇しかつたので何事も覺えがないが、ただ范奉議坐守が八百餘壯灸してくれたので甦つたので、その使つた艾が篩に一箇ほどあつたとだけ聞いてゐるといふのであつた。そこで予は直ぐに取つて返し、一炷の艾を銀杏大にして十數壯灸して見ると、一向に痛みを覺

えなかつたが、四旁に灸すると赤い部分がみな痛んで、一壯毎に火が燼きるに隨つて赤が縮入し、三十餘壯にして赤暈が全部收退した。蓋し灸が遲れたために、初發の部分の肉が已に壞れたから痛まなかつたので、灸が好肉の部分に當つた時だけ痛んだのであつた。ところが夜に入つて背の全部が焮熱し、瘡が山のやうに高くなつて熱したが、その夜は安眠し、明方に見ると一箇の甌を覆せたやうに高さ三四寸になり、上に百餘の小竅が出來て色が正黑になり、手當をするとそれで安かになつた。蓋し山のやうに高くなつたのは毒が外に出たため、多數の小竅は毒が聚らぬため、色の正黑なるは皮、肉が壞れたためであつて、艾火で毒を壞肉の裏から出さなかつたならば、五臟に內迫して危險に陷つたことと思はれる。凡庸醫師の傅貼藥で涼冷にし消散するといふやうな說はいかで信ぜられようぞ』とある。

【附方】 舊十六、新三十一。【背瘡の灸法】凡そ背上に腫硬、疼痛を覺えたならば、濕紙を貼つて瘡の頭の部分を確め、大蒜十顆、淡豉半合、乳香一錢を細研し、瘡頭の大小に隨ひ、竹片を用ゐて圓く圍ふて藥を內に二分厚さに定塡し、その上に艾を著けて灸する。痛むものは灸すれば痒くなり、痒きものは灸すれば痛くなる。百壯

を標準とする。功力は蒜錢灸法と同じ。(外科精要)　【疔腫惡毒】門臼灰一撮を細かに篩ひ、獨蒜、或は新蒜薹にその灰をつけて瘡口を擦り、瘡から自然に少し汗が出るを候つて再び擦る。少頃して消散する。發背癰腫でもやはりこれを擦るがよし。【五色丹毒】一定の色なきもの、及び足踝に發したものには、蒜を擣いて厚く傅け、乾けば易へる。(肘後方)【關格脹滿】大、小便不通なるには、獨頭蒜を燒き(九)熟して皮を去り、綿に裹んで下部に納れる。氣が立ろに通ずる。(外臺祕要)【乾濕霍亂】轉筋。大蒜を擣いて足心に塗れば立ろに癒える。(永類鈐方)【水氣腫滿】大蒜、田螺、車前子等分を熬つて膏にし、臍中に攤貼する。水は排尿と共に下つて數日にして癒える。象山の人民が水腫を患つたとき、ある卜者からこれを用ゐることを傳受されて效があつた。(仇遠稗史)【山嵐瘴氣】生、熟の大蒜各七片を共に食ふ。少頃して腹が鳴り、或は吐血し、或は大便を泄して癒える。(攝生妙用方)【瘧疾寒熱】肘後では、獨頭蒜を炭上で燒き、方寸匕を酒で服す。○簡便では、桃仁半片を内關穴上に置き、獨蒜を擣き爛らして罨ふて縛住すれば止まる。男は左、女は右。隣家の嫗はこれで他人に治療を施して屢〻效を擧げた。○普濟方では、端午の日に取つた獨頭蒜を煨熟し、

(九)大觀ニ熱ニ作ル。

礬紅等分を入れ、擣いて芡子大の丸にし、一丸づつを嚼んで白湯で飲下す。【寒瘧冷痢】端午の日の獨頭蒜十箇、黄丹二錢を擣いて梧子大の丸にし、九丸づつを長流水で服するが甚だ妙である。(普濟方)【泄瀉暴痢】大蒜を擣いて兩足心に貼る。また臍中に貼るもよし。(千金方)【下痢禁口】及び小兒の泄痢には、方はいづれも上に同じ。【腸毒下血】蒜連丸――獨蒜を煨いて擣き、黄連末を和して丸にし、日毎に米湯で服す。(濟生方)【暴下血病】葫蒜五七箇を皮を去つて膏に研り、豆豉を入れて擣いて梧子大の丸にし、五六十丸づつを米飮で服す。癒えぬものなし。(寇宗奭本草衍義)【鼻血の止まぬもの】藥を服しても反應なきには、蒜一箇を皮を去つて泥のやうに研り、錢ほどの大いさ、豆一粒ほどの厚さの餅子にし、左鼻の出血には左足心に、右鼻の出血には右足心に貼り、兩鼻倶に出血するには倶に貼る。立ろに瘥える。(簡要濟衆方)【血逆心痛】生蒜の擣汁(一〇)二升を服すれば癒える。(一一)(肘後)【鬼疰腹痛】忍び難きには、獨頭蒜一箇と香墨を棗の大いさほどとを擣き、醬汁一合を和して頓服する(永類鈐方)【心腹冷痛】法醋に二三年浸した蒜を數顆まで食ふ。その效神の如きものだ。(李時珍瀕湖集簡方)【夜啼腹痛】顏色青きは冷證である。大蒜一箇を煨き研

(一〇)大觀ニ一ニ作ル。
(一一)大觀ニ千金ニ作ル。

つて日光で乾し、乳香五分と擣いて芥子大の丸にし、七丸づつを乳汁で服す。(危氏得效方)【寒濕氣痛】端午の日に收取した獨蒜を蜃粉と共に擣いて塗る。(唐瑤經驗方)【鬼毒風氣】獨頭蒜一箇に雄黄、杏仁を和して研つて丸にし、空腹に三丸を飲下して靜坐する。少時して毛を下出して安らぐものだ。(孟詵食療本草)【狗咽氣塞】喘息して通ぜず、須臾に絶せんとするには、獨頭蒜二箇を兩頭を削り去り、左患には右鼻を塞ぎ、右患には左鼻を塞ぎ、口中に膿血の出るを候つ。立ろに效がある。(聖惠)【喉痺腫痛】大蒜で耳、鼻中を塞ぎ、一日に二囘易へる。(肘後方)【魚骨硬咽】獨頭蒜で鼻中を塞げば自ら出る。(十便良方)【牙齒の疼痛】獨頭蒜を煨熟して切り、痛處を轉易しつつ熨す。また蟲痛にも主效がある。(外臺祕要)【眉毛動搖】目が交睫し得ず、喚べども應へず、ただ飲食だけ十分なるものには、蒜三兩を杵き、その汁を酒で調へて飲めば癒える。(夏子益奇疾方)【腦瀉鼻淵】大蒜を切片して足心に貼り、效を取つて止める。(摘玄方)【頭風の苦痛】易簡方では、大蒜の研汁を鼻中に嗃ふ。○聖濟錄では、大蒜七箇を皮を去り、先づ地を紅く燒いて、蒜を一箇づつその地上で磨つて膏子にし、殭蠶一兩を頭、足を去つてその蒜上に置き、一夜碗で覆ふて氣の透らぬやうに

し、ただその蠶を取つて研末し、それを鼻中に嗃入して口中に水を含む。甚だ效がある。【小兒の驚風】總錄。方は上に同じ。【小兒の臍風】獨頭蒜を切片して臍上に置き、艾で灸する。口中に蒜の臭氣が出て止まる。（黎居士簡易方）【小兒の氣淋】宋の寧宗皇帝がまだ郡王であつた時淋を病み、晝夜に凡そ三百回ほど厠に起ち、宮廷の御用醫は手當に窮し、ある者の推擧に依つて孫琳に治療を命ぜられた。琳は大蒜、淡豆豉、蒸餅の三物を擣いて丸にし、溫水で三十丸を進めて『今日中に三服を進めれば病は三分の一を減じ、明日も同樣で三日で病は除ける』といつた。果してその通であつたので、報酬として千緡を賜つた。ある人がその說を問ふと、琳は『小兒に何の理由で淋があらう。ただそれは水道が利せぬだけだ。三物はいづれも能く通利するものだから奏效したのだ』といつた。（愛竹翁談藪）【產後の中風】角弓反張し、言語を發せぬには、大蒜三十瓣を水三升で一升に煮取り、それを灌げば甦る。（張傑子母秘錄）【金瘡中風】角弓反張するには、蒜一升を心を去り、無灰酒四升で極端に煮爛し、滓を幷せて服す。須臾にして汗が出て瘥える。（外臺秘要）【婦人の陰腫】痒きには、蒜湯で洗ひ、效が現はれたならば止める。（永類鈐方）【陰汗で痒きも

の】大蒜、淡豉を擣いて梧子大の丸にし、硃砂を衣にかけ、空腹にして三十丸づつを燈心湯で服す。【小便淋瀝】或は尿があり、或は尿なきには、大蒜一箇を紙に包んで煨熟し、一夜露し、空心に新水で送下する。(朱氏集驗方)【小兒の白禿】ぽつぽつと圓くなるには、蒜を切つて日毎に揩る。(秘錄)【閉口椒毒】氣閉して絕せんとするには、蒜を煮て食ふ。(張仲景方)【射工溪毒】獨頭蒜を三分厚さに切つて上に貼り、上に灸して蒜氣を射入せしむれば瘥える。(梅師方)【蜈、蝎の螫傷】獨頭蒜で摩れば止む。(梅師)【蛇、虺の螫傷】孟詵曰く、卽時に蒜を嚼んで封じて六七囘易へ、かくて蒜一升を皮を去つて乳二升で煮熟し、空心に頓服し、翌日また進め、外部には皮を去つた蒜一升を細に擣いて小便一升で煮て三四沸し、それで損處を浸す。○梅師では、獨頭蒜、酸草を擣き、絞つて咬まれた患部に傅ける。【脚肚の轉筋】大蒜を足心に擦つて熱せしめれば平安になる。かくて冷水で一瓣を食ふ。(攝生方)【蟹を食つた中毒】乾蒜の煮汁を飲む。(集驗方)【蛇瘕で顏面の光るもの】火で灸くやうに發熱するには、蒜汁一盌を飲む。蛇のやうな狀態のものを吐出して平安になる。(危氏方)

五辛菜（拾遺）

和名　ごしんさい
洋名　Five pungent vegetables.

〔集解〕 時珍曰く、五辛菜とは、元旦、立春の日に葱、蒜、韮、蓼、蒿芥の辛嫩なる菜を雜和して食ふもののことで、迎新の意味を取つたものだ。これを五辛盤といふ。杜甫の詩に所謂『春日春盤細生菜』とあるそのものだ。

〔氣味〕 【辛し、溫にして毒なし】時珍曰く、熱病後に食へば多くは日を損ずる。

〔主治〕 【元日の朝これを食へば五臟の氣を助發する。常食すれば中を溫め、惡氣を去り、食物を消化し、氣を下す】（藏器）

(一)蕓薹（唐本草）

和名　うんだいあぶらな（新稱）
學名　Brassica sp.
科名　十字科

〔釋名〕 寒菜（胡居士方） 胡菜（同上） 薹菜（埤雅） 薹芥（沛志） 油菜（綱目）

時珍曰く、この菜は薹が起ち易く、その薹を採つて食ふもので、採れば必ず多く枝が分れるところから蕓薹と名けたので、淮地方ではこれを薹芥と謂ふ。卽ち今の油

(一)牧野云フ、本品ハ我邦デ從來カラ作ツテヰルあぶらな卽チなたねなトハ全ク別ノモノデアル、此レト混雜スルノデ今うんだいあぶらなノ新和名ヲ下シタ。

菜であつて、その子から油を搾れる。羌隴、氐胡ではその土地が甚だ寒いが、冬期に多くこの菜を種ゑて能く霜雪を經凌ぐ。その種は胡地から來たものだ。故に服虔の通俗文にはこれを胡菜といひ、胡洽居士の百病方には寒菜といつてある。いづれも右の意味を取つたものだ。或は、塞外に(三)雲臺戍といふ地名があつて、この菜は始めその地から種が來たのでそれでかく名けたのだといふが、やはりそれでも通じる。

〔蕓薹〕

【集解】恭曰く、別錄に『蕓薹とは一般人の噉ふ菜のことだ』とある。

宗奭曰く、蕓薹は甚だ香しくはない。冬を經て根が枯死せぬ。蠹を辟けるものだ。諸菜中ではやはり甚だ佳いものではない。

時珍曰く、蕓薹は方藥に多く用ゐてあるが、諸家の註にも明な記載がなく、現に

(三)雲臺戍、未詳。

（三）大觀ニ痛ニ作ル。

一般人も何の菜を指すかを識るものがないが、予（時珍）の調査考究したところでは今の油菜そのものだ。九月、十月に種を下し、生える葉は形も色も微に白菜に似たもので、冬、春に薹の心を採つて茹にする。三月には老いて食へなくなり、黄色で小さい四瓣の芥花のやうな花を開き、莢を結ぶ。その子を取收めるのだが、やはり芥子のやうで灰赤色だ。炒つて油を搾る。その油は黄色で、燈火に點けると甚だ明だが、食つては麻油に及ばない。近來は一般にその油が有利なところから、栽培も廣く行はれてゐる。

莖葉　［氣　味］　【辛し、溫にして毒なし】大明曰く、涼なり。別錄に曰く、春期にこれを食へば能く膝の痼疾を發する。詵曰く、先に腰脚を患つたものは多く食つてはならぬ。これを食へばますます劇しくなる。又、陽氣を損じ、瘡を發する。また口齒の（三）病あるもの、胡臭の人は食つてはならぬ。又、能く腹中の諸蟲を生ずる。道家では特にこれを忌んで五葷の一としてある。

［主　治］　【風遊丹腫、乳癰】（唐本草）【癥瘕結血を破る】（開寶）【產後の血風、及び瘀血を治す】（日華）【煮て食へば腰脚痺を治す。葉を擣いて婦人の吹奶に傅ける】（蘇

器）［瘭疽、豌豆瘡を治し、血を散じ、腫を消し、蓬砂を伏す］（時珍）

〔發　明〕藏器曰く、蕓薹は血を破る。故に產婦は食ふがよし。

馬志曰く、現に俗間の方に、病人も蕓薹は喫へるといつてある。それは血病に宜いのだ。

思邈曰く、貞觀七年三月、予は（一）內江縣にゐて、酒を飲む機會が多かつたが、夜に入つて四體、骨肉が疼痛し、明方には頭痛して額角に彈丸ほどの赤腫が生じて痛み、正午頃には全體が腫れて目が開けなくなり、日を經るに隨つて殆んど危險な狀態に陷つた。その時予は、本草に『蕓薹は風遊丹腫を治す』とあるに氣がついて、葉を取つて擣いて傅けると、手に隨つて消さ、その效驗神の如くであつた。また擣汁を服してもよし。

〔附　方〕新八。［赤火丹毒］方は前項を見よ。［天火熱瘡］初期は痱に似て漸次に水泡のやうになり、火燒瘡に似て赤色のものは、急速に能く人を殺す。蕓薹葉の擣汁で大黃、芒消、生鐵衣等分を調へて塗る。（近效方）［風熱腫毒］蕓薹の苗、葉、根、蔓菁根各三兩を末にし、雞子淸で和して貼る。直ちに消く。蔓菁がなければ

（四）內江縣、北周ニ中江縣ヲ置キ、隋ニ內江縣ニ改ム。今ノ四川省內江縣ノ西二支里ニ故城在リ。

（五）木村（康）曰ク、本邦產あぶらな種子ノ成分ハ「フイトステリン」、「フイチン」或ハ含硫黃含有成分ヲ含ム、ソノ組成分（%）ハ水分三—一〇、脂肪三三—四三、含窒素物一八・二—二一・三、無窒素物並ニ粗纖維三六—一五

商陸根（しやうりくこん）を代用する。甚だ有效だ。（近效方）【手、足の瘭疽】この疽はよく手、足、肩、背に生じ、纍纍（るゐるゐ）とした赤豆のやうで、剝げば汁が出る。蕓薹葉の煮汁一升を服し、幷に乾熟菜を數頓食ひ、鹽、醬を少し與へる。冬期には子を用ゐ、研つて水で服す。（千金方）【癰に似た異狀な疽】癰のやうで小さく、異狀のもので、小豆汁のやうな膿を出し、今日出し去れば明日滿つるものである。蕓薹を擣き熟して布袋に盛り、熱灰中で煨熟（わいじゆく）して更互に熨す。二三回以內でよし。葉のないときは乾いたものを用ゐる。（千金）【豌豆斑瘡】蕓薹葉を湯に煎じて洗ふ。（外臺祕要）【血痢腹痛】晝夜止まぬには、蕓薹葉の擣汁（たうじふ）二合に蜜一合を入れて溫服する。（聖惠方）【腸風下血】上に同じ。

子（五）

氣味 【辛し、溫にして毒なし】

主治 【夢（む）中泄精（ちうせつせい）、鬼と交接するもの】（思邈）【油を取つて頭に傅ければ髮を長く黑くする】（藏器）【帶血を行（や）り、冷氣を破り、腫を消し、結を散じ、難產、產後の心腹諸疾、赤丹熱腫、金瘡、血痔を治す】（時珍）

發明 時珍曰く、蕓薹菜は子と葉と同功であつて、その味は辛、氣は溫で、能く溫め能く散ずる。その功用は血滯を行り、結氣を破るに特長があるところから、

四、灰分三・五—五、內無水燐酸四六%、葉ハ枸櫞酸及ビ「メコン」酸、「チトペクタン」、「チトペクチン」酸、「アミラーゼ」ノ發酵素原體ヲ有ス而シテソノ灰分一瓩中鐵八・三瓱ヲ存ス。あぶらなノ組成(%)ハ食用植物誌ニヨレバ水分九五・二八、蛋白質二・一五、脂肪〇・一六、無窒素物〇・二一、木纖維一・一六、灰分一・〇七。

古方では腫を消し、結を散じ、産後一切の心腹氣血痛、諸種の遊風丹毒、熱腫、瘡痔を治する諸藥にみなこれを用ゐてある。經水が行つて後に四物湯にこれを加へて服すれば、能く産を斷つといふ。又、小兒の驚風を治す。兒の頂顖に貼れば氣を引いて上に出るのである。婦人方の産難を治する歌に『黄金花の結ぶ粟米の實、細研して酒で下す十五粒、靈丹の效妙神の如し、難産の時能く急を救ふ』とある。

【附方】　新十二。【蕓薹散】産後惡露が下らずして、血結衝心し、刺痛を伴ひ、冒寒し、冷えた處を踏めばその血が必ず心腹の間に往來し、忍び難く刺痛するを治す。これを血母といふ。幷に産後心腹の諸疾を治す。産後三日間は缺くべからざるものである。蕓薹子を炒り、當歸、桂心、赤芍藥と等分を用ゐ、二錢づつを酒で服す。惡物を趕ひ下す。(楊氏產乳)【産後の血運】蕓薹子、生地黃等分を末にし、三錢づつを薑七片、酒、水各半盞、童尿半盞で七分に煎じて溫服すれば甦る。(溫隱居海上方)【血を補し、氣を破る】追氣丸——婦人の血刺、腹痛の忍び難きものを治す。やはり常服するがよし。血虛を補し、氣塊を破り、甚だ效がある。蕓薹子を微し炒り、桂心と各一兩、高良薑半兩と末にし、醋糊で梧子大の丸にし、五丸づつを淡醋湯で

服す。（沈存中靈苑方）【腸風臟毒】下血するには、蕓薹子を生で用ゐ、甘草を炙き、末にして二錢づつを水で煎じて服す。（普濟方）【頭風の痛むもの】蕓薹子一分、大黃三分を末にして鼻に嗃ふ。【風熱牙痛】蕓薹子、白芥子、角茴香等分を末にし、左の痛には右鼻に、右には左鼻に嗃ふ。（聖惠）【小兒の天釣】蕓薹子、生烏頭を皮、尖を去り、各二錢を末にし、一錢づつを水で調へて頂上に塗る。これを塗頂散と名ける。（聖濟總錄）【風瘡の癒えぬもの】陳い菜子油と穿山甲末とを共に熬つて膏にし、それを塗れば直ちに癒える。（攝生衆妙方）【熱癤腫毒】蕓薹子、狗頭骨等分を末にし、醋で和して傅ける。（千金方）【傷損の接骨】蕓薹子一兩、小黃米を炒つて二合、龍骨少量を末にし、醋で調へて膏にし、紙上に攤して貼る。（乾坤祕韞）【湯火傷灼】菜子油で蚯蚓屎を調へて搽る。（楊起簡便單方）【蜈蚣の螫傷】菜子油を地上に傾け注いで擦り、その地上の油を摻るが好し。（六）四眼の人に見られてはならぬ。（陸氏積德堂方）

（一）菘　（別錄上品）

和名　たうな、はくさい
學名　Brassica pekinensis, Rupr.
科名　十字科

（六）四眼ノ人ハ方相氏ナ云フ、疫病ヲ逐フ神、又葬禮ニ與カル神。

（一）牧野云フ、たうなハ唐菜ノ意デ昔支那カラ始メテ入ツテ栽培ガ普及シタ時ニ

下シタ和名デアル、又しろな、いんげんなノ名モアル、今日我邦ニ入リテ廣ク栽培シテヰルモノハはくさい(白菜)デ、普通其葉包擁シ大ナル球ヲナスノデ、之レヲ結球白菜ト呼バレテヰル、是レハ人工デ園藝的ニ改良シタモノデアル。

(一) 揚州ハ草部蔓草類通草ノ註ヲ見ヨ。

(二) 燕趙ハ今ノ河北、山西兩省地方。

釋名　**白菜**　時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『菘は性冬を凌いで晩く凋み、四時常に見え、松の操がある。故に菘といつたのだ』とある。現に俗間ではこれを白菜といふ。その色が青白だ。

集解　弘景曰く、菘に數種あるが、やはりこれは一類のもので、ただその美なると美ならざるとに因つて品さだめしただけだ。菜類中で最も常食とされるものだ。

宗奭曰く、菘は、葉が蕪菁のやうで綠色がやや淡く、その味は微し苦く、葉が嫩くしてやや潤い。

頌曰く、(一)揚州の一種の菘は、葉が圓くして大きく、或は箑のやうで、啖つても滓がなく、他の土地のものよりも遙に勝れてゐる。牛肚菘ではないかと思ふ。

時珍曰く、菘とは現に一般に白菜と呼ぶそのもので、二種ある。一種は莖が圓く厚くして微し青く、一種は莖が扁く薄くして白い。その葉はいづれも淡青白色だ。(二)燕趙、遼陽、揚州で栽培するものは最も肥大で厚く、一本の重量十餘斤のものがある。南方で栽培する菘は畦の内で冬を過ごすが、北方で栽培するものは多くは窖

（四）燕京ハ北京。

に入れる。（四）燕京の農家ではまた馬糞を窖中に入れて風や日光に當らぬやうに壅ふて培ふが、成長して出る苗、葉はみな嫩黄色になり、脆く美味で滓がない。これは

〔白　菘〕

黄芽菜と呼んで貴族、富豪が珍重する食品だ。蓋しこれも韮黄を作る方法に倣つたものである。菘の子は蕓薹の子のやうで灰黒色だ。八月以後にこれを種ゑ、二月に芥花のやうな四瓣の黄花を開き、三月にやはり芥のやうな角を結ぶ。この菜は葅にして食ふが就中良く、蒸し、晒すには適しないものだ。

〔正　誤〕恭曰く、菘には三種あつて、牛肚菘といふは葉が最も大きく厚くして味が甘い。紫菘といふは葉が薄く細くして味が少し苦い。白菘といふは蔓菁に似たものだ。菘菜は北方の地には生じない。ある人が子を持つて往つて北方で種ゑた

が、初一年には半は蕪菁になり、二年目には菘の種は全然絶えて了つた。蕪菁を南方へ持つて來て種ゑても全然變つて了ふ。かやうに土地そのものに適不適がある。

頌曰く、菘は南、北いづれにもある。蔓菁と相類するもので、梗が長く、葉の光らないものを蕪菁といひ、梗が短く、葉が濶く厚くして肥腴なるものを菘といふ。舊說に、北方の地には菘がないといふが、現に(五)京洛で種ゑてゐる菘は全然南方で種ゑるものに類し、ただ肥厚な點がやや及ばないだけである。

機曰く、蔓菁と菘菜とは恐らく一種のもので、ただ南方の地のものは葉が高くして大きく、菘といひ、秋、冬にもある。北方の地のものは葉が短くして小さく、蔓菁といひ、春、夏にある。

時珍曰く、白菘とは白菜のこと、牛肚菘とは最も肥大なもののこと、紫菘とは蘆菔のことで、紫色の花が開くから紫菘といつたのだ。蘇恭が、白菘は蔓菁に似たものだといつたのは誤で、根も葉も同じくない、白菘は根が堅く小さくして食へないものだ。又、南、北で變種するといつてゐるが、蓋し蔓菁と紫菘とを指して言つたのだらうけれども、紫菘は根は蔓菁に似てゐるが葉は同じくなく、種類もやはり別

(五)京洛ハ今ノ河南省北部、黄河以南、開封、洛陽兩地間ノ地ヲ指ス。

だ。又、北方の地には菘がないといふが、唐より以前はさうであつたかも知れぬが、近來は白菘、紫菘は南、北を通じてある。ただ南方の地では蔓菁を種ゑずにこれを種ゑるが、やはり生じ易いからである。蘇頌は漫然、南、北いづれもよしと斷言し、汪機は當てもない臆斷の辨をなしてゐるが、いづれも謬誤だ。此に悉く正して置く。

莖葉【氣味】『甘く、溫にして毒なし』大明曰く、涼にして微毒あり。多く食へば皮膚の風瘙痒を發す。詵曰く、風冷を發する。內虛の人は食つてはならない。熱ある人が食つては一向病を發せぬところを見ると、性の冷なることが首肯かれる。本草に性溫なりとしてあるはその意味が解らない。弘景曰く、性和にして人を利するが、多食すれば少し冷のやうである。張仲景は『藥中に甘草があつても、菘を食つては病が除けなくする』といつた。頌曰く、小毒あり。多く食つてはならぬ。多く食つても生薑を食へば解す。瑞曰く、夏至の前に食へば氣を發し、疾を動ずる。足疾あるものはこれを忌む。時珍曰く、氣虛、胃冷の人が多く食へば惡心し、吐沫する。氣壯の人に適するものだ。

【主治】『腸、胃を通利し、胸中の煩を除き、酒渴を解す』(別錄)【食物を消化

し、氣を下し、瘴氣を治し、熱氣嗽を止める。冬の汁が就中佳し」(蕭炳)「中を和し、大、小便を利す」(寗原)

附方　舊一、新二。「小兒の赤遊」上下に行つて心に至れば死亡する。菘菜を擣いて傅ければ止まる(張傑子母秘錄)「漆毒の瘡」白菘菜を擣き爛らして塗る。「飛絲の目に入りたるとき」白菜を揉み爛らして帕に包み、汁を二三點目に滴し入れば出る。(普濟方)

子　氣味「甘し、平にして毒なし」主治「油にして頭に塗れば髮を長くする。刀劍に塗れば鏥びぬ」鏥の音は秀(シユウ)である。(弘景)

附方　舊一。「酒醉の醒めぬもの」菘菜子二合を細研し、井華水一盞で調へて二回に服す。(聖惠方)

芥(一)　(別錄上品)

和名　からし、ながらし
學名　Brassica cernua, Hemsl. (Sinapis cernua, Thunb.)
科名　十字科

釋名　時珍曰く、按ずるに、王安石の字說に『芥とは界の意味で、汗を發し、

(一)牧野云フ、我邦善ク栽培シテキテ其種子ヲ辛味料ニ使用シ、又葉ヲ蔬トスル故ニながらし(菜芥ノ意)ノ名ガアル。

氣を散じ、我を界するものの意味だ』とあり、王禎の農書に『その氣味辛烈にして菜中の介然たるもので、食へば剛介の象がある。故に文字は介に從ふのだ』とある。

【集解】弘景曰く、芥は菘に似て毛があり、味は辣い。生でも食ひ、また葅にもなる。その子は冬瓜を貯藏するによし。又、莨——音は郎（ラウ）——といふものもあつて、葅にすると甚だ辣い。

恭曰く、芥には三種あつて、葉が大きく子の麤なるものは、葉をば食ひ子をば藥に入れて用ゐる。葉が小さく子の細いものは、葉は食はず、ただ虀にするだけだ。又、白芥子といふがあつて、粗大で色が白く、白粱米のやうで甚だ辛美だ。これは西戎から來る。

〔芥〕

頌曰く、芥は處處にある。青芥といふは菘に似て毛があり、味は極めて辣い。紫芥は莖、葉が純紫で美しく、虀にして最も美味だ。白芥といふは本條の記載があ

る。その他、南芥、旋芥、花芥、石芥の類があつて、いづれも菜茹として美味なものだが、悉く錄載するわけに行かぬ。概して南方の地には芥が多く、言ひ傳ひに、嶺南には蕪菁がない。ある人が種を携へて彼の地に種ゑたが、みな芥に變化して了つたといふ。地氣の關係でさうなるのだ。

時珍曰く、芥に數種あつて、青芥はまた刺芥ともいひ、白菘に似て柔毛がある。大芥といふはまた皺葉芥ともいひ、葉が大きくして皺紋があり、色が尤も深綠で、味が更に辛辣だ。この二芥は藥用に適する。馬芥といふは葉が青芥のやうだ。花芥といふは葉に刻缺が多くして蘿蔔英のやうだ。紫芥といふは莖、葉みな紫で蘇のやうだ。石芥といふは低く小さいものである。いづれも八九月に種を下し、冬期に食ふものを俗に臘菜と呼び、春期に食ふものを俗に春菜と呼び、四月に食ふものを夏芥といひ、芥心の嫩薹を芥藍といひ、瀹でて食へば脆で美味だ。花は三月に開き、黃色の四出で、一二寸の莢を結ぶ。子の大いさは蘇子ほどで色は紫、味は辛い。研末して泡けて芥醬にし、それを肉食の侑にすると辛香愛すべきものである。劉恂の嶺南異物志に『南方の地の芥は高さ五六尺、子の大いさ雞子ほどある』とあるが、

これはまた芥としては異狀なものだ。

莖葉　[氣味]　【辛し、溫にして毒なし】詵曰く、煮て食へば氣と風とを動じ、生で食へば丹石を發する。多食してはならぬ。葉の大なるものが良く、細くして毛あるものは人を害す。寗原曰く、瘡瘍、痔疾、便血あるものはこれを忌む。思邈曰く、兎肉と共に食へば惡邪の病となる。鯽魚と共に食へば水腫を發する。

[主治]　【鼻に歸し、腎の經の邪氣を除き、九竅を利し、耳、目を明にし、中を安じ、久しく食すれば中を溫める】(別錄)【欬嗽上氣を止め、冷氣を除く】(日華)【欬逆に主效があり、氣を下し、頭面風を去る】(孟詵)【肺を通じ、痰を豁し、膈を利し、胃を開く】(時珍)

[發明]　時珍曰く、芥は性辛熱にして散ずる。故に能く肺を通じ、胃を開き、氣を利し、痰を豁するが、久しく食つては溫が積つて熱となり、辛の散が甚だ盛なために人の眞元を消耗し、肝木に病を受け、眼目を昏くし、瘡痔を發するものだ。しかるに別錄には、この物を能く耳、目を明にするといつてあるが、それは暫時の快を知つて積久の害を知らぬのだ。素問に『辛は氣に走る。氣病には多く辛を食つ

てはならぬ。多く食へば肉胝が生じて唇が褰する』とあるはこの物の類を指したのである。陸佃は『梅を望んで津を生じ、芥を食つて涙を隳すは五液の外より至るものだ。蒸つて涎垂れ、媿て汗出るは五液の内より生ずるものだ』といつてある。

附方　新四。【牙齦の腫爛】臭水の出るには、芥菜稈を焼いて性を存して研末し、頻りに傅ければ癒える。【飛絲の目に入つたるとき】青菜汁を點ける。神の如き效がある。（衛玄方）【漆瘡の搔痒】芥菜の煎湯で洗ふ。（千金方）【痔瘡の腫痛】芥葉を擣いて餅にし、頻りにそれに坐る。（談埜翁經效方）

子

（一）氣味　【辛し、熱にして毒なし】時珍曰く、多く食へば目を昏くし、火を動じ、氣を泄し、精を傷ふ。

主治　【鼻に歸し、一切の邪惡、疰氣、喉痺を去る】（弘景）【疰氣の部位不規則に發するもの、及び射工の毒には、丸にして服し、或は擣いて末にして醋で和して塗る。手に隨つて效驗がある】（蘇恭）【風毒腫、及び痲痺を治するには、醋で研つて傅ける。撲損瘀血、腰痛、腎冷には、生薑と和して研つて塗貼する。又、心痛を治するには酒で調へて服す】（日華）【研末して醬にして食へば、香美にして五臟を通利す

（一）木村（康）曰ク、からしノ種子ハ配糖體「ジニグリン」及加水分解酵素「ミロジン」ヲ含有ス、即チ種子ノ粉末ニ水ヲ加ヘテ放置スレバ「ジニグリン」ハ「ミロジン」ノ作用ニヨリ加水分解シテ揮發芥子油約一%ヲ生ズ、又脂肪約三七%ヲ含有シ、主トシテ「エルカ」酸及ビ「アラピン」酸等ノ「グリセリード」ヨリナル。からしノ蔬菜トシテノ組成ハ食用植物志ニヨレバ、

産地	水分	蛋白質	脂肪	無窒素物	灰分
內地	86.30	2.87	——	4.40	2.04
臺灣	90.655	2.028	0.300	6.232	0.776

(應用)芥子(局方)ハソノ細末ニ微溫湯(攝氏五十度內外)ヲ加ヘテ所謂芥子泥トナシ、皮膚ニ塗布シテ引赤藥トス。リウマチス、神經痛ノ局處ニ貼用シテ反對的

る】(孟詵)【研末して水で調へて頂顖に塗れば衄血を止める】(吳瑞)【中を溫め、寒を散じ。痰を豁し、竅を利し、胃寒吐食、肺寒欬嗽、風冷氣痛、口噤唇緊を治し、癰腫、瘀血を消散する】(時珍)

【發明】時珍曰く、芥子の功は菜と同じ。その味は辛で氣は散ずるものだから、能く九竅を利し、經絡を通じ、口噤、耳聾、鼻衄の證を治し、瘀血、癰腫、痛痺の邪を治する。その性は熱にして中を溫めるものだから、又よく氣を利し、痰を豁し、嗽を治し、吐を止め、心腹諸痛に主效がある。白芥子は辛烈が更に甚しいもので、治病に就中良し。後の本條に記載してある。

【附方】舊五、新十八。【感寒で汗なきもの】水で芥子末を調へて臍中を塡て、著衣の上から熱物で熨す。汗を取り出して妙である。(楊起簡便單方)【身體の麻木】芥菜子末を醋で調へて塗る。(濟生祕覽)【中風口噤】舌本の縮むには、芥菜子一升を研り、醋二升に入れて一升に煎じ、頷頰下に傅ければ效がある。(聖惠方)【小兒の唇緊】馬芥子の擣汁を曝して濃くし、揩り破つて頻りに塗る。(崔氏纂要方)【喉痺腫痛】芥子末を水で和して喉下に傅け、乾けば易へる。○又、辣芥子を研末して醋で調へ、汁を

ニ疼痛ヲ輕減セシムル效アリ。芥子ノ粉末ハ貯藏ニヨリ容易ニソノ效力ヲ失フヲ以テ、壓搾シテ脱脂セル粉末ヲ良トス。又芥子ハ揮發芥子油ノ製造原料トス、揮發芥子油ハ卒倒、假死等ニ刺戟藥トシテ其少量ヲ紙片ニ浸シ吸入セシム。其他芥子、「芥子漬、」「カレー」粉、其他食用嗜好品トシテ重要ナリ。食慾亢進竝ニ防腐ノ效ヲ有ス、又葉ハ蔬菜トシテ賞用サル。

取つて喉内に點入し、喉内の鳴るを待つて、陳麻骨(ふるきあさがら)を烟に燒いて吸入すれば立ろに癒える。(いづれも聖惠方)【突然の聾閉】芥子末を人乳汁で和し、綿で裹んで塞ぐ。(外臺祕要)【雀目で見えぬもの】眞紫芥菜子を黒く炒つて末にし、羊肝一頭分を八服に分け、一服毎に芥末三錢を肝に捻つて笋籜(じんたく)で裹定して煮熟し、冷えてから食つて汁で送下する。(聖濟總錄)【目中の翳膜】芥子一粒を手で輕く挼(も)んで眼中に入れ、少頃して井華水、雞子清で洗ふ。(總錄)【眉毛の生えぬもの】芥菜子、半夏(はんげ)等分を末にし、生薑の自然汁で調へて搽る。數回にして生える。(孫氏集效方)【鬼疰勞氣(きしゆらうき)】芥子三升を研末して絹袋に盛り、酒三斗の中に七日間入れ、一日三回溫服する。(廣濟方)【熱痰煩運】方は白芥の條にある。【霍亂吐瀉】芥子を細に搗き、水で和して臍上に傅ける。(聖濟總錄)【反胃吐食(ほんゐとしよく)】芥子末を、一日三回、方寸匕づつ酒で服す。(千金方)【上氣嘔吐】芥子末を蜜で梧子大の丸にし、井華水(せいくわすゐ)で寅の刻に七丸を服し、申の刻に再服する。(千金方)【臍下の絞痛】方は上に同じ。【腰、脊の脹痛】芥子末を酒で調へて貼れば立ろに效がある。(摘玄方)【走注風毒】痛むには、小芥子末を雞子白で和して塗る。(聖惠)【一切の癰腫(ようしゆ)】猪膽汁で芥子末を和し、一日三回貼る。猪脂でもよし。(千

金翼）【癰腫熱毒】家芥子末と柏葉とを擣いて塗る。癒えぬものなし。大いに效驗がある。山芥であれば更に妙である。（千金(三)翼）【熱毒瘰癧】小芥子末を醋で和して貼り、消くを看て止める。肉を損ずる恐があるからだ。（肘後）【五種の瘻疾】芥子末を水と蜜とで和して傅け、乾けば易へる。（廣濟方）【射工の毒に中つたとき】瘡あるには、芥子末を(四)酒で和して厚く塗る。半日で痛が止まる。（千金方）【婦人の經閉】行らぬこと一年に至り、臍腹が痛み、腰腿が沈重し、寒熱往來するには、芥子二兩を末にし、食前に二錢づつを熱酒で服す。（仁存方）【陰證傷寒】腹痛し、厥逆するには、芥菜子を研末し、水で調へて臍上に貼る。（生生編）

(一)白芥（宋開寶附）

和名 しろがらし、きくばがらし
學名 Brassica alba, Boiss. (Sinapis alba, L.)
科名 十字科

【釋名】胡芥（蜀本草）蜀芥 時珍曰く、その種は(三)胡、戎の地から來たもので、蜀で盛に栽培するからかく名けたのだ。

【集解】恭曰く、白芥子は粗大で色白く、白粱米ほどのもので、甚だ辛美であ

(三)大觀ニ方ニ作ル。

(四)大觀ニ酒上ニ苦字アリ。

(一)牧野云フ、未ダ我邦ニ見ザル一種デ此ニしろがらしトシタノハ其漢名ニ基キテノ名デ西洋デモ俗ニ White Mustard ト稱スル、本草綱目啓蒙ニハ之レヲ芥ノ異品トシテ、之レニしろがらしノ名ヲ署

シテアレドモ、之レヲ芥ノ變リ品ト觀ルハ穩カデナイ、從テしろがらしノ名ハ私ノ言フしろがらしトハ種類ガ違フ、白芥ハ歐洲、北亞弗利加、亞細亞ノ產デ、其葉ハ羽狀ニ分裂シ、果實ハ毛ヲ有シ且著シイ嘴ガアル。

(二)胡、戎ハ蒙古、甘肅省西部以西、青海、西藏、新疆省等西北番地方ヲ稱ス。蜀ハ今ノ四川省ノ地。太原、河東ハ今ノ山西省南北部ヲ指ス。

る。戎地方から來るものだ。

藏器曰く、白芥は太原、河東に產する。葉は芥のやうで白く、茹にして食へば甚だ美味だ。

保昇曰く、胡芥は近道にもある。葉は大きく、子は白く且つ粗く、藥用、及び啖ふに最も佳いものだが、しかし一般にはまだ多く用ゐられてゐない。

〔白芥〕

時珍曰く、白芥は何處にでも種ゑられるものだが、ただ一般にその栽培法を知るものが少いのだ。八九月に種を下せば冬生えて食へる。春深くなると莖の高さ二三尺になり、その葉、花には丫があつて花芥のやうだ。葉は青白色で、莖は起ち易いが中が空で性が脆く、狂風、大雪を最も畏れるから十分にそれを保護してやらねばならぬ。保護さへよければ折損しない。三月に香の郁しい黄色の花を開き、芥の角のやうな角を結び、

その子は粱米ほどの大いさで黄白色だ。又、莖が太く中が實して尤も高い一種があつて、その子もやはり大きい。この菜は芥類には相違ないが、全然特殊な別種である。しかし藥用としては芥子に勝る。

莖葉 [氣味] 【辛し、溫にして毒なし】 時珍曰く、肘後方に『熱病の人は胡芥を食つてはならぬ』とあるはその性が煖だからだ。

[主治] 【冷氣】(藏器) 【五臟を安ずる。功は芥と同じ】(日華)

子 [氣味] 【辛し、溫にして毒なし】 [主治] 【汗を發し、胸膈の痰冷、上氣の面目黄赤に主效がある。又、醋に研つて射工の毒に傅ける】(別錄) 【惡氣、遁尸、飛尸、及び暴風毒腫が四肢に流れて疼痛するを禦ぐ】(弘景) 【烟に燒き、及び服して邪魅を辟ける】(日華) 藏器曰く、鎭宅の方に入れて用ゐる。【欬嗽、胸脇支滿、上氣で唾多きものには、七粒づつを溫酒で呑下す】(思邈) 【氣を利し、痰を豁し、寒を除き、中を煖め、腫を散じ、痛を止め、喘嗽、反胃、痺木、脚氣、筋骨腰節の諸痛を治す】(時珍)

[發明] 震亨曰く、痰の脇下、及び皮裏膜外に在るは、白芥子以外では能く達

(三)靜中詳ナラズ、痰氣、喘息、胸滿ノ症ヲ云フナラン。

(四)南陵ハ隋以後ノ縣名。故城ハ今ノ安徽省貴池縣ノ西南ニ在リ。

せぬものだ。古方の控涎丹に白芥子を用ゐてあるは正にこの意味だ

時珍曰く、白芥子の辛は能く肺に入り、温は能く發散する。故に氣を利し、痰を豁し、中を温め、胃を開き、痛を散じ、腫を消し、惡を辟ける功力がある。按ずるに、韓懋の醫通に「凡そ老人で痰氣喘嗽に苦しみ、胸滿して食に懶きは、妄に燥利の藥を投じてはならぬ。反つて眞氣を耗するものだ。予(懋)はある人からその親の(三)靜中の治療を依頼されて、三子養親湯を處して治療したが、それを試みると隨つて效があつた。蓋し白芥子は白色にして痰を主り、氣を下し、中を寛にする。紫蘇子は紫色にして氣を主り、喘を定め、嗽を止め、蘿蔔子の白種のものは食を主り、痞を開き、氣を降すものである。各〻微し炒つて研り破り、主とするところを看て君とし、毎劑三四錢以内として、生絹袋に盛つて湯に煮て飲ませたのである。煎じ過ぎてはならぬ。過ぎれば味が苦辣となるものだ。若し大便が元來實するものならば蜜一匙を入れ、冬期には薑一片を加へるが尤も良し。(四)南陵の未齋子はこの藥の贊辭を作つてある。

附方　舊一、新八。【反胃上氣】白芥子末一二錢を酒で服す。(普濟方)【熱痰煩

運】白芥子、黒芥子、大戟、甘遂、芒消、硃砂等分を末にし、糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを薑湯で服す。これを白芥丸と名ける。（普濟）【冷痰痞滿】黒芥子、白芥子、大戟、甘遂、胡椒、桂心等分を末にし、糊で梧子大の丸にし、十丸づつを薑湯で服す。これを黒芥丸と名ける。（普濟方）【腹冷氣起】白芥子一升を微し炒つて研末し、湯に浸した蒸餅で小豆大の丸にし、十丸づつを薑湯で服するが甚だ妙である。（續傳信方）【脚氣で痛むもの】方は白芷の條下にある。【小兒の（五）乳癖】白芥子を研末し、水で調へて攤膏にして貼る。平安を得るまでを期とする。（本草權度）【痘の目に入るを防ぐ】白芥子末を水で調へて足心に塗る。毒を引いて下に歸し、瘡疹をして目に入らしめない。（全幼心鑑）【腫毒の初期】白芥子末を醋で調へて塗る（瀕湖集簡方）【胸脇の痰飲】白芥子五錢、白朮一兩を末にし、棗肉で和し搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。（摘玄方）

（一）蕪菁（別錄上品）

和名　かぶ、かぶら
學名　Brassica Rapa, L.
科名　十字科

（五）乳癖ハチマメ、乳頭ノ破裂スル症。

（一）牧野云フ、蕪菁ハ歐洲ノ原産デアルガ、其レガ往昔支那ニ入リ支那カラ日本

ニ傳ヘタモノデ、今ハ一般重要ナ蔬菜ノ一トナツテ居リ其異品モ頗ル多イ。釋名ノ諸葛菜ト同名異物ノモノニ今 Moricandia sonchifolia, Hook. fil. ト云フ品ガアツテ、紫花ヲ開キ支那ノ諸處ニ野生シテヰル。

（二）幷汾ハ幷州、汾州地方、幷州ハ石部石膏ノ註、汾州ハ同部石髓ノ註ヲ見ヨ。

（三）河朔ハ今ノ河北省地方。

（四）塞北ハ蒙古地方ヲ指ス。河西ハ草部山草類甘草ノ註ヲ見ヨ。

（五）大觀ニ須ニ作ル。

（六）大觀ニ記字下ニ註字アリ。

（七）陳、宋ハ今ノ河南省ノ東北部、商丘、宛丘地方ヲ指ス。

（八）幽州ハ草部山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

（九）楚ハ石部石炭ノ

「釋名」　蔓菁（唐本）　**九英菘**（食療）　**諸葛菜**　藏器曰く、蕪菁は北方では蔓菁と名けるが、現に（二）幷汾、（三）河朔地方ではその根を食ひ、蕪根と呼んでゐる。これはやはり蕪菁なる名稱からしたもので、蕪菁といふが南、北に通ずる名稱だ。（四）塞北、河西で種ゑるものは九英蔓菁と名け、また九英菘ともいふ。根、葉が長大で味が美くない。その地方ではこれを軍糧にする。

禹錫曰く、爾雅に『須は蕵蕪なり』とあり、又『詩の谷風に「葑を采り、菲を采る」とあり、毛萇の註に「葑は須なり」とあり、孫炎は「（五）葑、一名葑蓯」といつた。禮の坊記（六）には「葑は蔓菁なり。（七）陳、宋地方で葑といふ」とあり、陸機は「葑は蕪菁なり。（八）幽州地方では芥といふ」といひ、郭璞は「蕵蕪は羊蹄に似て葉が細く、味は酢くして食へるものだ」といひ、揚雄の方言には「蘴蕘は蔓菁である。陳、（九）楚では蘴といひ、（一〇）齊、魯では蕘といひ、（一一）關西では蕪菁といひ、（一二）趙、魏では大芥（一三）といふ」といつた。して見ると、葑といひ、須といひ、蕪菁といひ、蔓菁といひ、蕵蕪といひ、蕘といひ、芥といふ七種に呼ばれるものは一種の物だ』とある。

時珍曰く、按ずるに、孫愐の『蘴とは蔓菁の苗のことだ』といつた說が甚だ穩當

註ヲ見ヨ。
(一〇)齊魯ハ山東省地方。
(一一)關西ハ禽部水禽類鵜鶘ノ註ヲ見ヨ。
(一二)趙魏ハ山西省地方。
(一三)大觀ニ芥字ノ下ニ蔓菁音同ノ四字アリ。
(一四)江陵ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。
(一五)猫獠、猺獠ハ雲南、廣西ノ西南ニ住ム蠻族ノ部落ヲ指

だ。掌禹錫は薞蕪を移して蔓菁を解釋し、陳藏器は薞蕪を酸模だといつたが、陳氏の說が優つてゐる。詳細は草部の酸模の條を見よ。劉禹錫の嘉話錄に『諸葛亮は、軍隊を駐めると兵士を指揮してそこに蔓菁だけを種ゑさせたものだ、それは一には纔に苗が生え初めると生で啖へる。二には葉が舒びれば煮て食へる。三には久しくそこに滯在すればますます繁茂し成長する。四には棄てて去つても惜くない。五には再びその地へ向つた場合に尋ねて採り易い。六には冬も根があつて食へる。諸種の蔬菜に比してその利用の甚だ博い點に著眼したものだ。現在でもなほ蜀地方では諸葛菜と呼び、(一四)江陵でもやはりさう呼んでゐる』とあり、又、朱輔山の溪蠻叢話には『(一五)猫獠、猺獠地方に馬王菜といふを産する。味が澀くして刺が多い。即ち諸葛菜だ。馬殷が遺したものだと言ひ傳へ

〔蔓菁〕
—蕪菁—

ス。（金部金、夷獠ノ註、石部丹砂ノ蠻峒、猪獠峒等ノ註參照。

（一六）西川ハ今ノ四川省の西半地方。

（一七）江表ハ江蘇省揚子江以南ヲ指ス。

（一八）痺ハ卑ニ通ズ、ヒクキ事ヲ云フ。

るのでかく名けたのだ』とある。又、蒙古地方ではその根を沙吉木兒と呼ぶ。

集解　弘景曰く、別錄には蕪菁、蘆菔を同條に記載してあるが、蘆菔とは今の溫菘のことで、その根は食へるが葉は噉へないものだ。蕪菁は根は溫菘よりも細いが葉は菘に似て食ふに好いものだ。（一六）西川ではただそれだけを種ゑる。その子は溫菘と甚だよく似てゐるが、俗方では用ゐない。ただ服食家で錬つて食ふが、蘆菔子とはいはないから、子は恐らく用ゐぬのであらう。俗間では一般にその根を蒸し、また葅にして食ふ。但し少し薰臭なものだ。

恭曰く、蕪菁は北方では蔓菁と名ける。根、葉、及び子はいづれも菘の類で、蘆菔とは全然別だ。體用もやはり異ふ。陶氏は、蕪菁は蘆菔に似て、蘆菔の葉は食へないといつたが、これは（一七）江表には二物を產せぬので、その物の實際が判らなかつたのだ。菘子は黑色、蔓菁子は紫赤色で大いさは相似たものだ。蘆菔子は黃赤色で大いさは數倍し、且つ圓くない。

大明曰く、蔓菁は蘆菔に比すれば梗が短くして細く、葉は大きく、地上に連つて生え、厚く濶く、短く肥えて（一八）痺である。その色は紅い。

頌曰く、蕪菁は南、北いづれにもあるが北方の地に就中多く、四時常にあつて、春は苗を食ひ、夏は心を食ひ、また薹子ともいふ。秋は莖を食ひ、冬は根を食ふ。河朔では多く種ゑて饑饉の歳の備にする。菜類中の最も有益なるはただこの物である。その子は夏、秋に熟した時に採る。

宗奭曰く、蔓菁は、夏期になると枯れるので、その時に野菜畑へまた種ゑ、雞毛菜といふ。心を食ふは春の間だ。諸菜中では有益無損にして一般人の生活に功あるものだ。十分摘み採つた殘りは子を取つて油にし、それを燈火に點ずると甚だ明だ。西方の地ではその油も食ふ。河東、太原に産するものは根が極めて大きく、他の土地のものは及ばない。又、西番、(一九)吐谷渾の地にも産する。

機曰く、葉は蔓菁、根は蘆菔だ。

時珍曰く、別錄に蕪菁、蘆菔を同一條に記載したところから、種種なる臆説を生み、或る者は二物を一種とし、或る者は二物は全然別だといひ、或るものは南に在ては萊菔といひ、北に在つては蔓菁といふといひ、一向に一定した見解がないが、今按ずるに、この二物は根、葉、花、子が全く別であつて一類のものでない。蔓菁とい

(一九)吐谷渾ハ草部芳草類木香ノ註ヲ見ヨ。

ふは芥屬のもので、根は長くして白く、その味は辛く苦くして短く、莖は粗く、葉は大きくして厚く濶く、夏の初に薹が起ち、四出で芥のやうな黄色の花を開き、やはり芥のやうな角を結び、その子は平均して圓く、芥子に似て紫赤色だ。蘆菔といふは菘屬のもので、根は圓く、また長いものもあつて、紅、白の二色あり、その味は辛く甘くして(二〇)永く、葉は甚だ大きくして糙澀だ。また(二一)花葉のものもある。夏の初に薹が起つて淡紫色の花を開き、蟲のやうな狀態で腹が太く尾の尖つた角を結び、子は胡盧巴に似て平均せず、圓くなく、黄赤色だ。かやうに分けて見ると自ら明白である。この蔓菁は六月種ゑたものは根が大きくして葉に蠹がつき、八月に種ゑたものは葉が美しくして根が小さい。ただ七月の初に種ゑたものは根、葉倶に良し。賣らうとして作るものは純ら(二二)九荚、九英のものを種ゑるので、根は大きいが味が短く、淨め削つて菹にするが甚だ佳し。現に燕京地方では甁で醃藏して閉甕菜と呼んでゐる。

根葉　【氣味】【苦し、溫にして毒なし】時珍曰く、辛く甘く苦し。宗奭曰く、多く食へば氣を動ずる。

(二〇)永、一本ニ苦トアリ。

(二一)花葉ハ葉ニ剪彩刻アルヲ云フ。

(二二)九荚ハ九英ノ誤。次ノ九英二字ハ衍文。

【主　治】【五臟を利し、身を輕くし、氣を益す。長く食ふがよし】(別錄)【常食すれば中を通じ、人をして肥健ならしめる】(蘇頌)【食を消し、氣を下し、嗽を治し、消渴を止め、心腹の冷痛、及び熱毒風腫、乳癰、妬乳、寒熱を去る】(孟詵)

【發　明】詵曰く、九英菘は河西に產する。葉が大きく、根も粗く長い。羊肉に和して食ふが甚だ美である。常食として全然病を發した例がない。冬期に葅にし、羹に煮て食へば、宿食を消化し、氣を下し、嗽を治す。諸家の說を大體參考するに、その性冷である。しかるに本草に溫とあるは恐らく誤であらう。

【附　方】舊八、新四。【時疾の豫防】立春後、庚子に當る日に蔓菁汁を溫め、一家大小いづれも多少に限らず服す。一年間時疾を免れる。(二三)(神仙教子法)【鼻中衄血】諸葛菜を生で擣いて汁を飲む。(二四)(十便良方)【大醉して堪へざるとき】連日病困するには、蔓菁菜に少量の米を入れて煮熟し、滓を去つて冷飲するがよし。(肘後方)【飲酒に氣を辟ける】乾蔓菁根十四箇を二回蒸して末に碾り、酒後に二錢を水で服す。酒の氣がなくなる。(千金)【一切の腫毒】生蔓菁根一握に鹽花少量を入れて共に擣き、それで封じて一日三回易へる。○肘後方では、蔓菁葉を水に中てずに灰に燒き、

(二三)大觀ニ傷寒類要ニ作ル。
(二四)大觀ニ孫眞人食忌ニ作ル。

臘猪脂で和して封ずる。【根のある丁腫】大鍼で刺して孔を作り、蔓菁根を鍼の太さに削つて鐵生衣を染けて孔中に刺し入れ、更に蔓菁根、鐵生衣等分を擣いて上に塗け、膿が出るとき易へる。須臾にして根が出て立ろに瘥える。油膩、生冷、五辛、粘滑、陳臭のものを忌む（肘後）【乳癰寒熱】蔓菁の根、幷に葉を水で洗はずに土を去り、鹽を和して擣いて塗り、熱すれば換へる。三五回に過ぎずして瘥える。冬期にはただ根を用ゐる。この方は已に十數人を救つた經驗がある。風を避けねばならぬ。（李絳兵部手集）【婦人の妬乳】生蔓菁根を擣き、鹽、醋、漿水を和して煮てその汁で洗ふ。五六回で良し。又ある方では、雞子白を和して封ずるも妙である。（食療）【斗ほどになる陰腫】生蔓菁根を擣いて封ずる。一般に治療不能のものを治す。（集療方）【豌豆斑瘡】蔓菁根を擣き、瘡を挑破してその汁を塗る。三時間ほどで根が出る。（肘後方）【犬咬傷瘡】重發せるには、蔓菁根の擣汁を服するが佳し（肘後）【小兒の頭禿】蕪菁葉を灰に燒き、（二五）脂で和して傅ける。（千金）【飛絲の眼に入つたとき】蔓菁菜を揉み爛らして帕に包み、汁を二三點滴せば出る。（普濟方）

子（二六）｜氣味｜【苦く辛し、平にして毒なし】｜主治｜【目を明にする】（別錄）

（二五）大觀ニ醋ニ作ル。
（二六）木村（康）曰ク、蕪菁 B. Rapa L. ノ成分ニツイテハ Wehmeri. D. Pflanzen-

【黄疸を療じ、小便を利す。水で煮た汁を服すれば癥瘕積聚に主效があり、少しづつ汁を飲めば霍亂の心腹脹を治す。末にして服すれば目暗に主效があり、油にして面膏に入れれば黑皯皺文を去る】(蘇恭)【油で和して蜘蛛咬に傅ける】(藏器)【壓取した油を頭に塗れば能く（二七）蒜髪を變ずる】(孟詵)【丸藥に入れて服すれば人をして肥健ならしめ、就中婦人に宜し】(蕭炳)

發明　藏器曰く、仙經に『蔓菁子を九蒸九曝して末に擣き、長く服すれば穀食を斷つて長生し得る』とある。蜘蛛に咬まれて毒が內に入る恐のあるには、末に擣いて酒で服し、また油で和して傅ける。蔓菁の畑に蜘蛛のゐないのは相畏れる關係があるからだ。

時珍曰く、蔓菁子は、升によく、降によく、能く汗し、能く吐し、能く下し、能く小便を利し、又、能く目を明にし、毒を解す。その功甚だ偉なるものだが、何ゆゑか世間で用ゐることを知るものが罕だ。夏初に採つた子を炒つて油を搾り、麻油と共に錬熟すると全然同一なものとなる。西方の地では多くこれを食ひ、燈火に點けるが、甚だ明だ。但し烟はやはり目を損ずるもので、北魏の祖珽が地牢中に幽囚

stoffe II Auflage, 398. ニ文獻二〇ヲ擧グ、種子ハ少量ノ配糖體「ジニグリン」、揮發芥子油等ヲ出ダス、ソノ組成(%)ハ水分七・八八、脂肪三三・五三、含窒素物二〇・四八、無窒素物二四・四一、粗纖維九・九一、灰分三・八一。又根ハ「ロダン」水素ヲ含ミ、花ハソノ一〇〇瓦中一・五瓱、葉ハ〇・四瓱（莖ハ〇）ノ硫黄分ヲ含ム。食用植物志ニヨレバ、食用トシテ賞用セラルル我内地産蕪菁根(B. Rapa var. rapifera) ノ組成(%)ハ水分九四・〇〇、蛋白質一・六二、脂肪〇・〇七、無窒素物二・八二、纖維〇・七、灰分〇・七八。

（二七）蒜髮ハ宜髮ノ誤

されたとき、蕪菁子油の燈を點けてゐたために視力を傷めたといふはそれである

【附　方】　舊四、新十八。【目を明にし、氣を益す】蕪菁子一升、水九升を汁が盡きるまで煮て日光で乾し、かく三回繰返してから研細し、一日三回、水で方寸匕を服す。また水に研り、米を和して粥に煮て食ふもよし。（外臺祕要）【常服して目を明にする】人をして腸腑を洞視せしめる。蕪菁子三升を苦酒三升で煮熟して日光で乾し、研り篩つて末にし、一日三回、方寸匕を井華水で服す。忌むものなし。抱朴子に『一斗を服し盡せば夜でも物を視得る』とある。（千金方）【青盲眼障】ただ瞳子さへ壞れぬものならば十中の九まで癒える。蔓菁子六升を蒸し、氣を甑内全部に普遍させて取下し、釜中に入れて熱湯を淋ぎ、それを曝乾してまた淋ぎ、かく三回繰返して取收め、杵いて末にし、一日二回、食前に淸酒で（二八）方寸匕を服す。（崔元亮海上方）【虚勞目暗】方は前記の法に同じ。（普濟方）【肝を補し、目を明にする】蕪菁子を淘つて一斤、黃精二斤を共に和して九蒸九晒して末にし、一日二回、空心に二錢づつを米飮で服す。○又ある法では、蔓菁子二升、決明子一升を和勻し、酒五升で煮乾して曝して末にし、一日二回、二錢づつを溫水で調へて服す。（いづれも聖惠）【風邪の目を攻むるもの】

宜委ハ黑白毛相雜ルナリ。
（二八）大觀ニ方チ二ニ作ル。

視力の明ならぬは肝の氣虚である。蔓菁子四兩を甕瓶中に入れて黒く燒き、聲がなくなつてから取出し、蛇蛻二兩を入れ、また燒いて灰にして末にし、一日三回、半錢づつを食後に酒で服す。(聖濟總錄)【服食辟穀】蕪菁子の熟したとき採り、水で三回煮て苦味を盡し、曝して末に擣き、一日三回、二錢づつを溫水で服す。久しく穀食を辟け得る。(蘇頌圖經本草)【衣服に染まる黃汗】涕唾までみな黃なるには、蔓菁子を末に擣き、早朝井華水で一匙を服し、日に再服して兩匙までに增加し、知あるを度とする。毎夜尿に帛を浸して見て逐日漸次に白くなれば瘥える。五升以上を服するに及ばぬ(外臺祕要)【金のやうな黃疸】眼睛が黃になり、小便の赤きには、生蔓菁子末方寸匕を、一日二回、熟水で服す。(孫眞人食忌)【急黃黃疸】及び內黃で腹が結して通ぜぬには、蔓菁子を末に擣き、水で汁を絞つて服す。嚏をして鼻から黃水を出し、また下痢するもので、それで癒える。子から油を取つて一盞づつ服するが更に佳し。(陳藏器本草拾遺)【熱黃便結】蕪菁子を末に擣き、水で和して汁を絞つて服す。少頃して一切の惡物を瀉するもので、沙石、草、髮いづれも出る。(孟詵食療本草)【二便關格】脹悶して絕せんとするには、蔓菁子油一合を空腹に服すれば通ずる。通じて後汗が

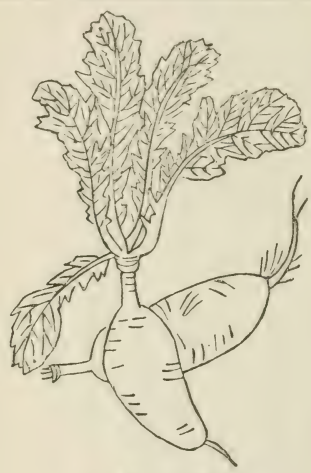
出ても怪しむに及ばぬ。(聖惠方)【心腹の脹るもの】蔓菁子一大合を揀り淨めて擣き爛し、水一升を和して研り、汁を濾して一盞を頓服する。少頃して自利し、或は自吐し、或は汗を出して癒える。(外臺祕要)【霍亂脹痛】蕪菁子を水で煮て汁を飲む。(瀕湖集簡方)【妊娠溺澀】蕪菁子末方寸匕を水で服す。一日二回(子母祕錄)【風疹の腹に入りたるもの】身體が强し、舌の乾硬するには、蔓菁子三兩を末にし、一錢づつを溫酒で服す。(聖惠方)【瘭疽發熱】疽が手、足、肩、背に生じ、米のやうに纍纍と起り、色白く、刮れば汁が出て復た發熱するには、蕪菁子を擣き熟して帛に裹み、晝夜休まずその上に展轉する。(肘後方)【骨疽の癒えぬもの】癒えても復た發し、骨が孔中から出るものには、蕪菁子を擣いて傅け、帛で裹定し、日に一回易へる。(千金方)【小兒の頭禿】蔓菁子末を酢で和し、一日三回傅ける。(千金方)【眉毛の脫落】蔓菁子四兩を炒つて研り、醋で和して塗る。(聖惠)【面黶痣點】蔓菁子を研末し、面脂中に入れて每夜塗る。また面皺をも去る。(聖惠方)

花　氣味　【辛し、平にして毒なし】　主治　【虛勞で眼の暗きもの。久しく服すれば長生し、夜間讀書し得る。三月三日に花を採つて陰乾し、末にして二錢

（一）牧野云フ、だいこんハ元來歐洲方面ノ原産デアルガ、往昔之レガ支那ニ入リ後支那カラ我邦ニ傳ヘ、今日デハ世界中我ガ日本ガ同品ノ最モ發達シタ國トナツテ居ル、從テ其品類多ク頗ル優品ニ富ンデヰテ、其巨大ナモノニハさくらじまだいこんノ如キモノガアル、古名ノ蘆葩ハ音譯字デ是レハ raphanus, raphanos, raphanis, rapa, rapum, rapus, raphus ナドノ語ガ其元ヂナスモノデアラウト思ハレル、之レニ據ツテ見レバ、だいこんノ源ガ歐洲方面ニアル事ガ推想シ得ラル

づつを空心に井華水で服す】（愼微）

（一）萊菔 音は來比(ライヒ)である。（唐本草）

和名　だいこん
學名　Raphanus sativus, L.
科名　十字科

【釋名】**蘆葩**　郭璞曰く、蘆の音羅(ラ)葩は音比(ヒ)である。菔と同じ。**蘿蔔**　音は羅北(ラホク)である。**雹葖**（爾雅註）**紫花菘**（同上）**溫菘**（同上）**土酥**　保昇曰く、萊菔は俗に蘿蔔と名ける。按ずるに、爾雅に『葖(とつ)は蘆葩(らひ)なり』とあり、孫炎の註に『紫花菘のことだ。俗に溫菘と呼ぶ。蕪菁に似て根が大きい。俗に雹(はく)葖(とつ)と名ける』とある。一名蘆菔といふそのものだ。頌曰く、紫花菘、溫菘とはい

〔萊菔——蘿蔔〕

ル、我邦海邊ニはまだいこんト云ノノガアルガ、是レハ栽培ノだいこんガ逸出シタモノデ、決シテ別種ノ品デハナイ。

(二) 小野蘭山曰、瓟ハ瓟ノ誤ナラン。瓟ハ蒲卓ノ反、瓟ハ蒲包ノ反ナリ。

づれも南方地方で呼ぶ名で、呉地方では楚菘と呼び、廣南地方では秦菘と呼ぶ。

時珍曰く、按ずるに、孫愐の廣韻に『魯地方では菈遾——音は拉荅(ラッタフ)——と名け、秦地方では蘿蔔と名ける』とあり、王禎の農書には『北方の地では蘿蔔一種のものに四種の名があつて、春は破地錐(はらすゐ)といひ、夏は夏生といひ、秋は蘿蔔といひ、冬は土酥(どそ)といふ。これはその潔白にして酥のやうだといふ意味だ』とある。予(時珍)が按ずるに、菘といふは菜の名で、その物が冬に耐へて松柏のやうだといふ意味に因る。萊菔といふは根の名で、上古にはこれを蘆葩といひ、中古には轉じて萊菔となり、後世には訛(なま)つて蘿蔔となつたのである。南方では蘿(二)瓟と呼ぶ。瓟は雹と同じで、晉灼の漢書註の中に書いてある。陸佃は『萊菔は能く麪毒を制する。これは來麰(らいぼう)の服するところのもので、それゆゑに菔の音は服なのだ』といつたが、これはやはり文字から意味を考へ出したものである。王氏の博濟方には、乾蘿蔔を仙人骨と稱してあるが、これも方士が呼ぶ出鱈目(でたらめ)の名稱だ。

集解 弘景曰く、蘆菔とは今の溫菘のことで、その根は食へる。俗間ではその根を蒸し、及び菹にして食ふが、ただ少し薰臭(くんしう)なものだ。葉は啖(く)へない。又、葖

といふがあるが、根は細くして辛味が過ぎ、服するに適しない。

恭曰く、萊菔、卽ち蘆菔であつて、嫩葉は生菜として食ひ、大葉は熟して啖へる。陶氏は食へないといつたが、事實と違つてゐる。(三)江北、(四)河北、(五)秦晉に最も多く、(六)登萊のものも好し。

頌曰く、萊菔は南、北を通じてあるが、北方の地に尤も多い。大、小の二種あつて、大なるものは肉が堅く、蒸して食ふに宜し。小なるものは白くして脆く、生で啖ふに宜し。(七)河朔には極めて大なるものがあるが、(八)江南、(九)安州、(一〇)洪州、(一一)信陽のものも甚だ大きく、その重量五六斤のものもあり、或は一秤に近いものもある。やはり一ら時期と栽培の力に因るものだ。

瑞曰く、夏期に復た種ゑるものをば夏蘿蔔と名け、形の小さくして長いものを蔓菁蘿蔔と名ける。

時珍曰く、萊菔は今は全國到る處にある。昔の人が蕪菁、萊菔の二物を混淆して註釋したことは已に蔓菁の條下に述べた通りである。耕作者が萊菔を栽培するには、六月に種を下し、秋に苗を採り、冬に根を掘る。春末に高い薹が抽き出て紫碧色の

(三)江北ハ揚子江以北ノ江蘇地方。
(四)河北ハ河北省地方。
(五)秦晉ハ山西、陝西地方。
(六)登萊ハ山東省ノ東部地方。
(七)河朔ハ河北トイフニ同ジ。
(八)江南ハ揚子江以南ノ江蘇、浙江地方。
(九)安州ハ元ニ置ク、今ノ河北省新縣ソノ地ナリ。
(一〇)洪州ハ草部山草類草犀ノ註ヲ見ヨ。
(一一)信陽ハ縣名、今ハ河南省汝陽道ニ屬ス。

（一三）木村（康）曰ク、食用植物誌ニヨレバ吾ガ宮重大根ノ組成（%）ハ水分九四・五五、蛋白質〇・七三、脂肪〇・〇一、無窒素物三・七〇、木纖維〇・五一、灰分一・四

小花を開き、夏初に角を結ぶ。その子は大麻子ほどの大いさで、圓きもの長きもの等があつて平均しない。色は黄赤だ。五月にまた再び種ゑられる。その葉は大なるは蕪菁ほどのものがあり、細きは花芥ほどで、いづれも細い柔毛がある。その根には紅、白の二色あつて、その形狀にも長、圓の二類があるが、概して沙地に生えたものは脆くして甘く、瘠地に生えたものは堅くして辣い。根、葉、いづれも生でもよく、熟してもよく、葅にするもよく、醬にもよく、豉にもよく、醋にもよく、糖にもよく、腊にもよく、飯にもよし。乃ち蔬菜中での最も利益あるものである。しかるに、古人は深くこれに詳考を加へてないが、それは物が賤いから忽せにしたといふわけではあるまいか。それとも、この物の利用の特長を知らなかつたものであらうか。

（一三）**氣味**　【根は辛く甘し、葉は辛く苦し、溫にして毒なし】詵曰く、性は冷である。思邈曰く、平である。地黄と共に食つてはならぬ。髮を白くするものだ。それはこの物が營衞を澀するためだ。時珍曰く、萊菔を多く食へば氣を動ずるが、ただ生薑が能くその毒を制す。又、硇砂を伏す。

九、Wehmer; d. Pflanzenstoff II. Auflage 411, 413.ニ文獻二〇餘ヲアゲテ次ノ四變種ノ成分ヲ述ブ。R. Sat. var. alba ニ於テハ、根ハ酵素ニヨツテ揮發油ヲ生成スル一種ノ配糖體「ラフアノール」作用ノ强力ナル「ヂアスターゼ」、「メチルメルカプタン」、「ロダン水素」、有機硫黄化合物「ペントザン」等ヲ含ム、ソノ組成(%)ハ水分八六・九二、含窒素物一・九二、脂肪〇・一一、無窒素物六・九〇(ソノ一糖分一・五)、粗纖維一・五五、灰分一・七、種子ハ脂肪油三七・五%(四五―五〇%)「エルカ」酸、油酸等ノ「グリツエリ

主治 【散にして服し、及び炮き煮て服食すれば、大いに氣を下し、穀物を消化し、中を和し、痰癖を去り、人體を肥健にする。生で擣いて汁を服すれば消渇を止める。實驗上大いに效驗があつた】(唐本)【關節を利し、顏色を理し、五臟の惡氣を練り、麪毒を制し、風氣を行り、邪熱氣を去る】(蕭炳)【五臟を利し、身を輕くし、人體を白淨にし、肌を細ならしめる】(孟詵)【痰を消し、欬を止め、肺痿吐血を治し、中を溫め、不足を補す。羊肉、(一三)銀魚と共に煮て食へば勞瘦欬嗽を治す】(日華)【猪肉と共に食へば人に益あり。生で擣いて服すれば禁口痢を治す】(汪穎)【擣汁を服すれば吐血、衄血を治す】(吳瑞)【胸膈を寬にし、大、小便を利す。生で食へば渴を止め、中を寬にし、煮て食へば痰を化して消導する】(寧原)【魚の腥氣を殺し、豆腐積を治す】(汪機)【呑酸に主效があり、積滯を化し、酒毒を解し、瘀血を散ずるに甚だ效がある。末にして服すれば五淋を治し、丸にして服すれば白濁を治す。煎湯で脚氣を洗ふ。汁を飲めば下痢、及び失音、幷に烟熏で死せんとするを治す。生で擣いて打撲、湯火傷に塗る】(時珍)

發明 頌曰く、「萊菔の功は蕪菁と同じだが、力の猛いことは更にそれ以上だ。

断下の方にはやはりその根を用ゐ、焼き熟して藥に入れる。就中能く麪毒を制するもので、昔、ある婆羅門僧が中國へ來て、麥麪を食ふを見て『かかる大熱のものを如何にして食ふのであらうか』と驚いたが、その膳部の中に蘆菔のあるを見て『なるほどこれがあればその性を解すわけだ』といつた。それから相傳へて麪を食ふには必ず蘆菔を啖ふ。

炳曰く、擣き爛らして麪を制し、それを餺飥にして食ふが最も佳く、飽食しても熱を發しない。酥で煎じて食へば氣を下す。凡そ飲食過度の場合には、生で嚼んで嚥めばそれで消化する。

愼微曰く、按ずるに、楊億の談苑に『江東の居民は「芋を三十畝に種ゑれば、その結果米三十斛を省ける。蘿蔔を三十畝に種ゑれば、その結果米三十斛を多く消費する」といふ。これで見ると、蘿蔔は果して能く食物を消化するものだといふことが首肯かれる』とある。

宗奭曰く、地黃、何首烏を服した人が萊菔を食へば髭髮が白くなる。世間ではみなこの物は味が辛くして氣を下すことが速なためと考へてゐるが、然らば生薑、芥

ド」硫黄含有ノ有機游離酸等ヲ含ム、種子ノ組成(%)ハ脂肪三〇・二、含窒素物一八・三六、無窒素物及纖維四〇・三四、水分七・五、灰分三・五〇。R. Sativa var. nigra ニ於テハ、葉ハ芥子油配糖體及「ミロジン」ヲ含ミ、根ハ〇・〇〇二五%ノ硫黄含有油分、結晶性「ラファノール」等ヲ、種子ハ揮發油〇・一〇八%、脂肪油三九%、「ミロジン」芥子油配糖體等ヲ含ム。R. Sativa var. radiculo ニ於テハ、根ハ「ラファノール」、紅色素、「ペントザン」、「ペリチン」類有機硫黄化合物等ヲ含ミ、種子ハ「ミロジン」、揮發油(〇・一〇六%)、脂肪油(三四・

七)ヲ有ス。
R. Sativa var. oleifera (R. chinensis Mill.) ノ種子ハ、〇・一三三%ノ揮發油及ビ三三ノ脂肪油ヲ含ム。
(應用)根及ビ葉ハ蔬菜トシテ重要ナリ、民間ニテ根ノ切片ヲ水飴ト混ジテ咳嗽ニ效アリトテ用ウ、又種子ハ健胃祛痰藥トス。
二三)大觀ニ銀ヲ鍍ニ作ル-

子は更に辛いが、その結果さうでないのは何故かといふに、それはただ能く散するだけのものだからで、蓋し萊菔は辛くしてまた甘い。故に能く散じ、緩にしてまた氣を下すことが速かなものなのだ。氣を散ずるに生薑を用ゐ、氣を下すに萊菔を用ゐる理由はそれである。

震亨曰く、萊菔は土に屬して金と水とを有する。寇氏は、この物を『氣を下すことが速だ』といつたが、一般に煮て過多に食ふと往往にして停滯して溢飮を起す。これは甘が多くして辛が少いからではあるまいか。

時珍曰く、萊菔は根、葉同功であつて、生で食へば氣を升し、熟して食へば氣を降す。蘇、寇二氏はただこの物を『氣を下すことが速だ』とのみいひ、孫眞人は『久しく食へば營衞を澀す』といつたが、やはりその物は生では噫氣し、熟すれば泄氣し、升、降同じからぬ點を知らないのだ。概して太陰、陽明、少陽の氣分に入るものだから、主とするところはみな肺、脾、腸、胃、三焦の病である。李九華は『萊菔を多く食へば人の血を滲す』といつた。して見ると、その人の髭髮を白くするも蓋し亦この關係に因るのであつて、獨り氣下し、營衞を澀するに因するだけのもの

(一四)齊州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。

(一五)饒州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。

ではない。

按ずるに、洞微志に『(一四)齊州のあるものが狂を病んで、かういふことを言ひ出した「夢で紅裳を著た少女子に連れられてある宮殿へ往つたが、そこにゐた年頃の娘に毎日歌を歌へといはれて

五靈樓閣曉玲瓏　天府由來是此中

惆悵悶懷言不盡　一丸蘿蔔火吾宮

と歌つてゐた」と。ところがある道士がそれを聞いて「この病は大麥の毒を犯したのだ。その夢の少女は心の神、年頃の娘は脾の神だ。醫經に蘿蔔は麪毒を制すとあるから、それで吾が宮を火くといつたので、火くとは毀るといふ意味だ」といつて、藥、幷に蘿蔔を以て治療したが、果してそれで癒えた』とある。

又、按ずるに、張杲の醫說に『(一五)饒の住民李七といふ者が鼻衄を病んで甚だ危ふかつたとき、醫師が蘿蔔の自然汁に無灰酒を和して飮ませると直に止んだ。蓋し血は氣に隨つて運るもので、氣が滯るから血が妄行するのであつて、蘿蔔は氣を下して消導するものだから奏效したのだ』とあり、又『ある人は好んで豆腐を食つて中

毒し、醫師の治療も效がなかつたが、ふと豆腐屋が「女房が誤つて鍋の中へ蘿蔔湯を入れたところが、とうとう豆腐に成らなくなつて了つた」と話してゐるを聞き、心の裡になるほどと悟り、そこで蘿蔔湯を飮んで見るとそれで瘳えた。物の理にはかやうな妙がある』とある。

又、延壽書には、李師は難を逃れて石窟中に入つて、賊に烟で熏じられて死に垂とするに至つたが、蘿蔔菜一束を搜り取り、嚼んでその汁を嚥下すると甦つたといふ記載がある。これは急に備へる法として心得置くべきことである。

【附　方】　舊二、新二十一。【物を食つて酸く覺えるもの】蘿蔔數片を生で嚼む。或は生菜を嚼むも佳し。絕だ妙である。乾いたもの、熟したもの、鹽で醃けたもの、及びその人が胃冷の場合にはいづれも效がない。（瀕湖集簡方）【反胃噎疾】蘿蔔を蜜で煎じ浸し、少しづつ嚼んで嚥むが良し。（普濟方）【消渴飮水】獨勝散——子を出了した蘿蔔三箇を淨洗して切片し、日光で乾して末にし、猪肉を煎じて湯を澄清して二錢づつを調へ、一日三回服し、漸次に三錢まで增加する。生のものの擣汁もよし。或は汁で粥を煮て食ふ。（圖經本草）【肺痿欬血】蘿蔔に羊肉、或は鯽魚を和し、煮熟し

て頻りに食ふ（普濟方）【鼻衄の止まぬもの】蘿蔔の擣汁半盞に酒少量を入れて熱服し、幷に汁を鼻中に注ぐ。いづれも良し。或は煎沸した酒に蘿蔔を入れて再煎して飮む。（衞生易簡方）【下痢禁口】蘿蔔の擣汁一小盞、蜜一盞、水一盞を共に煎じ、早朝一服し、正午一服し、日晡に米飮で阿膠丸百粒を呑む。もし蘿蔔がないときは子を擂つた汁もよし。ある方では、枯礬七分を加へて共に煎じる。ある方では、ただ蘿蔔菜の煎湯を日毎に飮む。○普濟方では、蘿蔔片を新、舊に拘らず蜜を漬けて噙み、汁を嚥む。味が淡くなつたときは換へる。食思がついたときは肉と粥を煮て食はせる。多過ぎてはならぬ。【痢後の腸痛】方は上に同じ。【大腸便血】大蘿蔔皮を燒いて性を存し、荷葉を燒いて性を存し、蒲黄を生で等分を末にし、一錢づつを米飮で服す。（普濟）【腸風下血】蜜で炙いた蘿蔔を任意に食ふ。昔、ある婦人がこれを服して效を擧げた。（百一選方）【酒疾下血】十日間も引續き止まぬには、大蘿蔔二十箇を青葉一寸餘を留め、罐に入れて井水で十分に煮爛し、淡醋を入れて空心に任意に食ふ。（壽親養老方）【大腸脱肛】生萊菔を擣いて臍中に實てて束ねる。瘡あるを覺えたときは直ちに除く。（摘玄方）【小便白濁】生蘿蔔を中を剜り去つて蓋を留め、呉茱萸を塡

滿して蓋をし、糯米飯上にさし込んで蒸熟し、取り出して茱萸を去り、その蘿蔔を焙じて研末し、糊で梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを鹽湯で服す。(普濟)【沙石諸淋】忍び難く疼くには、蘿蔔を切片して蜜に浸し、少時して炙き乾し、焦げ過ぎぬやうにして數回繰返し、一日三回、細に嚼んで鹽湯で服す。これを瞑眩膏と名ける。(普濟)【全身の浮腫】果實を生じ了つた蘿蔔、浮麥等分を湯に浸して飲む。(聖濟總錄)【脚氣走痛】蘿蔔の煎湯で洗ひ、同時に晒し乾した蘿蔔の末を足袋の底に鋪く。(聖濟總錄)【偏、正頭痛】生蘿蔔汁を蜆殼に一つだけ、仰臥して左右に隨つて鼻中に注ぐ。神效がある。王荊公が頭痛を病んだとき、ある道人がこの方を傳授して間もなく癒えた。これで人の病を治した例は枚擧に遑ない。(如宜方)【失音不語】蘿蔔を生で擣いた汁に薑汁を入れて共に服す。(普濟方)【喉痺腫痛】蘿蔔汁と皂莢漿を和して服し、吐を取る。(同上)【滿口爛瘡】蘿蔔の自然汁で頻に嗽いで涎を去るが妙である。(瀕湖集簡方)【烟熏のために死せんとするもの】方は發明の項に記載してある。【湯火傷灼】生蘿蔔を擣いて塗る。子でもよし。(聖濟總錄)【火花で肌を傷めたとき】方は上に同じ。【打撲の血聚】皮の破れぬものには、蘿蔔、或はその葉を用ゐ、

擣いて封ずる。(邵氏方)

子　氣味　【辛く甘し、平にして毒なし】　主治　【研汁を服すれば風痰を吐す。醋と共に研つて用ゐれば腫毒を消す】(日華)　【氣を下し、喘を定め、痰を治し、食を消し、脹を除き、大、小便を利し、氣痛、下痢後重を止め、瘡疹を發する】(時珍)

發明　震亨曰く、萊菔子は痰を治するに墻を推し壁を倒すやうな功がある。時珍曰く、萊菔子の功は氣を利するに特長があつて、生では能く升り、熟すれば能く降り、升つては風痰を吐し、風寒を散じ、瘡疹を發し、降つては痰喘、欬嗽を定め、下痢後重を調へ、內痛を止める。いづれも氣を利するの效果であつて、予は嘗てこれを用ゐて果して著しい成績を擧げた。

附方　舊二、新十四。　【上氣痰嗽】喘促して膿血を唾するには、萊菔子一合を研細し、湯に煎じて食上に服す。(食醫心鏡)　【肺痰欬嗽】萊菔子半升を淘淨し、焙じ乾して黃に炒つて末にし、糖で和して莧子大の丸にし、綿で裹んで含み、汁を嚥む。甚だ妙である。(勝金方)　【齁喘痰促】味の膿厚な物を食ふと發するものだ。蘿菔子を淘淨し、蒸熟し晒して研り、薑汁に浸した蒸餅で綠豆大の丸にし、一日三回、三十丸づ

つを口津で嚥み下す。これを淸金丸と名ける。(醫學集成)【痰氣喘息】蘿蔔子を炒り、皂莢を燒いて性を存し、等分を末にして薑汁と煉蜜とで梧子大の丸にし、五七十丸づつを白湯で服す。(簡便單方)【久嗽痰喘】蘿蔔子を炒り、杏仁を皮、尖を去つて炒り、等分を蒸餠で麻子大の丸にし、三五丸づつを時時に津で嚥む。(醫學集成)【老人の氣喘】蘿蔔子を炒つて研末し、蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。(衞生祕覽)【風痰の宣吐】勝金方では、蘿蔔子末三錢を溫水で調へて服す。良久して涎沫を吐出する。もし攤緩風の患者ならば、この方で吐して後に緊疎藥を用ゐ、疎して後に和氣散を服して瘥を取る。○丹溪の吐法では、蘿蔔子半升を細に擂り、水一椀で濾して汁を取り、その汁に香油、及び蜜少量を入れて溫服し、後に桐油に浸して晒し乾し、鵞翎で探吐する。【中風口禁】蘿蔔子、牙皂莢各二錢を水で煎じて服し、吐を取る。(丹溪方)【小兒の風寒】蘿蔔子を生で研末し、一錢を溫めた葱酒で服して徵汗を取る。大いに效がある。(衞生易簡方)【風祕、氣祕】蘿蔔子を炒つて一合を水に擂り、皂莢末二錢を和して服す。立ろに通ずる。(壽域神方)【氣脹、氣蠱】萊菔子を研つて水で汁を濾し取り、縮砂一兩を一夜浸して炒り乾し、また浸してまた

炒り、凡そ七回繰返して末にし、一錢づつを米飮で服す。神の如き效がある。（朱氏集驗方）【小兒の盤腸】氣痛するには、蘿蔔子を黃に炒つて研末し、半錢を乳香湯で服す。（楊仁齋直指方）【年久しき頭風】萊菔子、生薑等分を搗いて汁を取り、麝香少量を入れて鼻中に搐入する。立ろに止む。（普濟方）【牙齒の疼痛】蘿蔔子十四粒を生で研つて人乳で和し、左の疼くには右鼻に點け、右の疼くには右鼻に點ける。【瘡疹の出ぬもの】蘿蔔子を生で研末し、二錢を米飮で服するが良し。（衞生易簡方）

花【主治】【糟下酒で淹藏して食ふ。甚だ美味にして目を明にする】（士良）

生薑（一）（別錄中品）

和名　しやうが
學名　Zingiber officinale, L.
科名　しやうが科（蘘荷科）

【校正】もとは乾薑の條下に附してあつたが、此には一條を分離して掲げ、本書には草部から此に移し入れた。

【釋名】時珍曰く、按ずるに、許愼の說文には薑を彊と書き「濕を禦ぐの菜な

（一）牧野云フ、しやうがハ蓋シ太平洋諸島ノ原産デアラウト謂ハレテヰルが、今日デハ諸國一般ニ廣ク栽培セラレテヰル我邦デハ極メテ稀ニ花穗ヲ出スコトがアルが花ハ開クニ至ラヌ、おほしやうがト云フモノハ、地下莖ノ巨大ナ一品デアル

ガ、支那ニ多ク產スル。

(二)犍爲ハ金部錫ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ山ヲ川ニ作ル。

(四)荊州ハ草部隰草類茺蔚ノ註ヲ見ヨ、揚州ハ草部山草類朮ノ註ヲ見ヨ。

(五)漢ハ石部特生礜石漢州ノ註ヲ見ヨ。温州ハ石部鹵石類食鹽ノ註、池州ハ石部鹵石類綠礬ノ註ヲ見ヨ。

り』としてある。王安石の字說には『薑は能く百邪を疆禦するものだ。故に薑といつたのだ』とある。初生の嫩(やはらか)なものでその尖(さき)の微紫色なるを紫薑と名け、或は子薑と書く。宿根を母薑といふ。

【集解】別錄に曰く、生薑、乾薑は(二)犍爲(けんゐ)の(三)山谷、及び(四)荊州、揚州に生ずる。九月に采(と)る。

頌曰く、處處にあるが、(五)漢、温、池州のものを良しとする。苗は高さ二三尺、葉は箭竹葉(せんちくえふ)に似て長く、兩兩相對する。苗は青く、根は黃で、花、實はない。秋期に根を採る。

時珍曰く、薑は原地、陽地、沙地に適し、四月に母薑を取つて種(う)ゑると五月に苗が生え、初生は嫩蘆(どんろ)のやうで、葉はやや濶(ひろ)く、竹葉に似て對生する。葉もやはり辛香だ。秋社の前後に新芽が頓に成長し、指を列べたやうな狀態になり、取つて食へば筋がない。これを子薑といふ。秋

分後のものはこれに次ぎ、降霜後には老いる。性濕洳を悪んで日を畏れるものだ。それゆゑに秋熱すると薑がない。呂氏春秋に『和の美なるものに楊樸の薑あり』とある。楊樸とは西蜀に在る地名だ。春秋運斗樞には『璇星散じて薑となる』とある。

〔六〕氣味　『辛し、微溫にして毒なし』藏器曰く、生薑は溫である。熱ならしめんとするときは皮を去り、冷ならしめんとするときは皮を留める。

元素曰く、辛くして甘く、溫である。氣、味倶に厚く、浮にして升る。陽である。

〇之才曰く、秦椒が使となる。半夏、莨菪の毒を殺す。黃芩、黃連、天鼠糞を悪む。

弘景曰く、久しく服すれば志を少き、智を少き、心氣を傷る。現に一般に噉ふ辛辣の物では、ただこの物だけが最も尋常だ。故に論語に『食する毎に薑を撤せず』とある。それは常に食ふがよしといふ意味だ。但し多食してはならない。病がある者には效能がある。

恭曰く、本經に『薑は久しく服すれば神明に通じ、痰氣に主效がある』といつてある。これは常に噉つて差支ないものだ。陶氏は謬にかやうな說をなしてゐるが、

〔六〕木村(康)曰ク、(成分)根莖ニハ辛味成分「チンゲロン」ヲ含有ス。カツテ「ギンゲロール」ナル名稱ヲ與ヘラレシモノハ「チンゲロン」ノ粗製品ナリ、油狀ノ辛味成分ヲ「ショーガオール」ト言フ、根莖中ノ精油含料ハ一.%内外ニシテ、其成分ハ「チンギヘレン」、「チンギベロール」、「チトラール」「メチルヘプテン」、「ノニルアルデヒド」「リナロール」、右旋「ボルネオール」等ナリ。野村博―化誌大正六

検討して見るに根據がない。

思邈曰く、八九月に多く薑を食へば春に至つて多く眼を患ひ、壽を損じ、筋力を減ずる。妊婦がこれを食へば(七)盈指の兒が生れる。

杲曰く、古人は『秋は薑を食つてはならぬ、人をして氣を瀉せしめるものだ』といつた。蓋し夏期には火が旺で、汗し散ずべきものだから薑を食ふことを禁ぜぬのだが、辛は氣を走し、肺を瀉するものだから秋期には禁じたのだ。晦菴語錄にもやはり『秋薑は人の天年を夭する』といふ言葉がある。

時珍曰く、薑を食ふことが久しきに亙れば積熱して目を患ふ。予(時珍)は屢々試みた實驗上誤らない。凡そ痔病の人は、多くこれを食ひ、また兼て酒を飲めば立ろに發すること甚だ速だ。癰瘡の人が多く食へば惡肉を生ずる。これはいづれも昔の人の言はなかつたところである。相感志には『糟薑の瓶の內へ蟬蛻を入れると老薑でも筋が無くなる』とある。やはり物の性に伏するところがあると見える。

(八)【主　治】【久しく服すれば臭氣を去り、神明に通ずる】(本經)【五臟に歸し、風邪、寒熱、傷寒、頭痛、鼻塞、欬逆、上氣を除き、嘔吐を止め、痰を去り、氣を下

(三八)二九九—化誌大正七（三九）七〇六—東北理紀要二(I五六五、五八一、五八九)一六。E. K. Nelson; T. Am. Ch. Soc. Trans. 1917 (III) 777; 1917 (III) 794. Brooks; T. Am. Ch. Soc. 1916 (38) 430.

(七) 盈指ハ六ツ指。

(八) 木村(康)曰ク、生薑ハ香辛性健胃藥トシ又矯臭藥トス、藥局方製劑ハ生薑丁

幾、生薑舍利別ナリ。漢方ニテ重要ナルノミナラズ民間藥方ニモ種種用キラル。又調味上ニモ重要ナル食品ナリ。

(九) 木村(康)曰ク、今漢藥トシテ薑根ヲ見ルニ、本草書ニ生薑、乾生薑、均薑、乾薑、炮薑等ノ別ヲアグル事ニヨリ知ラルル如ク、生薑ハ俗ニイフひねしやうが

す」(別錄)「水氣滿を去り、欬嗽、時疾を療じ、半夏を和すれば心下の急痛に主效があり、杏仁を和して煎にすれば急痛氣實、心胸擁膈、冷熱氣を下して神效がある。擣汁に蜜を和して服すれば、中熱嘔逆で食物の落付かぬを治す」(甄權)「煩悶を散じ、胃氣を開く。汁を煎にして服すれば、一切の結實、胸膈を衝く惡氣を下すに神驗がある」(孟詵)「血を破り、中を調へ、冷氣を去る。汁は藥毒を解す」(藏器)「壯熱を除き、痰喘、脹滿、冷痢、腹痛、轉筋、心滿を治し、胸中の臭氣、狐臭を去り、腹內の長蟲を殺す」(張鼎)「脾、胃を益し、風寒を散ず」(元素)「菌蕈、諸物の毒を解す」(吳瑞)「生で用ゐれば發散し、熟して用ゐれば中を和し、野禽を食つた中毒から起る喉痺を解す。浸した汁を赤眼に點け、擣汁に黃明膠を和して熬つて風濕痛に貼るが甚だ妙である」(時珍)

乾生薑 (九) 主治 「嗽を治し、中を溫め、脹滿、霍亂の止まぬもの、腹痛、冷痢、血閉を治す。病人の虛して冷ゆるにはこれを加へるが宜し」(甄權)「薑屑に酒を和して服すれば偏風を治す」(孟詵)「肺の經の氣分の藥であつて、能く肺を益す」(好古)

發明 成無已曰く、薑、棗は味辛く甘く、專ら脾の津液を行して營衛を和す

即チ生ノ薑根ヲ用ウルモノニシテ、漢方中生薑トシテ記サルルモノハ、實ニ此ノ眞味ノ生薑ナサスモノナリ、而シテ乾生薑ト稱スルモノコソ今日ノ本邦生藥市場ニ生薑トシテ取扱ハルルモノニ充當スベク、民間人漢藥商ハ大薑ヲ以テ乾燥シタル均薑ヲ扱ヘドモ、乾生薑ハ之ヲ扱ハザルガ如シ、乾薑ハ薑根ヲ蒸シテ後乾燥シタルモノ、邦産、民國共ニ市場ニアリ、概シテ邦産ノモノ小形ナルト雖モ、混ズル時ハ一見シテ區別スルハ容易ナラズ。澱粉モ糊化セルヲ以テ澱粉粒ニヨリテモ區別ス可ラズ、僅ニ氣味ニヨリテ之ヲ知ルノミ、又薑根ヲ黑

る薬の中に用ゐる。獨り發散だけに專なるものではない。

杲曰く、生薑の用途に四ある。半夏、厚朴の毒を解するが一、風寒を發散するが二、棗と共に用ゐれば辛、溫にして脾、胃の元氣を益し、中を溫め、濕を去るが三、芍藥と共に用ゐれば經を溫め、寒を散するが四である。孫眞人は『薑は嘔患者に對する聖藥だ』といつたが、蓋し辛は散ずるもの、嘔は氣逆して散ぜぬもので、この藥は陽を行して氣を散ずるのである。或る者は問ふて『生薑の辛溫は肺に入るものだ。胃口に入るといふは如何なるわけか』といふが、それは『俗に心下を胃口としてゐるが、それは正しくない。咽門の下は有形の物を受けて胃の系に及ぼすものだ。これが便ち胃口であつて、肺の系と同行するものだ。故に能く肺に入つて胃口を開く』のである。また『一般に「夜間には生薑を食ふな、人をして氣閉せしめる」といふは何故か』といふに、それは『生薑は辛、溫にして開發を主とするものだ。夜間には氣が本來收斂する。然るに反つてこれを開發するは自然の法則に違背するからだ。病人の場合にはさうと限るわけに行かぬ』のである。生薑屑は乾薑に比すれば熱せず、乾生薑に比すれば溫せぬものだ。乾生薑を乾薑の代用とするは、それな

焼トシタル炮薑ハ、我ガ和漢藥店ニハ之ヲ見ザルガ如シ。

ればより以上僭越な働をせぬからである。俗に『上牀の蘿蔔、下牀の薑』といふは、薑は能く胃を開き、蘿蔔は食物を消化するものだからだ。

時珍曰く、薑は辛にして葷ならず、邪を去り、惡を辟けるもので、生で啖ふにも、熟して食ふにも、醋、醬、糟、鹽にも蜜煎にも調和にも宜からぬはなく、蔬菜になり、調和劑になり、果子になり、藥になる。その利用範圍の廣いものだ。凡そ早朝の旅行や山行には一塊を含むが宜し。霧露、淸濕の氣、及び山嵐、不正の邪に犯されない。按ずるに、方廣心法附餘に『凡そ中風、中暑、中氣、中毒、中惡、乾霍亂、一切の突然に發る劇しき病には、薑汁と童尿とを服すれば立ろに解し散ずる』とある。蓋し薑は能く痰を開き、氣を下し、童尿は火を降すものである。

頌曰く、崔元亮集驗方に、敕賜薑茶治痢方――生薑を細に切つて好き茶一二盌を和し、任意に呷へばそれで瘥える。熱痢の場合は薑の皮のあるまゝ用ゐ、冷痢には皮を去るが大いに妙だとの記載がある。

楊士瀛曰く、薑は能く陽を助け、茶は能く陰を助け、二物いづれも惡氣を消散するもので、陰陽を調和し、且つ濕熱、及び酒食、暑氣の毒を解す。痢の赤、白を問

(一〇)大觀ニ二ヲ八ニ作ル。又附子一兩ヲ四兩ニ作ル。

(一一)大觀ニ千金方ノ三字アリ。

(一二)大觀ニ二ヲ一ニ作ル。醋漿二合ヲ七合ニ作ル。

はず通じて用ゐて宜し。蘇東坡が文潞公を治して有效だつた。

【附方】 舊二十、新三十。【痰澼卒風】生薑(一〇)二兩、附子一兩、水五升を二升に煮取り、二回に分服する。猪肉、冷水を忌む。(千金)【胃虛風熱】食事不能なるには、薑汁半盃、生地黃汁少量、蜜一匙、水二合を和して服す。(食療本草)【虐疾寒熱】脾胃痰が聚つて發して寒熱となるには、生薑四兩を擣いて自然汁一酒盃を一夜露し、發作の日の五更に北に向つて立つて飲めば直に止まる。なほ止まらぬときは再服する。(易簡)【寒熱痰嗽】初期には、燒薑一塊を含咽する。(本草衍義)【欬嗽の止まぬもの】生薑五兩、餳半升を火で煎熟して食ひ盡せば癒える。段侍御はこれを用ゐて效があつた。(初虞世必效方)【久患欬噫】生薑汁半合、蜜一匙を煎じ、溫めて呷ふ。三服で癒える。(外臺祕要方)【小兒の欬嗽】生薑四兩を煎じた湯で浴する。(千金方)【暴逆氣上】薑二三片を嚼む。屢〻效があつた。(寇氏衍義)【乾嘔厥逆】頻りに生薑を嚼む。嘔患者の聖藥である。(一一)【嘔吐して止まぬもの】生薑(一二)二兩、醋漿二合を銀器で四合に煎じ取り、滓共に呷ふ。また服內の長蟲を殺す。(食醫心鏡)【心痞嘔噦】心(一三)下の痞堅するには、生薑八兩、水三升を一升に煮取り、半夏五合を洗つて水五升で一

升に煮て汁を取り、共に煮て一升半にし、二回に分服する。(千金)【反胃羸弱】兵部手集では、母薑二斤の擣汁で粥を作つて食ふ。○傳信適用方では、生薑を切片し、蔴油で煎じて末にし、軟綿にその末を蘸けて嚼み嚥む。【霍亂で死せんとするもの】生薑五兩、牛兒屎一升、水四升を二升に煎じ、二回に分服すれば止まる。(梅師方)【霍亂轉筋】腹に入つて死せんとするには、生薑三兩を擣き、酒一升で煮て二三沸して服し、同時に薑を擣いて痛處に貼る。(外臺秘要)【霍亂腹脹】吐、下し得ぬには、生薑一斤、水七升を二升に煮取り、三回に分服する。(肘後方)【腹中脹滿】薑を煨いて綿で裹んで下部に納れ、冷えれば易へる。(梅師)【胸脇滿痛】凡そ心胸、脇下に邪氣の結實があつて硬痛し脹滿するには、生薑一斤を擣滓し、汁をば取つて置き、慢に炒つて潤ふを待つて絹で包み、患部に置いて丁寧に熨す。冷えれば再び汁で炒つて再び熨す。良久してさつぱりとして寛快になる。(陶華傷寒撮法)【大便不通】生薑を長さ二寸に削り、一鹽を塗つて下部に納れる。立ろに通ずる。(外臺)【冷痢の止まぬもの】(一四)生薑を煨き研つて末にし、乾薑末と等分を醋と麪で和して餛飩にし、先づ水で煮てまた(一五)清飲で煮過し、停めて冷し、一日一回十四箇を呑んで粥で送下する。(食療)

(一三)大觀ニ中ニ作ル。

(一四)大觀ニ生薑ヲ取椒ノ二字ニ作ル。

(一五)大觀ニ清ヲ稀ニ作ル。

【消渇飲水】乾生薑末一兩を鯽魚膽汁で和して梧子大の丸にし、七丸づつを米飲で服す（聖惠）【濕熱發黃】生薑を時時に全身に擦る。その黃は自ら退く、ある方では、茵蔯蒿を加へるが尤も妙である、（傷寒鎚法）【暴赤眼腫】宗奭曰く、古銅錢で薑を刮り、その錢唇の汁を取つて點ける。淚が出て、今日點ければ明日癒えること疑なし。

○一には、暴風客熱で目赤く、睛痛んで腫れるを治す。臘月に取つた生薑を擣き絞つた汁を陰乾して粉を取り、銅靑末等分を入れ、少量づつを沸湯に泡けて澄淸し、溫めて洗ふ。淚が出て妙である。【舌上の生胎】諸病の舌胎には、布を井水に染めて抹し、後に薑片で時時に擦れば自ら去る。（陶華方）【滿口爛瘡】生薑の自然汁で頻頻と漱いで吐く。また末にして搽るもよし。甚だ效がある。【牙齒疼痛】老生薑を瓦で焙じ、枯礬末を入れて共に擦る。ある人は日夜呻吟したが、これを用ゐて癒えた。（普濟方）【喉痺毒氣】生薑二斤の擣汁と蜜五合を煎じまぜ、一日五回、一合づつを服す。（一一六）【鳩を食つた中毒】【竹雞を食つた毒】【鷓胡を食つた毒】方はいづれも禽部の本條にある【高苣の中毒】【諸藥の中毒】【狂犬の咬傷】いづれも生薑汁を飲めば解す（小品）【虎に傷けられた瘡】生薑汁を內服し、外部を汁で洗つて白礬末を傅

一一六〕大觀ニ千金方ノ三字アリ。

ける。(秘覽)【蝮蛇の螫傷】薑末を傅け、乾けば易へる。(千金)【蜘蛛の咬傷】薑を炮いて切片して貼るが良し。(千金)【刀、斧の金瘡】生薑を嚼んで傅ける。動いてはならぬ　次の日には肉が生じて甚だ妙である。(扶壽方)【手、足の閃拗】生薑、葱白を擣き爛らし、麪を和して炒熱して罨ふ。【跌撲傷損】薑汁と酒とで生麪を調へて貼る。【あらゆる蟲の耳に入りたるとき】薑汁少許を滴す。【腋下狐臭】薑汁を頻に塗れば根を絕つ。【赤、白癜風】生薑を頻に擦るが良し。(いづれも易簡)【兩耳の凍瘡】生薑の自然汁を熬つて膏にして塗る。(暇日記)【發背の初期】生薑一塊を炭火で炙いて一層を刮り、一層を末にして猪膽汁で調へて塗る。(海上方)【疔瘡腫毒】方は白芷の條下にある。【諸瘡痔漏】久しく痂を結せぬには、生薑を皮のまま大片に切り、白礬末を塗つて炙き焦し、研細して貼る。動かしてはならぬ。良效がある。(普濟)【產後の血滯】心に冲して下らぬには、生薑五兩、水八升(一七)を煮て服す。【產後の肉線】ある婦人が、產後に力業をしたために長さ三四尺の肉線を垂下し、觸れば痛みが心腹に引いて絕命せんとする狀態に陷つたことがある。その時ある道人が、老薑を買はせて皮のまま三斤を擣き爛らし、蔴油二斤を入れてよく拌ぜて炒乾し、先づ練つた絹

(一七)大觀ニ升字下三升分三ノ四字アリ、又服下ニ揚氏產乳ノ四字アリ。

五尺を折つて方結にし、それで輕く肉線を盛り起して屈曲せしめ、三圍にして產戶に納れ、かくて先の薑を絹袋に盛つて近づけて熏じ、冷えると更に換へさせた。すると一晝夜にして大半縮入し、二日にして完全に入つた。道人は『これは魏夫人が祕傳の怪病方で、ただ線を斷らせてはならぬものだ。斷れては治らない』といつた。

【脈溢怪症】ある者は毛竅から節次に出血して止まず、皮は鼓のやうに脹り、須臾にして目、鼻、口が氣せられて脹れ合さつた。これは脈溢といふ病である。生薑の自然汁と水と各半盞を和して服ませると平安になつた。(いづれも夏子益奇疾方)

薑皮　氣味　【辛し、涼にして毒なし】　主治　【浮腫、腹脹、痞滿を消し、脾、胃を和し、瞖を去る】(時珍)

附方　舊一。【髭髮の白を拔いて黑に換へる】老生薑を刮つた皮一大升を、久しく用ゐて油の干著いた鍋を洗はずそのままの中に入れ、氣の通らぬやうに固濟し、眞面目な人に番をさせて文武火で煎じ、火力を急にせぬやうに注意して朝から日暮まで煎じて十分である。それを研つて末にし、白きを拔いた後へ、先づ小さい物に蔴子大ほどを點けてその毛孔に入れる。或は鬚下に點けて然る後に拔いて指で

撚り入れる。三日後には黑毛を生じて神效がある。李卿はこれを用ゐて效驗があつた。（蘇頌圖經本草）

葉　〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】〔主治〕【鱠を食つて成つた癥は、擣汁を飲めば消する】（張機）

〔附方〕新一。【打撲傷の瘀血】薑葉一升、當歸三兩を末にし、一日三回、溫酒で方寸匕を服す。（范汪東陽方）

乾薑（本經中品）

和名　かんきやう
洋名　Dry Ginger.

〔校正〕草部より移して此に置く。

〔釋名〕**白薑**　下文を見よ。

〔集解〕弘景曰く、乾薑は、今ではただ(一)臨海(二)章安に產し、(三)數村で作るだけだ。蜀、漢の薑が舊は美いものだつた。荊州には好い薑はあるが(四)並に乾にすることが不能だ。凡そ乾薑を作る法は、水に三日漬けて皮を去り、流水中に六日間置いて更に皮を刮り去り、然る後に晒し乾し、(五)瓷缸に入れて三日間釀して出來上る

(一)臨海ハ草部山草類丹參ノ註ヲ見ヨ。
(二)章安ハ後漢ノ縣名、今ノ浙江省台州府臨海縣ノ東南百十五支里ニ在リ。
(三)大觀ニ數村ヲ兩

三村䑕ノ四字ニ作ル。
（四）並ノ字大觀ニ據リ補入ス。
（五）大觀ニ置甕甌中謂之釀也トアリ。
（六）襄州ハ石部𤁲石ノ註、均州ハ草部毒草類藜蘆ノ註ヲ見ヨ。
（七）大觀ニ中ニ作ル。

ものである。

頌曰く、製造法は、根を採つて長流水で洗ひ、日光に晒せば乾薑となる。漢、溫、池州のものを良しとする。陶氏の說は漢州の乾薑法だ。

時珍曰く、乾薑は母薑で造るものだ。今は江西、（六）襄、均いづれでも造つてゐる。白く淨かな結實せるものを良しとする。故に一般に白薑といふのだ。又曰く、均薑はすべて藥に入れる。いづれも炮いて用うべきものだ。

［氣味］【辛し、溫にして毒なし】 𥭦曰く、苦く辛し。好古曰く、大熱である。保昇曰く、久しく服すれば目を暗くする。その他は生薑と同じ。時珍曰く、大清外術に『妊婦は乾薑を食つてはならぬ。胎內を消せしめるものだ』とある。蓋しその性が熱にして辛、散ずるものだからだ。

［主治］『胸滿、欬逆上氣。中を溫め、血を止め、汗を出し、風濕痺を逐ふ。腸澼下痢。生のものが尤も良し』（本經）【寒冷腹痛、中惡、霍亂、脹滿、風邪、諸毒、皮膚間の結氣。唾血を止める』（別錄）『腰腎（七）間の疼冷、冷氣を治し、血を破り、風を去り、四肢の關節を通じ、五臟、六腑を開き、諸絡脈を宣し、風毒、冷痺、夜小便多

きを去る】(甄權)【痰を消し、氣を下し、轉筋、吐瀉、(八)腹臟、反胃、乾嘔、瘀血、撲損を治し、鼻(九)紅を止め、冷、熱の毒を解し、胃を開き、宿食を消する】(大明)【心下の寒痞、目睛の久赤に主效がある】(好古)

【發明】元素曰く、乾薑は、氣薄く、味厚く、半沈み、半浮き、升によく、降によく、陽中の陰である。又曰く、大辛、大熱にして陽中の陽である。その用途に四あり、一には心を通じ、陽を助け、二には臟腑の沈寒、痼冷を去り、三には諸經の寒氣を發し、四には感寒、腹痛を治す。腎中に陽なくして脈氣の絕せんとするには、黑附子を引として水で煎じて服す。これを薑附湯と名ける。また中焦の寒邪を治す。これは寒淫の勝つところをば辛を以つて散ずるのである。又、よく下焦を補するものだから四逆湯にこれを用ゐる。乾薑の本來は辛いものだが、炮けばやや苦くなる。故に止つて移らない。能く裏寒を治するはそのためであつて、附子の行て止らぬやうなものではない。理中湯にこれを用ゐるのはこの物が陽を回らすものだからである。

李杲曰く、乾薑は、生では辛く、炮けば苦い。陽である。生では寒邪を逐ふて表

(八)大觀ニ臟ノ下ニ冷ノ字アリ。
(九)大觀ニ紅ヲ洪ニ作ル。

を發し、炮けば胃冷を除いて中を守る。多く用ゐれば元氣を耗散するは、辛は散ずるもので、この場合には壯火が氣を食するからである。生甘草を用ゐて緩にすべきものだ。辛、熱は裏寒を散ずるものだから、五味子と共に用ゐれば肺を溫め、人參と共に用ゐれば胃を溫める。

好古曰く、乾薑は心、脾の二經の氣分の藥である。故に心氣不足を補するのだ。或は『乾薑は辛、熱で脾を補すとはいはない。現に理中湯にこれを用ゐてあつて、泄するといふが補すと言はぬのは何故か』といふものもあるが、蓋し辛、熱は濕を燥し、脾中の寒濕、邪氣を泄するので、正氣を泄するのではない。又曰く、乾薑を服して中を治すれば必ず上に僭するものだから注意を要する。

震亨曰く、乾薑は肺中に入つて肺氣を利し、腎中に入つて下濕を燥し、肝經に入り、血藥を引いて血を生ずる。補陰の藥と共に用ゐればやはり能く血藥を引き氣分に入つて血を生ずる。故に血虛發熱、產後大熱にはこれを用ゐる。唾血、痢血を止めるには黑く炒つて用うべきものだ。血脫で、色が白くして夭して澤ならず、脈の濡なるものがある。これは大寒であつて、乾薑の辛、溫で血を益し、大熱で經を溫

むべきものである。

時珍曰く、乾薑は能く血藥を引いて血分に入り、氣藥を氣分に入れ、また能く惡を去り、新を養ふ。陽生じて陰長するの意がある。故に血虚のものにこれを用ゐるのだ。凡そ一般に吐血、衄血、下血し、陰あつて陽なきものにはやはりこれを用ゐるが宜し。これは熱因熱用の從治の法である。

附方　舊十六、新十二。【脾胃の虚冷】食事が落ちつかず、久しきに亙つて羸弱すれば瘵となるものである。溫州の白乾薑を漿水で煮透して取出し、乾して末に擣き、陳廩米で煮た粥飲で梧子大の丸にし、三五十丸づつを白湯で服す。その效神の如きものだ。（蘇頌圖經）【脾、胃虚弱】飲食が減少し、傷み易く、化し難く、無力にして肌瘦するには、乾薑を頻に硏つて四兩を用ゐ、白餳を切つた塊を水に浴して鐵銚に入れて溶化したもので和して梧子大の丸にし、空心に米飲で三十丸づつを服す。（十便方）【頭運吐逆】胃冷で痰が生ずるものである。川乾薑を炮いて二錢半、甘草を炒つて一錢二分、水一鍾半を半に煎じ減し、累りに服用すれば效がある。（傳信適用方）【心、脾の冷痛】胃を暖めて痰を消する二薑丸——乾薑、高良薑等分を炮いて研末

（一〇）合州ハ草部芳草類牡丹ノ註ヲ見ヨ。

し、糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを食後に猪皮湯で服す。（和劑局方）【心氣卒痛】乾薑末一錢を米飲で服す。（外臺祕要）【陰陽易病】傷寒後の婦人は、たとひ病が瘥えても百日未滿には男子と交合してはならぬ。ために病となつて拘急し、手足が拳し、腹痛して死せんとする危險に陷る。これを男子の場合は陰易と名け、婦人の場合は陽易と名ける。速に汗すれば癒えるが、滿四日を經過しては望がない。乾薑四兩を末にし、半兩づつを白湯で調へて服し、寢具を被る。汗を出して後には手、足が伸びて癒える。（傷寒類要方）【中寒水瀉】乾薑を炮いて末にし、粥飮で二錢を服すれば效がある。（千金方）【寒痢青色】乾薑を大豆大に切り、米飲で六七箇づつを服す。日中三回、夜間一回。累りに用ゐて效を得た。（肘後方）【血痢の止まぬもの】乾薑を黑く燒いて性を存し、放冷して末にし、一錢づつを米飲で服す。神の如き妙效がある。（姚氏集驗）【脾寒瘧疾】外臺では、乾薑、高良薑等分を末にし、一錢づつを水一盞で七分に煎じて服す。○又、乾薑を黑く炒つて末にし、發作時に臨んで溫酒で三錢匕を服す。【冷氣欬嗽】結脹するには、乾薑末半錢を熱酒で調へて服す。或は餳糖で丸にして噙む。（姚僧垣方）【欬嗽上氣】（一〇）合州の乾薑を炮き、皂莢を炮いて皮子、及

び蛀のついた部分を去り、桂心の紫色のものを皮を去り、いづれも擣き篩つて等分を用ゐ、錬つた白蜜を和して（一）三千杵擣いて梧子大の丸にし、毎服三丸を嗽の發するとき飲で服す。一日三五服。葱、麪、油で熬りつけた物を食ふことを禁ず。その效神の如きものだ。禹錫が淮南にゐたとき、同寮李亞がこれで人を治してやつてゐたが、方をば示さなかつた。或る者がそれを吝むものとして非難すると、李は「凡そ世間では、一般に嗽を患ふものには多く冷藥を進めてゐる。この方は熱燥の藥を用ゐてあるのだから、その方を示したならば必ず服まうとせぬだらうと思ふ。それゆゑに方をば示さずに藥だけを出してやるのだが、多くは奏效してゐる」といつた。實際試みるに確にその通りであつた。（劉禹錫傳信方）【虚勞の不眠】乾薑を末にして湯で三錢を服し、微汗を取り出す。（千金方）【吐血して止まぬもの】乾薑を末にし、童尿で一錢を調へて服するが良し。【鼻衄の止まぬもの】乾薑を尖に削り、煨いて鼻中を塞げば止まる。（二）【齆鼻で通ぜぬもの】乾薑末を蜜で調へて鼻中を塞ぐ。（三）（廣利方）【冷涙目昏】乾薑粉一字を湯に炮け、點けて洗ふ。（聖濟錄）【赤眼澀痛】白薑末を水で調へて足心に貼るが甚だ妙である。（普濟方）【突然視力の缺乏するもの】母薑

（一）大觀ニ一二ニ作ル。
（二）大觀ニ廣利方ノ三字アリ。
（三）大觀ニ廣利方ヲ千金方ニ作ル。

を嚙んで一日六七囘舌で舐める。視力の囘復するを度とする。(聖濟錄)【突然目中の痛むもの】乾薑を圓く滑に削つて眥中に納れ、汁が出るときは拭ふ。なほ痛が盡きぬときは更に更へる。(千金)【牙痛の止まぬもの】川薑を炮き、川椒と等分を末にして摻る。(御藥院方)【斑豆厥逆】斑豆で涼藥を過多に服し、手、足が厥冷して脈の微なるには、乾薑を炮いて二錢半、粉甘草を炙いて一錢半、水二鍾を一鍾に煎じて服す。(龐安常傷寒論)【癰疽の初期】乾薑一兩を紫に炒つて研末し、醋で調へて頭だけを殘して四圍に傅ければ自ら癒える。これは東昌の申一齋の奇方である。(諸症辨疑)【瘰癧の斂らぬもの】乾薑を末にして薑汁で作つた糊で和して劑とし、黃丹を衣にかけ、毎日瘡の大小に隨つて內にその藥を入れる。膿を追ひ盡して肉を生ずるものだ。口の合するを度とする。もし合せぬときは葱白汁で大黃末を調へて搽れば癒える。(救急方)【虎、狼に傷けられたとき】乾薑末を傅ける。(肘後方)【狂犬の咬傷】乾薑末二匕を水で服す。生薑汁で服するも良し。幷に薑を炙き熱して熨してからそれを傅ければ定まる。(廣川方)

附錄 **天竺乾薑**(拾遺) 藏器曰く、味辛し、溫にして毒なし。主治は冷氣寒

中、宿食不消、腹脹、下痢、腰背痛、痃癖氣塊、惡血積聚。（一四）婆羅門國に生ずる。

一名胡乾薑といふ　形狀は薑に似て小さく、黃色である。

（一）同　蒿（宋嘉祐）

和名　しゆんきく
學名　Chrysanthemum coronarium, L. var. spatiosum, Bailey.
科名　きく科(菊科)

【釋名】蓬蒿　時珍曰く、形狀も氣も蓬蒿と同じだからかく名けたのだ。

【集解】禹錫曰く、本草に形狀の記述がなく、後世一般に識るものがない。
時珍曰く、同蒿は八九月に種を下し、冬、春に肥えた莖を採つて食ふ。花、葉は微に白蒿に似たもので、その味は辛く甘く、蒿の臭氣があり、四月臺が起つて高さ二尺餘になり、深黃色の花を開く。その花の形狀は單瓣の菊花のやうで、一箇の花に百近くの子を結び、毬になつて地松、及び苦蕒子のやうだ。最も

〔同　蒿〕

（一四）婆羅門國ハ印度ノ一地方ヲ指スモノカ。

（一）牧野云フ、今日我邦デハ一般ニ栽培セラレテ一ノ蔬トナツテヰルガ、原トハ支那カラ傳ヘタモノデアラウ、原種ハ地中海地方ノ産デアルガ、其レハ花草トシテ今日我邦デモ作ツテヰル、之レナはなしゆんきくト稱スル其葉ハ蔬ノしゆんきくヨリハ細裂シテヰル。

繁茂し易いものである。この菜は古からあつたもので、孫思邈は千金方の菜類に記載し、宋の嘉祐中に至つて始めて本草に補入したもので、現に一般に通常食品としてあるものだ。汪機はそれを識らずして勝手にかやうな記事を編述したのであつて、誠に笑止なことである。

|氣味| 【甘く辛し、平にして毒なし】禹錫曰く、多く食へば風氣を動じ、人の心を薫じ、人をして氣滿せしめる。|主治| 【心氣を安じ、脾、胃を養ひ、(三)痰飲を消し、腸、胃を利す】(思邈)

(二)邪蒿（宋嘉祐）

和名　無シ
學名　未詳
科名　繖形科

〔邪蒿〕

|釋名| 時珍曰く、この蒿は葉の紋がみな邪だからかく名けたのだ。

|集解| 藏器曰く、邪蒿は根、莖が青蒿に似て細く軟だ。

(三)大觀ニ水ニ作ル。

(二)牧野云フ、我邦ニ之レナキ品デアル、先輩之レヲやまにんじん并ニいぶきばうふうニ充テシハ誤デアル、救荒本草ニ邪蒿ノ圖ガアル、植物名實圖考ノ圖ハ救荒本草ノ圖ヲ基トシテ補筆シタモノデアル、其葉繁ク細裂シテ瞥見スレバくそにんじんノ如ク見ユレ

時珍曰く、三四月に苗が生え、葉は青蒿に似て色が淺く、臭くない。根、葉いづれも茹にし得る。

［氣　味］【辛し、温、平にして毒なし】詵(一)曰く、生で食へば微し風を動ずる。羮にして食ふが良し。胡荽と共に食つてはならぬ。汗に臭氣があるやうになる。

［主　治］【胸膈中の臭爛惡邪の氣。腸、胃を利し、血脈を通じ、不足の氣を續ぐ】(孟詵)【煮熟して醬醋を和して食へば、五臟の惡邪氣のために穀食を厭ふものを治し、脾、胃、腸癖、大渇熱中、暴疾、惡瘡を治す】(食醫心鑑)

胡荽(一)（宋嘉祐）

和名　こえんどろ
學名　Coriandrum sativum, L.
科名　繖形科

［釋　名］香荽(拾遺)　胡菜(外臺)　蒝荽　時珍曰く、荽を許氏の説文には葰と書いて『薑の屬であつて、口を香しからしめるものだ』といつてある。これは莖が柔く葉が細くして根に鬚が多く、綏綏然たるものだ。張騫が西域に使したとき始めて種を持ち歸つたといふので胡荽といつたのだ。今は俗に蒝荽と呼ぶ。蒝とは莖、

ド左ニハアラズ、松村氏ノ名彙ニ其品ト同定シテアルガ非デアル。

(一)牧野云フ、本品ハ地中海地方東部ノ原産デアルガ、今ハ諸處ニ栽培セラレテヰル、支那デハ能ク香味料トシテ使用セラレテヰルガ、我邦デハ餘リ顧ミラレナイ故ニ邦内ニ餘リ見ル事ガナイ、こえんどろハ葡語ノcoentro カラ來タモ

ノデアル。
（二）石勒ハ晉ノ五胡ノ一後趙ノ主ナリ。初メ并州ニ在ッテ奴トナル。
（三）并汾ハ山西省ノ中部地方。

葉の布散した有樣である。俗に芫花の芫の字を書くは正しくない。

藏器曰く、（二）石勒は胡の字を諱んだところから、（三）并、汾地方では胡荽を香荽と呼んだ。

【集解】時珍曰く、胡荽は處處で栽培する。八月種を下す。晦日が尤も良し。初生には莖が柔く、葉が圓く、葉に花岐があり、根は軟で白い。冬、春に採る。香美にして食へるものだ。また葅にするもよし。道家では五葷の一に數へてある。立夏の後に細い花が簇つて開き、芹菜花のやうで淡紫色だ。五月に子を收める。子は大麻子のやうで、やはり辛く香しい。

〔胡　荽〕

按ずるに、賈思勰の齊民要術に『六七月に種を蒔けば冬の竟るまで食へる。春期に子を挼んで水を沃げば芽種が生えるがそれは小さいもので、食品に供するだけだ』とある。王禎の農書には『胡荽は蔬菜

中でも子と葉といづれも用ゐ得るもので、生、熟いづれでも食へる。甚だ世に益あるものだ。肥地に種ゑるがよし』とある。

【正誤】李延飛曰く、胡荽は蕎子である。

呉瑞曰く、胡荽は俗に藠子と呼ぶもので、根、苗は蒜のやうだ。

時珍曰く、蕎子、卽ち藠子とは薤のことだ。李、呉二氏がいづれも胡荽としたのは誤である。

根葉【氣味】【辛し、溫にして微毒あり】詵曰く、平、微寒にして毒なし、生菜に和して食へる。この物は葷菜であつて、人の精神を損ずるものだ。華佗は『胡臭、口臭、䘌齒、及び脚氣、金瘡の人はいづれも食つてはならぬ。病が更にますます甚しくなる』といつた。藏器曰く、久しく食へば人をして多く忘れしめる。根は痼疾を發する。斜蒿と共に食つてはならぬ。人をして汗臭となり、難産せしめる。

時珍曰く、凡そ一切の補藥、及び藥中に白朮、牡丹のあるものを服したものはこれを食つてはならぬ。石鍾乳を伏す。

【主治】【穀物を消化し、五臟を治し、不足を補し、大、小腸を利し、小腹の氣

（四）大觀ニ歎ニ作ル。

を通じ、四肢の熱を拔き、頭痛を止め、沙疹を療ずる。豌豆瘡の出ぬものは、酒にして（三）飲めば立ろに出る。心竅に通ずるものだ】（嘉祐）【筋脈を補し、人をして能く食せしめ、腸風を治す。熱餅で裹んで食ふが甚だ良し】（孟詵）【諸菜と合せて食へば氣が香しく、人の口を爽ならしめ、飛尸、鬼疰、蠱毒を辟る】（吳瑞）【魚肉の毒を辟ける】（寧原）

【發明】時珍曰く、胡荽は辛く、溫にして香が竄するもので、內には心脾に通じ、外には四肢に達し、能く一切の不正の氣を辟ける。故に痘瘡が出て爽快ならぬものを能く發する。諸瘡はみな心火に屬し、營血は內に脾に攝するもので、心、脾の氣は芳香を得れば運行し、臭惡を得れば壅滯するものだからである。按ずるに、楊士瀛の直指方に『痘疹の不快なるには、胡荽酒を飲ませて惡氣を辟けるが宜く、床、帳の上下、左右にみなこれを掛けて汗氣、胡臭、天癸、淫佚の氣を禦ぐが宜し。專ら穢惡の必ず在るべきところに應ずるものだ。若し病兒が虛弱なる場合、及び天候が陰寒なる場合には、これを用ゐるが最も妙である。しかしその病兒が壯實である場合、及び春、夏の晴れて暖に陽氣の發越する時期に酒麴を加へては、膚を助け、

火を以て火を益し、胃中の熱が燥になり、毒血が聚畜し、ために變じて黒陷となるものだから愼重な注意を要する

【附方】舊五、新四。【瘮痘の不快】胡荽(五)二兩を切り、酒二大盞で煎沸してそれを沃ぎ、物で蓋定して氣の洩れぬやうにし、冷えるを候つて滓を去り、微しづつ含んで項、背から足まで悉くそれを噴く。頭、顔に噀いてはならぬ（經驗後方）【熱氣結滯】年を經て數々發するには、胡荽半斤を五月五日に採つて陰乾し、水七升で一升半に煮取り、滓を去つて分服する。なほ瘥えぬときは更に服す。春、夏は葉を、秋、冬は根、莖をいづれも用ゐる。（必效方）【孩子の赤丹】胡荽汁を塗る。（譚氏方）【顔面の黒子】胡荽の煎湯で日毎に洗ふ（小説）【産後に乳なきもの】乾胡荽の煎湯を飲むが效がある。（經驗方）【小便不通】胡荽二兩、葵根一握、水二升を一升に煎じ、滑石末一兩を入れて三四回に分服する。（聖濟總錄）【肛門脫出】胡荽を切つて一升を燒き、その煙で熏ずれば入る。（子母祕錄）【蟲の中毒を解す】胡荽根の擣汁半升を酒に和して服す。立ろに下つて神驗がある（必效方）【蛇虺の螫傷】胡荽苗、合口椒等分を擣いて塗る。（千金方）

(五) 大觀ニ三二ノ二字ニ作ル。

子 (六)【氣　味】【辛く酸し、平にして毒なし】炒つて用ゐる。【主　治】【穀を消し、食を能くする】(思邈)【蠱毒、五痔、及び肉食の中毒で血を吐下するには、煮汁を冷服する。又、油で煎じて小兒の禿瘡に塗る】(藏器)【痘疹を發し、魚腥を殺す】(時珍)

【附　方】舊三、新四。【諸肉食の毒】血を吐下して止まず、痿黄するには、胡荽子一升を煮て發裂せしめ、汁を取つて半升を冷服する。晝夜各一服すれば止まる。(食療本草)【腸風下血】胡荽子を生菜に和し、熱餅で裹んで食ふ。(普濟方)【痢、及び瀉血】胡荽子一合を炒つて末に擣き、毎服二錢を、赤痢には砂糖水で服し、白痢には薑湯で服し、瀉血には白湯で服す。一日二回。(普濟方)【五痔の痛むもの】胡荽子を炒つて末にし、二錢づつを空心に溫酒で服す。數服で效が現れる。(海上仙方)【痔漏脫肛】胡荽子一升、粟糠一升、乳香少量を小口瓶に入れ、烟に燒いて熏ずる。(儒門事親)【腸頭の挺出】秋、冬は胡荽子を擣いて醋で煮て熨す。甚だ效がある。(孟詵食療本草)【牙齒の疼痛】胡菜子、卽ち胡荽子五升を水五升で一升に煮取つて含漱する。(外臺祕要)

(六) 木村(康)曰ク、こゑんどろノ果實ニハ約一%ノ精油ヲ含有シ、其大部分ハ「デルタリナロール」ニシテ其他「ピネン」、「テルピネン」、「パラシモール」、「アペンチン」、「テルピネン」及「リナロール」、「ボルネロール」等ノ醋酸「エステル」等ヲ含有ス、未實果實及全草ハかめむしニ類スル臭氣アリ、成熟スルニ從ヒ此臭氣ハ消失シ芳香ヲ有スルニ至ル。

米、英、佛藥局方ニハ胡荽實ヲ健胃、驅風祛痰藥トシ一日用量二－六瓦煎劑トス。

(七) 大觀ニ吐ノ字ナシ。

(一)胡蘿蔔（綱目）

和名　にんじん
學名　Daucus Carota, L. var. sativa, DC.
科名　繖形科

【釋名】時珍曰く、元時代に始めて胡地から來たもので、氣味は微に蘿蔔に似てゐるところからかく名けたのだ。

【集解】時珍曰く、胡蘿蔔は今は北方の地、山東で多く種ゑ、(二)淮楚でも種ゑるものがある。八月に種を下し、邪蒿のやうな苗が生え、莖は肥え、白毛があり、辛臭が蒿のやうで食へない。冬期に根を掘り、それは生、熟いづれも啖へるもので、果蔬の用を兼ねる。根は黄、赤の二種あつて微に蒿の氣を帶び、長さ五六寸、太さは一握ほどのものもあり、形狀は掘つたばかりの新鮮な地黄、及び羊蹄根に似たものだ。三四月に莖の高さ二三尺になつて細かい白花を開き、それが傘のやうに攢簇して蛇牀の花に似てゐる。子もやはり蛇牀子のやうで、やや長くして毛があり、褐色だ。又、蒔蘿子のやうで、やはり食品の調和に用ゐる。按ずるに、周憲王の救荒本草に『野胡蘿蔔は苗、葉、花、實いづれも家胡蘿蔔と同じだが、ただ根が細く小

(一)牧野云フ、にんじんハ其根形ガ彼ノ人參（おたねにんじん）ニ似テヰルノデサウ云フノデアラウ元來ハ歐洲ノ原產デ同洲ニハ野生モアル栽培シタモノハ其根肥大トナツテ食用ニ適シ、久シク各地デ作ラレテヰル結果種種ノ園藝品種ガアル。

(二)淮楚ハ湖北以東揚子江北岸ノ地ヲ指ス。

さく、味が甘い。生で食ひ蒸して食ふいづれもよし。花、子はいづれも蛇牀より大きい』とある。又、金幼孜の北征錄には『(三)交河の北に沙蘿蔔といふがある。根の長さ二尺ばかり、大なるは徑一寸ほどあり、下に岐れて筋ほどの小さいものが生えてゐる。その色は黄白で、氣味は辛くして微し苦い。やはり蘿蔔の氣に似てゐる』とある。これはいづれも胡蘿蔔の類のものだ。

〔胡蘿蔔〕

根　(四)氣味　【甘く辛し、微溫にして毒なし】　主治　【氣を下し、中を補し、胸膈、腸、胃を利し、五藏を安じ、人をして健食ならしめ、益あつて損なし】(時珍)

(五)**子**　(六)主治　【久痢】(時珍)

(三)交河ハ山西省寧武縣ノ西ニ源ヲ發シテ桑乾河ニ注グ。

(四)木村(康)曰ク、にんじんハ歐洲原產ニシテ、久國ニ栽培セラレ品種甚ダ多シにんじんノ果實ヲ鶴蝨トシテ市場(上海)ニ出スモノアレドモ實ハ誤リニシテ、鶴蝨ハ「シナ」花 Artemissia Cina Borg ヲ正條トス。食用植物誌ニヨレバ、にんじん根ノ組成ハ本邦產水分八九・一二、蛋白質一・二五、脂肪〇・三五、無窒素物七・四一、纖維一・一〇、灰分〇・七七、歐洲產八九・七九、蛋白質一・二三、脂肪〇・三〇、無窒素物九・一六、纖維一・四九、灰分一・〇二、歐洲產ノ無窒素物九・一六中蔗糖二・

一一、果糖四・〇三ヲ含ム、ソノ橙赤色ヲ呈スルハソノ含有スル「カロチン」ニヨル。
(五)木村(康)曰ク、子ト云フハ果實ナリ、果實中ニハ〇・六―一・六ノ揮發油ヲ含ム、該揮發油ハ微量ノ「イソブッテル」酸ト「パミルチン」酸一四%ノ右旋「ピネン」及ビ左旋「リモネーン」、七―九%ノ「ダウコール」及一半「テルピン」類ノ若量ヲ含ム。西洋種にんじん(通稱三寸にんじん)ノ果實ノ揮發油〇・六%中一新「セスキテルペンアルコール」ヲ發見シ、「カロトール」ト命名ス。又舊來我國ニ栽培セラルル所謂大長種ノ果實ノ揮發油(一・六%)中ニ「アザローン」、「ビザボレン」及微量ノ「カロトール」ヲ發見ス。
(六)木村(康)曰ク、民間ニ湯火傷ニ根ヲ卸シテソノ汁ヲ數回塗レバ妙效アリトイフ。

(一)水斳　音は芹(キン)である。(本經下品)

和名　せり
學名　Oenanthe stolonifera, DC.
科名　繖形科

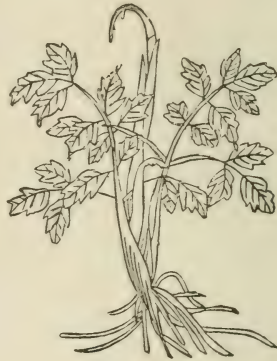
釋名　**芹菜**(別錄)　**水英**(本經)　**楚葵**　弘景曰く、斳の字は俗に芹の字に書く。その主治の點から論ずれば上品に編入さるべきものである。下品に編入したのは如何なる意味か解らない。二月、三月に英となつたときには葅にし、熟してからは瀹て食ふ。故に水英と名けたのだ。

時珍曰く、斳は蘄と書くが正しく、屮、蘄に从ふ諧聲である。後世字劃を省いて芹と書くは斤に从ふので、やはり諧聲だ。その性は冷、滑にして葵のやうだ。故に爾雅にはこれを楚葵といひ、呂氏春秋には『菜の美なるものに雲夢の芹あり』とあ

(一)牧野云フ、本品ハ支那ト日本トガ原産地デアル、我邦デハ往住之レヲ水中ニ作ッテ蔬トシテ市場ニ出シテヰル。

（二）蘄州ハ草部隰草類艾ノ註ヲ見ヨ。

つて、雲夢は楚の地である。楚に（二）蘄州、蘄縣なる名地があつて俱に音は淇（キ）であるが、羅願の爾雅翼に『その地に芹を多く產する。故にその文字は芹に从ふので、

〔水斳〕——芹——

蘄はやはり音芹（キン）である。徐鍇注說文に蘄の字を収、斳に从つてあるが、諸書に斳の字は無い。ただ說文に別に菥の字を出して音銀（ギン）としてあるがこれは次第に誤を承けたものではないかと思ふ』とある。これに據ると、蘄の字もやはり斳に从つて蘄の字に書くが正しいのであらう。

［集解］別錄に曰く、水斳は南海の池澤に生ずる。

恭曰く、水芹、卽ち芹菜である。兩種あつて、荻芹は色白く、根を取る。赤芹は莖、葉を取る。いづれも菹にしまた生菜として食へる。

保昇曰く、芹は水中に生ずる。葉は芎藭に似たもので、花は白色で實がない。根

もやはり白色だ。
詵曰く、水芹の黑滑の地に生えたものは、食つて見て高田のもののやうに人體に宜くはない。酒、醬中に置けば香美になる。高田のものをば白芹と名ける。その他の田に生えるものにはいづれも蟲子が葉の間にゐて、視ても容易に目につかぬが、食へば患をなすものだ。
弘景曰く、また渣芹といふがあつて、生菜にもなれば生でも啖へる。
時珍曰く、芹には水芹と旱芹とあつて、水芹は江湖の陂澤の涯に生え、旱芹は平地に生え、赤、白の二種ある。二月に苗が生え、その葉は節に對して生えて芎藭に似てゐる。莖は節、稜があつて中が空だ。その氣は芬芳なものである。五月に蛇牀花のやうな細かな白花を開く。楚地方では採つて饑を濟ふ。なかなか有用なものだ。詩に『觱沸たる檻泉、言に共の芹を采る』とあり、杜甫の詩に『飯には煮る青泥坊底の芹』といひ、又『香芹碧澗の羹』とあるは、いづれも芹の功を賞美したものだ。而るに列子が『卿豪芹を嘗めて口を蜇し腹を慘ましむ』といつたのは、蓋し芹を食ふ適當な方法を知らなかつたのだ。

(三) 木村(康)曰ク、(成分)内地產せりハ水分九三・六〇、蛋白質二・〇一、脂肪〇・一三、無窒素物三・二二、灰分一・〇四。臺灣產水分九五・四九三、蛋白質〇・五三六、脂肪〇・一四八、無窒素物二・六一四、灰分一・二〇五。

堇 (三) 氣味 【甘し、平にして毒なし】 思邈曰く、苦く酸し、冷、澁にして毒なし。詵曰く、醋で和して食へば歯を損ずる。鼈瘕には食つてはならぬ。李廷飛曰く、赤芹は人に害があるから食つてはならぬ。

主治 【婦人の赤沃。血を止め、精を養ひ、血脈を保し、氣を益し、人體を肥健ならしめ、食を嗜ましめる】(本經) 【伏熱を去る。石藥の毒を殺すには擣汁を服す】(孟詵) 【汁を飲めば小兒の暴熱、大人の酒後の熱、鼻塞、身熱を去り、頭中風熱を去り、口歯を利し、大、小腸を利す】(藏器) 【煩渴、崩中帶下、五種の黃病を治す】(大明)

發明 張仲景曰く、春、秋の二時には龍が精を帶びて芹菜中に入るものだ。人が誤つて食へば病となり、顏が青く、手が青く、腹が妊娠のやうに滿し、痛み忍び難い。これを蛟龍病といふ。いづれも硬餳二三升を一日三回服す。蜥蜴を吐出して瘥える。

時珍曰く、芹菜は水涯に生ずるものだ。蛟龍は變化測り難いものとはいひながら、その精をこの中に入れるとは思はれない。これは大抵蜥蜴、虺、蛇の類が春、夏の頃に此の中に精を遺すものだからさうなるのだ。且つ蛇は喜んで芹を嗜むことが特

にそれを立證してゐる。別に馬芹といふがあるが、それは後章に掲げる。

【附方】舊一、新二。【小兒の吐瀉】芹菜を細に切つて煮て汁を飲む。多少に拘らぬ（子母秘錄）【小便淋痛】根の白い水芹菜を葉を去り、擣いてその汁を井水に和して服す（聖惠方）【小便出血】水芹の擣汁を日に六七合服す（聖惠方）

花【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【脈溢】（蘇恭）

(一)菫 音は勤（キン）である。（唐本草）

和名　未詳
學名　未詳
科名　繖形科

【釋名】苦菫（爾雅）菫葵（唐本）旱芹（綱目）禹錫曰く、爾雅に『齧は苦菫なり』とあり、郭璞は『即ち菫葵である。本草に「味甘し」とあるが、此には苦菫といつてある。古人は言葉を顚倒したもので、甘草を大苦といつたやうなものだ』といつてある。

時珍曰く、その性は滑にして葵のやうだから葵なる名稱を呼ばれたのだ。

【集解】恭曰く、菫菜は野生のもので人が栽培するものではない。葉は蕺菜に

(一)牧野云フ、此菫即チ旱芹ハ先輩之レヲ陸生ノ芹トシ、はたけぜりト訓ジテアレドモ其邊頗ル明瞭ヲ缺イデ居ル、私ハ此旱芹ハせりヲ圖ニ作ツタモノデナク、何カ別ノ種ト思ヘドモ其植物ハ不明デアル、植物名實圖考ニ其圖アレドモ何ノ種カ判明セヌ、せりノ葉ニ似テハヰレド何カ別種ノ者デハナイ

カト思フ、支那デ實地ニ就キ詮索セバ分ル事ト思フ。集解ノ文中ニハすみれラシイ處モアレドモ判然シナイ。

（二）大觀ニ殺ヲ散ニ作ル。

似て花は紫色だ。

禹錫曰く、說文に『菫は、根は薺のやう、葉は細柳のやう、子は米のやうだ。蒸汋して食へば甘く滑かだ』とある。內則に『菫、荁、枌、楡』とあるがそれである。

時珍曰く、これは旱芹のことである。その性は滑利するものだ。故に洪舜兪の賦に『烈に椒、桂あり、滑に菫、楡あり』といつたのである。黃花の一種には毒があつて人を殺す。卽ち毛芹である。草部の毛茛の條を見よ。又、烏苗も菫と名ける有毒物だ。各本條下を見よ。

葉【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【擣汁で馬毒瘡を洗ひ、幷に服す。又、蛇、蠍の毒、及び癰腫に塗る】（唐本）【久しく食へば心下の煩熱を除き、寒熱鼠瘻、瘰癧生瘡、結核聚氣に主效があり、瘀血を下し、霍亂を止める。また生で擣いた汁半升を服すれば、能く鬼毒を（二）殺して吐出する】（孟詵）

【發明】詵曰く、菫葉は霍亂を止めることが香菜と同功だ。香菜、卽ち香薷である。

【附方】舊二、新一。【結核氣】菫菜を日光で乾して末にし、油で煎じて膏にし、

一日三五回摩れば瘥える。（孟詵食療）【濕熱氣】旱芹菜を日光で乾して末にし、糊で梧子大の丸にし、四十丸づつを空心に溫酒で服す。大いにあらゆる蟲の毒を殺す。（壽域神方）【蛇咬瘡】生で杵いた菫汁を塗る。（萬畢術）

(一)紫菫

音は芹（キン）である。（宋圖經）　和名 未詳　學名 未詳　科名 繖形科？

【釋名】赤芹（綱目）蜀芹（圖經）楚葵（同上）苔菜（同上）水萄菜　時珍曰く、菫、蘄、芹、蘄の四字は同一意味である。左に詳記する。

【集解】頌曰く、紫菫は江南、(二)呉興郡に生ずる。淮南では楚葵と名け、(三)宜春郡では蜀芹と名け、豫章郡では苔菜と名け、(四)晉陵郡では水萄菜と名ける。時珍曰く、蘇頌の說は唐の玄宗天寶單方の記載から出たもので、紫菫の形狀に就いての說明が缺けてゐる。今按ずるに、軒轅述寶藏論に『赤芹、卽ち紫芹であつて、水濱に生じ、葉の形は赤芍藥のやうで色青く、長さ三寸ばかり、葉の表面に黃斑があり、味は苦く澀い。その汁は雌を煮、汞を制し、硃砂を伏し、三黃を擒にする。

(一)牧野云フ、植物名實圖考ニ據レバ、せりニ似テ大形ナ繖形科品デアルガ何ノ種カ明ラメ難イ、又本草綱目啓蒙ニ之レヲむらさきけまん一名やぶけまん（Corydalis incisa, Pers.）ニ充テシハ、中中ニ苦心ノ跡ガ見ユルガ果シテ此種カ不明デアル。

(二)呉興郡ハ鱗部龜鼈類鼈ノ註ヲ見ヨ。

(三)宜春郡ハ隋ニ置キ、唐ニ袁州ニ改ム、今ノ江西省宜春縣ソノ地ナリ。

(四)豫章郡ハ石部石床ノ註ヲ見ヨ。

號して起貧草といふ』とあり、又、土宿眞君の本草には『赤芹は陰厓の陂澤、水に近き石間に生え、形狀は赤芍藥に類し、その葉は深綠で背が甚だ赤く、莖、葉は蕎麥に似て、花は紅くして美しい。結實もやはり豨蕎麥のやうだ。その根は蜘蛛に似て、嚼めば酸く苦くして澀い。江淮地方では三四月に苗を採つて蔬菜として食ふ。南方には存外稀で、(五)太行、王屋の諸山に最も多い』とある。

〔紫菫〕

苗　【氣味】【酸く、平にして微毒あり】

花　【氣味】【酸し、微溫にして毒なし】　【主治】【大人、小兒の脫肛】(蘇頌)

【附方】舊一。【脫肛】凡そ大人、小兒の脫肛は、天候の冷氣が續き、及び冷えた食物を喫つて暴痢して止まぬ結果下脫するものだ。久しく治療しても癒えぬには、春期中に紫菫花二斤を採收して曝乾して散にし、磁毛末七兩と和して研細し、それを肛上に塗つて納入し、別人をして冷水を顏に噀かせれば腸中に吸入する。毎日一

(四) 晉陵郡ハ晉ニ置ク、今ノ江蘇省武進縣ソノ治ナリ。

(五) 太行山ハ石部石硫黃ノ註、王屋山ハ同部太一餘粮ノ註ヲ見ヨ。

囘藥を塗つて顏に噀けば六七囘に過ぎずして瘥える。又、熱酒半升で散一方寸匕を和し、空腹に服す。一日再服し、漸次に二方寸匕まで增加し、瘥えるを度とする。五歲以下の小兒の場合には、杏子半筒ほどを酒で和して服す。生、冷の物、陳倉米等を忌む。(天寶單方)

(一)馬蘄 音は芹(キン)である。(唐本草)

和名　しやく
學名　Anthriscus sylvestris, Hoffm.
科名　繖形科

釋名　牛蘄(爾雅)　胡芹(通志)　野茴香(綱目)　時珍曰く、凡そ物の大なるものは多く馬の字を冠して呼ぶ。この草は芹に似て大きいからかく呼ばれるのだ。俗に野茴香と稱するはその氣味、子の形が微に似てゐるからである。金光明經三十二品香藥にこれを葉婆儞といつてある。

集解　恭曰く、馬蘄は水澤の傍に生ずる。苗は鬼針、菾菜等に似て、嫩いときは食へる。花は靑白色、子は黃黑色で防風子に似たものだ。食味を調へるに用ゐる。香は橘皮に似て苦味がない。

(一)牧野云フ、植物名實圖考ニ圖說ガアル、本草綱目啓蒙ニハ詳ナラズトシテアレドモ私ハ之レヲしやくト判定シタ、此品ハ我邦デモ處ニヨリ食用トスル。

保升曰く、花は芹花のやうで、子は防風子のやうで扁く大きい、爾雅に『茭は牛蘄なり』とあり、孫炎の釋に『芹に似て葉が細く鋭く、菜として食へるものだ。一名茭、一名馬蘄といひ、子は藥に入れて用ゐる』とある。

時珍曰く、馬蘄と芹とは同類中の異種で、處處の卑濕の地にある。三四月に苗が生え、一本に叢生し、蒿のやうで蒙茸たる白毛があり、嫩いときは茹にして食

〔馬　　蘄〕

へる。葉は水芹に似て微し小さく、芎藭の葉に似て色が深い。五六月に碎小な花を開き、攢簇して蛇牀、及び蒔蘿のやうだ。色は青白である。結實もやはり蒔蘿の子に似てゐるが、ただ色が黒くして重いだけだ。その根は白色で長さは一尺ほどあり、氣はやはり香しいが堅硬で食へない。蘇恭の所謂鬼針は鬼釵草のことで、莖は四角、椏、葉、子は釵脚に似て、針のやうに人の衣服に著くものだ。これとはやや異ふ。

苗 【氣味】【甘く辛し、溫にして毒なし】【主治】【脾、胃を益し、胸膈を

利し、冷氣を去る。茹にして食ふ】（時珍）

子【氣味】【甘く辛し、溫にして毒なし】【主治】【心腹脹滿。胃を開き、氣を下し、食物を消化する。調味に用ゐる】（唐本）【炒り研つて醋で服すれば卒心痛を治し、人をして睡を得せしめる】（孟詵）【中を溫め、脾を暖め、反胃を治す】（時珍）

【附方】新一。【慢脾驚風】馬芹子、丁香、白殭蠶等分を末にし、一錢づつを、炙いた橘皮の煎湯で服す。これを醒脾散と名ける。（普濟方）

(一)蘹香（唐本草）

和名　うゐきやう
學名　Foeniculum vulgare, Gaertn.
科名　繖形科

【校正】草部より此に移し入る。

【釋名】**茴香　八月珠**　頌曰く、蘹香は、北方では一般に(二)茴香と呼ぶ。發育が近いからだ。弘景曰く、臭肉を煮る場合に少量を投ずれば、臭氣がなくなり、醤の臭敗したものに末を入れるとやはり香しくなる。故に回香と名けたのだ。時珍曰く、俚俗に多くこれを衿、袵の中に懷て咀嚼する風習がある。蘹香なる名稱は或は

(一)牧野云フ、本種ハ南歐洲ノ原產デアルガ、今ハ廣ク世界ノ各處デ栽エラレテキル、集解文中ニアル舶茴香一名八角茴香ハしきみ屬ノ一種 Illicium verum, Hook. fil. ト云フモノデアル、我邦ヘハ未ダ其生木ガ來テキナイガ其實ハ藥鋪ニ在ル。

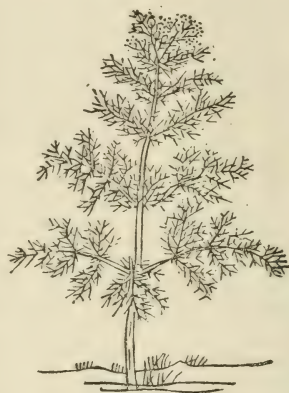
(二)大觀ニ茴上土字アリ。

(三) 交廣ハ交州、廣州。廣東省以南ノ地ヲ指ス。

(四) 川トハ四川省ノ地ヲ指ス。

此から出たものではないかと思ふ。

【集解】頌曰く、今は(三)交廣、諸番、及び近郡にいづれもあるが、藥用には多く諸番からの舶來品を用ゐる。或は、近い地方のもののやうに功力がないともいふ。

〔蘹香〕
——茴香——

三月葉が生え、老胡荽に似て極めて疎細で叢をなし、五月になると粗い莖が出て高さ三四尺になり、七月に花が著き、その花は頭が傘蓋のやうで黄色だ。結實は麥ほどで小さく、色が青い。北方の地では土茴香と呼び、八九月に實を採つて陰乾する。現に近道では人家の庭園や畑に種ゑるものが甚だ多い。(四)川地方では多くその莖、葉を煮て食ふ。

宗奭曰く、老胡荽に似てゐるといふは誤だ。胡荽の葉は蛇牀のやうで、葉とはいふもののただ散じた絲髪のやうで、特に諸草と異ふものだ。

時珍曰く、茴香は宿根が深く、冬に苗が生えて叢になり、莖が肥え葉は絲のやうで、五六月に花を開く。その花は蛇牀の花のやうで黃色だ。結子は大いさ麥粒ほどで、輕くして細稜がある。俗に大茴香と呼ぶものだ。今はただ(五)寧夏の產だけを第一とし、その他の地に產する小さいものをば小茴香と呼ぶ。外國から舶來するものは、實の大いさ柏實ほどあつて、裂けて八瓣となり、一瓣が一核で、大いさ豆ほど、色は黃褐だ。仁があつて味が更に甜い。俗にこれを舶茴香と呼び、また八角茴香といふ。廣西の(六)左右江の峒中にもあつて、形や色は中國の茴香と迥に別だが、ただ氣味が同じである。北方人はこれを酒のつまにして嚼む。

子

(七)**氣味**　【辛し、平にして毒なし】　思邈曰く、苦く辛し、微寒にして濇る。權曰く、苦く辛し、酒と配合するが良し。黃に炒つて用ゐる。好古曰く、陽であり浮であつて、手、足の少陰、太陽の經に入る。

主治　【諸瘻、霍亂、及び蛇傷】(唐本)　【膀胱、胃間の冷氣。及び腸氣を育ひ、中を調へ、痛、嘔吐を止める】(馬志)　【乾濕脚氣、腎勞、𤻲疝、陰疼を治し、胃を開き、氣を下す】(大明)　【命門の不足を補す】(李杲)　【丹田を煖める】(吳綬)

(五) 寧夏ハ石部馬腦ノ註ヲ見ヨ。

(六) 左右江峒ハ西南地方蠻族ノ部落。禽部林禽類鸜鵒ノ註參照。

(七) 木村(康)曰ク、果實ハ精油三―八%ヲ含有シ、其主成分ハ「アネトール」ニシテ五〇―六〇%ヲ含ム、其他「ソエンヒヨン」少量ノ有旋「ピネン」、「ヂペランテン」「アニスアルデヒド」等ヲ含有ス。(藥用)茴香油ヲ製ス

健胃、驅風、及祛痰藥トス、藥局方製劑トシテ茴香精、アムモニア茴香精、茴香水、複方センナ舐劑、複方甘草散、センナ舍利別、小兒散等ヲ製スルニ用ウ。

【發明】 誂曰く、茴香は、國人はこれを重じて陽道を助ける功力があるものといつてゐるが、その正しい使用方法を心得てゐない。

好古曰く、茴香は本來膀胱を治する藥であつて、その功力が丙を先にする。故に小腸といつたのだ。能く丙の燥を潤し、その功力が戊を先にする。故に丙より壬に至るのである。又、手、足の少陰の二經の藥であつて、上下經の通道を開く、それは壬と丙と交る所以である。

時珍曰く、小茴香は性平であつて、氣を理し、胃を開き、夏期に蠅を祛き、臭を辟ける。食料として宜し。大茴香は性熱である。多く食へば目を傷め、瘡を發する。食料として過量を用ゐるは宜くない。古方にある去鈴丸は、茴香二兩、皮つきの生薑四兩を共に坩器に入れて一伏時淹け、慢火で炒つて鹽一兩を入れて末にし、糊で梧子大の丸にし、三五十丸づつを空心に鹽酒で服す。この方はもと脾、胃虚弱の病を治するもので、茴香は鹽を得れば腎の經に引入して邪氣を發出する。腎に邪を受けねば病は自ら生らぬのである。また小腸疝氣を治するにも有效だ。

【附方】 舊四、新十六。【胃を開き食を進める】茴香二兩、生薑四兩を共に擣き

まぜ、淨器に入れ濕紙で蓋ふて一夜置き、翌日鉏、石器で文武火で黄に炒焦して末にし、酒糊で梧子大の丸にし、十丸乃至(八)二十五丸を(九)溫酒で服す。(經驗方)【瘴瘧發熱】背、項に連るには、茴香子の擣汁を服す。(孫眞人方)【大、小便閉】鼓脹し、氣促するには、八角茴香七個、大麻仁半兩を末にし、生葱白二十一本と共に研つて湯に煎じ、一日一回、それを五苓散末を調へて服す。(普濟)【小便頻數】茴香を多少に拘らず淘淨し、鹽少量を入れて炒つて研末し、糯米糕を炙いてその末を蘸けて食ふ。【傷寒脱陽】小便の通ぜぬには、茴香末を生薑の自然汁で調へて腹上に傅け、外に茴香末を益元散に入れて服す。(摘玄方)【腎消飲水】小便が膏油の如くなるには、茴香を炒り、苦楝子を炒り、等分を末にして毎食前に酒で二錢を服す。(保命集)【腎邪冷氣】力弱きには、大茴香六兩を三分し、生附子一個を皮を去つて三分し、第一回には、附子一分、茴香一分を共に黄に炒つて一夜火毒を出し、附子を去つて茴香を研末し、空心に一錢を鹽酒で服し、第二回には、二味各一分を同じく炒つて性を存して火毒を出し、附子を一半を去り一半を留めて茴香と共に末にし、前の如くにして服し、第三回には、各一分を共に炒つて性を存して火毒を出し、全部を研つて末

(八)大觀ニ二字ナシ。
(九)大觀ニ溫ヲ茶ニ作ル。

にし、前の如くにして服す。(朱氏集驗方)【腎虚腰痛】茴香を炒つて研り、猪腰子を批開してその末を內に摻り入れ、濕紙で裹んで煨熟し、空心に食つて鹽酒で迸下する。(戴原禮要訣)【刺すやうに覺ゆる腰痛】簡便方では、八角茴香を炒つて研り、二錢づつを食前に鹽湯で服し、外に糯米一二升を炒り熱し、袋に盛つて患部を(一〇)拴する。○活人心統では、思仙散——八角茴香、杜仲を各〻炒り研つて三錢、木香一錢、水一鍾、酒半鍾を煎じて服す。【腰重刺脹】八角茴香を炒つて末にし、食前に二錢を酒で服す。(直指方)【疝氣の腎に入りたるもの】茴香を炒つて二包にし、更互に熨す。(簡便方)【小腸氣墜】直指では、八角茴香、小茴香各三錢、乳香少量を水で服して汗を取る。○孫氏集效方では、小腸疝氣で忍び難く痛むを治す。大茴香、荔枝核を黑く炒つて各等分を研末し、一錢づつを溫酒で調へて服す。○瀕湖集簡方では、大茴香一兩、花椒五錢を炒つて研り、一錢づつを酒で服す。【膀胱疝痛】本事方では、舶來の茴香、杏仁各一兩、葱白を焙じ乾して五錢を末にし、二錢づつを酒で服して胡桃を嚼んで迸下する。○集要では、疝氣、膀胱、小腸痛を治す。茴香を鹽で炒り、晩蠶沙を鹽で炒つて等分を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを溫酒で嚼ん

(一〇)字書ニ拴ハ揀ナリ、揀音董打ナリ、擊ナリ。

で服す。【疝氣偏墜】大茴香末一兩、小茴香末一兩を(一)牙猪の尿胞一箇の尿の入つたまゝのものに入れて括り著け、罐に入れて酒で煮爛し、その胞共に搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを白湯で服す。仙方である。(鄧才筆峯雜興)【脇下刺痛】小茴香一兩を炒り、枳殼五錢を麩で炒つて末にし、二錢づつを鹽酒で調へて服す。神效がある。(袖珍方)【口臭の辟除】茴香を羹に煮、及び生で食ふ。いづれもよし。(昝殷食醫心鏡)【蛇咬の久しきに亙つて潰れたるもの】小茴香を末に擣いて傅ける。(千金)

莖葉　[氣味]　子と同じ。[主治]　【煮て食へば、卒然の惡心で腹中の不安なるを治す】(甄權)【小腸氣で卒に腎氣が脇を衝き、刀で刺すやうに痛んで喘息し得ぬを治す。生の擣汁一合を熱酒一合に投じ和して服す】(孟詵)

[發明]　頌曰く、范汪の方に、惡毒癰腫が或は陰卵、髀間に連り、疼痛し、攣急し、小腹に牽入して忍び難きを療ず。これは一夜にして死亡するものだ。茴香の苗、葉の擣汁一升を服す。一日三四服し、その滓を腫に貼る。冬期には根を用ゐる。これは外國の神方であつて、(二)永嘉以來これを用ゐて起死回生の神驗を現したとある。

(一)牙猪ハ野猪ナリ。

(二)永嘉ハ晉ノ懷帝ノ年號。元年ハ西紀三〇七年ニ當ル。

(一)蒔蘿（宋開寶）

和名　いのんど
學名　Anethum graveolens, L.
科名　繖形科

校正　草部より此に移し入る。

釋名　**慈謀勒**（開寶）　**小茴香**　時珍曰く、蒔蘿といひ慈謀勒といふはいづれも外國語である。

集解　藏器曰く、蒔蘿は(二)佛誓國に生ずる。實は馬芹子のやうで辛香だ。

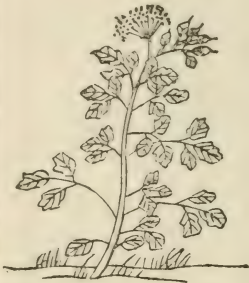
珣曰く、按ずるに、廣州記に『(三)波斯國に生ず』とある。馬芹子は色が黒くして重く、蒔蘿子は色が褐で輕い。これが相異點だ。善く食味を滋くし、多食しても害がないが、阿魏と共に食つてはならぬ。その味を奪ふものだ。

頌曰く、今は嶺南、及び近道のいづれにもある。三月、四月に苗が生え、花、實は大いさ蛇牀に類して簇生し、辛香である。六七月に實を

〔蒔蘿〕

(一) 牧野云フ、歐洲ノ原産デアル、我邦ニテハ偶ニ之レヲ見ルニ過ギナイ、いのんどハ原ト西班牙語ノ eneldo カラ來タモノト謂ハルル。

(二) 佛誓國、卽チ三佛齊國。石部婆娑石ノ註ヲ見ヨ。

(三) 波斯國ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

採る。現に一般に五味を和するに多く用ゐてゐるが、藥用にすることは聞かない。

時珍曰く、その子は簇生し、形狀は蛇牀子のやうで短く、微し黑い。氣は辛臭で茴香に及ばない。

嘉謨曰く、俗に蒔蘿椒と呼ぶ。內部に黑子があるが、ただ皮が薄く、色は褐で紅ではない。

苗　氣味　【辛し、溫にして毒なし】　主治　【氣を下し、膈を利す】(時珍)

子　(四)氣味　【辛し、溫にして毒なし】　主治　【小兒の氣脹、霍亂嘔逆、腹冷で食物の落つかぬもの、兩肋痞滿】(藏器)【脾を健にし、胃氣を開き、腸を溫め、魚肉の毒を殺し、水臟を補し、腎氣を治し、筋骨を壯にする】(日華)【膈氣に主效があり、食物を消化し、食味を滋くする】(李珣)

附方　新二。【閃挫腰痛】蒔蘿を末にし、二錢匕を酒で服す。(永類鈐方)【牙齒疼痛】舶來の蒔蘿、蕓薹子、白芥子等分を研末し、口中に水を含み、痛の左右に隨つて鼻に嗜ぐ。神效がある。(聖惠方)

附錄　**蜀胡爛**(拾遺)　藏器曰く、子——味辛し、平にして毒なし。主治は冷

(四) 木村(康)曰ク、果實ハ脂肪油一六%精油三—四%ヲ含有ス、精油ノ主成分ハ「カルボン」ニシテ四〇—六〇%ヲ含ム、其他炭化水素及「リモーネン」等ヲ含有ス、莖葉モ亦精油ヲ含有シ、其成分ハ「カルボン」、「フエランドレン」、「テルピネン」等ナリ。英局方ニテハ蒔蘿水及蒔蘿油ヲ製造シ、

氣の心腹脹滿。(五)腎を補し、婦人の血氣、下痢を除き、牙齒の蟲を殺す。安南に生ずる。藿香(くわいかう)に似たもので、食味を和するに用ゐ得る。

數低(拾遺) 藏器曰く、子——味甘し、溫にして毒なし。主治は冷風、冷氣、宿食不消の脹滿を下す。西番、北土に生ずる。藿香と互に似たものだ。胡人はこれを羹(かう)にして食ふ。

池得勒(拾遺) 藏器曰く、根——辛し、溫にして毒なし。冷氣を破り、食物を消化する。西國に生ずる草の根であつて、胡人は食ふ。

馬思荅吉 時珍曰く、味苦し、溫にして毒なし。邪惡の氣を去り、中を溫め、膈を利し、氣を順にし、痛を止め、津を生じ、渴を解し、人の口を香(かんばし)からしめる。元の時代には高級な膳部に用ゐ、最も力の強い香料となつてゐたといふ。如何なる形狀のものか判然せぬ。故に此に附錄する。

(一)羅勒(宋嘉祐附)

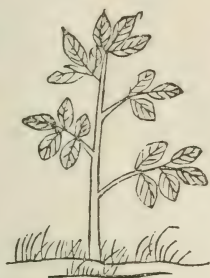
和名 けめぼはき(新稱)
學名 Ocimum canum, Sims. ?
科名 唇形科

驅風藥トナス。果實ハ西洋料理香味料トス。
(五)大觀ニ肝ニ作ル。

(一)牧野云フ、從來之レヲめぼはきニ充テテアレドモ私ハ賛成セヌ、此品ハ著シ

下ノ學名ノ者ト思フ。

〔釋名〕 **蘭香**（嘉祐） **香菜**（綱目） **瞖子草** 禹錫曰く、北方では一般に石勒の諱を避けて羅勒を蘭香と呼ぶ。時珍曰く、按ずるに、鄴中記に「石虎は諱を勒といつたので、羅勒を香菜と呼び改めた」とある。今俗間ではこれを瞖子草と呼び、その子で瞖を治す。

〔集解〕 禹錫曰く、羅勒は處處にある。三種あつて、一種は紫蘇葉に似てゐる。一種は葉が大きく、二十步以內なればその香が聞ける。一種は生菜にもなるものだ。冬期には乾いたものを用ゐる。子は目の中へ入れて置くと瞖を去るもので、少頃して濕脹して物と倶に出る。

〔羅勒〕
──蘭香──

時珍曰く、香菜は、三月、棗の葉の生える時に種ゑれば生える。さなくば生えない。常に魚腥水、米泔水、泥溝水を澆げば香しくなつて茂る。糞水は宜くない。臞仙の神隱書に『畑の邊、水の側に廣く種ゑるがよし、饑饉の際にはやはりこれも食糧になる。その子は大いさ蚕のやうで、褐色で光らない。七月に採收する』とある。

○弘景曰く、術家では、羊角、馬蹄を取つて燒いて灰にして撒き、濕地に踏みならして置く、すると羅勒が生える。俗に西王母菜と呼び、これを食へば人體を益する。

(二)【氣　味】【辛し、溫にして微毒あり】禹錫曰く、多く食つてはならぬ。關節を壅し、營衞を澀し、人の血脈を行らざらしめ、又、風を動じ、脚氣を發する。

【主　治】【中を調へ、食物を消化し、惡氣を去り、水氣を消す。生で食ふが宜し。齒根爛瘡を療するに(三)使としてこれを用ゐるが甚だ良し。啘嘔の患者は汁を取つて半合を服す。冬期には乾いたものの煮汁を用ゐる。その根を灰に燒いて小兒の黃爛瘡に傅ける】(禹錫)【飛尸、鬼疰、蠱毒に主效がある】(吳瑞)

【發　明】時珍曰く、按ずるに、羅天益は『蘭香は味辛く、氣は溫であつて、能く血を和し、燥を潤ほす』といつてある。然るに禹錫が『多く食へば營衞を澀し、血脈が行らなくなる』といつたのは何故であらうか。又、東垣李氏の牙疼、口臭を治する神功丸中に蘭香を用ゐて『無ければ藿香を代用する』といつた。これはただその惡氣を去る功力を取つただけのことである。故に飲膳正要に『諸菜と共に食へば味辛香にして能く腥氣を辟ける』といつてある。いづれもこの意味だ。

(二)木村(康)曰ク、めばうきハ「ピネン」「チネオール」、右旋「カンフォル」「メチルカビユール」ヲ含ム、揮發油ヲ含有ス。
Dragendorff; Heilpflanzen; 469.
(三)大觀ニ灰ニ作ル。

【附方】新二。【鼻疳赤爛】蘭香葉を灰に燒いて二錢、銅青五分、輕粉二字を末にし、一日三回傅ける。（錢乙小兒方）【反胃欬噫】生薑四兩を擣き爛して蘭香葉一兩、椒末一錢を入れ、鹽を和した麪四兩で裹んで燒餅にし、煨熱して空心に喫ふ。二三回に過ぎずして效がある。反胃には甘蔗汁を入れて和す。（普濟方）

子【主治】【目翳、及び塵物の目に入りたるには、三五顆を目中に入れて置く。少頃して濕脹と物とが倶に出るものだ。又、風赤眵涙に主效がある】（嘉祐）

【發明】時珍曰く、按ずるに、普濟方に『昔、（四）廬州の知錄彭大辨が臨安にゐた頃、暴かに赤眼に罹つて後に翳を生じたが、ある僧が蘭香子を洗ひ晒して一粒づつその眥中に入れて目を閉ぢさせたが、少頃すると膜と共に出た。ある方では末にして點ける』とある。予（時珍）が嘗てこの子を試みたが水中に入れてもやはり脹大した。蓋しこの子は濕を得れば脹るものだから、能く眵涙、浮膜を染め込ませて惹き出すのだ。しかし、目中には塵一つ入ることも出來ぬものだが、この子は三五顆納れても一向に妨碍を感じない。蓋し一の特異な點だ。

【附方】新二。【目昏浮翳】蘭香子七箇づつを就寢時に水で煎じて服す。久しく

（四）廬州ハ草部芳草類白芷ノ註、臨安ハ土部伏龍肝ノ註ヲ見ヨ。

して效がある。（海上名方）【走馬牙疳】小兒が肥甘なる食物のために腎に虚熱を受け、口から臭い息を出し、次號に齒が黑くなるを崩砂と名ける。漸次に齦爛に至るを潰槽と名ける。又、或は出血するを宣露と名ける。重くなつて齒が落ちるものを腐根と名ける。蘭香子末、輕粉各一錢、蜜陀僧を醋に淬し研末して半兩を和勻し、少量づつを齒、及び齦に傅ければ立ろに效がある。甘露飲を内服する。（活幼口議）

（一）白花菜（食物）

和名　ふうてふさう
學名　Pedicellaria pentaphylla, Schrank.
　　　(Gynandropsis pentaphylla, DC.)
科名　ふうてふさう科（白花菜科）

〔白花菜〕

【釋名】　羊角菜

【集解】　時珍曰く、白花菜は三月に種ゑる。柔い莖が延蔓して一枚に五枚の葉があり、葉の大いさは拇指ほどである。秋期中に小さい白色で蕊の長い花を開き、長さ二三寸の小さい角を結ぶ。その

（一）牧野云フ、熱帶地方ノ原産デアルガ今ハ廣ク各地デ見ラルル、我ガ臺灣ナドニハ野生ノ狀態トナツテヰルト思フ、集解ノ文中ニ在ル黄花菜ハきばなふうてうさうト云フモノデ、Polanisia viscosa DC. ノ學名ヲ有スル、此レモ亦廣ク暖地ニ見ル一草デアル。

子は黒色で細く、形状は初眠の蠶沙のやうで光澤がない。菜は氣が羶臭(せんしう)なもので、ただ鹽葅にして食へるだけだ。

頴曰く、一種の黄花のものを黄花菜と名ける。形状は同じでただ花が黄なだけだ。

(三)【氣味】【苦く辛し、微毒あり】頴曰く、多く食へば風氣を動じ、臟腑に滯り、胃中を悶滿せしめ、脾を傷(いた)める。【主治】【氣を下す】(汪頴)【煎じた水で痔を洗ふ。擣き爛らして風濕痺痛に敷く。酒に擂(す)つて飲めば瘧を止める】(時珍)

(二)蔊菜　音は罕(カン)である。(綱目)

和名　すかしたごはう
學名　Nasturtium palustre, DC.
科名　十字科

【校正】草部拾遺の䕭菜を併せ入る。

【釋名】䕭菜　音は宕(タウ)である。辣米菜　時珍曰く、蔊とは味が辛辣(しんらつ)で火で焊(や)くやうだといふ意味で名けたものだ。また蔊とも書く。陳藏器の本草に䕭菜といふがあつて『辛菜である。南方の地ではこれを食ふ』といひ、形状を説明してないが、今唐韻、玉篇を調べて見てもいづれも蔊なる文字はなく、ただ蔊の文字があつ

(二)木村(康)曰ク、ドラゴンドルフ氏ノ書ニ芥子油ニ類似スル揮發油ヲ含有ス。

(一)牧野云フ、植物名實圖考ニハ之レヲたねつけばなトスルガ、然シ集解ニ黄花ヲ開キ一二分ノ角ヲ結ブト云フ點ヲ考ヘテ、今之レヲすかしたごはうト定メテ見タ、然シ高サガ二三寸ハ餘リ短カスギル嫌ハアレドモ、其レハ瘠セテ矮ナルモノト想像シテ、先ヅ疑ヲ抱キツツ上ノ如クシテ見タ。

て『辛菜なり』としてある。これで見ると蕣は蔊の字の訛だ。

集解 時珍曰く、蔊菜は南方の地に生ずる田畑の中の小草で、冬期に地に布いて叢生し、長さ二三寸、梗柔く、葉細く、二月に黄色の細花を開き、長さ一二分の細角を結び、角の内部に細子がある。野人は根、葉の附いたまま抜いて食ふ。味が極めて辛辣なので辣米菜と呼ぶ。沙地に生ずるものは尤もひよろひよろしてゐる。故に洪舜兪の老圃賦に『蔊に拂土の風あり』といつたのだ。林洪の山家清供には『朱文公は酒の後で蔊莖を蔬菜料理にして食つた。蓋し盱江、建陽、嚴陵地方ではいづれも喜んで食ふ』とある。

〔蔊菜〕
——辣米菜——

氣味 【辛し、溫にして毒なし】李廷飛曰く、蔊菜を細に切つて生蜜で洗ひ拌ぜ、或はあつさりと汋けて食へば、口を爽にし、食物を消化する。多く食へば痼疾を發し、熱を生ず。

主治【冷氣、腹内の久寒、飲食の不消化を去り、人をして能く食はしめる】（藏器）【胸膈を利し、冷痰の心腹痛を豁する】（時珍）

草豉(一)（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

校正 草部より此に移し入る。

集解 藏器曰く、(二)巴西の諸國に生ずる。韭の形狀に似た草で、豉が花中から出る。彼の地の者はそれを食ふ。

氣味【辛し、平にして毒なし】主治【惡氣。中を調へ、五臟を益し、胃を開き、人をして能く食せしめる】（藏器）

本草綱目菜部第二十六卷　終

(一) 牧野云フ、草豉ハ未詳ノ品デアル。

(二) 巴西ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。

昭和七年五月十六日印刷
昭和七年五月二十日發行

（頭註國譯本草綱目第七冊）
非賣品

監修者　白井光太郎
翻譯者　鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　氣賀林一
東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一一六一七

東京・日東印刷株式會社印行・本郷